明治三十七年五月五日發行
毎月一回五日發行

第四巻

女學世界

第六號

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可



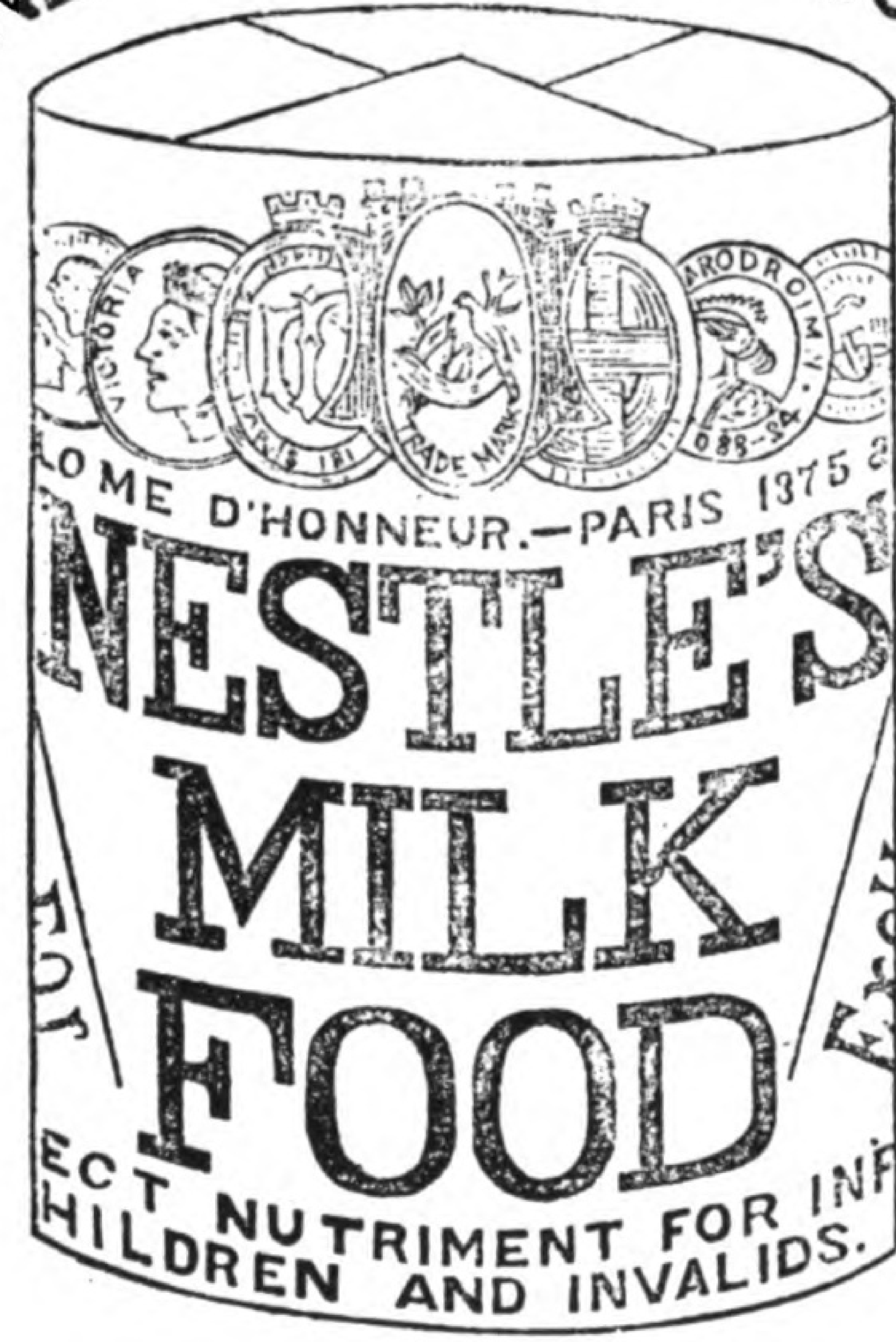

東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覽被下候樣奉希上候

女學世界 第四巻第六號 目次

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品
各國醫科大學大病院、
醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

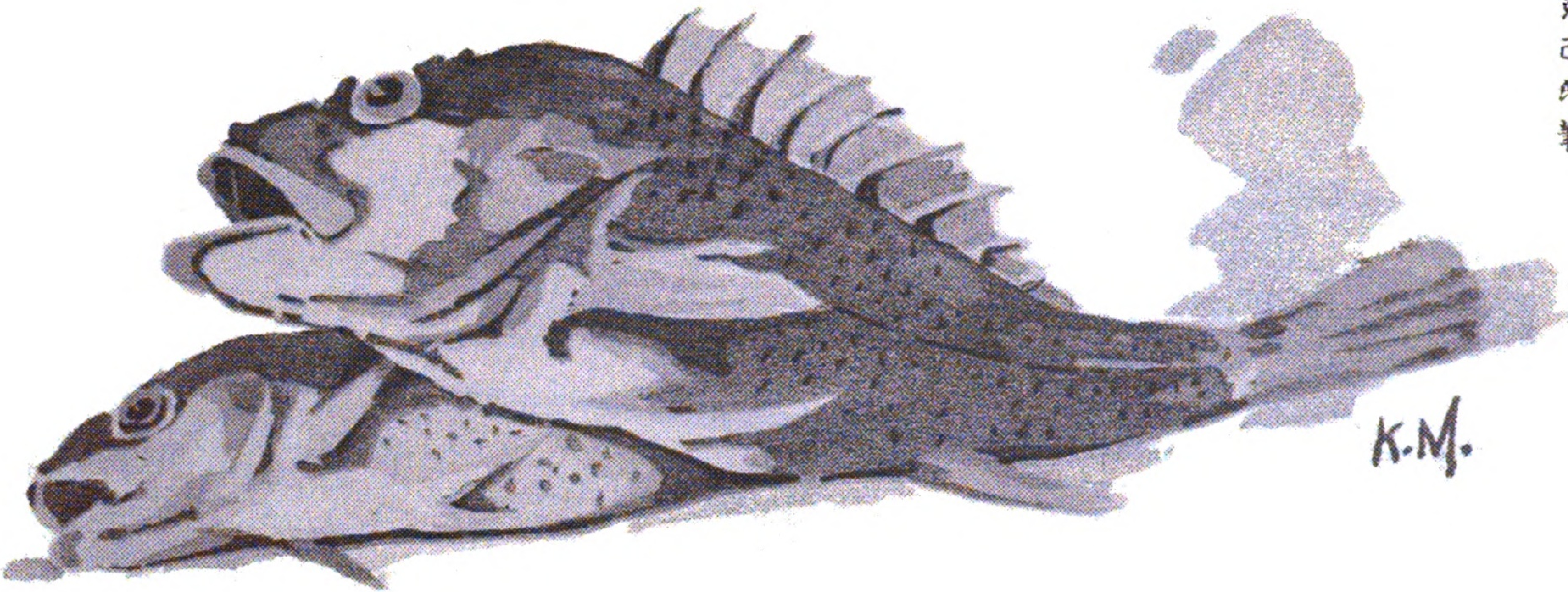
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

燕子花



三宅克己氏筆

めばる



三宅克己氏筆

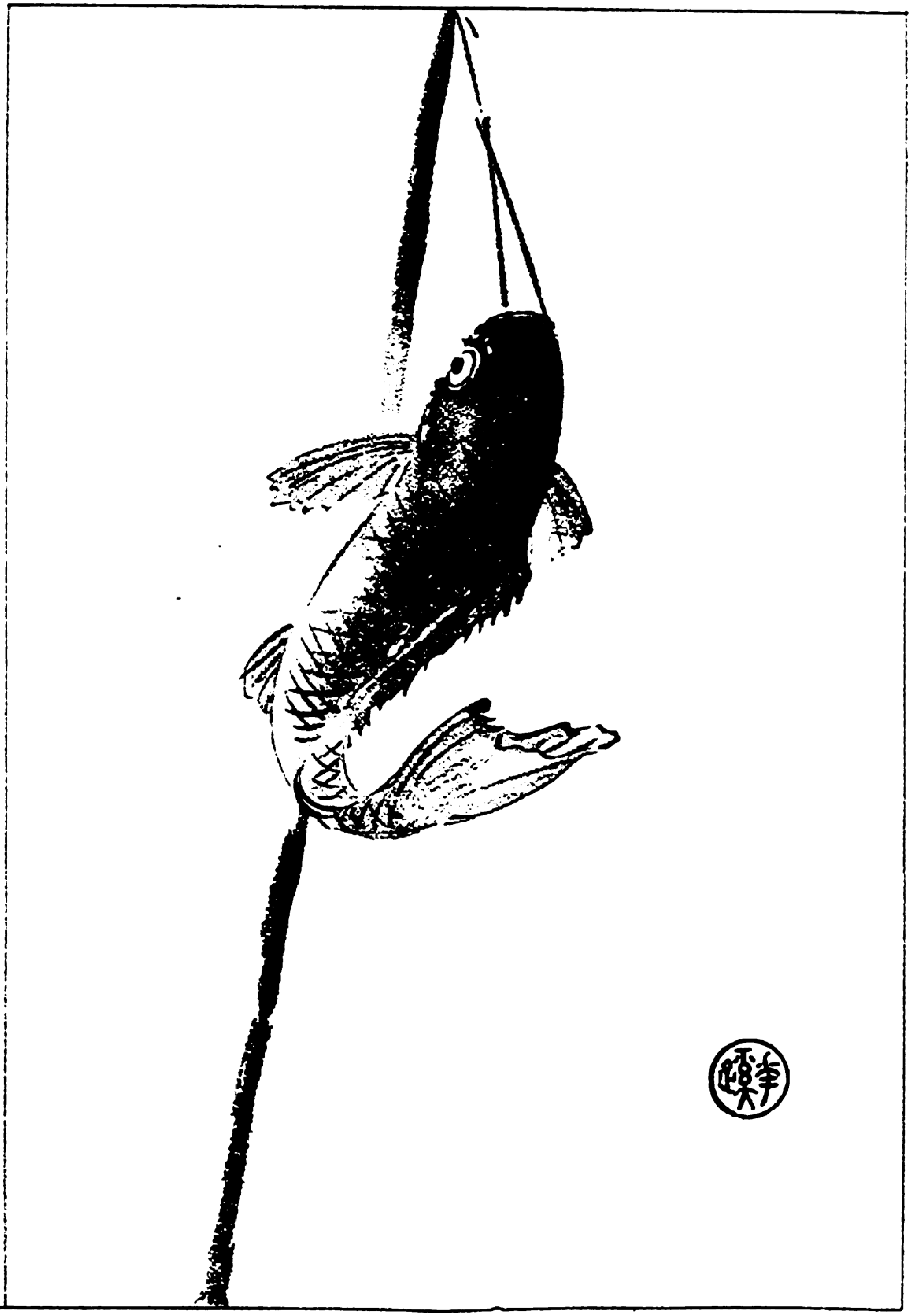
花菖蒲

跡見花蹊女史筆

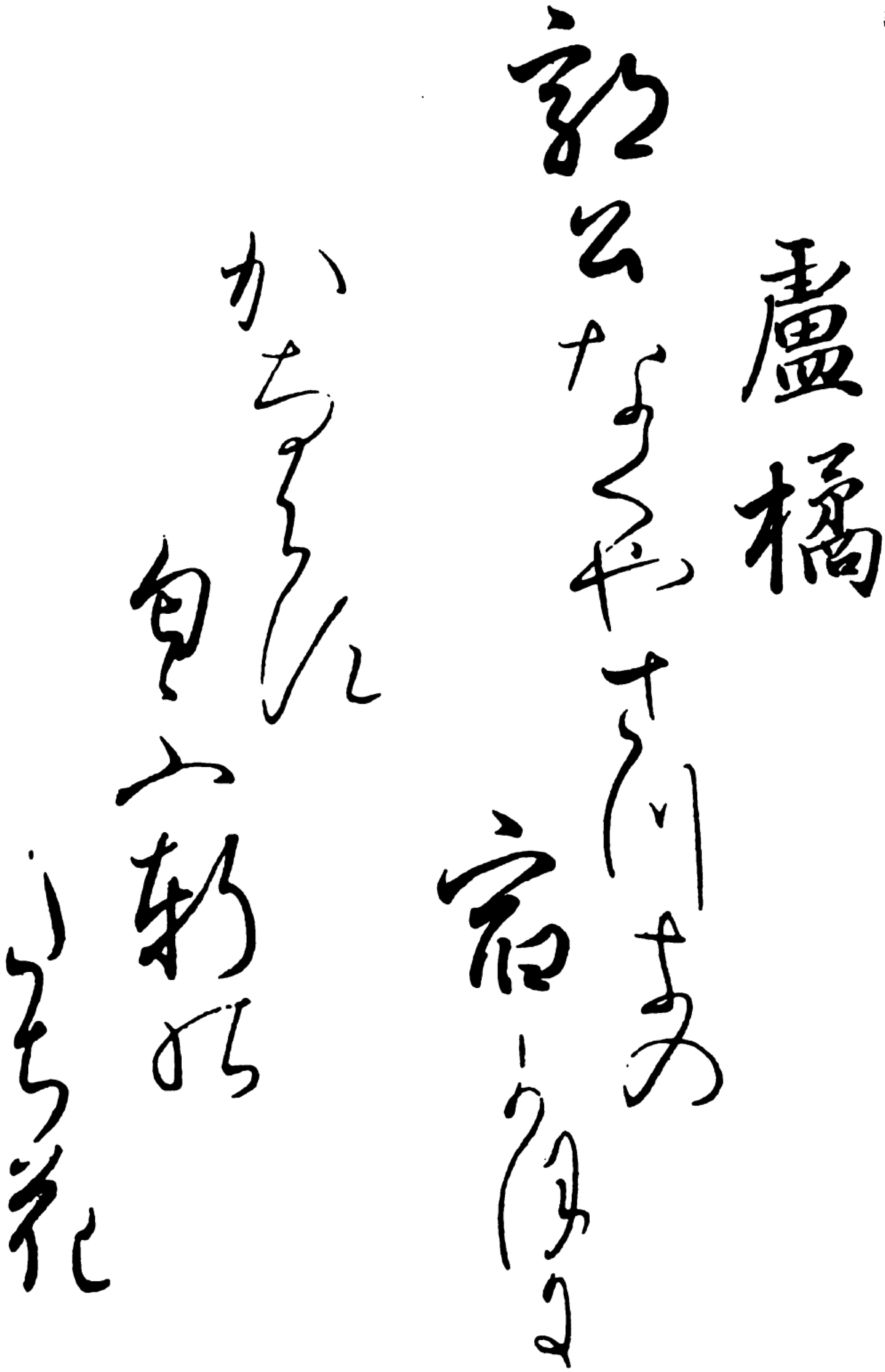


端午圖

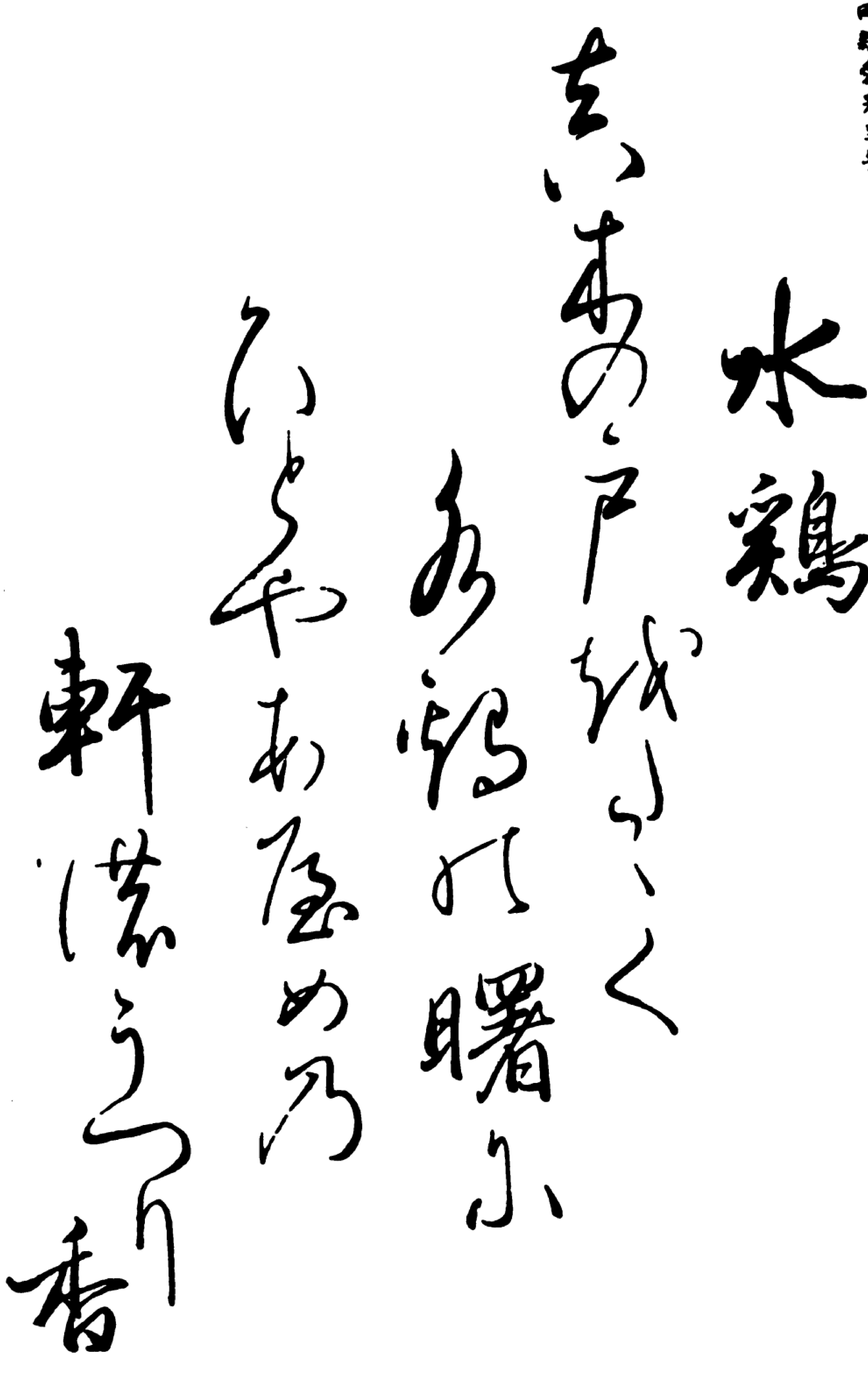
跡見花蹊女史筆



多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



三宅花圃女史筆

五月の末つかたにて今も
いつよりかくいつまで思ハ
我國民気句なを我を捨
此くの如く戦ひての后移らん
三軍ハ戦死しまるをいく人

のおはゝの伊勢さまよりも
とのゝいつもちこゝろもよき人
なかなか宜男物得くしやかふ
こゝのへ入ぬれは兵糧の種
ましとは源氏よ大やすみうち不
いのしこ

獨逸伯林大學教授パウルゼン氏原著

日本文學博士蟹江義丸君　文學士藤井健次郎君　文學士深作安文君　共譯

(製本既成)

倫理學大系

全壹冊洋裝上製總クロース製金文字入
裝幀高尚印刷鮮明
正價金一圓八十錢
小包送料十五錢

本書は伯林大學教授パウルゼン氏の原著倫理學系統を飜譯したるものなり其倫理史篇は極めて簡潔に其要を擧げて茫々三千載に起伏せる人生觀の變遷を一目の下に瞭然たらしめ其原理論者は穩健篤實の見を以て中正の主義を宣べて人生の趣旨を闡明し其德及本義務論篇は周匝萬遍の考察能く人生諸般の實際問題を究明して躬行に資して敢て遺憾なからしむ倫理の書刊行せらるゝもの決して尠しとせずと雖斯の如く包括的にして内容多き書は稀なり實に良書といふべし倫理研究に志す者及敎育家は謂ふに及ばず政治家も社會改良論者も實業家も皆本書を讀まざるべからず否翼に人生の旨趣を領會して而して社會に處せんとするの士は必ず本書を繙かざるべからず

類書

井上文學博士閲　木村鷹太郎君著　**東洋西洋倫理學史**　全壹冊　上製五十五錢　郵税十錢　並製四十錢　郵税八錢

木村鷹太郎君著　**東洋倫理學史**　上卷　洋裝上製紙數一千二十四頁　正價二圓八十錢　小包送料十五錢

綱島榮一郎君著　**西洋倫理學史**　全壹冊　洋裝上製紙數五百六十四頁　正價一圓三十錢　郵税十四錢

蟹江文學博士著　**倫理學**　全壹冊　上製五十五錢　郵税十錢　並製四十錢　郵税八錢

(甲の一)

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(甲の二)

毎月一回三日發行

家庭之友

（第貳卷）第壹號要目

男女結婚の資格

其一……ガンドレット夫人
其二……村井知至
其三……寺田勇吉
其四……佐治實然
草花の話……醫學士 原 熈
出産の仕度と産後の注意……ドクトル 森永友碩
育兒問答 小兒の食物、ジフテリヤ看護法、外數件……井上友子
家政問答（家計豫算表五種）
家具保存の注意（毛布と白布の洗濯法）
小兒西洋服仕立方……コーツ夫人
家庭料理……宇山鎌子
社會百生活
戰爭雜感（六則）
多摩河畔より……大下藤次郎
家庭之友の誕生日

定價 壹冊 五錢 郵税五厘　一ヶ年 十二冊 郵税共 前金六拾錢
見本は郵券代用六錢 初號より註文に應ず

家庭之友 合本
本年四月滿一週年の記念として第壹卷合本を發行す本誌の眞價は世自ら定評あり初號以下既に五版六版を重ねて而かも尚ほ足らず依つて今全部を改刷して優美なるクロス金字入合本を製す總目錄附四百餘頁趣味と實益との無盡藏なり

▼▲定價（郵税共）金七拾錢▼▲

大下藤次郎著

水彩畫階梯

挿繪八葉 製本優美 金五拾錢 郵税四錢

著者曩に再び海外に遊びて幾多研究發明する所あり乃ち斷然舊著「水彩畫の栞」を絶版して新に此書を著せり說く所親切明瞭何人も容易に會得し自修の便を得ること諄々良師の指導を受くるに異ならず本書の特色として最も價値を有するは十六種の色彩表を挿めると模樣畫に於ける場合の各色彩の調和の適不適を列擧したると歐米大家及著者の作畫を或は石版十五度刷或は又寫眞版に製して添附したるとにあり又本書に不明の點あらば質問自由なり

渡邊修二郎著

初學獨習 英語速成

定價四拾錢 郵税四錢

東京朝日新聞評して曰く近來英語獨習者の爲に發行する書冊雜誌著しく增加し殆ど之が取捨に惑ふの有樣なるが此書は著者が歐洲滯在數年間の經驗に依りたるものなれば最新最便の正則初學者に裨益すべき英語獨習書として近刊書中に於て比類少なきものなり

女學書類

● 家庭の新風味 全六册合本……金壹圓 郵税八錢
● 家庭夜話 全三册合本……金壹圓 郵税八錢
● 女子立志編……金五拾錢 郵税六錢
● 婦女小訓（上製）……金三拾錢 郵税四錢
（並製）……金貳拾錢 郵税不要

出版元 東京神田區南甲賀町八番地 內外出版協會

古今無比 最新良劑 婦人藥 發見せり 効顯偉大

◎婦人血之道諸症最新特効劑

本劑は某病院長大醫の新發明に據り責任を以て調製發賣したるものにして其効の確實顯著なるは左に掲載する所の諸症に實驗して明なり

婦人科諸名醫の稱賛を得たる新良劑也



主治摘要
○血の道より來る諸症
○子宮病○產前產後
○赤帶下○月經困難
○逆上○頭痛○眩暈
○腰痛○冷感○貧血
○衰弱○神經性諸症

定價	
一日分	金八錢
三日分	金二十錢
一週間分	金四十五錢
三週間分	金壹圓廿五錢
五週間分	金二圓

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地

本舖 內外藥品賣藥 化粧品問屋 合資會社 **博愛堂藥店**

電話本局二百八十六番電信略號○ハク

○取次 各地至る所の藥店にあり

(甲の四)

秀才文壇



擔任記者 文學士久保天隨君〇長谷川天溪君〇文學士中内蝶二君〇小笠原嵐舟君〇菅綠蔭君（慶應義塾教授）〇佐々木信綱君〇西村天囚君〇雪中庵雀志宗匠〇大内露泊君〇矢部白雨君外數名

定價 一冊郵税共拾壹錢六冊同六拾三錢十二冊同壹圓貳拾錢〇郵券代用必壹割增爲替駒込局

本誌内容目次

●社説●名家文壇●史傳●地理●講義●文藝●成功●特別文壇●青年文壇（論文、美文、書簡文、小説、新体詩、漢詩、和歌、俳句）●青年議會●編輯便●新刊批評●學海時報●日露交戰錄……●寫眞口繪＝風景、風俗、繪畫其他數葉挿入

發兌元 東京小石川區指ヶ谷町一三三 文光堂

家傳官許 清水圓（外用塗藥）

東京小石川區指ヶ谷百四十五 清水あや

肺病

千葉縣安房國北條町

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

川名助次郎

高等女學校學科程度初號より取揃送本の準備有

會長 子爵岡部長職君 第十六號 五月三日發行

講師 ◎修身、篠田教授◎國語、佐方教授◎地理、伊藤校長◎歷史、高木教諭◎理科、林校長◎家政、下田學監◎裁縫、喜多見舍監◎禮法、小笠原講師◎兒童心理、松本文學士◎女子衛生、鷲山校長◎割烹、赤堀講師其他名家論説會員の文章和歌等趣味津々

（目下入會の好時期）

獨特の通信教授 各科解釋付

女子學術講義

（見本郵券卅錢）

我が教育會は女子の爲講習を開き更に講義錄を發行す講義中難解の文字には別に註釋を加へ女子の讀易く了解し易き講義錄なり

◎入會金廿錢◎會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五拾錢壹年三圓一學期間四圓五拾錢◎入會者に會員證卒業者に卒業證書を授く◎卒業期一ヶ年半

東京市神田區錦町神田橋際 東京府教育會附屬 女子講學會

女學世界へ廣告中 割引券 入會金特に拾錢に減ず但し五月中

（甲の五）

數學書の最新著

理學士 藤田外次郎君著

文部省檢定受驗用 新撰數學講義

（上卷製本既成）

全貳冊　洋裝菊判上製　正價一冊卅八錢　郵稅一冊六錢

從來我國に行はるゝ數學教科書夥多ありと雖も大概ね中學程度以上のものは其類非常に少なく偶々是あるも只一學科に限らるゝか或は問題の機械的解法に止まるものとす本書は此缺を補はんが爲めに編述せられたるものにして理論を主として普通教科書に洩らされたる稍高尚なる理論は細大洩す所なく加ふるに適當の順序に配列せられたる應用問題に詳細なる解法を與へ理論及應用相待つて完全を期せしむ卽上卷にありては算術の主眼たる四則應用問題を特種の順序に排列し凡ての種類を網羅して殘す所なく代數學に於ては、其主要なる代數式の運算より筆を起して代數方程式の起源及解法の原理を詳述して餘蘊なし本書は其形式に於て一小冊たるを免がれざるも所謂要を摘み粹を拔きたるものにして中學卒業以上の學生及文部省檢定受驗者の一讀を逸すべからざる良書なりとす

工業叢書

工學士 重見道之君著

工業數學

（製本既成）

全壹冊　洋製上製總クロース　正價金九十錢　郵稅金十錢

工業の進歩は其實地を經濟的に發達せしむるにあり、吾國工事の遠く歐米に及ばざる所以のものは主として實地工業者の學理に精通せざるに因る、特に其基礎たるべき應用數學の智識に缺如せるを以て、其端緒を得るに苦み遂に學理を註解のものとして茫然自失せるもの少しとせず著者玆に感ありて遂に本書を著はす。本書は專ら工業學校、工手學校、鐵道學校生徒の參考及び土木、造兵、造船、建築等の實物工業に從事するもの、獨習用たるを期したれ共、又尋常中學高等學校入學受驗生の物理數學問題の練習用として最も親切なる方法を採れり、初學者が高尚なる研究をなすの階梯は實に本書の特質にあるを諒知あれ

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（甲の六）

黒木陸軍大将の家庭



川田鷹氏　夫人百子　次女愛子　黒木大将　長男三次氏　長女つれ子　次男清氏

（貴婦人嗜好参照）

（博進社工場印行）

高砂艦長石橋甫君の家庭







京都淑女學校卒業生



戦争の裏面

出征兵士の家族





旅順口閉塞決死將校の一員

山賀大機關士の家庭



朝汐艦長松永少佐の家庭



旅順口閉塞決死將校の一員



旅順口閉塞決死將校の一員

雷艦長三村大尉の家庭

歐洲風物



巴里府高等裁判所

上毛原市裁縫專修所生徒



日露戰

博文館發行

本誌每月三回

三日、十三日、廿三日 發行

正價一冊拾錢
郵稅壹錢五厘

宣戰の大詔一たび下りて世上戰爭記類の發行を見ること雨後の新筍も啻ならずと謂ふべし、而も本館は尤も其の經驗に富めることを信じて疑はず、回顧すれば明治二十七八年の戰役に於て本館は卒先日清戰爭實記を發行して始めて我邦に於ける寫眞銅版應用の模範を示し卅二年の北清事變には東洋戰爭實記を發行して益す戰記編錄の完備に力め爲めに出版界に一新生面を開きたるは本館が最も光榮とする所にして江湖の齊しく徹意を了せられ本館の辛勞と成效とを認識せらるる所なりとす

思ふに今日征露の役は眞に空前の大業にして其繋る所も亦至大なり是時に當りて遺憾なく戰況を報し形勢を錄し我忠勇なる陸海軍人の勳勞を表彰して全國の士氣を振作し敵愾心を發揚鼓舞するは實に出版業者の責務たり是に於て本館は又日露戰爭實記及び寫眞畫報を發行して時勢の需用に應し從來多年の經驗に鑑みて通信寫眞畫編輯印刷製本の諸機關を整備し材料の精確報道の迅速は勿論猶趣味の豐多を謀り此三絕を以て帝國の威武を宇內に發揚するの唯一機關たらん事を期せり

私に本館は此旨意を貫徹せんが爲に幾多の達識能文の記者と當代第一流の畫家とを聘せるの外更に戰地各方面には偏く從軍記者並に本館特有の寫眞班を派遣し砲煙彈雨の間に出入して渾ての戰況を記述し撮寫して隨時寄送せしむる事とし別に從軍畫報員あり詳かに所觀を描畫して通信せしむ從軍記者の外別に寫眞班と畫報員とを備ふる者實に我邦に在ては破天荒の擧にして凡そ軍隊活動の形狀と隨所山河の風光とは細大收めて紙上に

（乙の二）

發兌元　東京市日本橋

爭實記の特色

活躍せしむべく斯の如にして始めて空前の大戰爭の實態を中外に宣揚することを得ん哉

本館は又此際報道を尤も迅速ならしめんか爲め新たに**最新式**の**輪轉大印刷機械**を求め專ら戰爭實記印刷製本の用に供したるより優に**毎日六萬部**の戰爭實記を印刷製本しつゝあり是未曾有の事に屬す斯くして毎月**日露戰爭實記三回日露戰爭寫眞畫報一回**を發行し**記事寫眞繪畫**の三素を以て戰鬪の顛末及び之に伴ふ**內外**の**政治外交通商**の事情に至る迄最も**迅速精確**に且**多趣味的**に編錄し以て世界的唯一完全なる戰爭實記たるの實を擧げつゝあり

本館の戰爭實記が江湖多數の具眼者の爲めに無比の聲價と信頼とを博せるもの實に上述の內容あるが爲めにして**第壹編**は**廿六版**を重ね**第二編**も**廿一版**となり**第參編**以下悉く**十數版**を重ねぬ**販路**は遠く**清韓**より**歐米各國**に**擴**まり**夐**に**他**の**類似**の**戰記類**に**超絕**し我が出版界無前の盛況を視る所以亦此に在り而も本館は尚未だ現況を以て足れりとせず爾後戰局の發展に隨ひ益々**規模**を**恢擴**し以て江湖の眷顧に酬ひ併せて本館が世に負ふ所の責務を全くせんことを期す江湖諸彥願くは精讀を給へ

實記前金正價

一ケ月（三冊）	貳拾八錢五厘	郵税四錢五厘
三ケ月（九冊）	八拾三錢	郵税十三錢半
六ケ月（十八冊）	壹圓六拾錢	郵税貳拾七錢
一ケ年（卅六冊）	參圓十五錢	郵税五拾四錢

畫報前金正價

一ケ月（一冊）	貳拾錢	郵税貳錢
三ケ月（三冊）	五拾七錢	郵税六錢
六ケ月（六冊）	壹圓拾錢	郵税拾貳錢
一ケ年（十二冊）	參圓拾五錢	郵税貳拾四錢

定期增刊 **寫眞畫報** 毎月**八日發行**

一冊貳拾錢 郵税二錢五厘

（その三）

區本町三丁目 博文館

戰時の讀物

櫻井鷗村君譯

世界冒險譚

金堀少年
遠征奇談
二勇少年
續遠征奇談
決志少年
漂流少年

殖民少年
航海少年
不撓少年
朽木舟
俠勇少年
絶嶋奇談

以上全部拾二冊既成
每編讀切◉各冊增刷
壹冊正價三拾錢 郵稅六錢

◉押川春浪君著 海國冒險奇談 **新造軍艦** 三版出來 正價金三拾錢 郵稅六錢

◉押川春浪君著 海嶋冒險奇談 **海底軍艦** 七版出來 正價金三拾錢 郵稅六錢

◉押川春浪君著 英雄小說 **武俠之日本** 四版出來 正價金四拾錢 郵稅六錢

◉押川春浪君著 海嶋探奇談 **塔中之怪** 五版出來 正價金廿五錢 郵稅四錢

◉押川春浪君著 傳奇小說 **銀山王** 正價金三拾錢 郵稅四錢

◉水田南陽君譯 傳奇小說 **魔法醫者** 二版出來 賣價金拾二錢 郵稅四錢

◉諸名大家共著 近世 **世界十偉人** 二版出來 正價金五拾錢 郵稅八錢

◉文學大家共著 **東西廿四傑** 五版出來 正價金卅五錢 郵稅六錢

◉文學士煙山專太郎君著 英雄末路 **ナポレオン** 正價金三拾錢 郵稅六錢

◉巖谷小波外二君共譯 少年小說 **乞食王子** 二版出來 賣價金廿五錢 郵稅六錢

◉櫻井鷗村君譯 少女小說 **少看護婦** 拾二版出來 正價金拾五錢 郵稅四錢

◉鈴木光次郎君著 **明治豪傑譚** 正價金廿五錢 郵稅四錢

櫻井鷗村君譯

初航海 勇冒險少年譚

十版 正價金廿五錢 郵稅四錢

發兌元 東京日本橋區本町 **博文館** 東京神田表神保町 **東京堂**

（乙の四）

前渡邊裁縫女學校教師

岡本政子先生著

獨習自在 裁縫積り方五百題

價三十錢 郵稅六錢

本書は裁縫上最も面倒にして一般に困難を感ずる「積り方」に就いて凡そ五百題を設け恰も手を取つて導く様に叮嚀親切に説述したれば本書に依れば教師を要せず自宅に於て充分獨習する事を得可し、本書は實に著者が諸女學校に於て多年の間教授上の實驗に鑑みて平易の方法を選みたれば何人も一讀して了解し易く行ひ易し、世の女子諸君は必ず一本を座右に備ふ可き珍書なり。

本書の內容

㊀第一編 繻袢＝一つ身、三つ身、四つ身●本裁、男襦袢、本裁女襦袢、長襦袢●第二編 着物一つ身、三つ身、四つ身 中裁、本裁男服 本裁女服、男女服無垢 二枚重 三枚重 八掛附 裾廻し●第三編 羽織＝四つ身 本裁男羽織、本裁女羽織、羽織裏●第四編 被布＝一つ身 三つ身、四つ身及中裁、本裁●第五編 袴＝男袴、女袴●第六編 しやつ●第七編 づぼん下と股引㊇第八編 袢纏●第九編 合羽＝男合羽、女合羽●第十編 夜着＝大夜着 中夜着 小夜着●第十一編 雜＝吾妻こーと 蒲團 十德 蚊蟵。

文學博士木村正辭先生題

女子大學講師井上頼圀先生序

前華族女學校講師近藤正一先生述

國語國文 高等女學讀本詳解

價三十錢 郵稅六錢

引用書目

關根正直氏編 女子國文讀本

國分操子氏編 女子國文讀本

落合直文氏編 女子國語讀本

廣池千九郎氏編 高等女學讀本

篠田利英氏、岡田正義氏、吉田彌平氏、中島政吉氏編 女子國語讀本

明治書院編 高等女子讀本

本書は高等女學校生徒の國語國文研究の便に資せんため上記各校教科書の熟語成句を解釋す且つ習慣上特殊の稱呼ある地名物名は一々傍訓を施せり。本書は主として文章語句の主旨大要に通せしめんとし普通文國語文書翰文の如きものは會意の語假借の語轉注の語たるの別なく勉めて平易簡明に解釋したり。本書は目次をいろはの發音に依て次第したればその搜覽の方法極めて便利なり。

(乙の七)

發兌 東京神田鍋町廿一番地 (電話本局三〇六七番) 大學館 賣捌 全國各書籍店

毎月一回

十五日發行

少年世界主筆

巖谷小波山人編

和洋諸大家密畫入

第一編

少年日露戰史

一名 日露戰爭讀本……

來六月十五日博文館第十七週年紀念日發行

日露戰爭は千古未曾有の大戰なり、苟も我同胞たる者萬世之を記臆せずして可ならんや、本書は即ち、未來の帝國民たる少年諸君の爲めに此大戰の本末を最も着實に最も正確に最も平易なる歷史体に記述し加ふるに諸君が先輩の義勇奉公の美談逸話を以てす、是れ尋常際物的戰爭記に比して已に月鼈の差ある所以戰勝國家庭の讀本として、學校の賞品として、將た教科參考書として何物か之に如かんや、噫千古未曾有の大戰は亦千古未曾有の良書を產めり、滿天下の少年諸君！帝國々民たるに耻ぢざらんと欲せば、奮つて本書を繙き給へ！

▲紙數一册百頁 菊判四號字鼇頭付

▲毎號諸大家密畫及寫眞版一二頁入

▲定價一册拾錢 六册前金五十七錢 十二册一圓十錢 郵稅四錢

六月創刊

全部十二冊

（東京市日本橋區本町三丁目）

博文館發行

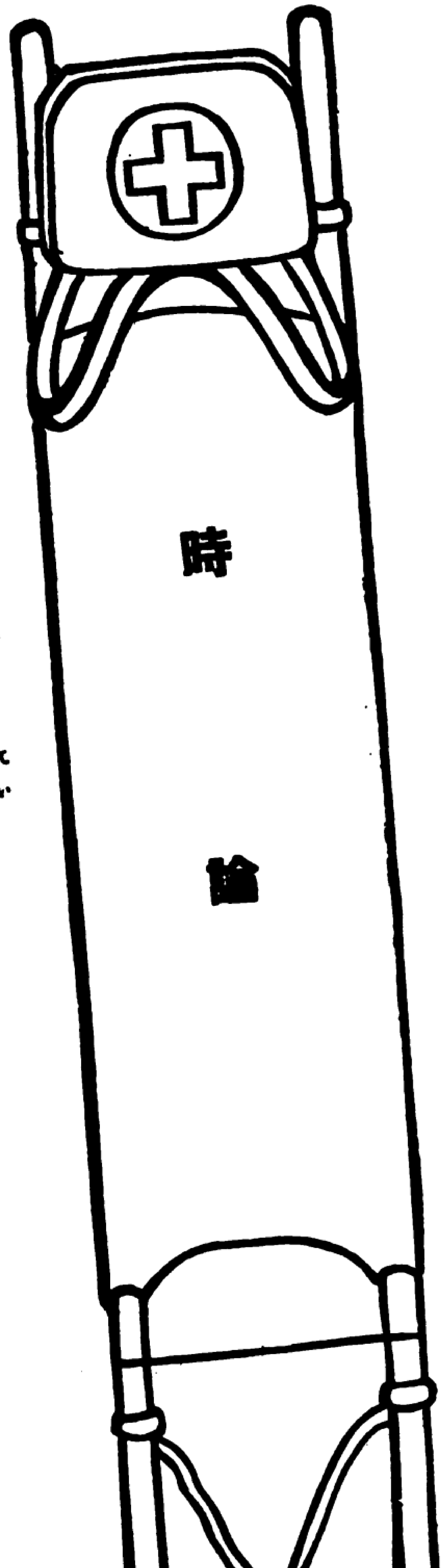
（乙の八）

女学世界

第六號　五月五日發行

動物も亦この心あり

二月九日仁川沖の海戰に露艦コレーツ號は戰ひ敗れて八尾島外に沈沒し波の間にくゝ殘骸を洗はるゝ計となりしが、茲に此の戰ひ終りし後二三日にして仁川の居留地に彷ひ歩く一頭の巨犬あり、首輪の文字にてコレーツ艦に飼はれたるものとは知られける、されば敵と思へば憎しみも出づれ非類の畜生何咎やあらん、殊には累々として主を失ない彷徨する態の哀れなるに、人々食を與へ寢床を作りて飼ひける程に、日ならずして勢付き市中を馳せ廻る程とはなりぬ、さる程に或日八尾丸（これは元とコレーツの小蒸滊にして今は引揚げて大島艦に使ふ）が埠頭に來るや犬は見馴れたる船とて流石に故家忘じ難く、忽ち海に飛入り泳ぎつき追へども逃げず、打てども去らず、水兵等は止むなく引入れて大島艦へ連れ行き、頸輪を見てコレーツと名づけ飼ひ置きたり。斯くて三月八日朝となり我が病院に看護されたる露の負傷兵が博愛丸にて日本に送らるゝ事となり彼等は杖に縋り舷に凭りコレーツの哀なる殘骸を見て悄然たりしが、此を知りたる彼の犬は大島艦より之を望み舷に足踏懸け、哀れなる聲を上げて鳴きつゝありしが、軈て身を躍らし海に沒し姿は消へて又た見る能はざりしと。非類の畜生と雖も馴れ馴染みし同國人の行末を悲しみ最後を遂たるならんと戰地通信の一節に見へたり、犬にも亦この心あり人誰れか惻隱の情なからん。



武士的家庭

婦人の地位を増進するの好時機

伯爵 大隈重信

由來この戰なるものは、概ね男性的であつて、極めて優美なる靜淑なる、平和的なる女性の方面から見ると餘り興味が無いやうに思はれる、併しながら我が國民は封建制度の下に殆んど六七百年間生息し居つたので、總ての家庭が自から武士的氣風を帶びて居る、武士といへば、即ち劍を提げて敵に向ふのであるから武勇の性質を尊んだのである、その武勇を尊ぶの時代が、長年月の間續いて來たので、隨つて國民全体男、女、老、幼を問はず、皆な武にのみ重きを置いたのである、故に武勇の性質、換言すれば武士道的氣風は、獨り男性の上にのみあつたのではなくして、女性も均しく此封建的時勢の感化を受けて來て居るのである、去れば今日の婦

人も多少此武といふ觀念に就ては、自然に家庭の感化を受けて居るのである。
勿論、封建の時代と云ても、國民全体が悉く武士ではない、劍を提げて敵に向ふ軍人ではない、之れは士族なる階級に屬して居るのであつて、其數といへば凡そ四十万である、此四十万人が平生大小を帶して居つて、イザ戰となれば軍隊となつて敵に向つたのである、然らば之れを戸數にすると四十万戸、先づ概して二百万人、即ち國内の人口の十分の一位であつたらうと思ふ、尤も幕府の末路になつては國内の人口が三千万近くなつて居つたけれども先づ十分の一と見て大差はないであらう、この階級が、即ち我が邦の中等社會を形作つて居つたので、而して平和の時には政治に關係し、戰時には直ちに軍隊となつたのである、去れば日本全國民の摸範中心となつたのは、總て此士族即ち武士であつて、隨つて日本の國風は、皆な士族に依つて導かれ、武士に依つて支配されて來たのである、既に士族なるもの即ち武士なるものが、日本全國民の中心であり、摸範であつたから、總ての國民が、尙武の氣風を尊び、重んじたのは自然の結果である、故に百姓と呼ばれ素町人と呼ばれ極めて低き階級に置かれた農工商の社會に至つても、自から此武士的感化を受けて居るのである、夫れは或は小説に依つて、或は軍談に依つて或は芝居に依つて若しくは又檀那寺の和尙達の說敎に依つて、殆んど宗敎的に此武士的感化を受けたのであつて山村僻邑の愚夫愚婦に至るまで及ぼしたる所の、其感化力は頗る偉大なるものである。

で、當時の家庭、殊に武士の家庭なるものは、如何なる有様であつたかといふと、武士の生活は、封建の君主若くは將軍から祿を貰つて居るのであるが、君主、將軍に於ても、この多數の士族を養ふとは、餘程困難であつたので、其四十万の武士の多數は、極めて小祿である所から、其祿のみでは生活が覺束ないのであつた、尤も其中の一部は、夫れ〳〵藩の役人となつて、祿の外に僅少ながらも給料を得るといふ者もあつたけれども、

夫れは一部分の人に過ぎぬので、多數の士族は、得る所のものは其祿のみであるから、なか〳〵生活が出來ない、然らば如何にして生活の餘裕をつけやうか、商賣でもして收入の道を開いたらば宜いのであらうか、所がこの士族は、概ね商賣を禁せられて居る、茲に於てか自然內職が起つて、その生活の補助をすることになつた、この內職には、先づ婦人の家內職業が第一であつて、即ち機を織るとか、木綿を紡ぐとか、或は扇子を作るとか、或は團扇を拵へるとか、若くは提灯の骨を削るとか、仕立物をするとか、或は又中には雛人形を作るとか數へ上ぐれば色々澤山な仕事がある、要するに其土地の模樣に依つて、種々樣々な內職をやつたのである、斯く士族の生活なるものは、僅かに內職をして、一家を維持するといふ位なものであるから、隨つて平生に於ける生活の程度、その經濟の方法は、餘程約まやかでなくては家政が圓滿に行かない、而も武士としての體面からは、表面には「武士は食はねど高楊枝」といふが如き、苦しい思ひをしても、品位を傷けぬやう、體面を汚さぬやう、恰も佐野源左衞門が、瘦せても馬一匹、錆びても槍一本といつた如く、其人の地位相當に瘦我慢を張つて行かねばならぬのであつた、去れば上等の士族に在つては、馬は大抵持つて居つた、其の以下になつては、馬は持たなくとも、鎧を持つて居るとか、或は刀を平日用ふる外に一本別に持つて居るといふが如く、平生武士のたしなみに就ては、よく氣をつけたもので、たとへ米櫃は空しくとも、此たしなみは決して疎かにしない、體面を傷けない、斯くの如き次第であるから、士族の家庭には、一般に節儉の風が行はれた、武士と儉約とは、常に離るべからざるものであつた、所謂勤儉尙武なるもの即ち是れである、凡そ武士に貴ぶ所のものは、無論第一に勇に相違ない、併しながら夫れと同時に、義を貴ぶ、節を貴ぶ、高潔を貴ぶ、名譽を貴ぶといふのが、眞の武士の武士たる所以である。

而してこの家庭の中心は、誰れであるかといへば、いふ迄もなく婦人である、夫をして體面を損せざらしめまた後顧の憂なからしむる爲めには、家庭の中心なる婦人が、十分に一家を修めて行かなければならない、然るに總て日常の費用を約かにして、生活を立てゝ行かなければ、直ちに其の家庭が紊れる、蓋し生計の餘裕ある家庭を修めて行くとは、左程の難事ではない、又貧乏にしても別に品格を重んじない家庭を修むるとならば、

之れも左程の難事ではない、遣繰算段をさへして行けば、先づ以て濟む譯だけれども、此士族の家庭は、貧乏なるが上に品格を重んじなければならぬ、体面を保つて行かなければならぬのであるこれ程難義な話はないこれ程手腕を要する家庭の主婦はあるまい、然るに此衝に當れる婦人にして家を修むることが拙いか、若しくは其婦人が家政の如何を顧みずして只自分の虚榮心を滿足せしめんが爲めに所謂外見を飾つて無用の冗費をなすか或は物見遊山に心を奪はるゝが如きことがあつたならば、左なきだに餘裕なき家政が、彌が上に紊れて貧乏は更に一家を襲ふて來る、一体一家を保つ上に就ては男性よりも女性の力が與つて大なる力があることは、今更事新しく申す迄もないことで、男子は、如何に一家の經濟を節約に修めやうとしても、社會の表面に立働いて内を顧みる遑が少いから此點だけは如何にしても女子に企及することは出來ない、隨つて此の女性の賢愚は、即ち一家の幸、不幸の岐るゝ所である、况んや貧乏にして而も体面を保たなければならぬ武士の家庭に於てをや、故に武士の婦人は餘程此點に於て嚴格なる教育を受けたものである、古來、我が邦に烈女節婦の多く出てたのも、畢竟この嚴格なる家庭に教育せられた結果である、で、此武士的の嚴格なる家庭の風が、自から他の家庭に及ぼし農工商にも亦幾らか、感化を與へた、故に我が邦の總ての家庭が、武士的氣風を帶びて居る所以である、斯く封建時代の武士的家庭は、貧乏にして恰も戰時の際と同樣なる困難をして居つたので、又其困難と戰ひつつ行かなければ、滿足に家道を保つて行くことが出來なかつた。

されば武士の家庭に於ける婦人は、概ね素養あり、品性あり、また家政經濟の手腕があつたから、この婦人の他に及ぼす感化力はなか〳〵少くない、一体女性の感化力は、餘程優れたもので、殊に男性に向つては偉大なる力を有して居る、畢竟『似たもの夫婦』などゝ云ふは、この女性の感化力の然らしむる結果である、勿論中には男子の及ぼす感化もあるが、女性の感化はヨリ多くして、女性の方に男子の性質が、自から引き附けらるゝものである、之れを要するに、日本の婦人は、概して武士的家庭教育を、自然に受け得て來たのであるから、この度の戰争に就て、故らに彼是れ言ふ迄もなく、總ての家庭、總ての婦人が、戰時に處する覺悟は、夙に附いて居るとゝ思ふのである。（次號完結）

戰時米國婦人の活動

米國チカゴ婦人會員　リバアモール女史手記

(一)　募集金額一億八千万圓

記者曰く米國の婦人が有爲の氣象に富み、燃るが如き愛國心を有するは、人の能く知る所にして、他の文明諸國に於て其比を見ざる所なり、殊に其氣象の發揮されたるは、南北戰爭の時にてありし、當時彼等は徒らに受働的に軍隊に同情を寄するが如き女々しき振舞に甘んずることなく、男子に銃劍を執て戰場に走せ向ひ、一死國恩に報ゆるの義務あれば、女子には出征者の家族を救護し、兵士の勞苦を慰藉し、病兵傷兵を看護し、若くは此等の事業に必要の金錢物品を募集するの義務なかる可らずと信じ居たるが故に、一たび戰爭の破裂するや、都となく、鄙となく、愛國婦人會なるもの翕然として起り、忽ちにして二万有餘の組織が出來、會員の數實に二百四十万に達したりき、而して彼等は病院を設け、看護婦を派遣し、無料旅館を設け軍人を慰籍する等人をして麻姑を倣ふて痒きを搔くの想ひあらしめたるのみならず、彼等か此戰爭中に募集したる軍資金額の巨大なるに至ては、驚嘆に堪へざるものあり、彼等は實に秋毫も男子の助力を籍らずして一億八千萬圓の巨額を募集したりしなり。

記者は彼等温柔の婦人が、其蒲柳の身を以て彈煙硝雨の間を奔走し、出征軍人をして百萬の援兵を得たるの想ひあらしめたる光景を叙するの頗る興味あるを知ると雖も、又彼等が其實務に迂なるの腦髓を以て、如何にして二億に近き巨大の資金を募集することを得たるか、其方法を講究するは、現下我有爲の婦人に取り、大に

參考となるべきものあるを信ずるが故に左に其梗槪を揭ぐることゝなせり。

（二）第一の募集方法

南北戰爭の當初一ヶ年の間は、各地の婦人會は皆な個々孤立して働きしが故に、其募集の方法も、千差萬別、一々枚擧するに遑なけれど當時物品の送達等に種々の不便ありて折角の寄贈も徒勞に屬すること多かりしより漸く個々分立するの得策にあらざるを覺とり、其第二年目に至りては、戰時衞生組合と稱する大仕掛組合を組織し、婦人會の機關として働かしむることゝなれり、此組合の組織が漸く完全し、政府の信任を得て、種々の特權を附與せらるゝに及んで、各地の婦人會は皆な此組合と氣脈を通じ、其部下として働くことゝなりしより漸く募集の方法も統一するに至れり、該組合は先づ各婦人會の擔當する募集額の標準を定め、一會一ヶ月現金六十圓若くは之れに相當する物品を寄贈することゝなせしが、此標準は戰爭の終局に至るまで變更するの必要なかりき、蓋し此金額は標準として定めたるに過ぎざれば、地方の狀況により或は大に之に超過せるもあれば又少しく不足せしものもありたりしか、要するに總計に於ては常に多額の超過を見ざる月はなかりき。

各婦人會の會員等は皆な自ら率先して一定の會費を醵出せしが、彼等は決して之を其良人の囊裡に仰ぎしにあらず、戶棚や簞笥を搔廻はして、括枕でも、蒲團被でも、襯衣でも、靴足袋でも、差當り必要を感せざる品は、悉く寄贈して會費に充てしのみならず、一家の暮向も大節儉を行ひ、罐詰の菓物、ゼリー（砂糖煮の菓物）の類は一切用ひざることゝし、バタや鷄卵を用るにも制限を定め、其他苟も奢侈に屬する飲食物は悉く廢止し、而して剩し得たる金圓を以て會費を支拂ひしなり、且つ婦人會に屬すると否とを問はず、婦人が自ら裁縫したる襯衣、蓐被、下股引、枕や蒲團の外被等を婦人會に寄贈するもの引きも切らざりしが、織物商の店頭には此等の用に供するフランネル、綿布等の顧客を以て常に充滿され、何れの家庭を見ても婦人等が忙しげに是

等の衣類を裁縫せるを見ざるはなかりき、靴足袋の編物は最も需用多かりしを以て、老婆も、少女も、十歳未滿の女兒までも之を手にしつゝ往來を徘徊するを見るに至れり、當時慰問袋と稱し、防水布にて作れる袋中に堅牢なる縫針一打、留針一函、白黑の縫糸、小刀、剃刀、煙草、封筒、書簡箋等を納め、兵士に寄贈すること流行しければ、到る處、慰問袋を製造する婦人を見かけざるはなき有樣なりしが、其出征軍人に贈與せし總數は幾千萬個なりしか知る可らず。

（三）第二の募集方法

各婦人會は種々の名目を付して簡易なる宴會を開きしことあり、紅楓會、牡蠣會など稱する會合は盛に行れしが、中にも音樂會は最も成功ありし、ウヰスコンシンにては鐵道線路より十八哩程も隔りたる僻村の農家の妻女等が、一團となり、附近の二三十哩の地を跋涉し、小麥を乞ひ廻はり、之をチカゴー市に送りて最高價に賣却したりしに、其代價一千圓餘ありしを以て直に戰時衞生組合に送付せしと云ふ、マサチユーセット州シエーアポールの女子懲治監々督者エレン、シー、ジョンソン夫人は世界に只一人の女典獄にて、米國にても再び得難き婦人なるが、此戰爭中、夫人は三たび洲内の各町村を巡廻して誘說したりき、――其内二回は州内の婦人等を奬勵して軍資金の募集に應せしめんが爲めにして、一回はボストン市に開ける戰時慈善市に出品せしめんが爲めなりき。

（四）第三の募集方法

嘗て各方面に激戰ありしが爲め、衞生組合の設立に係る病院は、皆一時に金庫空乏して頗る困難を極めたることあり、婦人等は此危急を救はんが爲め、一の懇願書を作りて之を印刷し、西北諸州の各敎會の牧師等に、敎派の如何を問はず之を送り、第一月の第三日曜日一日だけの敎會收入金を寄贈されたき旨を申送りけるに、

宗教の教師等までも之を快諾し、續々送金し來りしが、當時西北諸州は今日に比すれば人口至て稀疎にして、今日の如く殷富ならざるのみか寧ろ貧困の有樣なりしにも拘らず、其總額十萬圓以上ありしと云ふ、其後幾ばくもなく更に臨時募集をなすの必要を感じたることありしが、婦人等は此時も前回同樣の懇願書を作り、西北諸州の新聞紙に廣告し、各州内に住する老幼男女を始め各商店、各製造場、各法人より一日分の賃錢、給料、若くは商工業の利益金を寄贈せんことを乞ひしに、皆な相競ふて之に應じ、忽ちにして其應募額二十萬圓以上に達したりき。

（五）第四の募集方法

然れども日を經るに從ひ、戰鬪線は愈々擴張し、組合の經費も益々多きを要し、到底從來の方法のみを以て供給し得べきにあらず、當時各婦人會員等は晝夜奔走して募集したれども尙ほ不足を告げ組合にては一戰爭ある每とに忽ち金庫も、倉庫も空乏を告るの有樣にて、非常の困難を極めける折から、北軍にて大に兵士を募り、西南に向て軍を進めたるより、該組合も隨て大に其業務を擴張せざるを得ず、是に於て婦人等は大英斷を以て、古來未曾有の大慈善市を開設するの計畫をなせしが、其結果は案外の大成功にてありし、當時先登第一に慈善市を開設したるは、チカゴー市の婦人會なりしが、此慈善市は最初の設計より終局の結算に至るまで、專ら婦人の手のみにて經營し、聊かも男子の助力を仰ぎしにあらず。

此經營に與りて最も力ありしは、彼の有名なるリバアモール女史にてありしが、女史は此計畫の成功を天祐に歸し且つ曰く『我々は最初此慈善市にて五萬圓の資金を集る目論見にて、公然目論見書を發表したりしに、世間にては從來實務に熟練なる人々が集りて、非常の注意を以て計畫してすら、未だ曾て慈善市を開ひて七萬圓以上の收益ありしを聞かざるに、今實務に迂遠なる婦人の計畫を以て五萬圓の巨額を收めんと欲するは大膽

も甚だしとて、最初は人皆な冷笑して顧みるものなかりき、左れど我々は此冷遇の爲めに、毫末も屈撓することなく、愈々發奮して、心中窃かに一層大なる期望を懐きつゝ、少なくも十萬圓の資金を集めんとて苦心したりき、我々は先づ如何にもして完全無缺の準備をなし、啻に世間の信用を恢復するのみならず、知事、代議士立法者、軍人、郵便局長、宗教家及び教員等の如き上流の人士をして、其完備に感服し、之を賛助するの念を起さしめんと欲し、精力を盡して經營したりき、或る日の如きは、我婦人會より此事業に關して發送したる郵便物は、容量三石五斗の大箱に充滿したりき、左れば最初冷淡なりし男子等も竟には我々の躁狂熱に感染し恰も睡りより覺めたる人の如く、俄かに騒ぎ出し、雪崩の一襲し來るが如く一時に四方八方より出品し來りて寄贈品の山を築き、以て最初冷淡なりし罪過を贖ひぬ。

『此慈善市の陳列場には、六つの大廣間を以て之れに充てたれば、一切の寄贈品も六種に區別し、一室毎とに特種の物品を陳列せり、第一區には器械類を陳列して一々之を運轉し、第二區には珍奇なる骨董物、第三區には捕獲したる敵軍の軍旗類、第四區には其他の戰利品、第五區には繪畫彫刻等の美術品、第六區には各地よりの寄贈に係る雜貨、而して此陳列場には大統領林克倫氏が南米の奴隷四百萬人を解放したる奴隷解放令の草稿を掲げありしが、是は大統領が自ら寄贈せし品なりし故、忽ち六千圓の高價に賣れたりき、此家屋の最大室の前面の廣庭にて、家畜市場を開き、日々勇ましき掛聲にて競賣をなせりしが、此家畜は各地より此市に寄贈したる馬、牛、山羊、乳牛の類なりき。

『チカゴー市民は何事にまれ祝意を表するときは、行列をなして市中を練歩くことを好めるが故に、此慈善市の開業當日には、三哩餘も續ける盛なる行列をなして市中を練歩きしが、市長の注意にて商店も、工業場も、學校も皆な休業をなして此市場の爲めに祝意を表したりき、此日は十月の天、晴れ渡りて、風緩かに、氣清く

嚠喨たる軍樂を奏しつゝ此行列が練歩行く光景は、殊に勇しく見受けられぬ、此市場は十四日間にて閉鎖したりしが、其賣上高は我等が内心の期望に二倍して、總計二十萬圓の巨額に上れり。

一たびチカゴーの婦人會が先例を示めせしより、慈善市は恰も疫癘の流行するが如く、忽ち全國に傳播し、此慈善市が纔かに閉鎖すると同時に、シンシンナチーにても同様の方法にて慈善市を開き、五萬圓の賣上金を得たりしが、次ぎにボストンにては七十萬圓の賣上金を得、其又次ぎには其頃繁榮の一都會なりけるヂユービユークにて十二萬圓を得、斯くて甲より乙、乙より丙と、相踵で慈善市を開き、紐育市の如きは殆んど大博覽會に髣髴たる大慈善市を開き、二百萬圓に近き賣上金を得たりしが、其不足額は豪商等が補充せし故、發送せし金額は二百萬圓なりき、最終に最も賣上高の大なりしは費府の慈善市にて、實に三百萬圓に上りしと云ふ。

ベロー博士は當時の慈善市を評して曰く若し米國婦人等の發意にて、此大計畫をなさゞりしならば、恐らくは世界に此の如き大なる慈善市を見ること能はざりしならん、殊に感ずべきは、斯る大計畫をなすに當り、最初の設計より、最終の決算に至るまで、細大となく婦人のみにて之を決行したる勇氣と手際とにてありき、彼等の經營には嘗て男子が已れ等の特有と信じ居たる執務の方式は一も欠くる所あらざりしなりと。

記者曰く古來我國に於ても、烈女節婦の光を日月と爭ふに足る程のもの尠からざりき、殊に我女性の愛國心に富めるの點に至ては、一歩も歐米の女性に讓る所なきは言を俟たず、然るに今や我國は生存を賭して一大强國と奮鬪しつゝあるにも拘らず、我婦人等は一部特殊の女性を除くの外、多くは徒に出征軍人に對して受動的の同情を寄するに過ぎずして、進んで活動的の同情を發揮せんと欲するものあるを聞かざるは何ぞや、他なし世の女流先覺者等が謙德を重ずるの餘り、因循姑息に流れ、進で之を誘掖するものなきが爲めのみ、余は車夫馬丁の妻女に至るまで、日々の小遣錢を節約して献金をなすの今日、一日も早く女流先覺者等が一大飛躍をなして、彼等を誘掖し、米國婦人等の勳功にも優るの大勳功を樹んこと切望に堪へざるなり。（江口岳東譯）

家庭月令（五月）

（五日）端午の節句　男の子の祝ひ日なり、此の日男児ある家々にては庭上に五月幟、鯉の吹流しを樹て、床間に甲冑、旗差物、馬印、菖蒲刀、弓箭、鍾馗、鎧櫃、武者人形等を飾り付け、柏餅、ちまきを製して我子の武運を祝す、眞に是れ武强國民の慶事。（六日）菖蒲湯　市中の湯屋にて菖蒲湯を立つ、是れなん强健長壽の薬湯（七日）招魂祭　六日七日の兩日九段靖國神社にて招魂祭を執行し、戰死者の英魂を吊ふ（十四日）出雲大社祭禮。（二十九日）地久節　皇后陛下の御誕辰日なれば、我等臣民は喜んで坤儀の無窮を祝し奉る。

（氣節）上旬より首夏となる「立夏」「小滿」花は梢に歸りて、若葉に吹く風凉しく、青山流水總て爽快の氣を帶びたり、人は袷一枚となりて初めて汗を知る、

（農事）農家の注意日たる八十八夜、此月にあり。上旬には既に麥黄ばみて所々に苗代田を作り、又た畑作に手入、施肥を行ふなんど、農家は追々蛙の聲の鳴きしきるに連れて繁忙となる、其他陸稻、白瓜、青瓜、いんげん　なた豆馬鈴薯、早小豆等の種まきに、茶摘に、桑摘みに、最も多忙を極む。

（園藝）楓、柑類、木犀、蘭の植替、石菖の根分け、木蓮のつぎ木に宜し、垣根の草漸く色深くなり、星をあざむく卯の花は殊に此月の見ものなり。

（食品）魚介類――甘鯛の白燒、卵の花と鯛の丸蒸し、鯛の味噌汁、香魚の山吹燒、泥鰌鍋◎野菜類――百合の丸煮、ソラ豆のスープ、うど、筍いろ〳〵、くわゐ、もやし根芋の浸物、摘み菜の香の物◎菓子類――芋羊羹、椿餅、柏餅。

（遊樂）牡丹、芍藥、つゝじ、藤の花、各々研を爭ふ好氣節なれば、杖を近郊に曳きて一日を觀賞に耽るも面白かるべく、或は漁獵の好時機なれば、糸を青潭に垂るゝもよく、網を河口に投げて鯛、めなだ、いな、黑鯛等をあさるも面白からん、或は河畔に螢を追ふも亦た一興。

（景勝）藤の名所は東京龜井戸、大阪野田藤。牡丹の名所は東京四ッ目植文、目黑、大阪吉助牡丹、攝津池田。つゝじの名所は武州大久保、日暮里花見寺、染井。芍藥の名所は東京四ッ目植文、百花園。

（日曜日）一日、八日、十五日、廿二日、廿九日、「祝日」廿九日地久節。

新家庭

▲廣瀬中佐の無妻主義

巖谷小波

忠勇武烈、威徳兼ね備はり、眞個帝國軍人の龜鑑として、萬古不朽の芳名を轟かした、廣瀬中佐の戰死に就ては、同胞五千萬の老若男女、一人として感奮せぬ者はあるまい古來英雄、豪傑の、君の爲め將た國の爲め、戰場の花と散り、歷史の玉と碎けた者、決して少くは無いが、蓋しこの中佐の如く、一死よく多數の人を動かし、多量の涙を搾り得た者も、亦あまり多くは無い。丈夫の本懷、是を措いて他にあらうか。

が、玆に只一つ、中佐の爲めに、否、寧ろ日本婦人の爲めに、大いに論じねば成らぬ事がある。それは他でも無い、中佐の無妻主義であつた事だ。

而も中佐の主義として、一生妻を迎へぬ所以は、生憎く委しく知り得ぬが、中佐は人に語つて、「軍人の結婚する氣が知れぬ」、と、常にかう云つて居たさうである。果して然らば、中佐の無妻主義なる者も、要するに、『女房は足手纒』と云ふ、封建武士的の意見にあらずば、「若し乃公が死んだ時、妻に悲嘆をかけるが不憫な」と云ふ、一種の憐憫に過ぎぬのであらう。

中佐が人格より推して、將た、一面現代婦人なる者の有樣に見ても、中佐がこの主義を抱持する事決して無理ならぬ次第である。

が、敢へて問ふ、日本の婦人諸姉！中佐がこの主義に對して、よく不平無きを得るか？

若し女房たるもの丶、果して足手纒に過ぎぬならば中佐ならざる他の男子も、決して之を迎へる氣はあるまい。而も日本の婦人として、よく良人の足手纒たらざるを得るもの敢へて少くはあるまいに

「良人の死んだ後の悲嘆」是はまた人の妻として、元より免れ得ぬ所である。が、而も悲しんで亂れず、後事に處して毫も誤らぬ者、亦乏いとも思はれぬ。

されはこそ或る婦人は、中佐が無妻主義を聞いて、是れ婦人を侮蔑したものであると、大いに憤慨したと云ふ。その憤慨や元より至當である。が、中佐が婦人を侮蔑したのも、亦必しも不當とは云へまい。

然しながら、婦人諸姉よ、姉等は廣瀬中佐の言に依つて、初めて勇士の婦人觀なるものを知り、之に對して憤慨するものならば、その迂濶さ加減、寧ろお氣の毒と云はざるを得ない。

知らずや中佐以外に、又幾百の勇士あつて、而も皆婦人を視る事、畢竟足手纏たるに過ぎぬを。

是恐らくは勇士なるもの、、平生婦人の研究に乏しく、現今の日本婦人の、果して那邊まで進みつゝあるかを、よく知らぬが故でもあらう。が、余を以つて云はしむれば、勇士の之を知らなかつたより、婦人の之を知らさなかつた事、是れ大きな手ぬかりだらうと思ふ。

嗚呼廣瀬中佐にして、若し夫人を有して居たとすれば、この際に於ける夫人の面目は如何?、中佐が荷ふべき絶代の名譽の、一半はやがて夫人に歸して、その愉快と嬉しさは、正に悲嘆を償ひ得たであらう。

否、わが幾百萬の日本婦人の中には、中佐と婚を結ばなかつたを悔ひぬ者、果して幾人あるであらう。實にかゝる大勇士を、わが良人と稱する事、なんと婦人の本懐ではあるまいか。

▲軍人と妻子

旅順襲撃の夜、砲火正さに交らんとする時、艦長松村大佐なる者、船橋の上に立つて、その外套の衣兜の中より、不圖落した妻子の寫眞を取りあげ、『帝國の軍人とも云はれる者が、死ぬまで妻子の寫眞を持つて居たと云はれては、末代までの笑はれ艸だ』と、矢庭に寫眞を引き裂いて、海中に投げ入れてしまつた。——是歌舞伎座に演ずる所の『艦隊譽夜襲』中の一場で、作者は有名な櫻痴居士である。

余はこの一場の、この仕艸を見て、この臺辭を聞いて、傍にある某學士と共に、思はず眉を顰めた。が、

之に反して多數の看客は、之に對して拍手を與へた。余等は更に眉を顰めたのである。

如何に諸姉よ！わが親愛なる女學世界讀者諸姉の中には、歌舞伎座にこの劇を見物された者も多からう。而してこの一場に對して、よく不快の感無きを得たか。

作者櫻痴居士は、一面文壇の大家であると同時に、一面政界の名士である。年齢は已に老境に入つては居るが、頭腦と思想とは、決して老朽しては居らぬ筈である。而も尙か丶る前世紀的行爲を、廿世紀の帝國軍人に敢へてせしめるとは、大いにその意を得ぬ所、之に拍手――喝采する、多數看客の沒文明に至つては、眞に沙汰の限りである。

動もすれば足手纏視される妻子は、寫眞としても尙且つ足手纏視されて、さながら塵芥の如く、引裂いて海に投げ棄てられる。妻子の若し之を聞いたならば、なんぼう不平の事であらう？　否、帝國軍人果して皆かくの如き了簡ならば、人生軍人の妻子と成る、また此位馬鹿々々しい事は無い。

然るに事實は之に反して、某海軍士官は、彼の旅順の海戰の折、片手にその子の寫眞を捧げて、餘所ながら實戰の壯觀を見せたと云ふ美談さへある。わが日本に於ても、妻を愛すと云ふ事を、男子の恥辱の一とした時代はもはや過去に成つた筈だ、愛は即ち人生の美德、夫として妻を愛するのに、何の天地に恥づる事があらう。

成る程軍人として、わが妻を愛する餘りに、出征をためらひ、戰死を恐れる振舞があつたら、如何にも恥辱に相違ないが、今死なうと云ふ覺悟をしながら妻子の寫眞をだも手にするを厭ふは、頗る人情に反した所爲だ。

蓋し多數の看客なるものはこの所爲を壯なりとして之に拍手をしたのであらう。何さまそれは壯かも知れぬ。が、それは所謂る蠻壯である。苟も新日本の軍人の中に、か丶る蠻壯を得意とする者があらうか。

余はこ丶に云はうと思ふ、櫻痴居士の『艦隊譽夜襲』なるものは、日本の婦人を侮蔑した作なると同時に、

また帝國軍人の体面をも、少からず傷けたものである事を。

▲僞善の應報

由來日本人は、好んで僞善の所爲をする、云ひかへて見れば、日本人は滅多に本心を明かさぬ。取りわけ婦人の多くがさうだ。

まづい御馳走も、結構と褒め、氣に入らぬ事をも勸められゝば賛成し、好いた人程、口の先では惡く云ひ、悲しい時にも、つとめて涙を飜さぬ樣にする。さりとは餘計な心遣ひでは無いか。

否、只に餘計な心遣ひのみならず、衍いては餘計な苦勞の種を蒔く。

例へば、虫の好かぬ御馳走を、結構と褒めた揚句は、さん〴〵之を食べさせられて、遂に胃の腑を損じたり、氣の進まぬ事を、勸められて、餘議なく賛成した結果は、飛んだ迷惑を負ひ込まされ、而もその不平は、その當の相手に訴へずして、却つて何も知らぬ第三者に當りちらす、彌々出でゝ彌々愚だ。

成る程時と場合に依つて、直言は甚だ苦しいものである。然しその時直言しなかつた爲めに、他日因つて起る苦痛と云ふものは、更に之に幾倍するのである。同じ苦しいものならば、早く苦しんで、輕く濟ますがよい。指を切るを吝んだ者は、腕を斷たねば成らぬ事に成る。

されば世の夫を定める婦人は、よくその點に鑑みて、兩親の手前、仲人への義理などゝ、下らぬ枝葉にのみ心を遣ひ、わが一生の浮沈と云ふ、大切な幹本を忘れぬ樣、十分注意せねば成るまい。

「嫌だけれども、仕方が無いから」とは、婦人の口からよく聞く事であるが、かゝる弱音は、畢竟意志の弱さから出るもの。仕方が無いとは、つまり仕方を需めぬからだ。

それを、嫌だけれども仕方が無いと云つて、嫌な夫を持つ事に成ると、今度は愛しもせぬ夫に對して、愛する風をせねば成らぬ事に成る。かくしてその一家の

中に、僞善の空氣が充ち渡つたが最後、人生幸福の守神は、到底寄り付く筈はあるまい。

▲端午の節句

維新以後、一時廢頽した節句の祝儀は、近年再び盛んに成つた。

が、知らず今年は如何であらう?

軍國多事。勤儉尚武の呼勢の下に、諸事節約の今日、多數の家庭では、この祝儀を廢する事、已に上巳の節句でも知れて居る、所で端午の節句は如何に?

蓋し上巳は女子の節句、端午は男子の節句、桃の節句は太平的で、菖蒲の節句は軍國的である事、今更云ふに及ぶまい。

巳に然らば、今年の端午の節句こそ、大いに盛んにすべきではないか。

見たまへ!彼の武者人形なるもの、神功皇后武内宿禰、豐太閤、加藤淸正、何れも外征的豪傑の標本である。若し之に、西郷隆盛を加へ、北白川宮殿下を加へ、山地將軍を加へ、乃至廣瀨中佐を加へ、床の間の正面には『宣戰詔勅』を掲げ、さて少年の團を爲して、その前に征露軍歌を唱ふならば、定めし愉快な節句と成るであらう。

若し夫れ、庭に立てる幟には、登り鯉、吹流しの他に、更に日章旗、聯隊旗、軍艦旗を加へるがよい。かくして未來の帝國々民に、十分尚武の氣を吹き込み得るならば、それこそ帝國萬歲である。

やるべし〳〵盛んにやるべし。今年の端午の節句こそ、大いに盛んにやるべしである。世間の阿父さま、阿母さま、願はくば、太郎君次郎君の爲めに、節句の費を惜みたまふな!尚武的の節句費は、やがて一種の恤兵費である。

花吹雪砲車で送る櫻哉　小波

軍國の今年は猿の花見哉　七三

貴婦人の嗜好

黑木陸軍大將夫人

中村鈴子

夫人百子は靜岡縣士族中島錫胤氏の第二女にして明治元年十月を以て生る幼にして故伯爵黑田清隆氏の養女と爲り明治二十年今の正三位勳一等功三級男爵陸軍大將黑木爲楨氏に嫁す人と爲り明慧靜嫻普く父母に仕へ子女を愛し良人の身邊を保護すること積年一日の如し加之愛國の至誠に充され日清役の際は熊本に在りて率先傷病兵慰藉に盡瘁せしは人口に膾炙する所なり

前日の豪雨に引換へ、快晴の朝景色は稍々上己の節句めきたれども生憎西風吹き荒みて、青山南町の切割道では肩掛を吹き取られる位に劇しく、此道を登り了ると一面の畑で、霜除の枯笹は風に靡き地に這ひさうでした。此畑を前にして芝生の土手に扇骨木の生垣を繞らしたのが黑木大將の御邸で、石柱鐵柵の西洋御門を入ると左手に馬繋場あり、右手に外部を小豆色に塗られたる洋式應接室あり、御玄關先の植込は、黐の古木に扁柏、樫などの低い株をあしらひ、前庭には蒲穂形に刈込んだ扇骨木幾株列を成して、紅色の若葉が風に揉まれつ〻閃いで居ました、網代の上鋪に手をつかへし應對振りの優かな御女中は、記者を導いて爪琴二面立掛けられし御中の室を通り、十二疊敷の御座敷へ案内されました。此室は眞正面一間半の御床の間で、朱塗の香臺に薩摩燒の香爐を置き、銅製花瓶に彼岸櫻を挿み、掛軸は魚籃觀世音の一幅、左手違棚の上に御主人の寫眞を飾り、次に紫檀の書棚など置かれ、硝子障子に庭樹の映るなど、淡雅な趣が備つて居るのです。御女中が萠黃綸子の座蒲團と陶製手あぶりとを侑めて退くと、擦れ違ひにさら〱と裾音して、『お寒いのに好く……』と優しい御聲と共に出で來られし夫人は、焦茶米澤飛白の小袖に紋羽二重三つ紋の黑い羽織を召され、紐は白、紫染分の丸打、黑繻子と水色縮緬の晝夜帶僅かに見え、襦袢の御襟は濃紫の縮緬で至て沈厚な御服裝、中高の瓜核顏に張りある御眼元、濃く厚い髮を目立たぬ束髮に上げて、鼈甲のヘアピン一本を

挿され、如何にも氣高い御風采ながら、物柔かで愛嬌溢れ、記者の御尋に對し一々精細に御答へ下さいました。夫人は先づ御手を鳴らして御女中に紅茶を命ぜられ、「先日は生憎留守に致して失禮申上げました、丁度赤十字の會へ參りまして……」と御話の端を開かれたのです。

▲篤志看護婦人會

平常會は第一の金曜に飯田町の本社の方で、第三の金曜に此澁谷の病院で稽古が御坐いましたが、此頃は一週に一度づゝで、却々皆樣御熱心に御出でになります。ハイ各宮樣の御息所も大抵御出ましになりまして、同じ樣に繃帶卷の御稽古を遊ばします。繃帶卷は人形又は健康躰の人を雛形にして、御醫者が教授致し螺旋帶、卷軸帶、三角帶など樣々の種類別が御坐います。流行感冒、氣管支加答兒、腸室扶斯などの看護法に就て講義が御坐いますし、此頃は又隔日に繃帶製造に皆樣御出でになりますが、却々澤山なとで御坐いますネ、私は未だ昨年の秋から入會致したばかりで、日も淺く一向不案内で御坐います。

▲熊本での御經驗

日清戰爭の節、熊本の篤志看護婦人會は却々實地に働かれましたネ。イエ私などは一向行屆きませんでしたが、片山の奥さん（陸軍監督監片山中行氏夫人）は能く御盡力になりました。彼の際の傷病兵は門司から春日の停車場へ着きましたので、其到着日には篤志看護婦の方々皆看護服で停車場へ出迎へ、歩けない兵には肩を貸し又は手を引いて待合所へ連れ行き、疲れた兵にはチヨツト藥を服せなどして暫く慰藉り、それから病院へ送りました。病院へも度々見舞に出て介抱に力を盡したのです。東京から看護婦を迎へましたのは、戰爭半ば過ぎ頃ですが、それは教員の樣に頼んだばかりで、實際の働きは熊本滯在の御婦人方が主のやうで御坐いましたネ。

▲大將の平生

平生少しも手のかゝらぬ世話のない人で、自分用は默つて致し、召使を煩はすとは御坐いません。家内中の

者に小言などチヨツトも申しませぬから、自然私が小言を云はねばならぬ役廻りに爲りまして、本當に女は損な事だつて私が申しますのホヽヽヽ。一躰に鷹揚で物に頓着しないのですが、又一つの事をするには非常に綿密な點が御坐います。此家を建てます時にも、公務の暇々に何時の間にか畫圖を悉皆自分で引きましたが、勝手元の都合まで便利なやうに工夫致したので……。斯樣なこと申すと自慢のやうに聞えますが、先年馬關の知人が參つて「將軍が戰地へ御出立の時にも小さな鞄を僅一個持つて御出るだけで、實に無頓着な方だと思つて居ましたが此御邸へ上つて、湯殿を拜見して案外なのに驚いた」と申しました。時々小刀を持つては臺所の損じた場所など繕つたり致しますが、女中共は「水瓶の栓が新らしくなつて居ますが又殿樣が遊ばしたのでせう」などゝ申して居ります。

▲薄着

四五年前までは、役所へ出ますに寒中でも外套は決して着けませず、又メリヤスの肌着も用ゐませんで、フランネルの襯衣とスコツチの薄い襦袢の上に軍服を着けただけで馬に乘りました。唯今では年齡の割合には薄着ですが、私の方で餘り氣を付け過ぎるので「お前が漸々厚着の癖を付けて不可」と申して居ります。

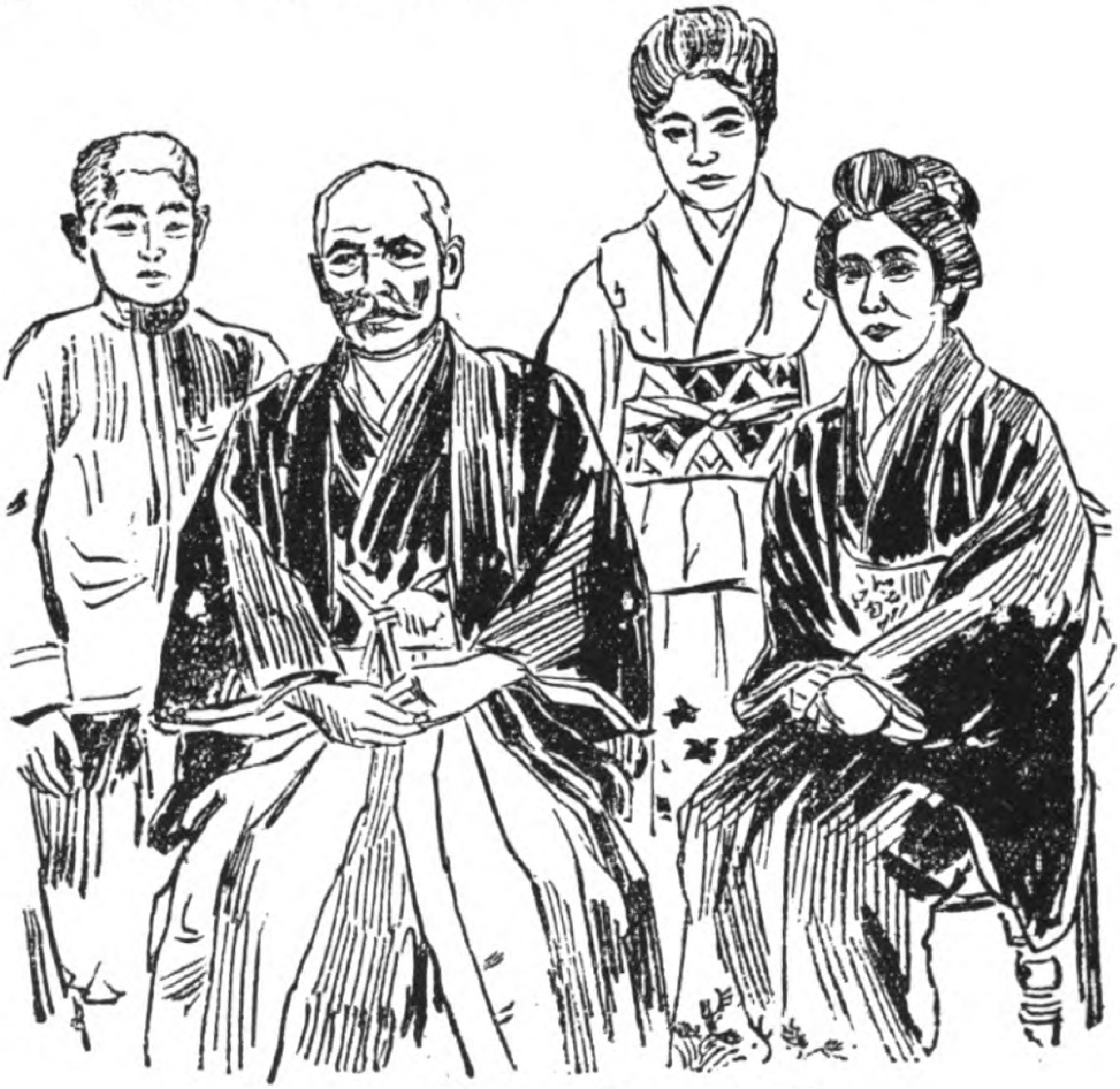
▲動植物

庭樹を刈込むとは嫌ひで、延び次第に任して置きます餘り蔓つて困りますから、留守の際に少し刈込して置きますと、歸つて參つて「庭樹を刈込んだか、可愛相に、天然の生長を妨げるな」と憐んで居ります。床の間の活花も撓めるのは大嫌ひで、自然の儘を挿して置きます。ハイ始終自分で庭から取つて來ては挿しますので……。特に愛しますのは動物の兒で御坐いまして小犬の世話なども能く行屆きます。勤務から歸ると、直に菓子を與れと申して、自分は少しも食べずに犬の子等に遣はし、又あの通り澤山飼つてある矮鷄の雛子に自分で畑の菜を細かく刻んで食べさせたり致します女中共にばかり任せて置くと食べて惡い物なぞ遣つて可愛想だと申して、宛然我子を取扱ふやうな鹽梅で御

坐います。

▲御子達の入浴まで

子供の幼いうちは自分で御湯に入れて洗つて遣りますが、石鹸や糠袋を用ふと肌が荒れると申して、顔など指先で丁寧に洗つて遣り、子供の手の胼胝を大層厭がりまして矢張り指先で氣長に洗つて遣りますが、女も及ばぬほど優しく致すのです。御客樣と御話しする時にも、子供を膝に抱いて居つたりなぞ致したことが御坐います。



乃木大將の家庭

▲下に對して寛大

卑吝い御話まで致すやうですが、玄關の者なぞが月末の勘定を致しても、餘り躰裁を繕つて帳面の上ばかり正しくするのは嫌ひで、却て是れ是れの付け落や誤りが御坐いましたと明白に申す方を喜んで居ります。▲人間は誰でも多少過失のあるのが當然で、何時も鑄型に嵌めた樣には行かぬ、唯過失を正直に表しさへすれば

差支ない」と申して一向咎めません。名古屋に居りました頃、往々兵士が途中で敬禮を忘れるとがあつて、他の者が彼是心配致しても決して搆ひませんで『兵士は一朝事ある際には眞先に生命を捨てねばならぬ者だから、平生は十分大切にして遣れ』と申して居つたので名古屋を出立する時には皆泣いて送つたさうです。如何ですか、是れは唯だ人様の御話でした。

▲飲食物

御酒は強い方で、日本酒が一番好きで御坐いますが、極行儀の善い御酒で、晩餐の外は決して頂きません。晝間頂くのは宮中の新年宴會の時ばかりですが、陛下が何時も黒木には日本酒を遣れと仰せられる相で、日本酒の好きなのは御叡慮に預かつて居るので御坐います。洋酒では葡萄酒かウヰスキーを少々用ゐまして朝は鷄卵をウヰスキーに溶したのと麵包の小さい切れ二個位が常食で御坐います。以前は牛乳を用ゐて居りましたが、餘り盲腸を痛めますから試しに一日止めました、スルト痛みがチヤンと直りましたので、牛乳に性に合はぬとが判り鷄卵とウヰスキーに代へました。平生食量は少い方で、肉類は好きですが餘り西洋料理も頂きません、普通に食べるのは御晝飯だけ、御夕飯は御酒の後梅干と香物で小豆粥を少々食べますが、此小豆粥は三百六十五日、一日でも缺しません。ハイ小豆粥は餘程滋養になると云ふ醫學上の説ださうです子、但だ小豆の粕が消化し難いと申すので、晒餡で炊く方がありますが粗いので困ります。それで主人は小豆粒が交らないと風味が惡いと申しますから、私も種種工夫致して、一合の小豆を四分の三だけ裏越に掛け四分の一の極軟かい粒だけ殘して粥へ混せて炊きますが、胃にも障らず誠に風味よく出來ます。間食は決して致さぬ人で、私は餅や菓子を食べますのを見たとがありません。間に頂くのは紅茶と番茶だけで、それも私方で氣を付けて上げなければ、自分から言ひ付けるとは滅多に御坐いません。

▲出張前の食物

其樣に食慾のない人ですが、演習前とか出征前とかに

は、一週間ほど粗食に慣して、急に身躰の具合を損せぬ様に注意して居ります。

▲銃猟

左様で御坐いますネ、先づ道楽とでも申すは銃猟で、銃の方は餘程巧者でもあり、獲物も多いものですから一番楽みらしう御坐います。私の養父（故黒田伯）も此道は大好でしたが、養父は獲物が無いと腹を立て、居りましたけれども、主人は獲物の無い時でも一向不平の容子はなく、山へ入つて銃を放つだけでも楽みとも為り運動ともなるから十分だと申して居ります。御承知の通り猟期は毎年十一月十五日から翌年四月十五日までと定まつて居りますが、此辺は最早大分荒してあつて獲物が少いので、當節は餘り出掛けません。熊本に居る頃は、阿蘇山へ一週間も行つて参ると、四疊半に一ぱい位雉子を取つて参りました。併し宅へは少しも置かず、皆軍隊に分けて喜ばせるのを楽みに致して居りました。時々主猟官の方々と日光へ出掛けますと、兎や鹿や稀には猪や熊が取れますさうで……其折の物は皆献じまして下され物は其中から特別に御坐います。私は御説教で無益の殺生の宜くないことを毎度聴きますから、何卒猟は止めて下さいと申すと『拙者の母親が食物にする為に猟するのは構はぬと言はれた、其上獲物は軍隊に分與して喜ばせるから無益の殺生ではない』と理窟を付けて居りますよ、ホヽヽヽ。

▲銃猟見物

明治十七八年頃、私は養父に連れられて熱海近辺の山などへ銃猟見物に参りました。結ひ付け草履で山へ登り、御辨當の番を致した位です。養父は伊東、和田木韮山……あの辺方々へ参りました。獲物は兎、雉子、山鳥などで、猪は天城で澤山取れました。道案内に猟師を一人連れますが、兎の通つた處は木の根を嚙つてあつたりして直に解るさうですネ。銃は打物によつて種々違ふやうですが、此家へ参つてから銃なぞ觸つたことは御坐いません。

▲猟犬

犬は一番大切の従者ですから、平生養成に注意致しま

す。雉子狩の犬、兎狩の犬なぞ自然に遺傳がありまして、各々其血統の腹から出たのを育てるのです。雉子犬を仕込むには、小さい時から庭で雉子の羽を投付けて遣つては主人の處へ咬へて來させ、雉子の臭ひを覺えさせます。併し食物には鳥肉を一切禁じませぬと味を覺えて狩の時途中で雉子を食べ散して行けません。總て犬には餘り肉類を遣らずに粗食に仕込む方が宜いさうです。皆様が宅の犬は性質が善いから貰ひたいと仰しやるので九疋位生れても一疋位しか殘さずに方方へ差上げます。小犬はよく庭を荒す者ですが、牛の骨を二つ三つ庭へ投げて置きますと、しやぶつたり玩弄にしたり是れにばかり怡び戯れて、一向他の場所で惡戯致しません、一番良い趣向で御坐いますよ。

▲出　征

主人は出立の前にも平日と同じく別段何にも申しませず、丁度銃獵にでも出掛ける位の容子で御坐いましたイエ私共は宅の玄關で見送り致しただけで停車場へは參りません。一軍將校の出立は餘り公然と申す次第でもありませぬ上に、女の事ですから覺悟は致して居りましても皆様の前でヒヨツと粗匆でもあつては濟まぬと存じて……。ハイ馬丁は三人とも皆連れて參つて貰ひました。留守中の家族は馬丁を煩はす事を一切廢し自分用だけは歩行で濟す積りで御坐います。

▲御留守中の御子達

私の持ちましたのは、唯今のところ二人で御坐いまして、十七歳の女子と十二歳の男子で御坐いますが、父が小言嫌ひで放任主義に育てゝ居ります。併し父の申付は一度も背きませず、又私よりも却て父を慕ひまして、此度出立の際にも深く感じたものと見へ、自分達の望みで翌日から戰地と同じ生活に致しました。ハイ戰地と申しても別に仕方もないのですが、學校への往復や衣食に就て注意することに定めたので御坐います。平生は鹿兒島風で三度々々溫かい御飯ですが、それを冷飯と一切に代へ、寐衣や寐床を暖めることを廢し、常着も成るべく薄着に致し、娘は華族女學校まで歩いて往復する様に爲り、弟の方も學習院へ通學致

すのに如何な雨風でも車に乗らぬ事に定めました。兩人とも學校が可なり遠方ですから七時に家を出ます。

▲朝の禮拜

唯今の御方は御笑ひでせうが、私は舊弊の家庭に育ちましたので、留守中は影膳を据ゑますのを一日も缺しません。子供は朝六時に起きて、先づ兩陛下の御眞影を拜し、それから此座敷で父の居る通りに禮を致し、後佛壇の守本尊を拜んでから食事を致します。學校の出入にも必ず此座敷へ參つて父の寫眞へ禮を述べますが、父の居るとき萬事此通りの行跡を致したら嘸喜びませうに、矢張り左樣は參りませんもので……。

▲長男

此家の長男（夫人の義子）は、學習院の教師の家に寄宿して居りますが、父が出立前一週間ほど歸宅して居りました。當人が申すには、私も青年であるから留守中は此家へ歸て留守居すべき筈であるが、歸宅すると友達が屢々來訪して勉强の妨げともなるから、誠に濟まぬが私だけは勉學の途に安着さして置いて頂きたいとの事ですから、これも一應道理だと存じて望に任せて置きます。

▲夫人の信心

私は前に申し上げます通り極昔風に育てられまして學校も私立へ少しばかり參つただけ位、本當に無教育の者ですから、迚も御參考になる樣な御話は出來ません。唯今御尋ねに甘へて下らぬ事ばかり御話申し上げたのを一々御書き下さいましては何とも耻ち入りますので、何卒宜しく御取捨を願ひたう御坐います。私の實父母は極幼少に別れまして顏も覺えて居りません。黑田へは小さい時から參りましたので、養父が榎本さんを御助け申して坊主になりました時、私が「大きな坊ちやんだ」と申したと一つ話に致されます。養父は却々豪華な人でしたので、諸藝人を度々邸へ呼び寄せましたから、見飽き聽き飽きは致しましたが、芝居見物には一切出しませんでした。此家の主人も斯う云ふ方は嫌ひですから、私も餘り參りませんが主人は家族が芝居へ參つたとて嚴しく申す人では御座いません。

併し私は何より信心が樂みなので、目白へ御說教を聽きに出ますし、又私と子供兩人とは雲照律師の十善戒を受けました。

夫人は未だ四十路に足らぬ御身ながら、道心堅固に流俗の浮華を退けられ、良人の身神保護にも、子女の教育にも、公共事業にも、勵精盡瘁せられ、各方面に遺憾なく行屆かれて居るので、御談話に少しもソツなく、記者は只管感じ入つて御側を去り兼ねました。軈て御寫眞を拜借し、御暇申し上げて御門外へ出ます時、後園に矮鷄幾羽尾を搖かしつゝ群れ遊ぶ樣の自由氣なるが透き見えて、將軍の御趣味を想望されました。此時丁度第一聯隊射的の音と、目黒に於ける練習の大砲の響とが、西北の勁風と善く調和し、灰色の團雲、東南に動ぎ出づるが頗る壯大に感じられました。

三須海軍少將夫人

夫人峰子は靜岡縣士族山本豐朔氏の長女にして慶應元年二月江戶小石川に生れ明治十七年を以て今の海軍少將海軍省人事局長三須宗太郎氏に嫁す人と爲り溫婉冷靜輕々しく信せず興に乘じて云爲せず善く家庭を守り子女を撫育するは軍人の配たるに耻ぢざる婦人と謂つべし

小石川傳通院の正面通を中程より右折し、礫川小學校に軍歌の合唱せらるゝを聽きつゝ、其隣の標札を見上ぐれば、これぞ記者が尋ね參りし三須海軍少將の御邸で御座いました。記者が御門へ入る途端、海老茶袴を着けた十二三の令孃が御友達と出で來られ、愛くるしいお顏に笑傾けて一禮され、お女中が次で出で來り記者を應接室へ導いたのであります。折節御親族よりの御來客と御談話中なりし夫人に挨拶致しましたが、夫人は紺竪縞の小袖に八丈の下着、海鼠縮緬と黑繻子の晝夜帶、黑縮緬に梅鉢の三紋羽織を召され、藤鼠縮緬に霞の小摸樣を微かに現した半襟など、極めて瀟洒なる御服裝、御髮は前髮も髱も豐裕とした花月卷、膚理

緻密な細面に癖のない鼻筋、ゆつたりした遠山の如き眉、靈活にして吸引力に富める明眸、愛嬌洒るばかりの朱唇皓齒は、其靜かに優しき御話振りと調和宜しく、對手をして恍然たらしめるのであります。

御座敷は高臺で清々と見晴しの好い御庭を控え、東は餌差町一帶を眼下に見渡し、南は礫川小學校の教場に接して居るのですが、日光は芝生一面に溢り、枝垂梅と八重椿が爛熳と咲き誇つて居る側に、大きい八手が高穗の袖垣に添ふて配色一際麗はしく、鏡のやうな椽側に庭木の投影婆娑と畫かれて居りました。御床の間には樵枕筆溪山聽瀑の圖を掛け、大花瓶に白梅二三枝を挿み、南の小壁に松方海東伯の書『靜修』二字の小額を揭げてあり、室の中央に紫檀の大机を据ゑ、赤地に黑紋樣の毛氈を掛けて應接用に備へられてあります。御來客は海戰の話より少將の戰功に及び『此頃は新聞や雜誌の記者が頻りに伺ふでせう』と問ひ、夫人は『よく皆樣が御出で下さいますが、何も辨へませぬ私ですから御耻しう御坐います』と程よく答へられつゝ、チョツト視線を記者に向けられました。暫くして御客は暇を告げ、夫人が送り出でらるゝ際、次の室に玩具の列國旗を細引に挾んで四方に掛渡してあるのを見受けました。

斯くて夫人は復坐せられ、改めて初對面の御挨拶あり茶菓など侑められて――

▲御留守居が平常

御遠方の處を態々御尋ね下さいまして有り難う存じますが、何にも御話致すほどの事も辨へず、御出での甲斐がおあり遊ばさない事と御氣の毒でなりません。私は皆樣のやうに御交際向には出ませず、唯もう留守居ばかり致して居りますから……ハイ私が參りたてから始終航海ばかりで陸上勤務は稀なので御坐います。二番目の男兒の三四歳頃、偶に航海から歸つて宅に居りますと、『餘所の叔父さんが居らつしやる』なぞ申していくらお父樣ですよと申し聞かせても判りませんで、可笑しう御座いました。丁度物心の付く頃不在でして、顏を覺えぬ故で御座いませう。

▲少將の平生

主人は御客樣と善く話す方で御座いますが、家内の者達には一向何にも申しません方で、食物なぞもサツパり構ひませんから、他樣のやうに種々の御料理を拵へる世話のない代りに、斯ういふ事が自然不馴で行けません、御酒も人樣の御相手は致しますが獨りでは滅多に飲みませず、偶に飲みます時にも盃に二つ程頂くと最早眞赤になります。間食は嫌ひで、御飯の量も少いので御坐いますが、副食物は割合に澤山食べます。近頃は齒が惡くなりましたので、海軍省の御辨當が堅い洋食の時は、御晝飯を食べずに濟しますから、左樣いふ時は御夜食が待遠しい樣子で間にチヨツトかすていら位頂きます、本當に食物に是れぞと申して嗜好のない人ですが、唯だ烟草ばかりは止められないさうで御坐います。

▲御信書

戰地からは滅多に手紙も寄越しませず、偶に寄越しましても、唯だ大勝利とか無事とか申す事だけで……能く細かく樣々の音信をなさる方も御座いますが、良人なぞは極簡單な文面なので御座います。ハイ子供の事は唯よく注意致すやうに位で……それから庭の掃除を男共に賴むなぞと申して參ります。

▲何時死でも氣樂

良人は兩親も兄弟も何にも無いのですから、「拙者は親族がないから何時死でも氣樂だ」なんて申して居ります。私が「子供の事を思つて下さらないでは困ります」と申しては、善く笑ふので御座いますよ。

▲御子達

總領は男子で生存ますと當年十九になる筈ですが、誕生後五個月目に亡く爲り、次の女の子は十六歲で一昨年とられました、唯今は男兒三人と女子一人で、末の男兒は八歲になりますが、年弱で昨年小學校へ入れませんで、今以て水道端の幼稚園へ參つて居ります、最早幼稚園へ遣るのも可笑しい樣ですが、宅に置くよりはと存じて四月まで遣はせる心算で御座います。子供も學齡になると自然文字が覺えたくなるものと見えま

して、此頃大分慾が出たやうです。それで幼稚園でも大きい子供には少しづゝ字を敎えるさうで、今日は「サ」と云ふ字を習つて來た抔と申して居ります。留守勝の父の事ですから、子供達も別段申し暮しも致しませんが、中で一番末の兒が善く噂を致します。

▲玩具の旗

ホ丶丶丶あれで御座いますか、先達て本鄕の方へ參りました時チヨット見當りましたので……子供達が列國の旗章を覺えたがりますから、始終斯うして下げて置き、一々傍へ國の名を書き付けて置いて遣ります。末のは未だ文字も知りませんから、兄や姉に敎えて貰つて大層喜んで居ります。一一私の處へ聞に參らずとも自然覺えて便利で御座います。



▲令孃の書物好

未だ十二ですから、本當に好きか嫌ひか判りませんけれども、御伽噺なぞを讀んだり、學校で御友達に種々な雜誌を借りて見たり致しますが、あれでも解るのか知らんなど丶叔父達（夫人の令弟）が笑ひます。又晝間讀んで置いた書物の話を夜分女中共に聽かせますが、「折角私が御話をして遣つても皆が眠つて仕舞ふから厭よ」なんて申して居ります。イエ最早手前共の子

供は皆不束の上に手懲りを致してから身躰ばかりを大切に心懸けますので、一向躾が行屆きません。

▲故令孃

旅行などは御耻しい程トント致したヿは御坐いません、が、日清役後氣管支病で暫く大磯へ養生に參り、松林館に居つたヿが御坐います。其後三十三年頃娘の養生のため大磯の長生館へ參り、鎌倉や逗子など方々へ連れて參つて居りました。ハイ横須賀へは其頃二三度參つて軍艦の中もチロツト拜見致しました。娘の病氣時分は丁度良人が廻航中で餘計に心配を致したので、私は此度の戰爭の留守よりも、彼の時の方が甚く心を痛めました。

▲夫人の實家

私は直此近邊で生れまして、御維新の際靜岡へ參り、丁度三歲から九歲まで居りました。兩親は未だ壯健で唯今大阪に居り、二人の弟は學校の都合で此家に寄留致し一人は大學へ通つて居ります。それで皆樣が子供達の復習の爲に應宜からうと仰しやいますけれど、何れも自分達の勉强が忙しいので、却々其樣な暇がないので御坐います。私は東京に生れた者でありながら、實家が武骨一方で昔から芝居へ一つ連れて行かれたヿは御坐いません。

▲お出不精

私の出不精は評判で御坐います。據ろ無い他出用事を成るたけ溜めて置いて一度に濟ませる樣に致しますと、それで偶に二日ぐらゐ續けて外出致すヿが有ります。子供達が『母樣又今日も御出掛ですか』なぞと申しますから、私は『遊山に行くとでも思ふのか又と言ふのが厭だ』と申すのですよ。それでも折惡しく偶々の不在の際に乾度何方か御出になるやうな都合で滅多に宅は空けられません。

▲御召使

女中は三人居りますが、皆田舍者で御坐います。最初神奈川の者を置きまして、それから續いて神奈川からばかり代りが參ります。大抵六七年ぐらゐ勤めますので、嫁入の世話まで致して遣りました。主人は留守勝

ですが、子供が多勢ですから朝晩は却々忙しう御坐います。それに洗濯物が隨分澤山で、水道を引きましてからは左程にも御坐いませんが、堀井戸ばかりの頃は御承知の通り水は深し迚も東京者には勤まりません。

▲針　仕　事

・・朝晩はゴタ〳〵致しますので、手紙など認めますにも晝間靜かな折でなければ周圍に子供がチラ〳〵致して落着いて書けない位です。それで纏つた仕立物などは大抵女中共の出來る者に致させますが、下拵えや心算物だけでも、相應に私の仕事があるので御坐います。それから足袋や靴下の繕ひと申すと、皆な私の處へ持つて參るとに定めて居ります、多勢の家では是れも一役で御坐いますよ。纏つた物は致し榮がありますけれど、足袋や靴下の繕ひは誰でも厭がりますから、私が引受けるので御坐います。

▲朝日艦坐礁の浮説

三十二年の一月良人が朝日艦受取に參つて廻航中でした、新聞に朝日艦が坐礁したと云ふ記事が出まして、良人の肖像と朝日の圖とが插畫になつて居りましたので、大層心配致しました處、海軍省から詳しい御報知があつて噂ばかりと云ふとが判り、漸と安心致しました。何に致しても軍艦の事は何時如何いふ事が御坐いますやら判りませんから……イエ最早生命より御役に過失がなければ宜いがと祈つて居ります位で、心配致し始めたら却々限りが御座いません。

▲出　征

陸軍の御方が御馬で此地から御出立なさるのとは違ひまして、前から佐世保へ出向いて居り、それから戰地へ參るのですから、私共は却てサッパリして宜いと皆樣と好く申すのですよ。大分佐世保まで御暇乞に御出掛なすつた奥樣方もあり、中には艀舟で軍艦まで御見送りなすつた方もあるさうです。左樣で御座いますネ、御出發になる御方の爲に如何でせうかネエ。○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○。私共は昨年の暮良人が佐世保へ立つのを新橋停車場まで送りましただけで……。

▲山中大佐と三浦中尉

仰しやる通り何處へ參りましても、彼の方々の御噂が出ますネ。中尉の奧様は軍艦まで御見送りだつた相ですから、本當に何樣なでしたらうと存じます。結婚後間もなく永い訣別を爲され、直に御髮まで截られた御心中は健氣であるだけお可哀相で御座います。山中さんの御妻子の御寫眞は新聞雜誌で拜見致しますが、彼の可愛らしい御子樣達の御顏を見ると實に御氣の毒樣で……。私の懇意な者に中佐の御官宅とお隣り合つて居つた者がありまして、「朝夕中佐の御顏を見て御昵み申して居たので、尚更御氣の毒に堪へない」と申して居りますよ。

何となく濕り勝になつた御座敷へ、久留米飛白の筒袖羽織を召した肥滿つた白皙の愛らしいのが、記者に一禮して夫人の側にお座りでした。言ふ迄もなく末の御令息で、今まで奧の室にポン〳〵射的の音が聞えたのは、此令息の遊び居らるゝのでした。

本當に此身躰て幼稚園へ參るのは可愛しいのですよとて笑まれ、

さア彼方へ御出でなさい

と言はれたので、從順に次の室へ走り行き、例の列國旗を樂しげに眺めらるゝ御容子が如何にも愛くるしく無邪氣でした。長坐を詫びて御玄關へ退つた時、傳通院境内に軍馬の嘶く聲が頻りでした。

▲米國看護婦隊

米國陸軍看護婦隊監督マツギー夫人のことに就ては屢屢記する處ありしが仝夫人は看護婦の撰拔には餘程注意を加へたる由にてその資格の制限は

一、責任ある看護婦學校の本業生たる事、少くも二年乃至三年間看護婦に必要の學科を教ふる所の學校本業生たる事

一、從軍看護の經驗を有する事

一、日本に赴く以上は少くも六ヶ月間軍隊看護に從事するの覺悟ある事

一、年齡は二十五歲以上五十歲以下の婦人に限る事

にしてその服裝の如きも一定の制限をなしその費用の如きも一々豫定を定めたるよし、その用意の周到なる實に間然する處なしと而して今同渡航する看護婦隊の中には米西戰爭に從事したるもの最も多く引續き北淸事件に從軍したる老練の看護婦にして一行八名いづれも撰りすぐりたる人々なりと。



戰爭と家庭

羽仁もと子

心を籠めて世上の事を見ますなら、私共は何物に向つても、多少の敎訓を見出すヿが出來るのです、殊に戰爭の如き一國の存亡興廢に關する大問題になりますと、その中に幾多の至大なる敎訓が含まれて居るのです。特に今回の戰爭などは、交戰後まだ日も淺いのに、かく迄に國民の愛國的感情を湧きたゝせた、平時に於ては殆ど夢想だも及ばぬ程の、種々なる働きをさせて居ります。勤儉貯蓄といふヿも今更のやうに、人の肺腑に染み込んだでありませう。私は戰爭の敎訓を家庭の上に應用して、差當り次の如き考を持つて居ります。

▲下婢に就て

此頃節儉の實行のために、下婢を廢するといふヿは、一般に餘程の美事かのやうに考へられて居りますけれど、一概にさうとばかりは限らぬかと思ひます。戰爭には必ず不景氣が伴ふもので、世の中のある方面には、その爲に困難に陷るものが、澤山出來るので御座います。戰爭の影響のために、難儀をするものは、唯に軍人の家族のみではありません、戰が長く續けば續くほ

ど、生活の便を失ふものは、追々と多くなるので御座います。斯樣にして一方には、子女のために職業を得やうとするものが澤山になり、他方に於ては紡績工場織屋、養蠶場はじめ、是等の男女の手を要すべき、多くの製造場が不景氣に苦しみますゆゑ、平生よりは一層に仕事が得にくい割合になるのです。この際今まで使つて居た雇人を出すといふのはどうでせうか、一家内のためには儉約になりますけれど、社會全体の上からは困つたとになるのです。むしろ置かれるものならば、雇人などはその儘にして置いて、寄席や芝居の費用は勿論、客に贅澤な菓子を出すとか、間食をするとかいふやうな、無益有害の費用から省いて行くのが當然です。少くとも下婢の二人も置くほどの家ならば、普通の家庭の有樣では、隨分この無益有害な費用が澤山あると思ひます。儉約の決心をするに當つて、主婦の第一に目を附けべきものは、まづ是等の冗費であります。畢竟私とても敢てこの際下婢を廢するといふとに、どこまでも不贊成を唱へるものではありませぬ、唯見えのため或は下らぬ習慣の爲に消費される金錢をば、さほど熱心に減じやうとも試みずに置きながら、可哀相に下婢などをまづ第一に出そうとするのは、寧ろ忍びぬと思ふからで御座います。私は家庭の中には殊に實利以上に人情の温さを存じて置きたいと思ひます。

モー一つ下婢に就て感じますのは、その寄附金のとであります。下婢の多くは平生餘程貯蓄心に乏しいもので、隨分下らぬ無駄づかひをするのであります。それが戰爭に就て慾を抑へて醵金するといふのは、申すまでもなく感ずべき事柄で、主人のほめるのも新聞の書きたてるのも當然でありますけれど、自分自身明日にでも病氣になるなら、早速他人に厄介をかけねばならぬやうな不始末なものが斯樣に一時健氣な心を起したやうな場合に於て、唯その義俠心を賞揚するだけにとゞめて置くのは、物足らぬ仕方だと思ひます。主婦たるものは宜しくかゝる場合を利用して、その義俠心を奬勵するにつけ、日頃の心掛けを說き聞かせねばなり

ません、例へば西洋人は一体に貯金の心掛けの篤いもので、奉公人なども婚禮をする時には、いろ／＼の支度それ／＼の入費などに、少しも親の手を借らず、その上家を持つて早速子供が出來るといふやうな場合にも、困らぬ丈けの貯金がなければ、恥として居ることなども語りきかせ、實力を養ふことの何よりも先なる所以を理解させたいと思ひます。

▲子供に就て

子供たちはまたかゝる折には、殊に強いことが好きになるもので、花の時候には花に就て敎へ、雪の折には雪に就て敎ゆ



▲出征の留守宅（一）

細君夫に代ッて十露盤を持つ

ることが、自然の敎育法であると同じこと、この際子供に強いことを敎ゆるのはよいことで御座います。併しながら強いといふことは敵をうつことばかり、世の中に強いものは軍人ばかりであると云ふやうな、誤解に陷らぬやうにいたしたいと思ひます。

即ち弱い人を助けるのも、強くなければ出來ぬことで、學問のよく出來るのにも、よい子になるのにも皆勇氣がいるといふことをよく／＼敎へて、强いといふ意味を成るべく廣くそして大きく考へさせねばなりません。

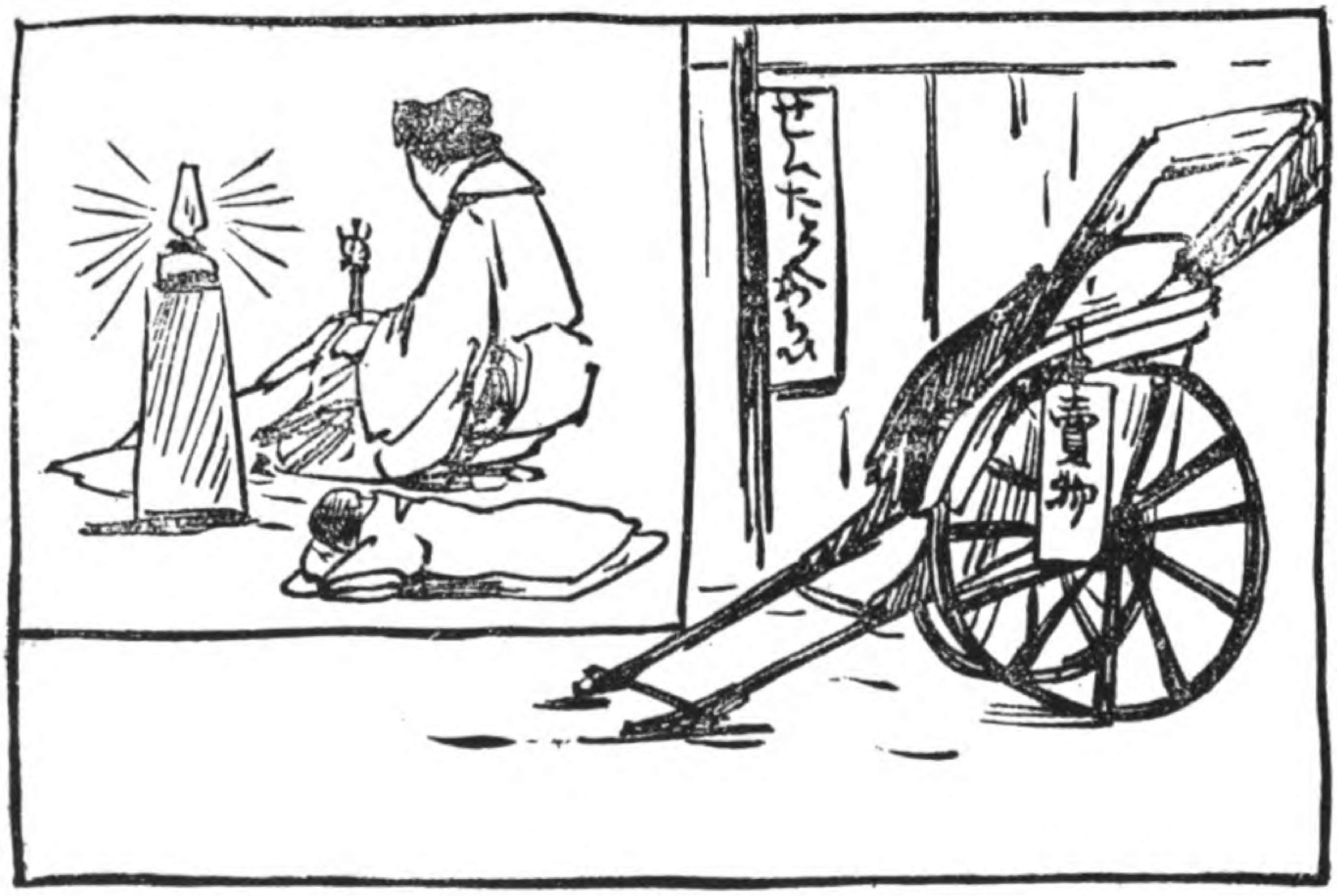
▲一般の婦人に就て

私供はじめ婦人はとかく世間の狀態に暗いので、自然考が狹くなり手前勝手にばかりなりやすう御座います。それゆゑ私供は此際、社會といふものはしんに共同的で、各々に責任を持ちまたお互に義務を負つて居るといふことを、充分に感んずるやうにつとめたいと思ひます。申すまでもなく露西亞は軍人のみの敵ではありません、國民全體の敵であります。併しながら國を擧げて戰に臨む譯ではなく、軍人たちは日本全體に代つて戰ふのであります、それゆゑ私共はこの際、最も軍人に對して、大いなる義務を負つて居ります。即ち彼等を慰問することにもつとめねばならぬ、その家族の貧困をも助けねばなりません。これらの事は獨り戰爭の時のみでなく、平時に於ても同じことで御座います。商人は教育家と別段に關りのないやうに見え教育家は政治家と何の關係もないやうでありますが、併し政治家が政治のことを執り行つて吳れるので、教育者が安んじて教育に從事することが出來、教育者が子弟を預つて吳れるので、商人はその子供だちの學校教育に心配しずと濟むのです。私供はお互に世話になりあつて生活するのです、それと同時にまたお互に世話を仕合つて立つて行くのです。

世話になる方は即ち義務を負ふのであつて、世話をするのが即ち責任を盡すのです。そして我々銘々の責任は如何なる所にあるかと云へば、何れもその長所のある所に責任を有つて居るのです。即ち軍事的敎錬をうけた所の軍人は、戰場に出るのが責任であると同じことで御座います、私供は少しでも自分の長所とする所を自分のためまた他人のために役に立てねばなりません。若しお互にその責任を怠りますなら、丁度軍人が戰爭に行くのを嫌うと一般で、此上もなき卑怯不面目で御座います。目下に於ける我々婦人の狀態を見ますなら、温順とか謙遜とかいふ美名（誤解されたる）の下に、隨分婦人の責任を無視してゐることが、家庭の内外に澤山あると思います。もしも軍人が卑怯であつた

なら、私供はこの際ドンナに心配するでありませうか、婦人の卑怯であるとも、社會全体の上からは、軍人の卑怯であるのと同じと、由々しき大事で御座います。

婦人はまたよく心配性だと申されますが、これも多くは世間見ずであるために、益なきとにクヨ〳〵と思ひ煩らうのだと思ひます。で私供はこの戦争を利用して、追々世間を知るやうになりたいと思います。即ち各町村市區の中には、軍人の家族を慰問する婦人會、或はその他か丶る種類の會などが出來て居ると思ひますゆゑ、まづその様な團体にでも連なつて、困難な人々の狀態でも見ますなら、自分のためにも慥に種々の益を得るかと思ひます。そして或はか丶る事より婦人に適當な社會的の働きも思ひつき、また籠りがちであつたものが、適當な外出をするやうにもなるでありませう。



▲出征の留守宅(二)

他家の裁縫して家計を資く

▲主婦に就て

家持といふものは忙はしいものと云はれて居ながら、實際にはなか〳〵暇な奥様方も澤山あると思ひます。田舍よりも殊に都會の生活は家によつては、至つて事少なでも濟んで行くので、子供もなしで女

中を置く家などでは、始終魚屋や八百屋、呉服屋のまわり番頭などを相手に、その日々を暮らして居る奥樣も隨分あるので御座います。斯ういふ方は差當り働かうと思つた所で、家には用事がないとお思ひになるかも知れませんけれど、この樣な奥樣に限つて、墓參とか親戚、懇意への訪問といふ時は、必ず宿車が玄關に梶棒をおろして、待つて居るといふ風です。まづこれらをやめる丈けでもよいのです。とにかく一日何もしないといふことが名譽でないといふことさへ、眞實に感じますなら、恐らく人間に用のないと云ふことはない筈でかるゝ方にも必ず心掛一つでは、相應な仕事が出て來るだらうと思ひます。

次に以上のやうな家庭でなしに、人數の相應に多い家では、主婦たる方々がその家族の心に、勤儉貯蓄といふことが入りかけて居る、この折を利用して、まづ家事に順序を定め（家人各々にそれ〲の仕事を割りあつるもよし、各々に自分のことは自身でするやうに、そしてなほ餘力を家事に用ゐることにして、追々に無駄費と無駄な勞力を省くことに巧みになりますなら、その時こそ大概の家では下婢なしに濟むやうになるのであらうと思います。私は今がめい〲儉約の決心と準備をする時で、その效能が戰後に於て著しくあらはれることになり、年を追ふて各家庭が益々健全な基礎の上に立つやうにありたいと思ひます。

最後に前項下婢解雇のよしあしにも關係のあることですが、例へば四人の下婢を俄に三人にして、主婦や家人がその解雇した下婢の仕事をするよりも、數人の下婢を置くほどの餘裕ある家ならば、むしろその家の夫人は徒らに下婢の代りをつとめることを名譽とせずに、軍人家族の慰問なり、或はその他の有益な事業になり、時間と力を盡くす方が一層大いなる必要であらうと思ひます。

皆さんこの戰爭は長く續くんでせうか又は早く結局のつくものでせうか、私共おもひ升のにはこの戰爭はきつと長く續きませう。そして長くつゞけば續くだけ金はいよ〱かゝります。文明の戰爭は金が第一です。金が乏しくてはいくさに勝てません。皆さんは此際大いに家事を務めて軍資供給の根本を養はなければなりません。

（女學記者）

日露戰爭 巷の噂

水原翠香

▲戰爭と家庭

今や日露戰爭起りてより貴となく賤となく老若男女都會も地方も日夜唯此事に熱して上流紳士の會合より井戸端會議の問題迄軍事の咄に非ざるなし抑日露の衝突は一朝一夕の談に非ず遠く四五十年の昔に始れり德川幕府いまだ盛なりし文化文政の頃よりして露艦の我北邊を覘ふ事絕ず憂國の士は北門の鎖鑰堅からざるを歎じて蝦夷（今の北海道）樺太を探見し防禦開拓を献策せし人々有と雖鎖國太平の折柄とて其言用ゐられず元來樺太は奧蝦夷の稱有て今の北海道と地勢連り大陸とは海峽を隔て日本の領土なる事は地圖面に明瞭なるを狡譎なる露國は我領也と主張し幕府の有司等抗辯勤ると雖或は軟に或は硬に幕吏等が外交の事に熟せざるを翻弄して要領を得せしめず荏苒年月を經過して其うちに日本は明治の維新と成て萬事の未整頓せざる際に乘じ終に千島を以て樺太と交換せり（千島は數多しと雖往來不便の洋中の小島のみ幾何の利も非ず是に反して樺太は面積廣大なる一大島にして山海の富源元より比物に非ず數多き小虫を餌として大魚を釣得たるが如し其猾智憎むべし）

遼東還附の事は今人皆克知る處なれば又云はず臥薪嘗膽十年の時運漸々廻り來て積雪結氷の鬱憤も旭の御旗の光に消散すべき時こそ來たれと我臣民は皆身命を抛ちて男子は外に出て戰ひ女子は内に止り家を治めて出征の男兒の爲に後顧の念なからしむべしとは全國一般の云ふ處にして又誰とて然思はぬはなかるべしと雖扨此事たる口に云ふは易けれども身に行ふは極めて難事なるべし目今は全國の人々血湧き肉躍るの頂上なれば眼前の事に狂奔して後日永久の事を思慮するの暇なく軍人の家族といへば家主は家税を半減又は無賃にても貸し諸商人は賣品の價を割引し醫師は施療產婆は無報酬學校も學資を要せず、其他に有志者の惠與金ありて諸方より配當し來り、軍人の家族中にも今日稼の貧困者などは却而其當人の在し日よりも餘裕を生ず

るの奇觀も有べく、斯ては易しと思ふべけれども是は則一時の狂熱にして決して永續すべき事に非ず、年月を經過すれば逆上たる血は冷却し隨而何事も常に復するが上に、諸税の負擔は益々重り爲に諸物價の騰るは勢ひ免るべからず、いかなる家主米屋八百屋も各々身代に拘はるに至れば背に腹は換られず、價を增滯りを債るに至るべきは當然の道理也、軍人家族たる人は只今より此事の必有べきを慮り、克覺悟を極めて世の艱難なる大敵と戰ふの計畫を爲さゞるべからずされば世上の惠與によりて若も活計に餘裕を得る有らば積で以て貯蓄とし、只順節儉を旨として女なりとも家業出來得べくば之を勉勵し、然らずば何なり共職業を營み或は他に雇はれて自活の道を立べき也、夫に附ての困難容易の事に非ざるべきも、不屈不撓の精神所謂和魂を要する事男子が旅順浦汐に危險を犯して突進し、滿洲の野に奮戰すると事柄こそ替れ其辛苦慘憺は同じかるべし、否々男子に於ては危險を犯しても運よければ敵彈もあたらずして海には敵艦を轟沈し、陸には敵軍を擊退して日本萬歲の凱閧を擧る時に心持はいか斗の愉快なるべき、よし不運にして戰死すとも始より國家に捧し命也、凡此世に生を受たる者何者か一死を免るゝを得べき、長短遲速は有ともいづれ一度は死するに決せり、同じく死するならば病沒するよりも花々敷戰死して勇名を戰史に留め永く靖國神社に國祭をうくるは其死榮や萬々也、況や武運めで度して凱旋の盛事にあふ間敷に非ず、何にしても男子はとく也勇み進んで出かくるも其筈也、女子に在ては比較的部がわるく家計に差支なきはよけれども、今日稼人の男子は出征に從ふからには其生還は先なきものと諦めざるべからず、幸にして其身は壯健上に仕ふべき舅姑なく下に保育すべき兒もなき獨身ならば看護婦となりて戰地に往來し、彈丸雨飛の危險を犯しても夫と運命を同じう爲も愉快なるべしと雖、或は病める老父母在又母の手を離ち難き子女ある者は止を得ず止りて夫に替りて今日の活計を立老父母の介抱、子女の養育萬端の事悉く一身に脊負て立たざるべからず、其心苦困難

や容易の業に非ず、而して万一の僥倖を祈りたる夫は不幸にも戰沒の報を傳へられ、家計の困難は永久一身に懸る、如斯辛苦慘憺猶其志を變せずして貞操を守るも、或は病の爲に又は艱難に堪ずして倒るゝも有べし、其死は男子の戰死の如く花やかならず、史に其名を留る事もなく、死は同じきも其苦みや彈丸一發の下に倒るゝよりも增るとも劣らざるべし、是等をこそ眞に愍むべき者の限りといふなるべし、或會にては此等の扶助を一

▲出征の留守宅(三)



無慈悲なる家主の催促

時にせずして、先十年と見積り年々に幾分宛と定めて細く長く惠み與ふる事に議決したりときく、諺に云ふ十年たてば一昔にて今の赤兒は親の手を放れ童子は青年壯者となりてそれ〳〵活計の道を得べければ至極尤なる計らひといふべし。

又家祿財産ある家にて生計には差障りなしといふ共夫が出征の留守宅を預かる細君としては內外の事一身に負擔して老人に仕へ子女の教育家政及び世上の交際等日夜の心勞は平日遠地出張の留主

居とは事替り、出征の夫には折々贈る信書にも唯家内の無事平穩を報じてたとへいかなる紛議有とも成べく親戚朋友の間にて共議して事を處理し些も其心に懸るべき事を告やるべからず憂苦にせまりて愁怨を訴へ或は情に惹かれて戀歌などを書贈り爲に夫の勇氣を沮喪せしめ望鄕の念を呼起す如きは軍人の妻として尤慎むべき也。

昔の物語近來の小說等にもよく有る如く良人遠征の留主に乘じて其親屬知人の內に不逞の野心家在て空閨を守る細君を誘惑せんとし或は色情に非ざるも其財產を橫領せんが爲に種々の惡計を工む事なしとは云ひ難し、たとひ然迄の惡人には非ずとも親戚にても家令にても餘り財產を丸任せにする時は其人孔夫子の如き聖に非ざれば何事か金の必要ある場合に自己が管理する財有ればツイ其金を以て急を充しおき、他日辨償すればよしと思ふなれども扨金錢上の事はとかく意の如くならぬ勝なる物にて、必定手に入と思ひし當は先方より外れて加之存もよらぬ大損失の俄然起るあり抔して終に該金を償ふべき道なく成果、始は唯一時の融通にて終は管守盜の罪に陷る等世間その例多く聞く處也されば財產は決て一人にて自由のならぬ樣第一銀行の如き大銀行に預けて利子は必要に應じて請取るとも元金を出すには慥なる親屬と當人との連印に非ざれば渡されぬ樣に爲おくべき也其證書は持主自ら大切に秘藏し置くを上策とす天災地變の爲ならば是非も無れど不注意よりして其財產を亡ひては夫が凱旋の日又戰沒しなば位牌に對し家に對して主婦たる者何の貌容かある

年若き細君の獨住するは禍を招くもと也自己は縱ひ貞烈堅固にても他よりは兎角に彼是といひはやすものなれば虛說にもせよ一度新聞などに浮名を立らるれば取消したりとて何の益もなし禍は未然に防ぐにしかず舅姑もなき家ならば實家の兩親か又は親屬のうちの慥なる人の監督の元に在て萬事を愼みて他の誹謗を受けざる樣にくらすべき也此事は曩に未亡人處世法と題してくはしく說たれば爰には省く去年の女學世界十四號に出たり參照して心得たまへかし。

▲戰爭と經濟

仄に傳承はれば聖上には深く叡慮を惱ませ給ふの餘りに申も恐多き御事ながら臺盤所より捧げ奉る日々の供御を一汁一菜にせよと宮内大臣へ御沙汰有しとかや御儉德の炳然なる忽に上流社會に傳波し諸家相競ふて節儉を專らとし建かけたる新築を中止し遊興を止め或は人減し珍膳美味を廢して野菜を用ゐらる丶等平日より錦衣玉食の奢侈に飽きたる貴婦人令孃は此頃赤十字社の繃帶卷に御出勤あらせらる丶にも木綿服と中食の辨當の粗食に誇る傾きさへ生じたりとぞ斯の如き潮流なれば上の好む處下之より甚きの習ひとて民間にても各家節儉々々の聲あり奢侈を省くの美德は誠に賞すべき事なれ共其主旨を取違へて動れば吝嗇に流れ人の怨を買ふ如き者なきに非ず殊に大勢の雇人職工を使役する工場商店等にては平日より美食もさせざるを猶其上に副食物を粗にし、三食二度迄茶漬々物計とする等は大に人氣を損じて儉嗇貪吝をなして主人の眼の屆かぬ處に大穴を明らるゝ事あり大家にて儉約を實行せんと



跣足參りの官婦人夫の無事を祈る

▲出征の留守宅(四)

ならば恐多けれど聖上の大御心に倣ひ奉りて主人たる者卒先して我身を反省み、妾を蓄たるは暇をとらせ外に在者は手をきり遊興を廢し、禁酒し、綿服し、細君も又劣らじと第一番に髪結女を斷りて手製の束髪とし觀劇を斷念して職業を爲し、遊藝の稽古は一切中止すべく、貴婦人すらも綿服せらる丶折柄なれば外出にも綿服にて唯さつぱりとし汚れ垢つかざれば足れり、決して恥るに及ばず却て心ある人は譽べき也、如斯主人夫婦眞先に節儉を勵行し然して雇人の食事等は餘りにかまはず、只大やうに節儉爲べき事を云渡すに止る時は雇人等も眞實に感伏して己が心より各自に節儉を勵行するに至るべし、然なりたらば主人は又大に是を譽稱へて月一回か二回宛一統に酒食を饗して奬勵すべし、是則いはずして偸喰を防ぐに足るもの也、拙く行ふは工に云ふに勝る、又千言一行にしかずとも云へり、己爲ずして他を强ふれば却て反動をおこす大家ならずとも主人主婦たる者は常に此心がけを忘るべからず況や戰時に於てをや。

美味珍肴に高價を費したる人の之を廢して普通の食となすはよけれ共、平日さして奢らざりし家にて副食物を廢し茶漬香の物とし、或は勞働する者迄も一統に粥を喰せる等は甚節儉に似て非なる物と云ふべし、如何となれば衣服の方は絹物にて暮し丶人が俄に綿服を着ても何等の故障なきのみか、二枚重ねたるは一枚にて足り損じ破も綿は絹の倍は慥に保つなれば節儉の實に適ふ物なれど、食は然らず今まで日々に用ゐたる牛乳、鷄卵、肉魚を止めて、漬物野菜のみを食すれば大に衞生に害あり、勿論田舎の農民は是等を常食として壯健也、雖然そは食物の故に非ずして田舎は山川田地廣濶にて空氣の淸淨なるが上に日々耕作に從事して男女共に幼少より身體をきたひ上るが故に、粗食不消化物も身體に障らざる也、都會にても勞働者は農夫と差て替る處なけれど常に座食して心を配り腦漿を耗す人にして粗食不消化物のみを用ゐては必病を生せざるを得す、（野菜にも滋養分多きもあり然るも煮て和かにして食ふをよしとす）殊に茶漬にて搔込めは勢ひ咀嚼爲ず鵜呑となる故に壯健者は障らねど

老人小兒又脾胃の虚弱人には甚害となる物也、又粥は病人の食にして七八歳迄の小兒衰弱の老人には宜けれど、十歳以上發達盛の童子壯年血氣の者は腹の耗る事非常に早くて次の食時迄耐忍難く、間食偸喰を爲し結局儉約とならず人氣を惡するだけ損となりて畢るべし。

眞の節儉を爲むとならば先第一に家内に病人なき樣に注意する事病人あれは醫を招くより始めて藥の外にも種種の物品を買はざるべからず、就ては不時に煮物の火を起し燭を點し或は人を雇ふ等其他目に立たざる費事て數ふべからず非常の費も病人の爲には止がたし洵に病程不經濟なる物はなし。

平日何もせず人をのみ使ふ旦那奥樣も節儉の爲に又衛生の爲に雇人を耗して自ら之に替り、旦那は庭樹の手入れ畑仕事又庭なき商家ならば店の荷の扱ひ、薪割及商業の驅引に東奔西走て身體を働らかすべし、奥樣も又家内の掃除物の出し入れ、買物も人を遣はず自ら出掛、一人女位の細君は下婢を止めて一切の事を擔任すべく隱居も庭の草除掃除又は孫の小兒車を押て近所の小用を足して運動傍手助を爲、女兒は學校より歸らば家内の事を手傳ひ、臺所事を實地研究す



下女輩の爭ひ合して其代を獻金す

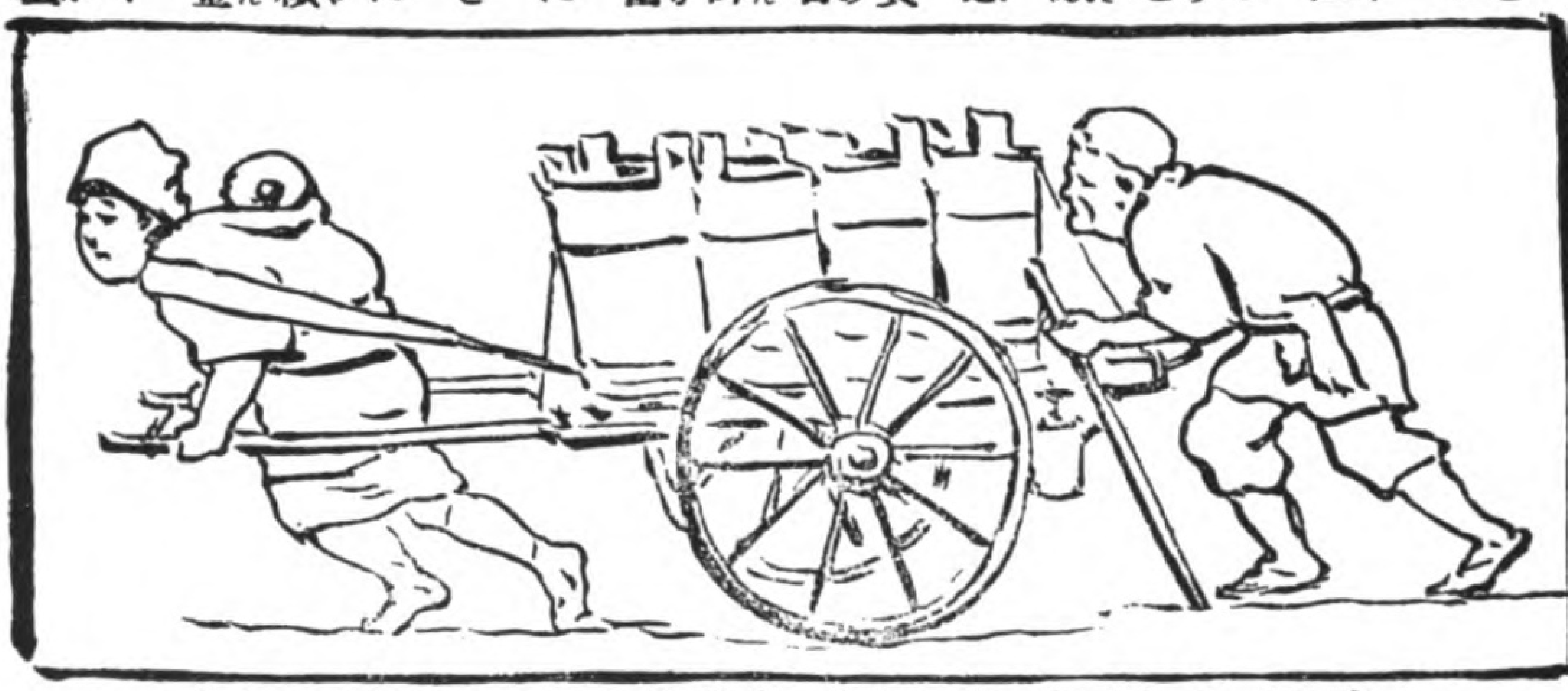
▲出征の留守宅(五)

れば一擧兩得家政學の捷徑也、斯一家一致和合して國に盡す爲と思は丶譬各々不平有とも互に耐忍し、各々劣らじと勤め働くが眞の節儉にして病魔などは遠く迯去りて各々健康なるべき也心身共に大夫丈なれば少々の事に障る物に非ざる也。

▲大國民たるの氣象

些少の事を節するよりも大きく贏る事を工夫爲にしかず、今や世上一般戰爭の他外を思はず、三月節句は來りても十軒店の雛徒に店ざらしと成て買手なし、書草紙屋も戰爭畫の外みる者なし、書林は戰爭の雜誌に輸贏を爭ひ、劇塲は各座戰爭を仕組何でも彼でも戰爭に非ざれば人氣はよらず、而て其揚高の幾分を献納爲といはざるはなし、然と雖是畢竟するに一國内にての事なれは公平正大なる眼より視る時は甲の物を集めて乙に移すに過ぎず、一方に集ると同時に他方に欠乏を來たすが故に其力到底長く續くべからず、倩國の爲に惟ば夫等の計畫を内地にて爲ずして外國に向つて爲すこそ策の得たる物ならめ、雜誌は英譯して畫草紙と共に外國に賣出さは英米人は悅で買ふべし、惣て何業に拘はらす今より後は內國取引を二ノ次とし專ら顧客を外國に求むべき也、是迄日本商人はとかく利己主義にて一致協力國の爲に大にもうける事をせず同業互に商賈敵として相妨ぐるが故に成功せず共倒となるが多し、島國根性と外人に笑はる丶も是非なし然らは愛國心なきかと思へばいざ戰爭となる塲合には商家の手代も俳優の子弟も身命を國家に捧げて軍務に從ひ其町村も出征軍人の出るを榮譽とし之を送り其行を壯にす、軍事には報國盡忠、商業といへば利己主義とは解し難き心ならずや、畢竟商賣を私物にして富國の爲と思はぬなるべし、見よ目前の今度又は日清戰爭の當時の事をいつも其前には人民政府を攻擊し議會は解散され又政府内にも海陸軍人中にも種々の軋轢有て互に惡感情を懷くと雖いよ〳〵戰爭と事定まれば是迄の事は一切忘たるが如く、相反目せし人も互に快く相扶けて國事に鞅掌し、軍人は海陸共に萬人も兄弟の

如く一意專心身命を抛て國家に忠を盡し人民は競ふて金を惜まず此擧國一致の神精一到何事かならざらむ强大國を敵として大勝利ある由緣洵に人心の一致程强く恐ろ敷物はなし此軍時の心を商畧に及ぼして同業各々商買敵など云ふ私心を去り露國的同士討の愚を演せず大に團体を組織し一致協力資産家は金力なき者を援助し資本なき者は身を以て事に從ひ唯我天皇陛下の御爲日本の富國隆盛を謀り各々技量を奮つて海陸軍人が着々大勝利を奏するに劣らじと勵みて他國の金を贏得て之を軍資にも恤兵にもあらゆる用に充んには戰爭幾年の久敷に度るとも國力は續くべし從來日本より外國に出稼して金を握み得る者は醜業婦に限り他は多く失敗すとは恥かしき限りならずや又蠢



▲出征の留守宅（六）老父嫁を相手に田圃に働く

人にて外國に興行せし者は僅に川上音二郎あるのみとは餘りに不甲斐なし今年は米國に大博覽會有と云ふ此好機會を逸さず、俳優連も國家の爲に大奮發して一座を組織し、軍國民之義務といふ大幟を樹て興行せよ內地には今恐多くも聖上の御儉德に惶みて上流より民間迄日々の食をさへ節せらるゝ程なれば況や觀劇は憚りて見ざるが多かるべく自然不入なるべきは勢ひ免難かるべし、譬ひ大入を〆たりとも前條にも云へる如く甲の金を乙に移す同士討的ならむのみ寧外國にて大當をとるを上策とすべし（彼等社會には些の事にも顏を立とか潰とかいふ意氣地有てとかくに和爲難き弊風あれどそは外國人に向てこそ云べけれ此際苟も內裏同士苦情をいふ折柄ならむや日本帝國

の爲に互に一致すべき也）勿論セリフは外人に解せざれは學士に托して其筋を譯翻したる番附を賣り此度の戰爭劇の外は所作事を專とすべし彼川上が歐洲に興行せし時風俗言語の異なれる故に日本にて賞したる劇も皆今一息にて唯貞奴か道成寺の振事のみ大當なりしにても知られたり貞奴猶且然り況や羽左衛門高麗藏梅幸等を始青年俳優の腕揃にて秘術を盡し舞踊らむには元來日本人か手先の器用なるに感ずる外國人は扇の手布晒等は殊に驚くべく又囃子方も三絃の機械的ならず手練を以て自由自在に彈立る大薩摩の如きには拍手喝采狂する如くなるべし此度の戰爭に日本ピイキと成たる米人は其場代の如きは比較的高價に爲とも頓着せず忽に大評判大當を占む事内地にて齷齪するの比に非ざるや請合也。

啻に俳優のみならず力士も行て興行すべし輕業手品獨樂廻し太神樂もゆけ角兵獅子もゆけ何でも彼でも機械的ならずして手練を以て外人を驚かすに足る藝人はドシ／＼出かけて日本國中に藝人欠乏するとも些も苦しからず古來未曾有の大節儉を勵行すべき折柄なればなか／＼に俳優などの居らぬ方が浮氣婦女子の妄念を斷絕せしめて自然と浪費をはぶく好都合なるべき也。

戰爭と家事經濟

經濟記者

戰爭は國家の大事であると共に、又國民各自の大事であります。一國の經濟が、それが爲に大なる影響を蒙ると共に、日本全國八百萬戸の家々の經濟も亦其爲に大なる影響を蒙らねばなりません。されば此際國家の財政を處理するの任に當れる人は、それ相當に用意も要れば、覺悟も要る、之と同じく一家の財政を操る人も、矢張特別の心得を必要とするのである。戰爭と家事經濟これは、今日の場合に於て、諸姉の一考を煩はし度いのであります。

△物價の騰貴

戰爭の結果として、第一に來るものは物價の騰貴で

ある。物價の騰貴は、戰時には殆ど免れぬ現象で、又實に家事經濟にとつては最も深い關係をもつて居るものである。何故物價が騰貴するに至るのかと云ふと、一つは國內の通貨が多くなり過ぎて、貨幣其もの丶價値が下落して來るからで、又一つは運輸交通の杜絕や資本原料の減少や、勞働者の欠乏などの爲に、商工業はじめ、其他一般の實業が發達を沮害せられて、物品の供給が不充分になるが故であつて、從つて戰時には一般の物品(殊に必要品)の直段が騰貴するに至るので決して軍隊に關する物品のみが高くなると云ふ譯ではない、而して之は戰爭が長く



出征の留守宅(七)

家族打寄りて戰報を讀む

なればなる程、騰貴の度も劇しくなつて來ると云ふ道理です。

さて今回の戰爭で、物價がどの位ゐ騰貴するに至つたであらうかと云ふに、或筋で調査したものに據ると開戰以來一ケ月許の間に、東京の物價は概して二分九厘餘の騰貴となつて居ます。

物價が二分九厘餘騰貴したとすれば、それだけ家々の物を買ふ力は弱められたものと同じ事になる。即ち今迄の金では今迄の物が買へなくなつたので、之を購買力減少と云ふ。抑もこれが、家事經濟にとつての大打擊で、收入の價値もおのづと減り、支出は何時か膨脹してゐると云

ふ樣な結果にも陷るのだ——但し平常の樣な氣で居るとである。尙是等の事は逐序と述べて行きませう。

△戰時の收入支出

第一に戰時の收入は如何、增すか、減るか、いづれであらうか。若し夫れ國家の財政に至つては、支出を計つて收入を定むると云ふのを原則とし、其代りにはイザ大事と云ふ場合に當つては、其の最高の權力を用ひて非常手段を實行し、飽迄も必要に應ずるだけの收入をつくると云ふ事も出來るが、私の經濟にあつては左樣は參りませぬ、唯だ尋常に增減して行くの外はない、而してこれは、家々の經濟が其の成立を異にするに隨つて、又必らずしも同一でないのであります。

先づ商工業に從事する家の收入に就いて言へば、ともすると戰時の商工業家は、軍隊に關する物品若くは其他俗に謂ふ際物の類を販賣製造して、立どころに巨利を博し俄に大なる富を成し上げると云ふ樣の事もあるが、それは格別、一般の商工業に就いて言へば、物價騰貴の結果概して賣口が減少して、兎角面白くないのが通常である、就中必要品以外の物品に關する商工業が、最も然り、勿論それにしても物價が騰貴したら收入は增さうと云ふ人もあるか知らぬが、それは元手の多く懸らぬ時分に澤山仕入れ、若くは製造して置いた家に限り、さもないものは、矢張多くの資本や、高い原料又は勞働者の賃銀を要して居るのだから、差引損得のない事になる、よし又、差引いた上に多少の利益が有つたにしても、其の收入たるや旣に價値の減少した、即ち購買力の衰へたものであるから、さしたる事のあるべき筈はない。又農家に就いて言へば、或は肥料の欠乏に苦しみ、或は資本に融通のつかぬのに困却した結果は、秋季の收穫が思はしくないと云ふ事になる。漁業に至つては海戰の行はれる場合、殊に不景氣だ、それも捷利の續いてゐる中は未だいゝか、一朝事が間違はうものなら大變である、イナ戰爭に負けたときは、啻に漁業のみならず、總べての實業が形無しにならねばならぬ、而して鑛業の如きものが、比較的

最も戰爭の影響を蒙るとの少いものであらうか。

まづ〱一般の實業家は、戰時に於て、特に著しく其の收入を增加するとは出來ぬ、實業家ばかりではない、總べての家々が、十中の八九までは皆左樣であらう、殊に甚だしいのは、例へば官吏其他の如く收入の一定してゐる者である。尤も是等は、反對に收入の減少すると云ふ憂ひは無いので、一重に支出上から來る打擊を受くるのみであるが、其の打擊がなか〱小さくない。

戰時の支出、と云つて戰爭だからだとて、別段家々が米や薪炭を平常よりは多く要する譯ではないから、普通の支出が特に增加する筈はない。寧ろ減少する方だと謂つても可いくらゐですが、併しそれは物品の多寡から觀た事なので、仕拂ふ代價は前に述べた理窟で物價の騰貴し購買力の減少の爲に、放心すると却つて增加して仕舞ふし此邊は最も注意を要する點で餘程用心をせぬと月末の勘定の時になつて『平常よりは餘計に買物をした積りではないが、これは不思議』と頭を捻らなくてはならぬ事になり、それこそ財政の當局者は其の責任を問はれる段にならう。

普通の支出にしても、既に此の如く戰時に於ては、

▲出征の留守宅（八）



老父子に代つて野菜を賣る

動もすれば自然と膨脹しやうとする傾を有してゐるが尚ほ此上に唯一つ、如何なる家にも免るべからざる臨時費と云ふものが發生する、何ぞや、曰く國家ならば軍事費、家々にありては其の一部の負担であります。

△軍事費の負担

國家が戰爭に從事する、國民一同は其の軍事費を負担せねばならんのである。されば或は献納金に、或は國債の應募に、或は古金銀の提供に、或は又恤兵部、奬兵義會などへの寄附に、家々は其の經濟の許す限りイナ其の將來に對する資本、或は生活費の一部を割いてなりとも、右の爲に多少の支出を爲すに非ざれば、奉公の義務に違犯すると云ふことになりて今日では殆ど一家の體面を保つことが出來ぬ。又萬一献納金や、寄附等はせぬとした所で、國家は尙ほ其外に租税と云ふものを課して、可厭應言はせず、家々から軍費を取立てる。斯くなつては家々は、どうしても之を以て免るべからざる戰時臨時費と看做すより外はない。

明治廿七八年、日清戰役の時には、我國は軍事費として總計二億三四千万圓程の金子をつかつた、但しそれは一年と少しの戰爭にである。今回は其の當時とは時勢も異なり、且つ露國と云ふ、負けぬ氣の大國を相手としてゐるのですから、期間も長く、費用も日淸戰役頃の比ではないと謂はねばならぬ。此間去る新聞紙に記載した所に據ると、我が政府が開戰以來既に支出した軍事費の高は、之を國民一人の頭に割當つれば、一日金三錢となる計算であるとの事です、即ち若し一家の人數を平均五人宛とすれば、國中の家々が負担する軍費の額は一日金拾五錢、一ケ月金四圓五拾錢と云ふことになつて居る譯である、隨分と大きい、併し大きいからと云つて、驚いてばかりゐる譯には參りませぬ何うしても是は負担せねばならぬ、家々が負担するに非ざれば、たれも負担するものは無いのである。

家々が軍事費を負担する多寡は、固より家により、其の地位や貧富の程度を異にするに從つて自ら差別の生じて來るのは止み難い所であるが、併し中には、殆

ど分不相應位ゐに多額の献納金や寄附をする家々も、實際に於て決して尠くない樣である。而してこれは、主として一家の經濟を處理することの巧みなるが故に基くとも多い。されば若し右の如く家々が其の富や收入の高にも似合はず、縱令僅かたりとも餘計の出金をなすことが出來れば、それは家の譽れであると共に、又一家の財政を繰る妻君其人の譽れで、主婦たるの面目は之に依つて揚がり、主婦たるの伎倆は之に依つて知られると云ふことになるのです。

だから、如何なる家でも成るべく多く軍事費を負担せよであるo さすれば此際、如何に他の一方に於ては其家の收入支出がうまく取行はれてゐるかを示すに足るのである。寔に此際、一には支出の節約と貯蓄、一には別に收入を増加する法を講ずる事が最も適切に其の必要を感ぜらるゝです。

頭髮の清潔

桂園子

人の品位を保つ上に於て又衛生の上に於て、清潔を勵行する事極めて必要なり。美しく装ふたる人の、手の爪を長くして黒き垢を付けたる、或は齒の黄ばみたるなどは、極めて些少の事にして而も最も人に不快の感を與へ、あたら心を込めたる飾りも一文の價値なくして品位を落すものなり、之に反して假令身には縫直しの布子を着くるも、清潔に折目正しく或は顔に紅粉こそ施さゞれ、清らかに垢ぬけたるは誠に奥床しく、自ら尊敬の心を人に起さしむるものなり、我は天より享け得たる身体の上に、或は白粉を施こし、頭にはこてこてと油を付けたるよりも、寧天然の美を其まゝに何の飾りもなくして、自然の美を表はしたるが幾層倍優りて心地よくおもふ、天然の美は活ける美なり、化粧したる美は死せる美なり、美は同じく美なりとも美しき人形よりは或は美の點に於て夫より劣るとも活ける人の方其優れる事幾層倍ならむ。

清潔は只に身体のみに必要なるにあらず、然れども我一身をさへ充分に清潔に保たれざるの人はいかで他の

諸事に於て完全望むべけむや、されば日々白粉を用ひ臙脂を施さゞるも可なり殊に日常職務多々なる時に方つて貴重なる時間を費して迄猶且之を行ふの必要は決して無きなり況や白粉は害多くして益少なきに於てをや、我は白粉禁止に賛成するものなりとて斯く攻擊するにあらざれ共殊に我國の古來より行はれ來りし風俗を一時に廢すると云ふは誠にむづかしき事なれば要するに之等濃厚なる化粧は止を得ぬ場合とか儀式の時に於てのみ格別として日常はなるべく廢したきものならずや寧夫だけの時間を費すならば清潔の方に用ひたきものなり。

出征の留守宅（九）



子をつれて納豆賣

▲頭髮清潔の法

近來漸く西洋の風入りて漸々束髮盛ならむとすれ共猶從來の結髮其跡を止む我國從來の結髮は天然の美を一層增す爲に油を用ふ而も是少量なれば毛髮に光澤を增し併せて毛の粗雜にして切るゝを防ぐの効あれども猶之にては滿足せず一筋の亂れざるを以て最よしとす、此上に鬢付すき油等を用ふ之等の油は純粹の油のみにあらずして、硬くする爲に、蠟の類を用ふるもの故大業に云ば之を付たる人は冬は寒氣の爲に蠟かたくなりて髮毛爲にかたまり夏期は溶けてやわらかゝるべ

きわけなり、而して一旦之に塵埃付けば容易に取れずして次第につもりて垢となり、加ふるに頭よりの蒸發氣は恰も壁の如き髪髱に遮ぎられて、中に籠り油の變敗したるものと共に誠に不快の臭氣を發するは往々認むる所なり、此害は夏に於て最も甚だし、殊に中を固く結びて其上には重き髷を結ひ上ぐる故に、毛は次第に其重力に堪へずして年を取るに從ひ醜き禿となる、是等は今猶老年の人に多く認むる處なり。

今の女學生徒達には以上述べたる如き狀態にあるもの漸く其跡を絕んとするは誠に悅ばしき事なり凡て毛髪は月に一二回は必ず洗ひ清めざるべからず又毎日朝夕には頭の皮膚に觸れたる空氣を交換する爲に櫛るは最よき事にして終日密閉して髪にて覆ひ置けば頭皮よりの蒸發氣外に出でられずして自然に臭氣をはなつに至る、又髪のあまりばら／＼する時に純粹なる油を小量に用ふるは亦衞生上必要なる事なり、元來毛根とは油の嚢ありて常に毛髪を活潤ならしむる樣になすものなれ共性來此油の少なき人今急に他より油を廢する時は乾燥して折れやすく次第に切るゝ故に、又は日光を遮ぎる上にも少量の油は塗りて宜しき事なり、然れ共從來の油は純粹のものとして賣れる中にも不純のもの多くして變敗する事早ければ若し此必要ある時にはグリセリンに少しアルコールを混じたるものを塗るべし、又髪を常に淸潔ならしむるにはアルコールとアンモニアとを等分に加へて夫に百分の六位（二者混合物の百分の六）のグリセリンを入れて而して後何にても好める香ひ（例へばホワイトローズなどを入るれば最も妙なり）を付けたるものをまんべんなくぬりて後乾きたる布にて拭ふ時はよく光澤を生じて而も軟きものとなる。

又髪を洗ふには我國のふのりは誠に簡單にして大に良きものなり髪の垢とか頭皮のはがれたるもの即ふけなどをよく溶かし取りて而も毛髪は少しも損はずして髪を洗ふには最も適當したるものなり。若又石鹼にて洗ふならば極めて多量を用ひざれば一種の化學作用を起して却りて脂肪を折出してぎし／＼となりて櫛も通ら

ぬ程になるものなり、此時にグリセリンニ少許のアルコールを入れたるものを少し加ふれば直にやわらかくなりてよく落つるものなり。又頭の痒き人はアンモニアにて洗ふもよろし。

凡て洗ひ終りたらば成るべく速に乾かしむべし、ながく水分の髪に附着するは髪の爲にも衛生上にも害ある事なり、又斯る事は余り我々には必要なき樣なれ共亦時として知り居るが爲に便利なる事もあるべければ、此處に記さん即毛髪の一種の寄生虫にして口にするさへ不快なれ共子供などにはよく有りがちの事なり、若し之等の生じたる場合には水銀軟膏を塗ると一度にて其害を除く事を得、此藥はみだりに藥屋にて賣らざる故に醫師に請て貰ふべし。初によく髪を洗ひて乾かし此藥を目方にて三分位を櫛の歯に塗りて夫にて一面に行き渡る樣にとくなり而して後に頭を布にて包み一夜措くと悉く其玉子迄死す之をふのりとか、石鹸にてよく洗ひ落すべし此一度にて大抵は皆死するものなれども殆玉子の死切らざる時には一日二日おきに玉子の悉くかへるを待ちて今一度行ふべし此洗ひ汁は有毒なるもの故、成るべく害にならざる處に捨つべし。

此外老人は白髪を染むると云ふ事あり、之極めて衛生上害ある事にして又天然にそむきたるものなり、白髪は亦自然の結果にして醜なるものに有らず、銀の如き白髪を有するは一層の品位を添て奥床しく尊く見ゆるものなり、何ぞ時間を費し不衛生をして迄も之を染むるの必要あらむや、若し之等の人常に黒色の髪たらむ事を欲さば毎日染ても猶不足なるべし、何となればたとへ白髪と雖時々刻々のび行くものなる故に昨日根本まで染めたりとするも今日は早や幾分か延びて白き根表はるゝ故に、髪を染め居る人は常に黒と白との二色の髪を有するわけなり、實に滑稽とや云はむ、而して之に用ふる藥には決して宜きものあらず、今日諸々の藥屋にて販賣するものは其原料は蓚酸、硫酸鐵醋酸鐵硝酸鐵、硫酸銅等何れも重金屬にして少しも溶解せざる沈澱物にして之等を用ふると自然に髪の毛がねばる樣になる何れも重金屬の硫化物か酸化物か黯類なる

故に皆衛生に宜しからず、薬屋にては数多の効用を並べ立つれども皆有害のものと知るべし。

和洋混合 一品料理

日本女子美術学校割烹科教授
井上善右衛門

▲肉よせ黄味あん　肉をたゝき擂鉢に入れよくすり塩、胡椒、だしを入れパン粉少し入れ、能くまぜ、板にのせ天火にて焼とも蒸ともし黄味あんをかけ胡椒をふり用る、黄味あんは玉子の黄身を三つ白身を二つ入れ之れを鍋へ入れ粉くず少々鰹節だしにて玉子をませ塩胡椒を入れ湯せんにて練りとろ〳〵にして用ゆべし

▲煮浸し蓬れん草　蓬蓮草をよくゆで水にとりしぼり細々に切り油にていため鰹節だしにて煮、塩少し入れ醤油少し入る。

▲蛤豆そほろ　蛤の大を醤油にてさつと、煮籠にあけ置き馬鈴薯もゆで裏漉にかけて鰹節だし塩白味淋とを入れ粉しよう入れ鍋へ入れ之れへ蛤を入れまぜ青豆を入れくず少々入れ鰹節だしにてときませて用ゆべし

▲八島海苔　火熨斗にてもみ押をかけ砂糖醤油だし少々入れまぜるべし但浅草海苔にても同様なるべし。

▲延明袋　油揚げを二枚にひらきざつとゆで籠にあげ置き肉にても鳥身にてもよし細く切りたゝきすり鉢へ入れ塩少し入れすり鰹節だし醤油、砂糖少々胡椒を入れよくする、にんじん、牛房、木くらげ、銀なんをゆで下煮し豆腐は煎り豆腐にして此れにまぜ油揚げをひろげ中に入れ四角よりしめて干瓢にて結び鍋に入れだし味淋醤油にてよく煮て用ゆべし、此れは丼物によろし。

▲蒸ようかん　晒あん二はい、砂糖四はい、水三ばい、塩少々入れ火にかけねり、メリケン粉二はいくず粉一ぱい水にてとき入れ箱に布巾をぬらし敷此れに入れて蒸し三四十分間蒸すべし。

▲青海苔酒浸し　海苔を焼き手にてもみ酒醤油煮きり少々かけ能くまぜ用ゆべし但し此れは小皿物猪口によろし。

▲柿酢あへ　柿をひらき種をとり細く切り味淋、砂糖をかけ大根にんじんを千に切り塩にてもみ水にて洗ひしぼり酢を少くかけ置べし油あげは二枚にはがし中の白身をとり皮を千に切りざつとゆで下煮し椎茸は水に漬けざつとゆで糸こんにやくを五分に切り塩にてもみほごし水にて洗ひゆで下煮をし大根にんじん柿とませ置き白ごまを煎り能くすり油揚げのしんはざつと煮ごまへまぜ裏漉にかけ酢砂糖を入れまぜ此れへ入れて能くまぜ用ゆべし但し此れは皿物によろし。

▲ドナス　玉子黄味斗り二つは砂糖三十目ベキンパト少しパタ少々入れ能くこねる玉子の白身をあわを立て此れをまぜメリケン粉五十目入よく手にてこね板の上にメリケン粉をふり是にあげ二三分のあつさにのし形にてぬくとも又は短冊に切り中へ庖丁にて切目を入れ是を引出しよじりをきヘツト油にてあげ上に浮き上りしをかへし狐色にあげ紙に砂糖をふり置き是にて揚げころかし砂糖を付け置くべし是れは菓子によし。

▲ベエクツツシエ　魚は何魚にてもよし切身にして塩少々ふりかけ置き玉ねぎ細々に切りセロリ又はハセリ細々にし是れを魚にかけバタを載せ天火にて焼き用ゆべし但そふす、からしを付けて出す。

▲白あへひじき　ひじきを能くゆで鰹節だし、醤油砂糖酒にて煮あげ豆腐をしぼり白味噌、白ごまを煎り能くすり味噌とまぜ豆腐を入れ裏漉にかけて鍋に入れざつと煮る砂糖、味淋を入れ是れにひじきを入れあへ用ゆべし。

▲青海苔酒浸し　海苔を焼きもみ　酒をかけ醤油、味淋少し入れまぜ用ゆべし
但し是れは小皿物猪口によろし。

▲サンドウイツチ　肉又ははも、ぶた、らかんを用ひる、肉を用ひる時は細々に切りたゝきすり鉢へ入れすり塩、胡椒にて醤油少々入れスツプかだしにても入れてよし其れを板の上に三分の厚味にのし天火にて焼べし次にパンを四角に切り是れも三分のあつさにしバタをぬり肉をはさみて重ね上に板をのせ押を置くべし是れは天火なき時は蒸してよし肉を焼くか蒸して用ひる

べし。

▲坪燒さゞゐ　生むきにして用ひるべし貝より身を出しわたをとり水にて能く洗ひ薄皮をとりたてにわり小口より細かく切りくわゐは丸ゆでにして皮をむき四つ割にし小口より細かく切り鰹節だし醬油にてざつと煮、銀なんをゆで皮をむきつぶし三つ葉を五分切にして貝の身とまぜさゞゐの坪を洗い是へ入れつゆはかつをだし六ぱい醬油一ぱい味淋一ぱい是れを殼へ入れ火にかけ煮るべしふき上りてつゆを入れ又ふき上りたる時おろしてよし但し貝の蓋をなして出すべし。

▲篠取煮麩　篠麩をざつとゆでかつをだし味淋醬油砂糖少し入、煮麩十本、だし一合五勺、醬油三勺、味淋五勺、砂糖十五匁にてつゆのつまる迄煮さまし四つ切にし南部あられをかけて用ひる但し此れは口取物によろし。

右は同學校春季一ヶ月間獻立の教案なり

季節　總菜のしなり

▲おろし芋のとろゝ

いもは自然薯蕷を最上とす、先づ皮をむき、摺り卸し之に鷄卵の白身を適度に交せ、擂鉢にてよく摺り、其のまゝ煮だし汁にて薄く摺り交せ、小丼又は碗に盛り、燒麩を甘く薄味付たるものを一ツ、此とろゝの中へかくし入れ、青海苔をかけて出すべし、麩を入れたるは中々に妙なり。

▲鮃の酢味噌

鮃を切身にし、ちよッと鹽を振りかけ、湯で、皿に盛り、わけぎを、之もざつと湯で、三四本づゝ揃へて結びて兩はしを切り捨て盛合にし、木の芽を摺り交せたる酢味噌をかけて出す、あつさりとして春期には尤もよし。

▲白魚の玉子酢

白魚干を（鹽湯でしたるものは倘更よし）暫時湯に浸して、鹽出しをなし、玉子をゆで、黄身を鉢にて摺り、酢にて、とろ〳〵にとかし、白砂糖に鹽少々加へ、白魚を皿に盛り、其上にかけて出すべし、見ばえも味も

よくて、手輕に出來得る料理なり。

▲小鯛の酢漬

小鯛の鱗と腸とを取り、全体のまゝ鹽を強くふりかけ、半日程置きて後、其鹽をしたみて、生酢を十分にかけて半日其まゝになし置き、又た其の酢をしたみて、此度は更に器に入れて、三杯酢を甘く拵へ、其上にかけ、翌日より食すべし、骨も頭も柔かになりて、殘りなく喰はるゝものなり。

▲筍と烏賊の木芽あへ

筍をゆでゝ亂切にして、烏賊も湯でゝよき程に切り而して之を味噌に和へるなり、味噌の仕方は白味噌中味噌二分の割合となす、その味噌の中へ砂糖少し入れ、木の芽を摺り込むなり、大獨活にても款冬にても用ふれば猶さらよし、獨活は太細に拘らず、斜切にし、款冬は太きは割り、細きはそのまゝ八分位に切るべし。

▲蛤蜊とわけぎの芥子あへ

蛤蜊を湯かき、わけぎもざつと湯煮で――強くしぼるべからず――六七分位に切り、芥子味噌とあへるなり味噌の拵へ方は、初め味噌をよく摺り、芥子を適宜に摺り交せ、砂糖を加へ、而して蛤蜊とわけぎを入れて交せるなり、但し芥子の拵へ方は粉芥子を深き茶椀に入れ、水にてねりませ、よくならし、其上に紙を二重にして押しかぶせ、其中へ水を少し入れ、炭火の小さきを幾度も入るれば、チユーチユーと水は沸え立ちて炭火は吸込まるゝなり、かくて湯のなくなりし時を度として茶椀をふせるなり、少時して紙を取りのけて、芥子を用ふれば、鼻を衝く如くに氣の立つものなり。

▲小松菜とむきみの芥子あへ

小松菜をゆでゝ切り、よくしぼり、むきみもゆでゝ、芥子味噌にて和へるなり、常の味噌をよく摺り、搔いたて芥子を適宜に摺り交せ、砂糖少し入れ、丁寧に交せるなり。

▲蓮根とさや豌豆の白和

豆腐をよく絞り、白胡麻のすりたるを中に入れ、味噌少し砂糖少し入れてすり、別に蓮根をゆで、八角に皮を取り、小口切にし、さや豆のあと先きを切り、ざつ

と湯煮し、二種とも薄味をつけて出す。

▲筍と獨活の鳥のうま煮

筍をゆで、暫時水に浸し程よく切り、獨活も皮をむき雜と湯で、亂切にし、初め鳥の切身を、味りん、砂糖、醤油にて甘く煮て、他の器に引あげ、其汁へ又更に味りん、砂糖、醤油をたして、筍と獨活を入れて、よく煮えたる時、前に引上げたる鳥を一つに交せ、花鰹を（うすくかきたるものなり）振かけて、又ざつと煮るなり、而して鉢に盛り、木の芽を上置きして客に出すべし。

▲百合の丸煮

百合を生のまゝ逆さに鍋に伏せ、食鹽味淋にて煮る、凡そ二十分もたてばよく煮えるなり、

▲慈姑の玉子燒

玉子十個に慈姑二十個位の割合、玉子の白身と黄身とを分け、慈姑をおろし、黄身とよく交せ、鹽と白砂糖にて甘く味をつけ、白身を泡立たせて黄身とよくかきませて、玉子燒鍋に油を引き、火にかけ、玉子を一たらし、試みて、なべの燒けたる適度を斗り、殘らず玉子を流し入れ、――燒鍋に八分位になるやうに玉子を入るべし――燒なべの蓋をなし、蓋の上にも火を載せて、上下より燒くべし。

▲春の茶椀蒸し

春の茶椀むしは種物多からざるを可とす、故に今之を三品づゝとして、其の三例を示せば（第一）白魚、きんこ、三ツ葉（第二）伊勢ゑび、はんぺい、菜、（第三）雁、小椎茸、もづく

▲慈姑の海苔卷

くわゐを生のまゝ皮をむき、わさび卸にておろし、よく摺り、温飩粉少し醤油少し加へ、すり合せ、淺草海苔を二枚敷き、其上へ篦にて一分程の厚さにのべ、三ツ葉のこま／＼を、パラリと撒き、小口よりくる／＼とまき、胡麻の油にて揚げ、小口切にして取合せものに用ふ。

▲豆腐の鍋燒田樂

串にさしたる田樂は手數のかゝるものなれば、今玆に

示す鍋焼田樂は時期にもよらず、俄に來客あつて何もあらざる時抔之を試みれば大に可し、手輕に出來得るのみならず、却て妙味あり。

▲春の浸し物

(一)田芹にうどんのせん、酢醬油、
(二)たんぽゝに嫁菜につくし、取ませ生醬油、
(三)もやし根芋を湯煮して立に割り、白胡麻醬油、
(四)葉にんじんを五分ぎりにし、黒胡麻しやう油、

▲豆の飯

莢ゑんどうの莢を去り、豆を水にて洗ひ、米と共に豆を釜に入れ、鹽を入れ、水加減して炊くべし、但し十分實の入りたる豆は始にざつと湯で丶、飯を炊く時に、醬油と酒を入れ、豆も共に交せて炊くもよし。

▲櫻飯

中位の蛸を湯で丶、足を一本づゝ薄く小口切に作り、飯に少し鹽を入れて仕掛け、煮え立つ時蛸を振り入れ、移すときよく交せ合せ、鰹だしの清汁に、おろし大根、三ツ葉の小口切、揉み海苔の香料をそへて出す。

▲筍と款冬と椎茸の五目飯

款冬をゆで　皮をむき、二三分程に切り、筍も湯で丶一分程の薄さに切り、椎茸は一寸丸のまゝ水に浸し、洗ふて細く切るのみ、筍を先に、款冬を後に、醬油とあくぬき砂糖にて、薄鹽に煮て、其の殘り汁に又た醬油砂糖をたして椎茸を煮るなり、米は常の如く水加減して、醬油を少し入れ、焚込み、飯鉢に移しながら、三品ともにかき交せにすべし。

▲細根大根の三杯酢漬

細根大根(ノ)莖を一寸程殘し葉先をとり、二時間ほど日にあて　、直ぐに三杯酢に漬けるなり。

▲獨活の味噌漬

山うどを二三日間陰干になし、三年味噌に漬けるなり、之は百日ばかりを經て食するに、風味妙なり。

▲春季當座漬

獨活、こんぶ、鹽推しの茄子、つと麩、小梅干、等を加へ酒醬油にて、梅の酢を用ゐて、當座漬とす、尤も木くらげ、蕃椒を入れる可し。

臨月食品献立の種類

東京女學館　牧倭文女

臨月時食品は何にても軟くかろき物を撰ぶべし其の調理もよく注意なさゞるべからず。飯は軟く炊き。鶏卵は生にても半熟になしてもよろし。牛肉にては犢の肉。鶏にては黄雌鶏よろし。魚類にては鯛、鮃、鰈、鯵、鱚、笠子、目張、せいご、こち等宜し。野菜類にては小松菜、摘菜、三ッ葉、葉牡丹。豆類にては扁豆、芋類にては馬鈴薯、等よろしとす。肉羹汁、牛乳等よろし。貝類は絶對的不可なり。一般に脂肪質多きものはよろしからず、消化よく淡泊なるものを撰ぶべし、臨月時の食品は産褥期食品と大差なきものなり。

産褥期二十一日間の食品を四季に分つ、但し九日迄は毎日の分を明記すべし。(四季の内秋冬の分は其季節に應じて出す。)

▲春の部

	朝	晝	夕
第一日	飯湯、牛乳	飯湯、牛乳、好によりてパン少し入れて可なり	飯湯、牛乳
第二日	飯湯、牛乳	飯湯、スープ	飯湯、牛乳
第三日	飯湯、牛乳、生玉子	飯湯、牛乳、鯛刺身	飯湯、牛乳スープ、かしは
第四日	粥(軟きもの)、牛乳、ゐんげん煮物	粥(軟きもの)、牛乳、鮃煮付	粥(軟きもの)、牛乳、吸物(小松菜、鯛)
	以後食後にジャムを用ゆるも可なり		
第五日	粥(軟きもの)、牛乳、半熟玉子	粥(軟きもの)、牛乳、檀煮物	粥(軟きもの)、牛乳、スープ、うどん
第六日	粥、牛乳、葉牡丹煮物	粥、馬鈴薯煮物、吸物(麸)	粥、牛乳、刺身(ひらめ)、でんぶ
第七日	粥、牛乳、生玉子	粥、かしは煮物、スープ	粥、牛乳、馬鈴薯
第八日	粥、牛乳、ゐんぎん煮物	粥、刺身(鯛)、吸物(鯛、小松菜)	粥、葉牡丹煮物、半熟玉子、でんぶ
第九日	飯(軟)、牛乳、生玉子	飯(軟)、檀煮物、刺身(ひらめ)	飯(軟)、鯛照焼、スープ

家事顧問

（問）生れて間もない赤子の舌が白くなりましたが何かよい治療法はありませぬか。（濱松町　鶴子）

（答）重炭酸曹達といふ廉價な藥があります、これを五十倍の水に溶し（若し何倍か分り難ければ嘗めて少し鹽氣のあるほどでよろし）がーゼ又は新しい白金巾の切を、よく洗ひ二寸四方位に切り、これをその水に浸し指に卷いて、小兒の舌を靜かに洗つてやるがよろし。總て舌の白くなるのは、乳首又は哺乳器の不潔からくるのですから、母親の乳なら、飮ませる前に、硼酸ならば猶よし、只の湯ででもよく洗つてから、含ませるやうにし、哺乳器械は十分淸潔にし、使用せぬ間は洗濯曹達を水に溶かした物を器內に滿して置くやうにするのがよろしいです。

（問）白襟紋附の時は、髮は束髮では失禮だといふ方があります、必ず丸まげか島田でなければならぬものですか。（田舍女）

（答）いゝえさういふ極りもありますまい、併しも禮儀作法など申すものは、習慣が一定の形となつたもので、一例を擧げますと昔は羽織といふものはごく、くつろいだ時着るもので今の人が「どてら」を着て居るやうに他人に羽織を着て面會するのは失禮な事となつてゐたのですが、此頃は禮服となつて、羽織袴で貴人の前に出るやうになりました。これと同じて「丸まげ」も「島田まげ」も何れも江戶時代の中頃に、遊女の結び始めたまげださうです、丸まげは勝山といふ遊女が結び始めたので一名勝山ともいひ、島田は島田宿の遊女が結んでゐたから名づけたといふ說もありますから、何もさまで神聖なまげではないやうです。時と所にもよりましようが、普通は束髮で白襟紋附が失禮とは申されませぬ。ことに赤阪御所でお菊の拜觀を許される、人々の奧樣方の中にも、白襟紋附で束髮の方は決して珍らしくはありませぬ。これを見ても失禮でない事はお分りになりましよう。

（問）此の頃、日の短かいので、おむつが乾かないでこまります。竹籠を被せて火で乾せば直き籠が焦げます、どうしたらよいでしよう。（子持）

（答）不用な石油罐の一方を切つて、竪長の四角な筒とし、小さな行火（あんくわ）の火鉢に炭團一つ位をいけこみ、この上へ石油罐を被せ、これに濕つたおむつを卷きつけて乾せば、十枚廿枚は十分か二十分で乾せます。竹籠で乾すのも時としては便利ですから、その一番こげ安い底の處へ石油罐から切り取つた、四角なブリキ板を、針金で裏に縛りつけて用ひれば焦げなくて、少し位火を强くする事も出來ます。

衛生顧問

（問）髮に簪附の代りにアセリンを附けても衛生上差支ありませぬか。（愛子）

（答）差支ありませぬ。

（問）一、わざとほくろを除く方法はありますまいか。

二、藥の加へ方に廿倍或は一分とは如何。

三、月經閉止は如何にせば善いでせうか。

四、神經衰弱して居る者は何時間眠れば宜しいでせうか。（越後國ⅡA等）

（答）一、は本誌來氏一日醫者をお讀みなさい。

二、は二十倍とは藥が一瓦に對して水が二十瓦あることと一分とは「一匁の十分の一」のことをも言ひ又百分比例でいふこともあります。

三、は答ふること出來ませぬ何となれば月經閉止の原因は何十とありますから之を詳しく述ぶるには數頁を要さればなりませぬからである、宜しく昨一年月頃の本誌來氏一日醫者欄を御覽なさい。

四、は何時間でも多く眠る程善いです即ち八時間以上が善いです。

（問）湯治をしたる後海水浴を致しても効を薄く致しますまいか。（北館　春子）

（答）差支ありませぬ。



米國貴女學校の生活

櫻田節彌女史談
彌生女史記

節彌女史は巖本善治氏、津田梅子女史等の選抜に依り、專ら米國貴孃教育法研究のため、明治二十七年より三十一年まで、ペンシルベニア州のフ井ラデルフ井ヤ市に程近きオガンツ學校に留學せり。今同校の主義と教育法に就て女史の語りし大略を紹介せん。

▲創立

今より七十餘年前に、デイレーと呼れた婦人が十七歳で高等教育を目的とした女學校をフ井ラデルフ井ヤに設立し、最初の數年間は格別有名な學校でもありませんでしたが、千八百五十年に至り漸く世人に知られるやうになり爾來日に月に盛大を極め、千八百八十三年に、彼の有名な南北戰爭の際の大藏卿、ジエークツク氏が百万弗を擲つて建築したオガンツと云ふ宏壯な邸宅、庭園の寄附を受け、此處へ移轉してオガンツ學校と改稱したのです。此校は費府を距ること滊車にて三十分間、構内の廣さは二十五万坪、校舍は四層で建坪は五万坪であります。春は菫花と雛菊とが一面に咲いて紫と黄の毛氈に遊ぶ心地がいたし、秋は構内を流るる小河に沿ふて林檎と栗を拾ふ樂みがあり、冬は温室の内に各國の花を眺むることが出來ます。

▲校長

創立者ディレー孃は校長の職をペチツト孃に讓りし後も、各學校長として此校に住居し八十二歳の高齢まで餘命を樂みました。現今の校長は三代目でイスマン孃と名けます、ペチツト、イスマン兩孃共四十餘年間學校生活に經驗ある人で、特にイスマン孃は外國へ十三回も參つた人であります。

▲此校の名譽

明治五六年頃ジエークック氏が住んで居た時分に、岩倉公が三十三人の御供を從へて御出になり、三日間此家に泊られた事があり、後畏れ多くも主上よりクック氏に對して種々の御贈物があつた相です。

▲目的

此校は日本の華族女學校と云ふ樣な地位で、貴族富豪の令孃を養成する目的ゆゑ、中下等の娘は一人も居りません、人員も少數を限つて寄宿生百人、通學生五十人と定め叮嚀周到に薫育するのですが、校則の嚴正な事は平民的學校の及ぶ處でなく、又勇壯敢爲の氣風を養成して徒らに軟弱卑屈の纎女とならしめぬ處が此校の長處であります。

▲入學

寄宿生として入學するには、願ひ出てから隨分長い間待て居る者が多いので、畢竟普通學校より廣い室を生徒に與へるために、此廣い塾舍がいつも滿員と云ふ勢だからです。入學の際は親が必ず連れ來り初めより親と學校との關係を密接にするので、毎月學校から生徒の成績、品行を親元へ悉しく報告します。

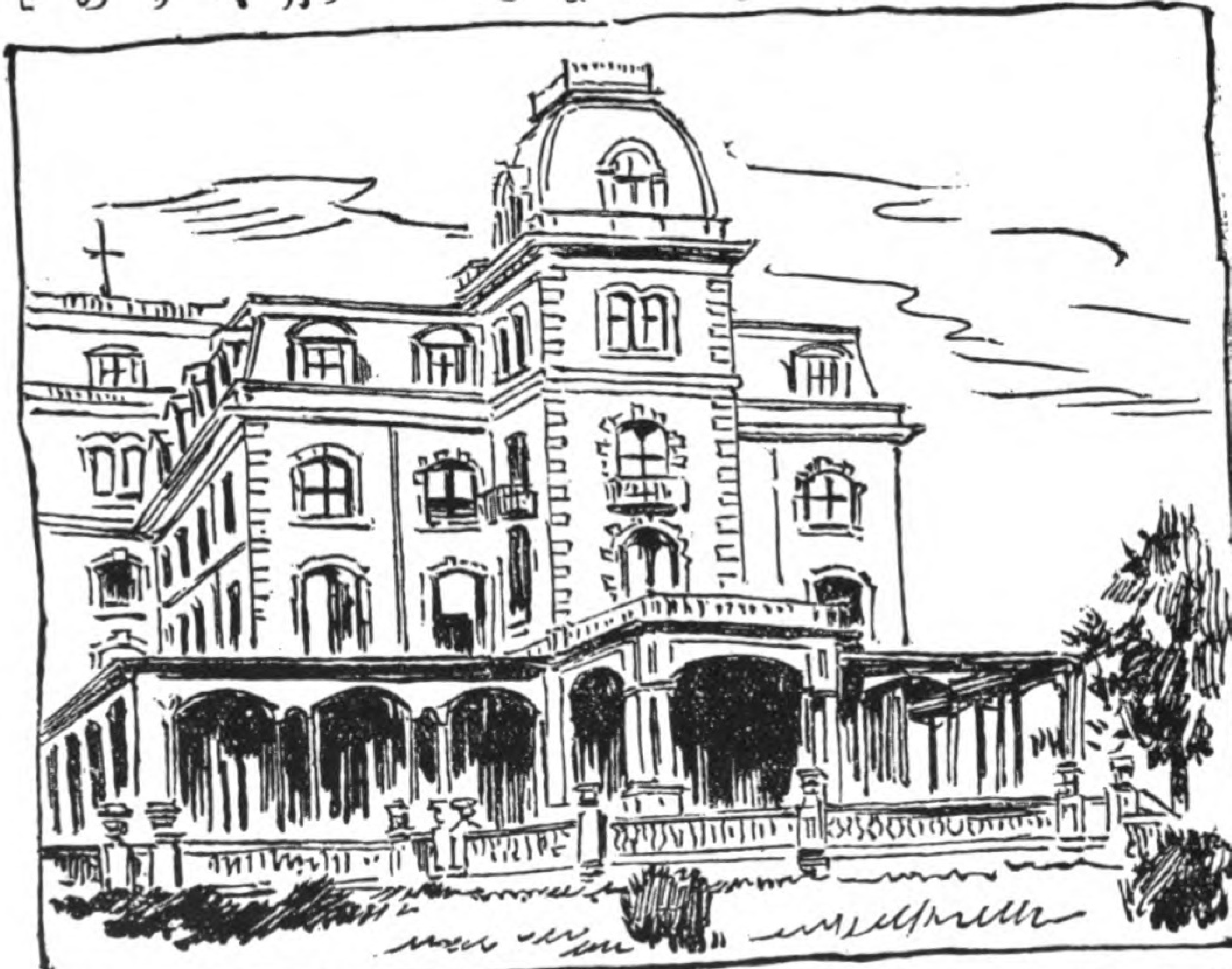
▲科目

歷史、地理、數學、植物學、審美學、文學、心理、倫理、論理、教育學の各專門科の中各々好む所の物を三科目づゝ選び得られます、尤も一學期を毎年十月の初より六月の初までの八箇月と定め、次の學期に於ては又隨意の科目を選修することを許します。校長は毎學期の初にエービーシーの順に一人づゝ呼で目的を尋ね、望みの科目を選ばせます、勿論三年間同一科目を專修するも年毎に更へるも各々の自由に任せるので

す、それから三科目の他に音樂、繪畫及び獨、佛、羅甸、希臘の語學は附隨科として毎年習ひ得る規則であります。米國の令孃は皆音樂繪畫に堪能で、特に獨佛の語學は競ふて勉强しますから外國語を知らぬ者は一人もありませぬ位。日本の貴婦人方は何故語學を勵まれぬかと不思議でなりません。

▲月謝食料

一學期即ち八箇月間の月謝、食料、寄宿料、洗濯料、と合せて千弗の定めであります、前に述べた附隨科の中語學は此月謝の範圍内で



學ばれますが、音樂と繪畫は別に月謝を拂ふので、一週に二度づゝの授業一度(四十五分間)の授業料が三弗から五弗です。私は音樂ばかりの授業料として三年間に二千圓程費ひました。

▲小遣ひ

月謝、食料の他に少からぬ小遣が掛ります。大抵八箇月間に多いのが八百弗、少くて四百弗程使ふので、一寸聞くと無益の奢侈に費すやうですが、生活の程度が上流の位置である上に修學上樣々の資金が要るので、悉くしは次に御話し致しま

せう。此小遣に就て別に小遣帳と云ふ簿記的の科目を設けて、毎月の終りに出納の正否と記載方の巧拙とを數學の教師が撿閲し點を與へます、點數は何の科目でも百點を最高としてあります。

▲買物、郵便

鉛筆、紙などの日用品は學校内に在りますが、交際用の物品等は月曜に費府まで買ひに出掛ます、此時は教師が一人附添て參り買方の監督をするので、其教師の滊車代は買物に行く生徒達が負擔致すのです、交際品には却々金も使ふし又撰び方が巧者です子。郵便は校内に生徒だけの郵便局があり、又教師の内に書信係があつて豫め屆け出してある親類、知己の筆蹟を鑑別しますから、無關係者と竊かに音信することは決して出來ません、若し一寸でも見馴れぬ筆蹟で生徒の許へ寄越した郵便があれば表書を瞥見して直ぐに開封しますが、多勢の生徒に就ての知人の筆蹟を一々鑑定するに、絕へて見誤りのないのには實に感ずべき炯眼だと思ひました。

▲演說家招待

米國内地の專門博士を一個月に二度づゝ招待して種々の學理の講演を聽きます、又外國からも年に二三度は招聘致しますが、餘程面白い研究です。但し其博士方の演說料と旅費等一切は學校が仕拂ふ規定であります。

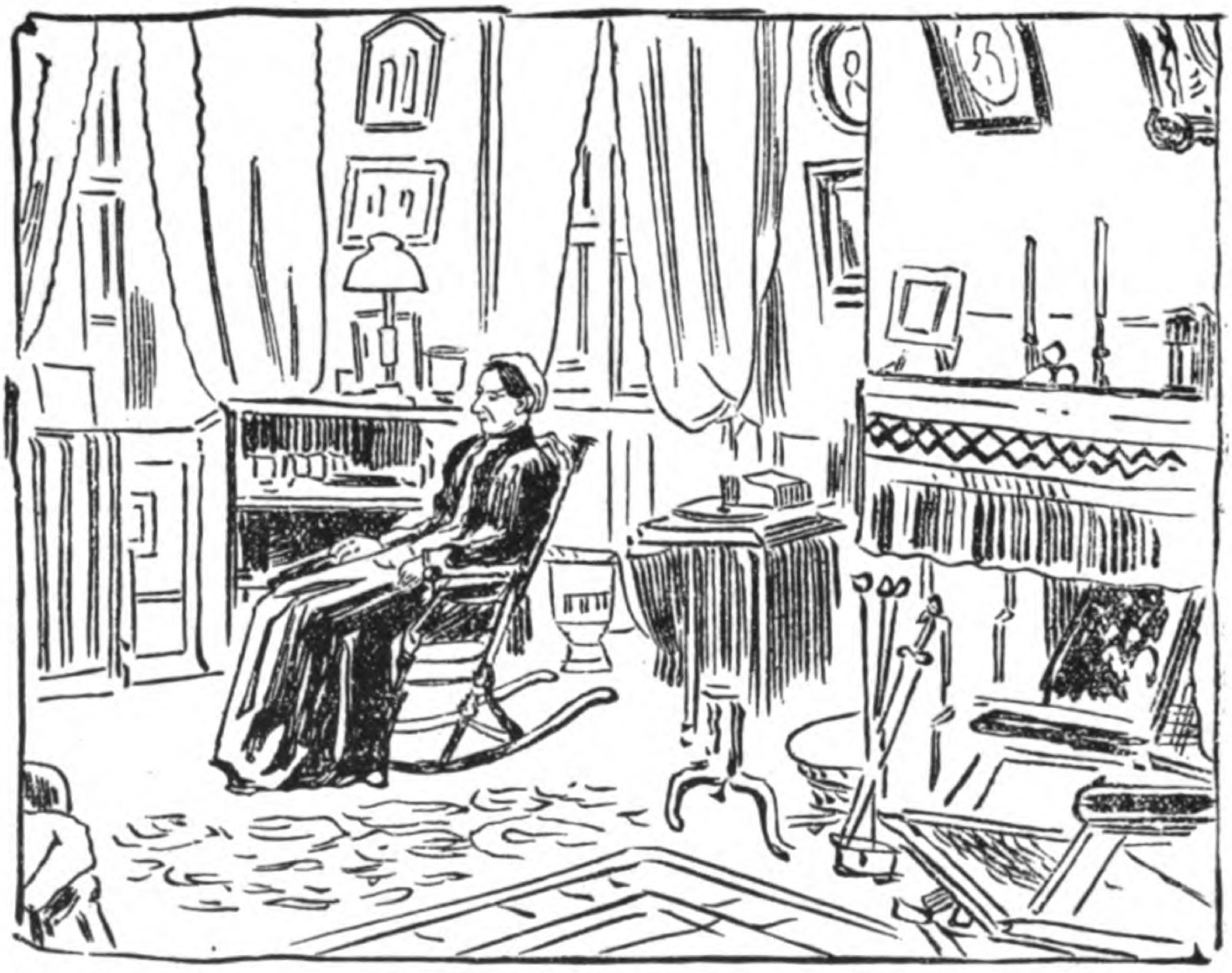
▲修學旅行

二箇月に一度專門の教師が生徒を連て歷史、地理等の實地研究のため修學旅行を致します、大抵一晩泊位で……。又六七八九の四箇月間の暑中休暇には親達に伴はれ歐洲旅行をするは常でありますが、稀には教師を伴ふて致す者があります、是も地理歷史の實修ですが、尚以太利等へ名畫の原作を見に行くので實に偉大な修學旅行で御座います、併し各自は勿論教師の旅費一切を悉く負擔する費用は多大なもので、實驗のために金を吝まぬのには感心致します子。

▲授業時間

午前九時に始まり午後二時十分に終り、四十五分を一

授業の時間、五分を用意時間とし別に休憩時間はありません、此用意の五分間に於て一教場より他教場へ移り教師に敬禮を行ふので間に合はぬ者には直に罰點を付けます、入學の初は却々骨が折れて私なぞ日本人は歩き方も遲し、皆と一齊に揃ふのに困難でしたが一箇月ばかりで慣れました。一番困難なのは三階から體操場、化學室へ移る時、此二場は少し離れた處に在るので餘程迅速を要します、特に雪降りには頭巾と長靴を忘れる事を罰則としてありますから、狼狽せぬやう又



大股に歩くやう練習せねばなりません、私も其爲に大層大股に歩く習慣が付きました。

▲運動

毎日の運動は十一時三十分より十二時までと、二時十分より三時三十分までとの二回で、唯自由に樣々の運動を致します、各生がよく運動場へ出ると否とを見る爲に體操の教師が椅子を中央に据ゑて監督して居ますから怠ることは出來ません、米國の令孃方は交際上手で決して獨りでは遊びません手、私など最初お馴のない内獨で立つて居ますと

直に傍へ來て腕を組み打解て話しを仕かけて呉れました、雪の強い日には廣い廊下で三十分に五十遍位廻つて運動致したのです。

▲兵式體操

一週に二回兵式體操があります、女學生の兵式體操は此校が元祖で餘程壯快なものです、教師には大尉を雇ひ號令に從つて進退、馳足まで眞成の兵式を習ふので、各々軍服を着け銃を肩にして芝の上を飛び廻る樣は男子と異ひません、又練達の生徒の中から軍曹、少尉、中尉、大尉を撰定して教師の休んだ際には此者が號令をかける事としてあります。每年五月には貴紳を招待し廣場に於て各隊の試驗を行ひ、各隊及び指揮官へ賞を與へます。此體操は餘り亂暴すぎるやうですが、筋肉の發達と腦と耳の練習に餘程有益であります、斯樣な粗暴なる運動を取ても、晚食前五時半より六時までの間に忽ち服裝を更へ容儀を整へ、長い裳裾を曳て端然と食卓に就く風采は淑女の態度が備つて、其行儀のよいこと誠に威服の至りですネ。此校にはグランド將軍の孫二人、ジョンソンの姪、費府の知事の娘さんも入學して居ましたが、知事の娘は兵式體操が極上手でした、其上優しい娘で每朝縣廳の親許へ電話をかけ機嫌を伺つて居ました。

▲オガンツ學生の資格

フ井ラデルフ井ヤで大統領の演説のある時、此校の學生だけに招待狀が參ります、是等が他校と異る資格でありませう。

▲芝居と音樂會

英國よりミスビユジーと申す婦人を四千五百圓にて迎へエロキユーションの稽古があり、二三箇月に一度づつシエキスピーヤのハムレツト、モルチエントビナス等があり、學校の四階に設てある舞臺にて芝居を致し、近邊の名士又は外交官を招いて生徒交際の栞と致します。又一箇月乃至二箇月に一度バイオリン、ピヤノ、唱歌などを賓客の前で致させます。

▲犬と自轉車

流石は貴族の娘さんだけに豪氣な事も致します、一千

八百九十年頃には塾生が各々馬と馬丁とを連れて來た相です。私の入學した時分は餘り混雜するために此風は廢されてありましたが、厩だけは殘つて居て其廣いのに驚きました。馬の代りに犬と自轉車は各自に必ず持て來て居ますから授業の終る時間になると、澤山の犬が敎場の玄關にずらりと居列んで主人の出るのを待構へて居ります。

▲寄宿室

凡そ三十疊位の室が二十二あつて一室に三人から五人程住ひ、寢臺四五脚、簞笥、ピアノを備へ、風呂場、化粧室便所等は各室に附いて居り、



右方は櫻田女史留學時代の狀態
左方は卒業生結婚後の狀態

監督敎師は廊下に一人づゝ居ります。別に獨住する室が十二だけ離れて建られて、七個のピアノを置いてあり、監督者は二人あります、一期に一度づゝ室替を行ひ一室に共住するのも、獨住するのも自由ですが、獨住は皆好みません、畢竟社交的思想の發達して居るからですネ。

▲賞罰

賞罰は一寸面白い趣向に定めてあります。罰則は勉强室へ入て一敎師の監督の許で三時半から五時半まで勉强するので、自由勉强を許されません、尤も新入生は罰なくとも此監督を二個月受けます、其

後敎員會議の上でセコンドオプトマ即ち少しく自由を與へられるので時間さへ守れば何處で勉强しても宜いのです。最後にホルストオプトマへ入れますが是は時間も自由で殆んど敎師と同樣に校外へも出られるので、早く此資格を得るのを榮譽と定めてあります。米國婦人は快活の代りに二十歲位でも案外小供つぽい處がありますから、日本人は眞面目に勉强すると云ふ評判で、私などは僅かの間にホルストオプトマへ入れられました。

▲起臥

夏冬共起床は六時四十五分で、七時三十分に講堂に集りますが、結髮や着衣は手早いもので、結髮は大抵三分間、着衣も五分間位です。私も米國へ參つてから萬事早く出來るやうな習慣となりました。就寢は九時で九時十五分に監督が消燈に參り其時生徒の自省記を持ち歸ります、自省記とは豫め紙片に六條目を記して生徒に渡し置き各自に記入させるので、其條目は第一部屋掃除の清否、第二敎場へ出る時間の正否、第三音樂復習の勤惰、第四毎日二時間宛の運動如何、第五學校の物品を大切にせしや否、第六精神的の事、これだけです。各生は明白に過失を記入して毫も隱匿しないのは、全く幼時から一般に養成された宗敎心の然らしむる所で、神の前には裸體であると云ふ觀念が深いからでせう。此毎晩の自省記は一週間に校長の手元へ集め一々點撿し、六箇條の中に背くものあれば其生徒を呼んで校長自ら訓戒致します。

▲食事

食物の結構なことは先づ日本の貴族以上の程度でせう牛乳などは校内に飼牛が四五頭あつて幾らでも飲みほうだい供給されます、時として今日の乳は牛が草を食べ過ぎたのか青臭いと云ひ出して飲ぬ者があると、大勢が同じやうに飲みませんで一度に一斗位餘ることがあります。校長が平生（御馳走は充分に食べろ、併し十二分にして物を費すな）と言ひ聞かせますが成程尤の次第で、如何に滋養品でも一定の分量を過せば効がない、譬へば一室に蠟燭を五十本つけて極度の光明を

放つ處を百本つけて見ても五十本だけの明さと同じである五十本は無益である。又砂糖を水に溶すにも一定の分量を超たとて甘味に差はなく、且つ分量外には決して溶解しない。滋養品も是と同じ理窟で校長の訓戒は却々味がある事と思ひます。食事の行儀を教へるため一箇月に一度位校長が大勢の生徒の前で澤山の皿を置いて食べて見せます、尚晩食の際には談話を奬勵しますが、慣れぬ者には教師が樣々の方法を設けて話の端緒を開かせるので、例へば今日は快いお天氣ですネ。明日午の運動には何々をして遊びませうネなども一二の談柄と致してあり、如何に無口な者でも自然話上手になります、若し一時間に二十語を發しなければ、×符を付けて罰の一つに數る位です。

▲清潔法

手拭、シーツは一週に三度取換へ、髮洗と爪の垢取は一週に一度費府から專門家が弟子を連れて來て致します。髮洗は一弗、爪の垢取が一度五十仙で何れも四十五分間づゝ掛ります、一寸贅澤な事ですが實に心地よく奇麗に掃除しまして爪の垢取は淡紅色の粉を指先にふりかけて透き通るやうに美しく致します。

▲衣服指環の制限

斯樣に高い程度の女學生生活は日本人が聞くと虚言のやうですが、米國の貴族富豪の收入高を知る方は、其愛孃を托する此校の學費位は容易であると云ふ事が御分りでせう、併し無益な奢侈を禁じるのは嚴正なもので、衣服も勉強時間には絹を禁じ、指環も金製は許しますが寶石を挾むのは堅く禁じてあります。（完）

女學校の卒業生に餞す

芝　萊　生

今や晩春の季節に會し全國各女學校に於て卒業生を出す數千、妙齢青春の人朝夕親みし學窓を去りて各々その父母を省するに際して一言なかるべからず、頃者芝萊生なる人あり、女學校卒業生に餞するの言每日紙上に見ゆ。語簡にして意深く又よく當世の情に通じて女生を訓戒する親切丁寧を極めたり割愛するに忍びざるを以て左に之を移して以て大方の劉覽に供す。

「螢の光窓の雪、文讀む月日かさねつゝ、いつしか年もすぎのとを、あけてぞけさは別れゆく」都下幾多の女學校卒業者よ、卿等積年苦學空しからず、今や名譽の月桂冠を戴き、錦を故郷に飾らんとす、家庭子豈に一言の餞なかるべけんや。

吾人は卿等が學期經驗の難關と、餚の粗惡なるとより外何の苦もなく、一定の規律の下に、定まれる課程を踏み、平和にして且つ愉快なる學校生活を去つて、波荒きうき世の大海に船出せざるべからざるをいとほしく思ふなり。然れども卿等は到底其境遇に入らざるべからず、知らず卿等のこれに處する覺悟果して如何。卿等の或者は曰く、余に此嵐と波とに抗すべき準備あり、何の驚くことかこれあらんと。然り吾人も亦たしか思はざるにあらず然れども若し自己の才學に誇り、世事與し易しと速斷し、學窓に於ける理想を直に實行せんとするが如きとあらば、吾人は恐る卿等は仁川港頭に於ける露艦のそれの如き不幸を見ざるべからざるとを。

然り眞に然り浮世は恰も大海のごとし大海は風波荒らし、卿等多年風波靜穩なる港内の生活を以て今直ちに怒濤狂瀾の大洋に出でんとす、用意周到よろしく以て傾覆の難を免かれざるべからず、芝爽生が劈頭第一卿等に餞する處ろ誠に深しといふべし。

卿等は識あらん、また才あらん。然れども記臆せよ、卿等の藏する所の識と學とは、恰も未だ港内に繋留せられたる船舶の機關士の如きものにして、其構造に於て設備に於て、或は充分なるべきも、社會てふ浩瀚たる大海に漕ぎ出でし後にあらざれば、之を操縦する者の眞價を知り得ざる如く、卿等の識學も浮世の波風と戰ひ、幾多の困難を經、鍛錬に鍛錬を重ねて後に於て、始めて活用の材たるべく、小禽籠内の空想、疊の上の水練は到底此社會に其儘應用せらるべきにあらざるを某女あり近者書を送りて曰く「今更らに學の窓のつく〱と戀しく相成候」と、此簡語果して如何なる意味を含める、若し卿等にして深く思考する所あらば其眞意を諒し得らるべし。

語簡にして意深し、卿等青春未だこの語の意味を盡す能はずと雖も今後兩三年必らず思ひ當る事あるべし。

爰に於てか卿等に告ぐ、卿等にして校門を出て丶其家

庭に還らば、多年蘊蓄せる才學を暫く胸裏の匣に藏し、先づ謙遜に父母の命令を聽くべし、同時に觀望臺に立てる心を以て至細に家庭の内部を觀且つ其組織を知り、次て其外部との關係を研究せよ、而して此際決して「我」てふ觀念を發する勿れ、かくして研究し觀察し往く間に、必ずや卿等は學窓に於ける理想の半（或は大部分か）は空想なりしを悟り、行路難を味ふと同時に始めて己が才學を正當に用ゆべき、活路を發見し得らるべく、世の口さがなき輩の卿等を目して所謂「女學生上り」の毒語を發せしむる由て來る所以を察し得らるべし。吁卿等は今や教師の教ゆる學校を出でぬ、然れども是より學ぶ所は卿等自ら教へざるべからず、卿等請ふ須らく「學校を出で、又學校に入り」し心となり、卿等の是より活動する此社會の研鑽に怠る所あらざれ。



訓意親切、世路の險艱、人情の反覆を說いて諄々として誨ゆるところ眞情溢れてさながら初旅の子に諭す慈母の言のごとし妙齡女子が服膺すべき處ろなるべし

「到底娘にはかなひませぬ」とは往往一部の母の口より聞く所なり、これ一面には愛女の才學を誇る無教育者の巧辭なることなりと雖ども他の一面に於ては、新舊思想の衝突を暗示したるものなり。

抑も此新舊思想の衝突なるものは、何れの世何れの時代に於ても、老人と少者の間に起るべき問題にして今日の我國の如き過渡時代に於ては殊に然りとす。『女大學』的の舊教育を受けたる者と文明の新教育に養成されたる者の其意見に於て相合はざるものあるは元より

の事にして卿等も必ずや爰に注意せるなるべしと雖ども、知ず識らずの間に此渦中の人たらざるを得ず。これ實に卿等の大に戒心せざるべからざる所なりとす。

新舊思想の衝突は今日の家庭に於て一の暗礁たり、爰一番の戒心を要す

卿等よ、卿等は暫く是等衝突の曲執にあるかを斷する勿れ。唯卿等は姑舅に對するよろしくうき世の荒波を渡り來りし人として之を敬し、徐に其多年の經驗に學ぶ所あれ。必ずや卿等既得の新教育の更に練磨せらるるを見ん。さればとて吾人は卿等に強ゆるに盲從せよ、無能なれと云ふにあらず、氣を長ふし思を平かにし、社會てふ學校の一年生たる心得を以て研鑽し、他日自ら主として一家を裁する日の準備を爲せよと云ふ意なり、而して其間に於て其新教育其理想を恰も葉末より垂るゝ露滴の如く浸潤し漸次汪洋たる新思潮を流布すべく努めよ、然らば京童の流語なる「女流ハイカラー」ともならずして、其理想を充分に應用し得るに至るべし。かく云はゞ或は吾人を目して因循なり頑固なりとなすやも知るべからずと雖、吾人の所見を以てすれば現今一般の狀態及び家庭の有様はこれ以上を容るゝ能はず、又世事到底狹き學窓に於ける空想の如からざればなり。

多年學窓にありて新智識を蓄めし卿等に向つて今更に社會學校の一年生たれよといふは聊か無理の注文なるべしと雖も實際の社會は學校とその組織を異にして萬事不如意の事多し、これに處するの道又大に考へざるべからず。

次に吾人の希望する所は、卿等が多年蘊蓄せる學と藝とを社會てふ檜舞臺に試みよと云ふことなり。形而上の問題は暫く云はざるも少くも其技藝を實際に於て驗せよ假磨なりし技藝てふ名刀を研磨せよ、例令料理法の如きこれなり。若し卿等にして學校に於て雛形的に教授され、一々ノートブックを稿きてなせしものを實際に試し見よ果して實用に適さるべきか、某あり一日愛女に一家四人の食すべき芋の料理を命じたりしに、彼は其皮を除くに實に二時五十分を要したりきと、又或る少婦にドーナットを造らしめしに、多くは黒色の者を製したりき　姑彼に問ふに此事を以てしたりしに

彼曰くノートブックに記せる時間通りになしたりし爲めなり、曰く何、曰く何と、實に滑稽なる事實は續續として報せらる、此の如きは果して家庭實用と云はるべきか、然れども是等は決して其人の責にあらずして實に其實際上の經驗足らざるが故なり、茲に於てか進歩せりと云ふ新思想の是にして舊思想の必ずしも非ならざるを悟る一例として知らるべし、吾人の卿等に對し多年蘊蓄の知識を暫く胸裏に藏し、經驗者に學ぶ所あれと勸むるはこれが爲め也。

學の料理に二時間を費やし、ドーナツの製造を黒焦げとなす、女學生の料理なるもの往々この如し以てその經驗の薄弱なるを知るべし。芝葉生の警喩絶妙。

夕空ははれて秋風ふき月かげ落て鈴虫鳴くの頃、ア丶我が父母如何に在はとす歌ひつ丶、朝に夕に偲びにしのびし故山もはや卿等を迎ふべくなりぬ、卿等心中の快それ如何計ぞや。

然れども卿等よ、感る無邪氣なる愉快も束の間にして、必ず卿等を沈思（或は煩悶）せしむべき一箇重要問題の、其身の上に降りかゝるを覺悟せざるべからず、抑も此重要問題とは何ぞや、云ふ迄もなく婚嫁問題これ也、多かる卒業生中此問題に對し何の苦なく解決さるべきものあるべしと雖とも、其多數は然らざるなるべし、聞らく卿等の學窓にあるや、是等の問題に關し心私かに一箇の理想を描けりと、然りこれあらん、然れども卿等にして、其豫期を實現し得べしと信せば卿等は必らず失望すべし、世事意の如くなるものと思意せばこれ亦た大なる誤謬なり、何となれば此社會は、狹き學窓に於て想像する如く、しかく單調なるものに非ざるなり、茲に於てか煩悶は遠慮なく卿等の頭腦を犯さん。卿等の或者、殊にミツシヨナリースクールに於て養成せられたる卒業生の中獨身の生活を持續し、或は教育事業に、或は社會事業に献身せんことを誓へる者ありと、其心事や尊く、其志願や敬すべしと雖ども、これ遂に到底空想なりしを悟るに至るべし、勿論吾人は皆な凡べて然りと云ふにあらず、千中一二は或は得べし、其最多數は然らざる也。近者獨身說を固執し、久しくオールドミスを以て甘せし婦人にして、類とし

て兜を脱く者あるを見ても知らるゝにあらずや、要するに現今の社會、目下の女子教育程度に於ては、其婦人にして特別の事情の存せざる限りは、到底爲し遂げ得らるべからずとなすを以て常道なりと信ずる也。

卿等理想を描く頗るよし、願はくは其の理想の爲めに實際の世を沒却する勿れ、徒に空想を抱いて一生の大事を誤る勿れ。

次に人の妻となるべく期せし人々に對し吾人の希望極めて多しと雖ども後日一の問題として、更らに論ずる時に讓るべし、唯だ一言告ぐべきものあり、何ぞや、結婚は早くも卒業後二年に於てせよ、これ一は學生時代の空想のうき世の波風に練磨せられて正當なる判斷をなし得べき爲めに、又一は學問上に於ける家政學と實際上に於ける家政との比較研究をなさんが爲めに。

若し然らずんば卿等は不幸錦繍を纏へる豚を夫とし、或は木枯吹き荒ぶ大廈高樓に袂の乾く暇なき夫人たるに至らんも知るべからず、而して又た或は老孃たるべく餘儀なくせらるゝ境遇に至るやも知るべからず、諺に曰く「美人拙夫に伴ふ」と、卿等須らく其眞意義を三思せよ。

聊か苦言を列ねて以て卒業生諸氏を送る卿等請ふ之を事實に徴し我言の當れりや否やを驗せよ。

世路の險難人情の冷熱、描き盡して餘蘊なし芝葉生とは如何なる人ぞ斯くまでに眞情を披瀝して以て當今の女生に訓戒するの人あらんとは。

女子職業學校の瞥見

永廻鐘江

▲通學生と寄宿生

本校生徒の大部分は通學生で、十二三歳の少女もあれば、丸髷の奥樣もある。併し多數は、二十歳前後の娘盛りの所謂鰕茶式部達であるから、中には間々如何はしいのがあつて、時々新聞の三面種を作ることがないではないが、併し六百人もある多數の内だから、社會の狀態が今のやうな有樣では、學校ばかり責めるのは、少し酷ではあるまいか學校は通學生については、

相當の注意を拂つて取締つてゐるやうである。即ち、通學簿といふものがあつて、これで家庭との連絡をとるやうになつてゐて、日々生徒の出缺、早退、遲刻のことを一々記載して、父兄又は保證人に通告することになつてゐる。故に家庭が學校と協力して、生徒を教養してさへ行かば、決して間違はないが、唯他郷から遊學する女學生が、ホンの名ばかりの保證人の監督を受けてゐるので、兎んだ浮名を流し、學校に迷惑をかけることになるのは遺憾である。

寄宿舍は、校舍の後方に附屬してゐて、目下七十名ばかりの寄宿生がゐる。舍監が二名、舍監補が一名あつて、全躰を取締り、各室には、學力技藝優秀なものを室長に撰ぶことになつてゐる。勿論女學生のことだから、家族的生活をして、家事上の



實習もする機會が多いのである。出入は頗る嚴重で、夜間の外出は許さないのみならず、通常の外出にも、出入檢査簿を取締から受取つて、これに時間を記入し、取締の檢印を受けて携へ行き、歸路につくとき、出宅時間に保證人の檢印を貰ふことになつてゐる。又手紙の如きも、受發いづれも取締の手を經ることになつてゐるから、外部の刺戟さへなくば、取締上一點の間隙もない譯で、局外から見れば寧ろ窮窟の感がある位である。

▲校内瞥見

校舍は、以前の建築だから、十分な設備でないが、優しい女性の學ぶべき所だから、これでまーよいとして、教室内の摸様を見ると、勿論實習の事であるから、教師も一人一室といふ譯でなく、一室數人の教師

が受持つのだから、頗る自由で、學科の敎室の如く、嚴肅に且つ規律正しく行かないやうである。師弟交々頭をつき合つて或は造花、或は編物といふやうに、いづれが敎師で、いづれが生徒か、見分けられぬ位、授業といふよりは、仕事をしてゐるといふ方が適切な有樣なのである。刺繡と繪畫との方は、敎師は主として監督してゐて、生徒はセッセと針を運び、粉本を寫してゐて、外目も觸らぬ有樣であつた。

敎師は大概女子で、刺繡繪畫の敎室に、男子の敎員を見受けた、尤も學科の敎授は、男子の敎員も、多少ゐられる。事務員も、會計を司るのが男子で、その他は皆女子で、電話で製作依賴の催促もあれば、問合もあつて、一々これに應答もせねばならず、出來上つた製作品は、一々調べて、記帳する用もあれば、入學したいといつて來る志願者に、應接もせねばならぬといふやうに、隨分忙しい事務があるやうに見受けた。流石女性だけに、綿密に注意深く處理してあつて、給仕小使に至るまで、女子を多く使つてある。

本校の敎育方法については、吾人門外漢が彼是いふ權利はないが、併し、壟を得て蜀を望むは人情の常だから、少し吾人の氣づいた事を注文してみようと思ふ。全校技藝の點については申分がない。否、全校生徒の技藝に熟達してゐる事は、世間既に已に定評ある次第で、博覽會への出品に、內外から種々の賞牌を得てゐるが、學科の方が、あまりに輕くて、僅々一週一時間の學科が多い。これは、この學校の性質上、已むを得ぬことであらうが、併し今後中流の家庭を作る子女に對しては、不十分の感がある。といつて、吾人は敢て學科の數を殖して貰いたいといふのではない。學科目は今ので十分であるから、今少しその時間を增加して欲しいのである。殊に高等女學校など卒業して來た生徒には、學科を授けないのが、本校の主旨であるけれども、家事上に關する諸多の智識と、女子の常識を豐富ならしむる學科とを補習させることにしたならば、至極結構であらうと思ふ。即ち技藝だけは、他の生徒と同樣に敎授しても、學科だけは別に補習させるやう

にしてあつたならば、まだ／＼智識ある女學生が多數入學するであらうと思ふ。これは、經濟上に關係することで、私立の全校に對しては、無理な注文かも知れぬが、併し、人物修養といふ點に於いて、智識の發達が如何に人間をして高尚ならしむるかといふことに注意したならば、吾人のいふ所は、強ち無理でもあるまい。光榮ある全校生徒の中に、如何はしい風評を立てられるものが、少くとも、今日よりは減じて來るに違いないだらうと思はれるので、ホンの老婆心から、一言述べ添へた次第である。

▲生徒及び製品

本校生徒の現在は五百九十五名で、内譯すると、

甲科　裁縫科が三百三十九名、編物科が百二十三名、刺繡科が百三十八名、圖畫科が三十八名、造花科が七十九名である。併し、一人で二科以上修めるのだから、實際の人員は三百六十名で、

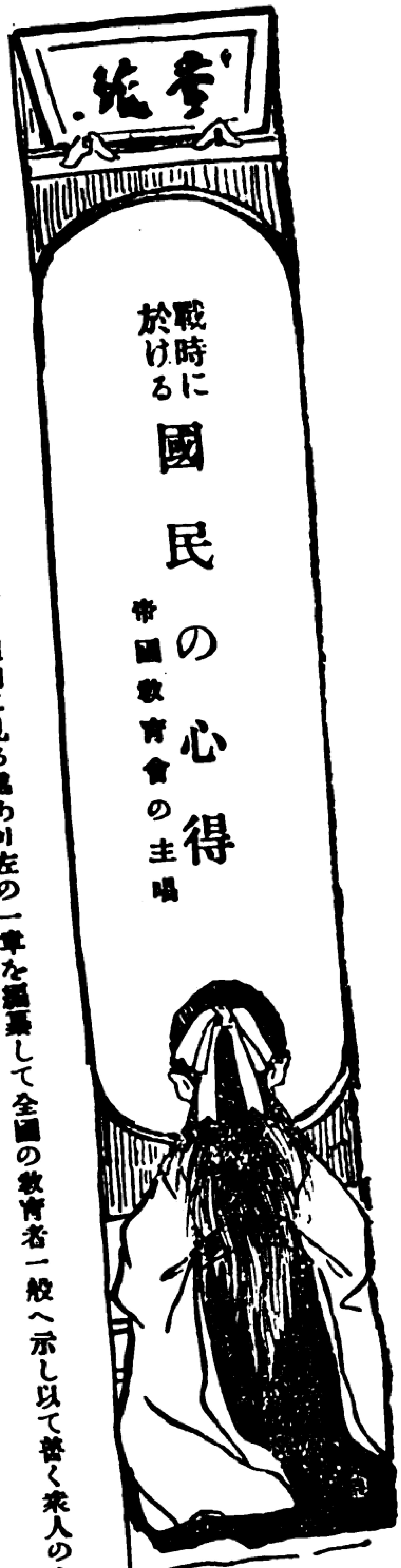
乙科　裁縫科が百三十四名　編物科が三名
刺繡科が八名　圖畫科が三名
造花科が十四名　別科が十一名で
合計百七十三名である。外に

割烹科　六十二名で、以上通計して、五百九十五名となる。從前は、裁縫敎員養成科を置いて、年々多數の敎員を出してゐたが、今日では、大分行き渡つて、裁縫敎員の不足を感じないやうになつたから、廢したといふことである。

生徒の製作品は、その材料は、各自の自辨になつてゐるので、十分技術を練磨しようといふには、各自の材料だけでは、到底足りないから、校外から製作の依賴を受けて、これで練習上の好都合と材料供給の良方法とを謀ることになつてゐる、近來では、生徒の技倆がメツキリ進歩して來たので、製作の依賴は絶えずある、殊に造花科の如きは、宮内省から屢々製作を命せられるのみならず、三井呉服店は本校の事業を贊助する目的で、生徒の製作品を陳列して販賣してくれるので、今日では、材料頗る豐富となつてきて、生徒は忙しきに、眼を廻はしてゐる實況なのである。

製作品を賣却して、得る所の純益金は、隨分多額に上るもので、優に本校經費の三分の一を支へてゐるのである。そして、純益金の半額以下は、生徒成績の良否によつて、或は十分一、或は十分の二といふやうに各自に配付し、これを貯蓄させるやうになつてゐる。最近の調査によれば、一ヶ年間の貯金總高百八十九圓四十三錢で、拂ひ戻した金高は百八十圓八十六錢五厘、此利子四圓九厘である。

（完）



戰時に於ける國民の心得

帝國教育會の主唱

今回日露の開戰に際し帝國教育會は深く時勢の趨向に見る處あり左の一章を編纂して全國の教育者一般へ示し以て普く衆人の心得となしたり

我が國は、上に萬世一系の皇室を戴き、國民は皆忠君愛國の念が深く、誠に世界に比類の無い國柄である、それで若し外國に對し何か大事が起る時は、上も下も擧國一致して國の爲に盡すから、我が國は幾千年の昔より曾て一度も他國に屈服したことがないばかりでなく、特に明治の御世となつてからは、我が國の勢は益盛になつて、今では世界屈指の强國の中に數へられて居る。

韓國と清國とは我が隣の國で、昔から我が國と親しく往來して居たが、此の二國は近來其の國力が弱くて、他國の爲に何時如何やうな事にせられるかも知れぬ。若し此の隣の二國が其の土地を他國に割き取られるやうなことがあつたならば、其の時は我が國も甚危くなるから、我が國では、此の二國をいつまでも獨立させて、其の今有つて居る土地をば少しも失はせぬやうに盡力せねばならぬ。

露西亞は久しい前から西伯利を取り、だんだん東の方に蔓延て我が北海道の北の方にある樺太島にも入り來り、又清國の北東の土地を取つて浦鹽斯德の港を開いたが、明治二十八年の日清戰爭の時清國から我が國へ讓した遼東半島をば他國と云ひ合せて、東洋の平和の爲清國へ還せと我が國へ勸告して來た、我が國では平和の爲な

ら還さうとて其の代りに償金を取つて半島を清國へ還した。然るに其の後間もなく露西亞は其の遼東半島の内にある旅順の土地を清國から借りて軍港とし、鐵道を滿洲に敷いて旅順まで續けた。明治三十三年清國の拳匪の亂があつた時列國から兵を出したが、露西亞も同じやうに兵を出した、亂が平いだ後列國は皆兵を引きあげたのに、露西亞ばかりは兵を滿洲に留めて少しも引き去る氣色がないばかりでなく、其の上に益〻兵を增し、又軍艦を多く本國から旅順へ回して、頻に戰の用意をして居つて、もはや清國から滿洲を奪ひ取らうとする内心が明かになつて來た、そればかりではない、露西亞は又た更に韓國の北の方の土地をも侵さうとするに至つた。

韓國が若し露西亞に侵されて其の土地を取られたならば、我が國は直に露西亞から抑へつけられるやうになり、又韓國との商賣貿易が安全にできなくなる、又滿洲が露西亞に取られたならば、韓國の獨立がおぼつかなくなる、それで我が國は露西亞と相談して、露西亞が前に言つて居つた通り、清國韓國の獨立と其の土地を侵さぬことを、互に堅く約束して置かうと掛合つた、所が露西亞は之を承知しないで、何のかのと時を延ばして其の間に更に戰の仕度をして居つて、今にも滿洲を奪ひ取り韓國の土地をも自由にしようといふことが明かに見えるから、今は止むことを得ない、我が武力を用ひて露西亞人を滿洲から逐ひ出さねばならぬこととなつた、そこで此の二月の六日に露西亞に向て、我が國ではもはや相談を續けることができぬ、といふことを通知した、是れで我が國と露西亞との和親は全く破れて愈〻戰を開くこととなつた、我が叡聖文武なる　天皇陛下は紀元節の前日を以て宣戰の詔勅を下された。

戰が始まると直に我が海軍が大勝利を得て敵の軍艦を多く打破した、是れは實に勇ましい喜ばしいことであるが、露西亞は大國ではあり、陸兵はなかなか多いから、彼の國を屈服させるまでには是れからまだ餘程年月が

かゝるであらう。此の戰は昔から我が國に例の無い大戰で、今は吾等日本國民が大決心をして、我が　天皇陛下の御爲に、此の萬國に比類ない國の爲に、皆一致してできるだけの力を盡さねばならぬ時である。

今此の戰の時に當つて吾等國民が堅く守らねばならぬ心得はいくらもあるが、次に列擧げた數個條は其の中での重なものである。

一、陸軍海軍の軍人は專ら忠節をはげんで、國の爲に生命を惜まず、艱難辛苦を耐へ忍んで其の職務を全うせねばならぬ。又軍人でない者も戰は吾等國民一同の戰であると覺悟し、各できるだけの骨折をして軍人の援けをせねばならぬ。

一、戰に出て行く軍人に後の心配をさせないやうに、家族のものや親類縁者は云ふまでもなく、同じ土地に住んで居るものも皆共に、其の出て行く人をはげまし、後の事を引受けて世話をせねばならぬ、又若し戰場で討死したものがあれば厚く之を吊ひ其の遺族を慰め助けねばならぬ。

一、遠い外國へ兵を出すには莫大の費用がかゝる、金が足らねば遂に戰ができなくなる、それ故軍資の爲政府に獻金し、又政府が公債を募る時は、なるたけ多く之に應じて、費用の助けをせねばならぬ。

一、戰の時は男女老幼の差別なく人々身体を健康にし、常よりも一層自分の仕事に精出さねばならぬ、殊に農工商の人々は各其の家業を稼いで、國の富を增し軍費の資を造らねばならぬ。

一、人々節儉して着物や食物などに奢りをせず、少しでも徒の費を省き、銀行や郵便局に金を預けて國の費用に足すことが肝要である、戰場に出て艱難辛苦する軍人を想へば節儉する位は何でもなからう。

一、戰に出て居る人は常に艱難辛苦をし、又戰つて傷を負ひ或は病に罹るものもある、是等の人々を慰める爲に、海陸軍の恤兵部に金や物を贈るがよろしい。

一、戰の爲に世間の騷がしいのにつけこんで、人の難儀を思はず、むやみに物の價を高くして、己れ獨り金儲けをしようとするやうなことは必ずしてはならぬ。

一、戰が長びく間には勝つこともあれば敗けることもあらう、勝つても安心せず傲慢の心を起さず、敗けても恐れず氣を落さず、おちついて益〻勵まねばならぬ。

一、外國人には深切を盡し、我れから高ぶらないやうにし、又我が行ひを正しくして侮られないやうにすることが肝要である、敵の方の人でも我が國に留まつて居るものをば憎まず侮らず、他の外國人と同じやうに待遇せねばならぬ。

一、戰の間は特に外國人が我が國民に目をつけるから、我が國民は相互に睦じくして、知らぬ間柄でも行儀をよくし、汽車汽船の中などは互に席を讓合ひ、老人や女小兒を助け、我恣な見苦しい振舞をせず、外國人に見られて笑はれ賤しめられぬやうにせねばならぬ。

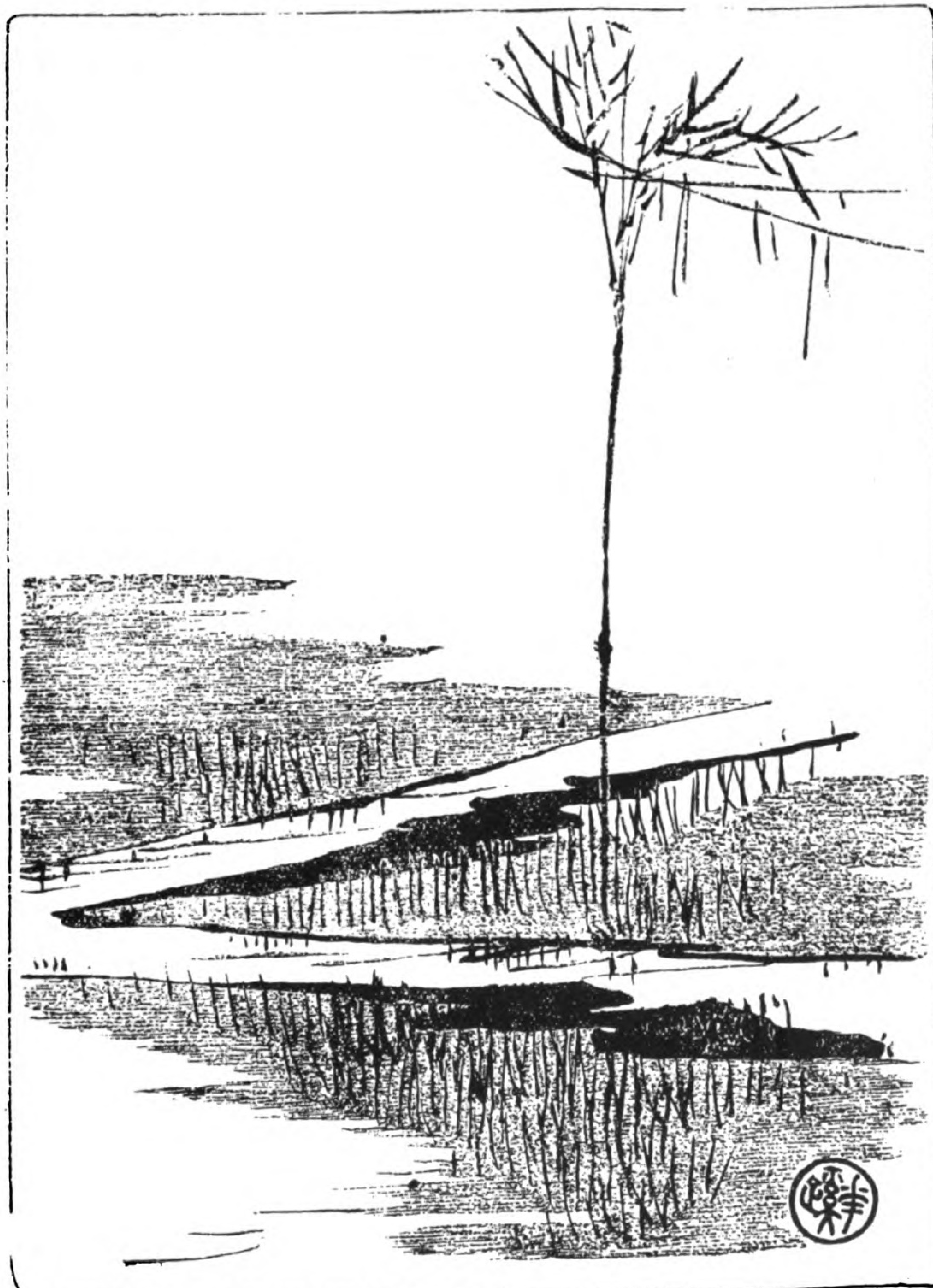
一、今度の戰は敵の屈服するまでは吾等の生命のあらん限り、耐へ忍んで續けて行く覺悟で無くてはならぬ。戰が止んでも又いつ何時平和が破れるかも知れぬから、此の戰の時の覺悟をいつまでも忘れぬやうにせねはならぬ。殊に子供の教育にはよく意を用ひ、少くとも義務となつて居る小學教育は必ず一般に受けさせて將來の大國民となる基を固めねばならぬ。

戰時の禁酒

先頃、禁酒會大會に於て安藤會長の爲したる戰時禁酒貯蓄に關する演說は時節柄頗る聽衆に感を與へたり氏の算に依れば人々晩酌一杯を廢さば二億乃至三億の餘裕を國民の蓄積に生ずるを得れば假令歲計の上に大なる違算を見るも重き納稅にも堪へ獻金をもするを得、國費調達上に何等の影響なきは勿論却て殖產興業の發達、社會風儀の改良等に至大の効果あるべきをいひ其れより氏が松尾、高橋、園田、澤田の四氏を歷訪して其意見を叩き豫想外の贊同を得たること自己函館の一敗より普佛戰爭の翌年兩國に遊て見たる實驗談及び日露戰爭の容易ならざると其結果の如何に論及し日本國民として戰時禁酒する何かあらんと諄々熱誠を吐露したり因に記す戰時禁酒の規約は一日金五錢の酒代を貯蓄し廿五圓に達せば債券を引受くる仕組みなりと。

苗代

跡見花蹊先生筆



歴史談

婦人界の双璧

高須梅溪

日露の戰雲、今や東洋の天地に瀰漫して、われ人共に國事に盡くすべき時は來りぬ。此際、余が本誌に於て、博愛の星、忠孝の花たる婦人界の双璧を傳ふる所以のもの、又少しく諸君の奮勵に資する所あらんとてなり。

刑場の白菫

●●●●●「刑場の白菫」と題せしは、可憐なる孝女マーガレット、ローパー夫人のことなり。夫人は、英國の士爵トーマス、モーアの愛孃にして、西曆一千五百六年に生れ、同四十四年、幽冥の客となりぬ。父モーアは、當時朝廷第一の重臣にして、ヘンリー八世の君に仕へ、忠誠の名、朝の内外に高く、識見學才、將た時流を拔きぬ。有名なる「ユートピア」（理想世界）は即ち氏の著なり、かゝれば、夫人も此尊き父の下に敎養せられて、そが莟堅き幼年時代より才學文章共に進み、才色の譽れ、近親の間に聞え渡るに至りぬ、芳紀二十才の春、准勳爵士ウヰリアム、ローパーに嫁し、夫婦の間いとむつまじく、うるはしきホームの樂みに、此世の憂ひを忘れしが、災禍一度モーアの頭上に落下し來るや、夫人の悲歎、俄かに絶頂に達して、父のために献身の誠を捧げぬ、夫人の高德は、これがために、鬼の如き獄卒をも動かし、孝女の名、一世に喧しうなるに至れり、われは、今そが面影の一片を傳へんと欲す。

＊　＊　＊　＊　＊

英國の如き最も進步したる邦土すら、其昔は立憲の薰風、未だ民衆の上に吹き渡らず、帝王專權の弊少からず臣下に災しぬ。忠誠なるモーアは、かくの如くにして、災厄の雲に蔽はれしなり。當時天下をしろしめす大君はヘンリー八世皇帝にして、賢明の聞え夙に高か

りしかど、猶ほ古來の餘風として、「帝王獨裁」の說を唱へ給ひ、苟くも我命に背かんものは、立ろに死刑に處すべしと宣ふが常なりき、されば、多くの廷臣等は勅命一度下る毎に、ほと〳〵恐懼しまつりて、只管大命に背きまつらざらんやう力めぬ。此間にありて、幸ひにも士爵モーアは、此大君の知遇を受け、官職次第に累進して、終に最高法官の榮職迄も經登りけるが幸福の花永く開かず平和の泉永へに涸かず、一朝、逆運の魔風モーアの一家に吹きすさぶや、忽ち恐ろしき災厄の塵砂中に包まゝるに至れり。

當時ヘンリー八世は、皇后キヤセリンを廢して、更らにアーン、ブーリン孃を皇后に立て給はんとする御意あり、終に大御心を決し給ひて、そが勅命を下し給ふに至りぬ、この御勅命は、いたくモーアを驚かしぬ、あはれ罪もなく科もなきキヤセリン皇后は、かよはき秋草の花のさながら、冷けき風に吹き倒さるゝが如くいとしき大君より離別の恥辱を受け給はんとす、かしこしともかしこし、苟くも大君の下にありて、尊き祿を食むもの、かゝる時に君の不正を諫めまつらずんば、何の日か高恩を報じまつることを得ん、よしやわが大君の勅命は、赫として日月の如かるとも、一身を鴻毛の輕きに比し、榮華をはかなき夢とあきらめて、只管大君の正しく淸き御名を汚さゞらん、さなり、さなりとて、モーアは、固く心に決する所ありき、かくの如くにして、渠は大君の命にさからひまつりぬ、

「臣は、今直ちに身を刑場の露と爲すとも飽迄わが君の勅命を止めまつらん、そは賢明の君にふさはしからぬ御業なり。」

と、奏上しまつりて、朝廷を辭し去りぬ。げに渠の胸中は、唯忠誠の二字もて滿されつゝありしなり。

されど勅命は、嚴として秋霜の如し。一たび大君の御口を洩れし御言葉は、容易う取消さるべうもあらず、果せるかな、ヘンリー八世の君は、赫として逆鱗ましましぬ。

「おのれ無禮の奴、渠を直ちに獄に下せ！　とくとく。」

と、いきまきて宣ひければ、忠直なるモーアの熱誠も、終に君の御心に達せずして、見るだに恐ろしく、物すごき幽暗の獄裏に禁錮せらるゝの身となれり。

此時ローパー夫人は、既にウィリアム、ローパーの家に嫁して琴瑟能く和し、その家庭の静穏なるさま、さながら百花咲き満ちて、蝴蝶舞ふの趣ありき。

然るに父モーアが一度忠直の諫言を為して、獄裡に投せらるゝの悲報、此平和なる一家を驚かすや、夫人の心臓は将に破裂せんばかりに驚愕と悲哀とをもて満されけらし。

『かの恵み深き父、正義を守り給ふ父君が如何にして、か



初夏の郊外

かる惨禍を買ひ給ひけん若し悪魔に均しき不義のために罰せられ給ひしならんには、猶ほ心に解しまつらんこともあれど、正しき忠誠の熱血を灌ぎ給ひてかく浅間しき恥かしめを受け給ふとは、何事ぞ、子として此儘に見過さんは、天罰の程いと恐ろし、假令妾が身は、これがためでに病み臥すとも、わが父君を救ひまつらずば、再び妾の真心を捧げまつる時なからん。

ローパー夫人の小さき胸の中は、そゞろに亂れて、座にすらたへず直ちに甲斐々々しく父の為めに四方に奔走し、さまざまの手術を盡くして、其免除を求めしかど、そが誠は天にも達せず、地にもと

かず、冷かなる律法の文は、終にモーアに對して、死刑の宣告を下すに至れり。

此慘酷、霜の如き報に接したる夫人の心は如何なりしぞ。常には薔薇色の紅を潮せし頰も俄かに青ざめて、さかしき眼の色も力を失ひ朱唇紫となりて、身も世もあらぬ思ひせしならん、うるはしき日の光も夫人を嘲るが如く花下に囀る鳥も夫人を弄ぶが如く、風の聲空の色、一として夫人の心膓を寸斷せしむる種とならざるはなかりしならん、あはれなる夫人は、吾を忘れて、獄裡の方に向ひぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今やモーアは、死刑の宣告を受けて、法庭を出で、將さに獄裡に歸らんとす。モーアの赤心鐵膓は、かゝる冷酷の律法に處せらるゝとも、露おどろくことはなけれど、流石に後に殘る妻子の身の上に思ひ至れば、丈夫猶ほ一掬の涙なき能はざるべし、されどモーアは恰かも平日談笑の間にあるが如く、微笑を含み乍ら、獄裡にひかれゆきぬ、四邊に群れる人々は、此快活瀟脫なるモーアの風采を仰ぎ見て、そゞろに胸中の苦悶を察し、ほと〳〵双袖を沾ほさぬものなかりしならむ。

此時、突然幾多の群集をおしわけ乍ら、いと優しき聲もて

「父上！」

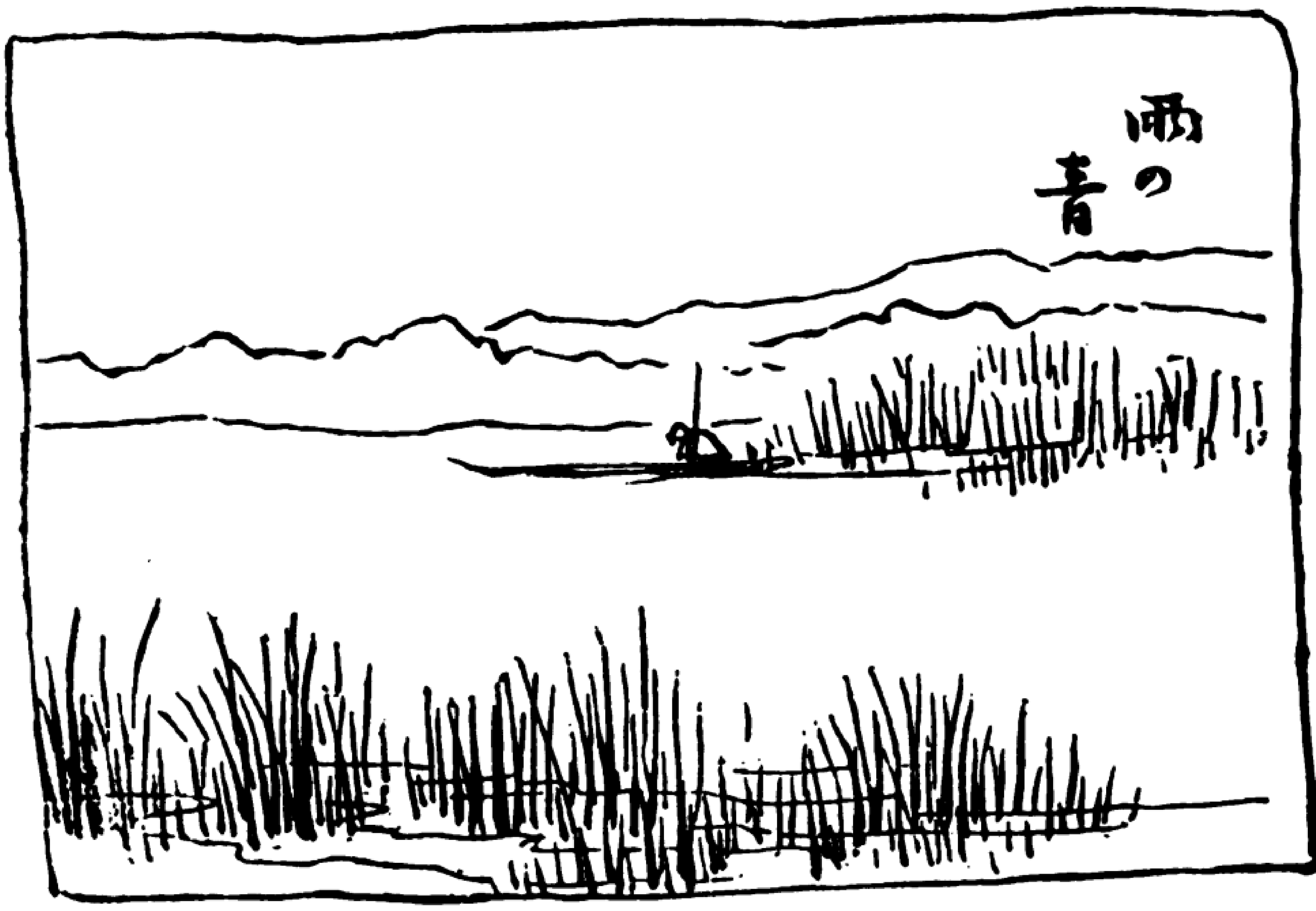
と呼びかけし可憐の婦人あり。そはローパー夫人なりしなり、群集は此憂ひに沈みし氣高き貴女の風姿を見て、一齊に眼を見張りぬ、夫人はほと〳〵吾を忘れて獄卒の間に轉び入り、父の側に近くよと見る一瞬間、早やそが襟元に取縋りて、淚は瀧津瀨の如く父の胸に濺がれぬ、此不意の音づれに逢ひし、モーアの喜びは、爛爛たる王冠のそれを得るよりも尙ほ貴く思ひしなるべし、夫人は何事をか言はんとせしが、唏噓の聲に妨げられて、又一語をも發すること能はず、されどその眞心は不言の中に現はれて、四邊の群集の心を動かしぬ、此健氣に可憐なる樣を見たる獄卒はよしや鬼に似たる心を持つとも、流石に夫人の優しき情緒に感じて

そを制すること能はざりしならん、果然！　獄吏は、モーアに向ひて、左の如き同情の言葉を洩らすに至りぬ。

「君が今度の災厄は、吾等の深く悲みに堪へざる所なり。若し君にして何か申しのこしたきことあらんには、少しも心配ひし給ふこと勿れ、今茲に來給へる愛娘に詳しくそを傳へ給ふとも苦しからじ。」

モーアは、此情ある言葉を聞きて、いたく喜び、いざ此世の名殘を告げんとて、夫人に慰諭の心をほのめかしぬ。

「嗚呼わが愛するマーガレットよ。わが斯くなれるも、皆天の爲せる業なれば、今更そ



初夏の郊外

を悲みたりとて、元の身に歸へらん、よしもなし、御身は夫のために心して、其よはき身をな毀ちぞ、わが一身の如きは、決して憂ふるに足らざるなり、さらば、此に最後の告別を爲さん。」

モーアは、斯く言ひ終りて、優しく夫人を擁し乍ら、最後の接吻を爲しぬ。

夫人は、接吻を爲し了りて、一たび身を退けたれど、何となく足すゝまず、一歩二歩三歩、覺束なき歩みを取りて、吾家に向はんとしたれど、父の面影、眼前に徂徠して、思ひはいや増し來れり、夫人は再びわれ知らず後に引返へして、父の側に馳せ

よるや否や、暫時其襟元に縋りて去らんともせず、此可憐なる娘の姿と其心ばえとを見しモーアは、終には堪へずして、双眼を沾ほし、默々として、彫像の如く佇立づめり、あはれ何ぞ其狀の慘たる、正にこれ晩秋の悲しき光景にも似たらずや。

* * * * *

モーアは、終に斬罪に處せられ了んぬ。氏が畢世の心血を灑ぎて物したりし著述のみ、空しく其形見として殘り、腥風吹きすさぶロンドン橋上、白日群集の間に、其首を梟せらるゝに至れり、夫人は泣く〳〵其亡骸を請ひ得て、セント、ピーターの僧院に葬らんとせしかど、罪人に對する掟として、そを隨意の場所に葬ることを許されざりしかば、かへす〳〵も、父の不幸を弔しつゝ、牢獄のほとり近き埋葬地に葬りぬ。

其後、日數を重ねたるに關らず、夫人は猶ほ只管父を追懷して止まざりき。

『正しき身を以て、唯牢獄の中に投せられ給ひしさへ口惜しきに、今又其首をロンドン橋上に梟せらるゝに至りしは、さながら一家を擧げて、墓穴の中に葬らるゝよりも猶ほ心苦し、若し地下にまします父君にして、此慘き光景を一目だに見給はんには、如何ばかり憾多きことゝ思ぼし給はん、妾が父君の生前に盡くしまつりし報恩の誠は、僅かに其御恩の千分の一にも及ばじ、さらば如何にもして父君の首を奪ひかへし、竊かに平和の地に葬りまつらばや。』

とて、夫人は雄々しくも心に決するところありき。

『至孝の情は鬼神をも動かすべし』とは、われ等の常に聞くところなれど、未だ其實狀に接したることなし。夫人が此時の胸中こそ實に此言葉の誠を表すにはあらぬか、纖弱風雨にすら堪ふる能はざる婦人の身にして如何にそを奪はんとする、一莖の野花すら心して踏まざる優しき婦人の身として、如何に其目的を遂げんとはする。

或夜、ロンドン橋下の水正に眠りて、人影全く後を絶ちたる時、夫人は獨り身を忍ばして橋畔に至れり、雨白く、風黑く、夫人の衣は大方ぬれにぬれて、心地惡

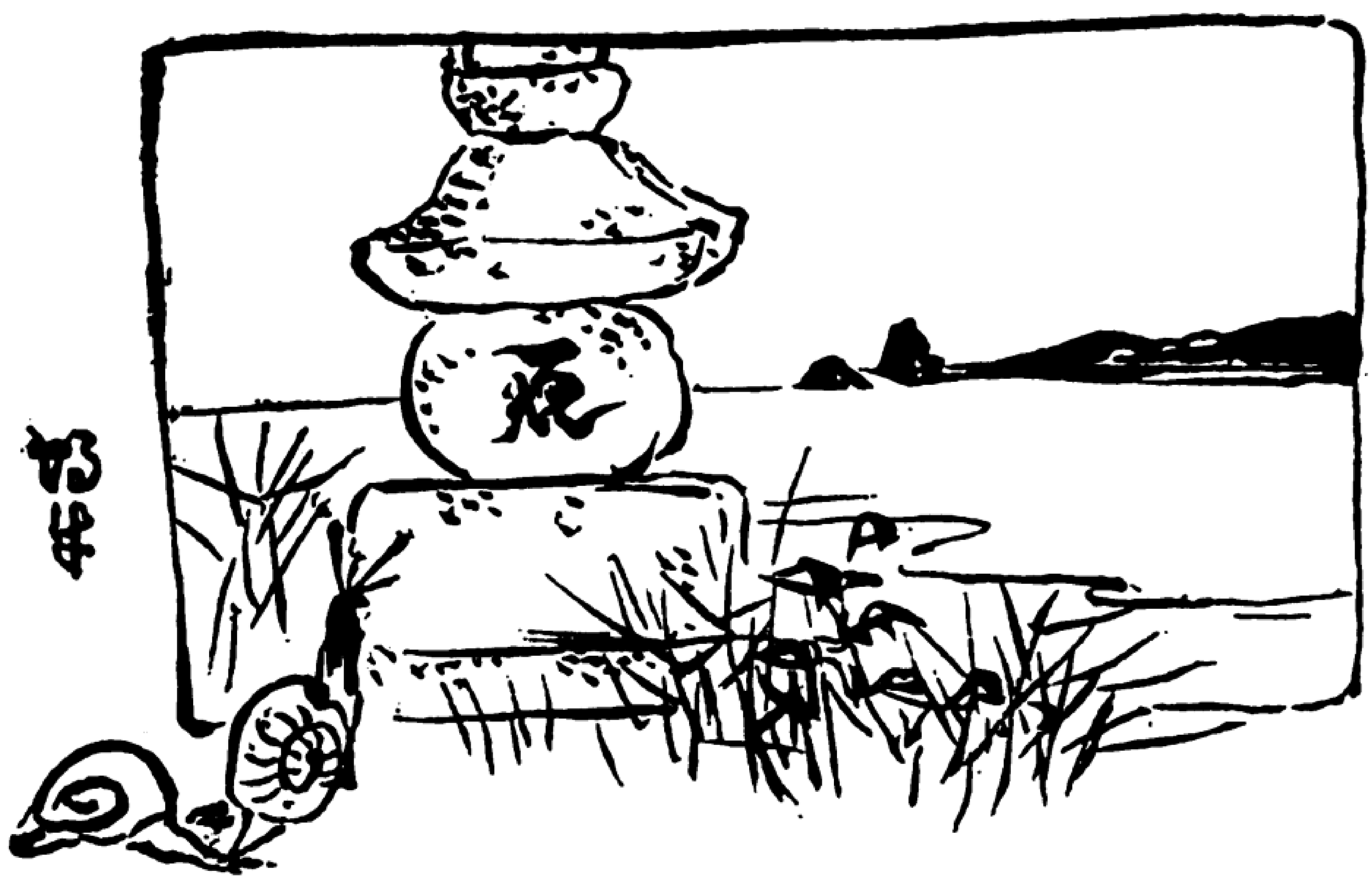
しきこと言ふばかりなれど、父を思ふ心は、岩をも徹さんばかりなれば、終にそが目的地に達して、父の首級を奪ひ歸りぬ、眠れる人人も、静かに流るゝ水も、夫人の心を知らざれど、獨り平等無私の天のみ能く夫人の心を知れり。

其翌日に至りて、此事忽ち官の知るところとなり、刑吏は直ちに夫人を呼び出して、嚴かに詰問し、終に無慘にも之を獄裡に投じて

『若しモーアの首級を返へさゞる時は、止むを得ず汝を刑罰に處すべし。』

と言ひたれば、夫人は神色自若として、深く心に決する處あるものの如く、

『妾は、父の首級を奪ひしには、



初夏の郊外

相違なけれど、そを魚腹に葬りまつらんは、なか／＼に悲しく侍り、これのみは、如何に仰せらるゝとも返へしまつること難し。』

と、いさぎよく答へて、少しも恐るゝ所なきが如し孱弱けれど、白菫の如き氣高く優しき心ばえには、鐵の如き刑吏の心も自ら動き、果てはヘンリー八世の御心をも感動せしめて、終に夫人の言ふがまゝに許さるゝことゝなりぬ、あはれ、我國のマーガレットたらんとするものは、そも誰ぞや。

闇中の白梅

万國基督婦人矯風會々頭として、嘖々の名聲あるウイルラード女史

は、西暦一八三九年米國ニユーヨークに生れ、十九才の時、女教師となりて、獨立の生活を營みてより此方、頻りに育英の事に力を盡くし、三十五歳の時に及びて、禁酒運動の爲めに力を致すや、終に其會頭となり、一代の欽仰する處となりぬ。今左にそが美しき事蹟の片影をしるさん。

文明の光は燦爛として、世を照らすの趣あれど、十方を遍照し玉ふ佛菩薩の光の如くならず、そが一面に於ては、忌むべく、嫌ふべき黒影を印するところあり。われ等若し此一面に逢着したらんには、さながら風吹きすさむ晩冬の夜を目のあたり見るらん心地して、色慾に耽り、大酒に溺れて、呻吟する人々の苦しき叫びを聞く心地するぞかし、此時に當りて、垣根の中に蕾を破りし白梅の、星の如くに、闇中にほのめきて、先づ初春の豫言を爲すを見ん時、われ等の悦びは、そも如何ばかりぞや、ウイラード女史の如きは、げに此闇中の白梅ならずや。

余は光榮ある女史の事業を叙する以前に、少しく女史の幼時に就いて語り置くべき必要あり。女史の家庭は春の如し、梅花樂しげに開き、黄鳥快く囀る園の中に似たりき。されば、女史が幼き時、其母君より受けたる教育は、極めて自由にして、且つ開發的に傾きたりしなり。

女史が家庭教育時代に、他日成功の種子を植えられたりとも見るべきは、小新聞の發行なりき、こは別に印刷して世に發表せしにはあらで、家庭にて母子の間に行はれし一種の娯樂なりしなり、女史の母君は專ら詩を作り、兄君は論説を草し、女史は旨と文學の方面を担任して、さま〴〵の詩文を物しぬ、凡そ幾多の娯樂中にて、かく純潔なるが上に樂趣ある遊伎ありとも覺えず、余は女史が如何ばかり面白く、如何ばかり熱心に此事に從ひたるかを想ひやりて、獨り微笑することを禁ずる能はざるなり。

其頃、都よりはる〴〵と來りし人ありて、女史が住へる土地の餘りに物淋しきよしを告げしかば、女史が天性自ら賦せられたる組織的性質は、瞬間の中に發動

し來り『さらばこれより直ぐに一小都市を作らん。』とて、自ら其發起者となり、ささやかなる建物に、いかめしき名を附して、商務局を設け新聞紙を刊行し、紙幣を造り、憲法を設け、市長書記を置きて會計、遞信の二課を定めつ最後の其母君をば裁判官に仰ぎて、此に縮寫せられたる一小都府を形造るに至れり、女史が後年の伎倆は、早くも斯る處にも一點の微光を放てるなり。

其後、女史が苦學精勵を積みたる結果、二十歳にして、シカゴの女子大學校を卒業するやさまざま思索を重ねたる後、獨身生



初夏の郊外

活を爲すに決し、專ら教育の方面に力を致さんと思ひ立ちぬ。此勇ましき門出を爲してより、一八五八年以來、一八七四年に至る迄、凡そ十六年の間は孜々として、子弟の教養に力を盡くし、倦まず撓まず、梅花の如き清操を以てせしかば、至る所歡呼の聲もて迎へられにき。一八七三年こそ、女史にとりても、米國にとりても、最も記憶すべき年なれ。これより先き女史が歐州各國を漫遊し來りて、故鄕の地を踏むや、イヴアンストンの女子大學校長に選ばれて、一種の理想的教養を施し、只管有爲の女子を養成するに力めしかど、西北兩大學合併の議起るに及びて、女史の意見、他と合はざる所

多かりしかば、潔く校長の職を辭して、新たに他の新生涯に向ひ一歩を轉せんとする志を抱くに至れり。折しも一八七三年、オハイオ州なるヒルスボロウとなん呼べる處にて、淸くうるはしき革俗の聲は、トムソンと呼べる姿優しく心雄々しげなる一婦人によりて擧げられぬ。トムソン夫人は、世の惡業墮落が半ば飲酒に基づくところ多きを慨き、如何にもして、そを矯正せばやと思ひ立ちて、所々の會堂に起ちては、婦人團体に禁酒の必要を奬說し、酒店に入りては、祈禱をもて其店を閉鎖せよと迫りしかば、世は一齊に夫人の熱誠に動かされて禁酒運動の潮流、オハイオ全州に溢れ滿つるに至れり、婦人の一隊は流麗の聲もて聖歌を唱へ、祈禱を捧げつゝ、至る所酒店の閉鎖を命せしかば、風紀肅正の旗印、一時に勢を得て曉の風に靡くの槪ありき、これがために中ば衰へかゝりし宗教的信仰は俄かに蘇ると同時に、禁酒名簿に登錄するもの、幾千人なるを知らず、トムソン夫人の活動は、徒勞に終らざりしよと見えたるが、瞬く暇に、激烈なる反動潮の如く起り來りて、旺んに禁酒運動を妨げんとするもの現はれしかば、此に女史の敏腕と淸節を要すべき時代は來れり。其頃とかや、女史は大學の職を辭せし後、東の方に赴き、折々禁酒運動の爲めに力を致して日を送りつゝありしが、偶まニューヨーク女學校より年俸三千五百圓にて校長に聘し來り、又一方よりシカゴ府の依賴ありて、當地婦人禁酒會々頭たらんことを懇願し來れり、但し此方は、別に一定の俸給なく、全く献身的事業とも言ふべきものなりき、普通の女子ならんには、虛榮利慾の爲めに眩目して、直ちに後者よりも前者の招聘に應じたるならん、されど女史は、只管虛榮を喜び、安逸を求むる平凡淺薄の婦人にあらざりしかば、假令其待遇の法よろしからざるも、神のため、道の爲め、將た人の爲め、後者の請ひを容れて終に婦人禁酒會々頭の職に就任しぬ。

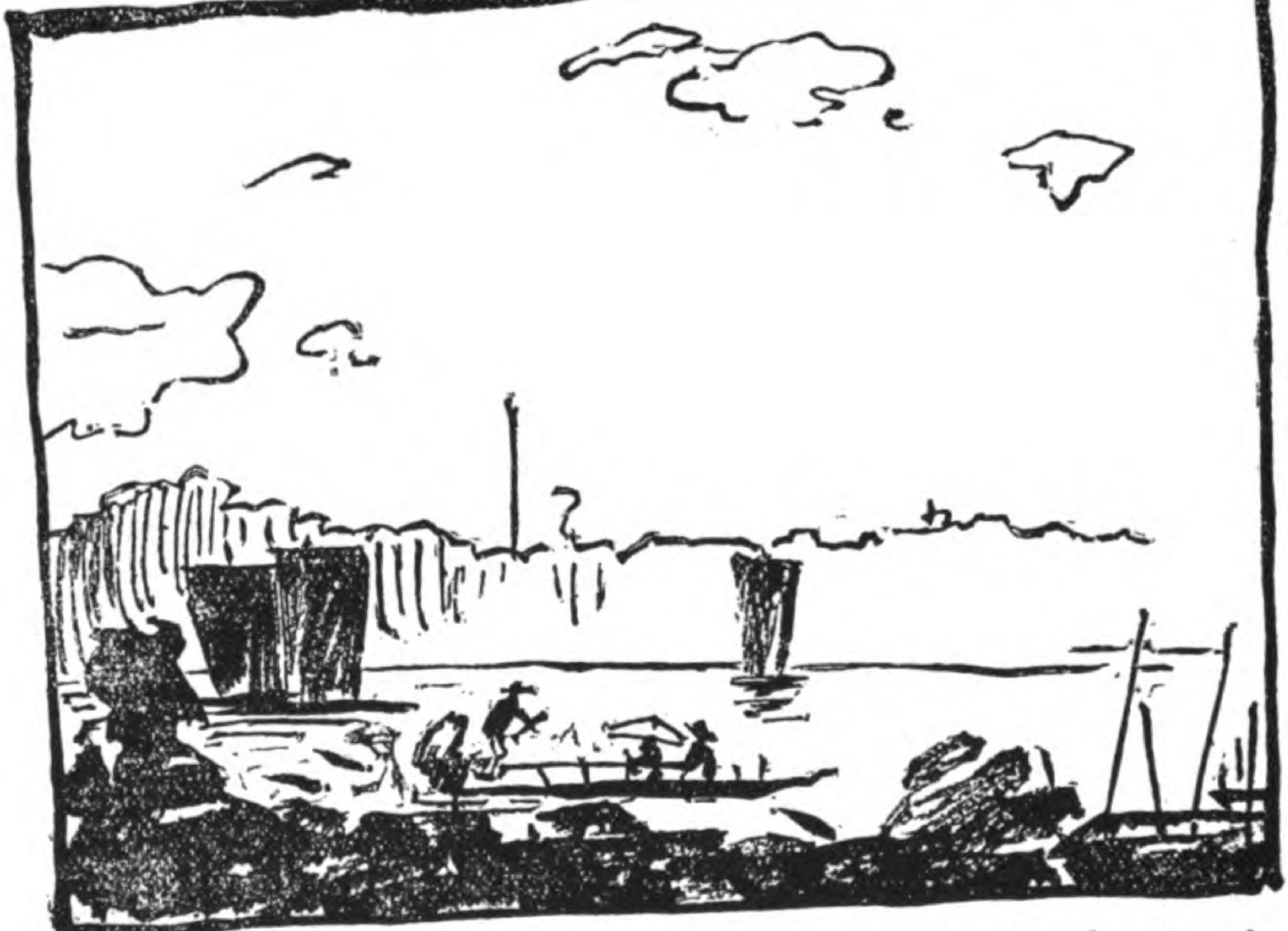
その後、女史の生活は誠に慘憺たるものなりき。名譽ある市府の團体に長たりと言へば、表面上極めて尊く、いかめしきやうなれど、其俸給は、街頭に起ちて物を

を乞へる卑しき者共にすら及はず、或時は饑餓のために、餓鬼道の苦みを受け、或時は身を殺して、畜生道のそれよりも甚しき勞作を爲し、最窮乏の生活を爲し乍ら、最高貴なる職に盡くす所少らざりきあゝ我國の上流婦人は、これに對して、如何の顔色かある。

＊　＊　＊　＊　＊

女史は會頭として一層能く戰ひぬ。

或時は聲枯るゝ迄說教を爲し或時は、眞心こめたる祈りを捧げ、或時は弱きもの病めるものを問ひ慰め、或時は會の組織を整へんがために心神を勞らし、能く粗衣粗食の苦痛



初夏の郊外

に堪へて、過大なる働きを爲せしかば、纎弱なる婦人の身のいかでか永久に健康を持續することを得べき、終に激烈なる熱病の惡魔に魅せられていたく病蓐の上に呻吟苦惱する身となるに至りぬ、母君は女史の病を見るにつけて、子を思ふの情殊に切なるが爲めに、如何にもして此苦みを除かんと欲し、女史に勸むるに、實際の困窮を訴ふべきことを以てせしかば、女史も亦止むなく母君の言葉に從ひそが實情を公けにするに至りぬこれより事漸う緒に就き、組織も改まり、女史の病將た快くなりたるをもて、女史は一

轉して、其書記の役に任ぜられぬ。

あはれ、女史がかく迄に神の爲め道の爲めに盡くして、病の床につき、又再び起ちて戰はんとする樣は、白梅一たび寒威を凌ぎて綻びかゝりたれど、降り續く霜雪の爲めに、しばし其身を蔽はれたるに似たらずや、されど女史の白梅に似たる風姿行動は、夜の闇を照らすらんやうに、その最後に於て、滿開の色と姿とを見せでは止まざるなり。

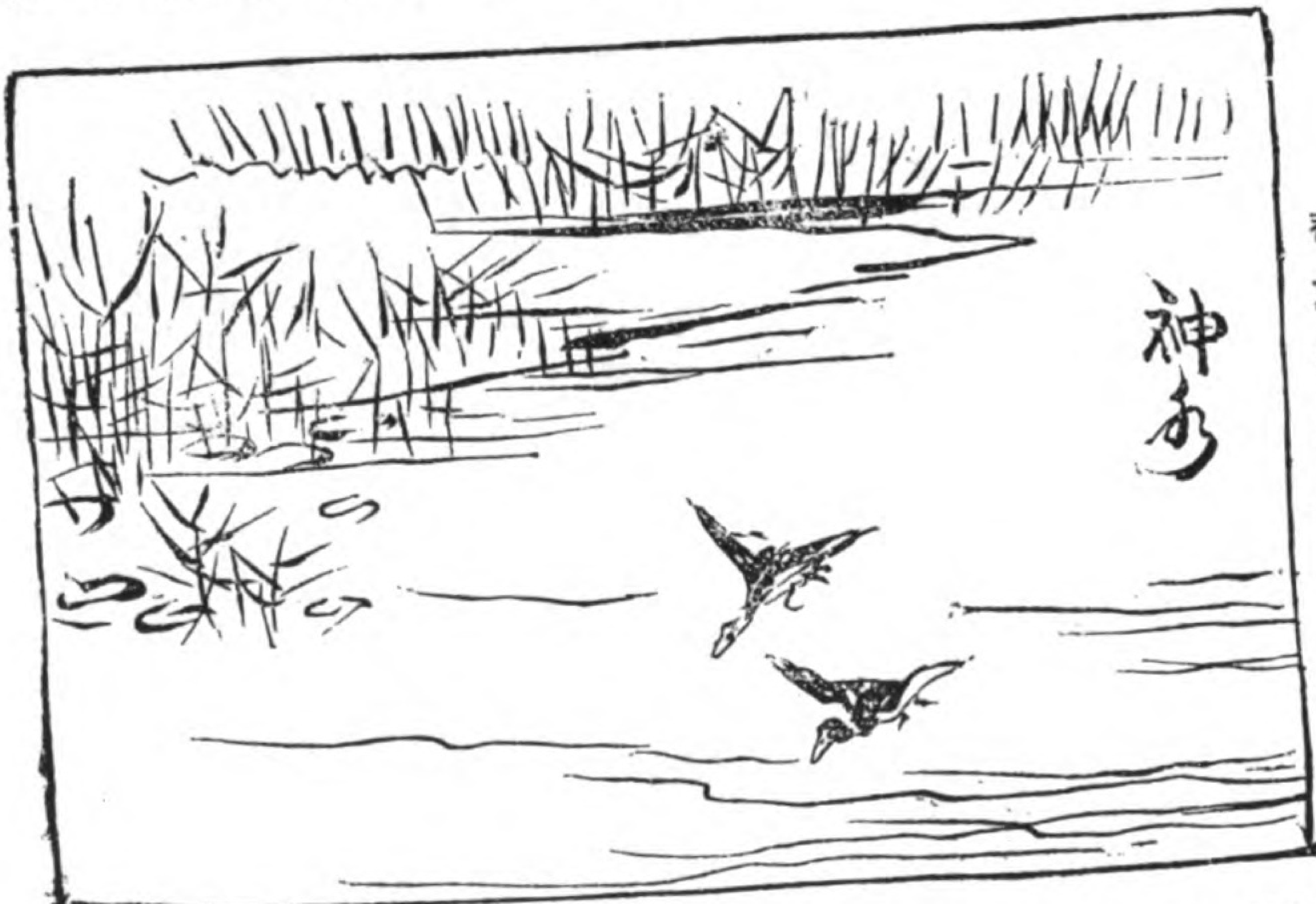
女史が書記として、新たに活動し初むるに當りて、つく〲と禁酒運動の前途に思ひを凝らしつ。其結果、婦人にして、撰擧權を得ざれば、思ふまゝに其目的を達する能はずと思惟せしかば、第一に婦人撰擧權の事を主張するに至りぬ。されど全國婦人禁酒會々頭は大會の席上にて其問題を提出することを拒み全會員も亦一致して、大なる反對を爲せり、さはれ、女史の確乎たる自信は、猶ほ梅の木の勁健なる樣に似たるが故に、飽迄其主張を貫きて、禁酒運動の妨げとなるべきものを排せんと欲し、少しも世の反擊を恐るゝことなかりき

一八七八年頃より、女史は旅裝を整へて、米大陸遊說の途に上りつ。屢ば風塵の間を馳せ旅途の苦みを嘗めつゝ、此處彼處を音づれ廻りて、一年の中、家にあること、僅かに二三週の外に出です、かくの如き熱心と、かくの如き至誠とをもて、爾後十年間、聯邦諸州の中、一万以上の人口を有する都府を初めとして、人口僅かに五千を有するばかりなる市町をも大方遊說しつくしぬ、女史が雄々しき行動は、到底人の力なりとも覺えず、或年の如きは、其友なるゴルドン孃と共に、星章旗の飜れるところ、四十四州五個の直轄地を訪ない、鐵道又は舟車に乘りて、旅寢の夢を重ねし行程、凡そ三万哩の長きに渡りしとかや。女史の說教は、至るところ禁酒の事を說くと共に、婦人撰擧權の事を以てし、固く主張して容易く動する風なかりしかば、そが熱誠の火焰、終に人の心を燒くばかりの勢を有し初め冷かに女史の說を嘲りたる人々をして、次第にその說の理あるに服せしむるに至りたりき。

一八七九年、インヂアナポリスの大會に於て女史は、

終に全國禁酒會々頭の榮職に擧げられ、爾來會の方針施設は、悉く女史の意向によりて決せられ、運動すること丶なれり、これ白梅の時を得て、次第に咲き綻ぶべき機運に會ひたるにも似たらずや。

女史が會頭となるや、あらゆる方面に向つて改善を施したるところ多し。今迄は、雜草地に滿ちて、春寥落、見るに堪へざる節なきにあらざりしかど、一度女史の清容、園生の全面を照らすに及び、雜草は刈かれ、寥落は跡を絶ちたる如く、會の組織面目全く一變せられて、新面目を呈するに至りぬ、其事業は、法律、社會、敎育、組織等に區分せられ、婦人選擧權の説將た大に迎へられて、綱紀一振せし概あり、女史は唯にこれのみをもて滿足すること能はず、禁酒運動の外に、社會のあらゆる雜草を切り拂ひ、米大陸の上に神聖高潔なる神の園生を現はさんと力めたりき、かくの如くにして、女史は一歩々々理想の方面に努力しぬ、讀者諸孃よ、此に至りて、女史の幼時を回顧したらんには、渠が其家庭の間に階段を攀ぢしむろやう實行の方善養せられたる伎倆の、はしなくも此に現はれて、美しき花の姿を現はしつるを見給はん。



初夏の郊外

女史が初めて會頭に選ばれし時は、大會の席上に來り臨みしもの、聯邦中、僅かに二十州に過ぎざりしかど、其後の大會に至

りては、四十四州の代表者皆先を爭うて來會し、新大陸及び舊大陸のもの、ひとしく席に列せしのみならず聯邦四十四州の中、三十八州にては、各公立學校に於て、酒の害毒を戒むる爲めに、之を課業の中にて說くと同時に、幾多の州議會に迫りて、婚姻の年齡を遲くし以て青年の腐敗を防ぐに力め、小兒煙草を賣ることについては、嚴正なる制限を加ふるに至りぬ。

今や白梅は、悉く滿開する運命に會せり。そか機關紙は、一週每に、七万五千部の發行を爲し、そか活版所は、全會の目的を遂行せんがために、一億三千万頁を印刷すと傳へらる、且つ其支部は、米國に於て一万に達し、諸方と氣脈を通じて、頗る敏活の擧動を爲し、其本部に至りては、雄麗宏壯、巍然として空を衝いて聳ゆ、これ等一切の支配を爲す大女王は、ウイルラード女史なり、女史や、正に文明の闇黑なる方面に對して、梅花の匂ひと、ほの白き微光とを點じたるのみならず、一般文明世界をして、芳香馥郁たる梅花世界たらしめんとす、余が女史を稱して、「闇中の白梅」と言ふ所以のもの、決して溢美にあらさるなり。

今の時、わか國婦人諸氏にして、此壯烈なる女史の熱誠と、勇氣と、才幹とを學びて、公私の爲めに盡くしたらんには、如何ばかり兵氣を旺んにし、國民を心强からしむべきか、余は諸孃が冷靜に此編を看過せられざらんことを祈るものなり。

（完）

戰國と美姫

林天然

後醍醐天皇天資英武にましまして、建武中興の業をたてさせ玉ふたが、延元元年足利尊氏叛逆して兵を擧げ、光嚴天皇の御弟豐仁親王を立て、天子と爲し、兩天子が一時に南北兩朝に立たせ玉ふ有樣となつたから、天下はゴチヤ〳〵に亂れてしまつた。此時代にも宮中に仕えた女性は隨分多かつたから、才色の優れた官女も尠くは無かつたでせうが、中について後世まで

名を殘したものは、

勾當内侍
左衛門佐局
顔世御前
辨内侍
伊賀局

の數人である。これらの婦人は概ね公卿の女で、家庭もよく容姿もよく、何れも宮中に仕えて、多少學藝もあり、世に謂ふ名媛共である。で此時代は絶えず戰亂があつた、戰亂があると武將どもは非常に賴もしがられる、武將の力によらうとすれば武將の歡心を得るのが肝要である、故に此時代には戰功のある者には、數多の領地を與ふの外、往々他の賞品の如く、玉か花かとまがふ美媛を賜ふて、其心意を慰め、武將をして益々奮勵せしめたと思はれることがある。で田舍で生れ、田舍で成長し、明け暮れ武道のみに心を入れ、暴ッぱい事ばかりして居た武將が、若し優さしくて美しい、氣高くて麗はしい、所謂上品の佳人を得たならば、それこそ大悦びに悦んで、一層奮勵したであらう。

前に列擧したる數人の女性は、大半武將に賜はり、一時は榮運の夢をみたのである、けれども歎げかはしいことには、當時欲深くて大義名分を知らない輩が、大抵足利尊氏に屬したから、南朝方の勢ふるはず、恐れ多くも後醍醐天皇は、萬乘の明君に御在しながら、中興の業半ばに絶え、叡慮を痛めつゝ長へに崩じ玉ひ、武忠勇の武將共も又相前後して戰沒してしまつた故、武將に賜はつた佳人どもは概ね薄命に此世を終つたのである。而し流石宮中に召し使はれし者だけあッて、亂世にありながら、何れも堅く婦道を守り、其身の全を保たん爲め、才德を汚がす樣なことをしたものは一人も無い。就中辨内侍の如き偕老の契を結ばなかッた者でさへ、深くこれが報恩に志したのである。さても既前に列擧したる佳人が、如何なる來歷をもつかは、既に世にありふれて居るが、予は特に幼稚なる婦人の爲め、こゝにその概要を述べて置きませう。

▲勾當内侍　頭大夫行房の女で、容姿麗はしく、後醍

醐天皇の女官となッた。建武中新田義貞内裏を警衛したことがある、一夜月さえて風なく、萬籟響を收めて、天地極めて靜寂であッた時、簾を半ば捲上げて、優に琴を彈いてる宮女がある、其音が如何にも美妙であッたから、義貞はわれ知らず、唐垣の隙間から窺いて見たら、勾當内侍であッた、流石の義貞も心動いたとみえ、其後人を頼み、

我袖のなみだにとまる影とだに
　知らで雲井の月やすむらん

と歌をかいて送ッた、内侍は應へもせずに居ッたが、天皇潛に此事を聞召し、義貞が屢 賊軍と戰ひて忠勤を盡すから、義貞の夫人として下だし賜はッた。で義貞が越前の方へ出陣する時、内侍を近江の堅田に留め置いたが、内侍ば愛慕に堪えんので、獨りで北國に赴き、越前の杣山で、瓜生照より義貞は、昨日足羽の戰に討死したといふことを聞き、非常に悲しみ歎き、歸ッてから琵琶湖の中に入ッて死んでしまッたといふことである。(けれども尼となり、嵯峨の奥往生院の近邊に、住ッてたといふ説もある)

▲左衛門佐局　後醍醐天皇中宮の女官で、容貌すぐれて文學を嗜み、特に琵琶を彈くのが上手であッた。曾て　天皇が北山殿に御幸のあッた時、局は命を奉じて琵琶を奏した、時に中納言藤原藤房局を一見し、朝思暮想止めんとして止めることが出來ない。元弘元年賊軍大擧して迫ッたから、天皇は笠置の山へ移り玉ふことになッた、藤房出發する前、今一度局に會はんとして中宮に行ッた所が、局は此時北山殿に赴いて居らなかッた、そこで藤房は髮を斷り、それへ

黒髪の亂れん世までながらへば
　これを今はのかたみとも見よ

とつけ置いて立ち去ッた。局かへり來て此歌をみ、殆んど狂するばかりに泣き悲んでゐたが、そのうちに賊軍がドン／＼攻め來て、局を捕え、將に狼藉に及ばうとした、局到底もかなはぬと思ひ、夜になッてから隨はんとすかし置き、隙をみて逃げ出し、藤房の歌の傍らに

書置きし君が玉章身に添へて
後の世までもかたみとやせん
と書きそへ、大堰川に入ッて溺死してしまッたといふことである。藤房は北條亡びてから後、意に合はざることあり、建武二年髮を削ッて僧となり、其後は何處へ行いたやら、今だによく分らないのである。

▲顏世御前　早田宮の御女、西の臺とよび、後醍醐天皇が鹽谷判官高貞に賜はッた美人である高貞は左衛門尉貞淸の子で、世世出雲國の名族である。元弘二年天皇潜に隱岐の島より還らせ玉ふ時、高貞一族を率ゐて官軍に屬し。それから建武二年に反して足利軍に降つた。足利尊氏



の執事は高師直といふ豪慢暴虐の奴である、常に戰功を恃んで憚る所がない、且つ奢侈を極め住宅など宏大美麗を盡し。其天性たる、淫慾頗る深く、女にかけては實に古今無雙の英雄である。京都に居つて、公卿などの女でも、容貌の美しい者と見ると、手當り次第に奪ひとり．何十人といふ程の妾をかこひ置き二條前關白の妹も．師直に逼まられ、師直の四子師夏を生んだといふことである。此師直いつしか高貞の妻、顏世御前が絕世の美貌人であることを聞き、手をかえ品をかえて挑んだが、なか〳〵應じない、遂に其湯上り姿を見しより、一層煩腦の慾

を高め、更に高貞を殺し、御前を奪んと考へた。延元三年脇屋義助(新田義貞の弟)北陸道に兵を起し、今にも進み來て、賊軍を打破らんとした、そこで尊氏は高貞に命じ、軍勢を率て義助を防しめた。前々から狙らい居つた師直こゝぞと思ひ、色々高貞の事を讒言した、高貞これを悟り、憎い爺め、國に歸ッて一番勝負をしてみやうとて、そッと家臣三十餘人をつれ、出雲をさして出發し、顔世御前には二十餘人の家臣をつけ、丹波の方から逃げさせた。所が高貞の弟貞泰がその事を師直に告げたから、師直大に驚き、尊氏に請ふて諸將を分ち追驅けさせた、顔世御前は遂に播州陰山で追着かれ、果敢なくも無慘の最後を遂げ、高貞は出雲にいたッてから自殺してしまッた。顔世御前に男子二人あッたが、長子(七歳)は母と共に殺され、次子(三歳)は逃げ匿れて命だけは助かッたといふこと。

▲辨内侍　右中辨藤原俊基の女である、父俊基は才學博く、中納言日野資朝と謀り、北條高時を亡さんとし、事露はれて鎌倉に送られ、元弘二年葛原ヶ岡の露と消えてしまッた。内侍は父を失ひてから母に棄られ、便りすくない身の上となッたから、叔父三位行氏の家に養はれ居ッた。でやゝ生長してから後醍醐天皇に召し出され、天皇崩後の後、後村上天皇に仕へてゐた。内侍は貌に似て才德のまさッてるのみでなく、容色も人にすぐれて居ッたが、彼淫虐なる高師直、いつの間に見込んだのか、内侍を戀ひ慕ひ、文など遣はして、樣樣に申入れたが、一向きく樣がないので、今度は利を以て、内侍の叔母即ち行氏の北の方をすかし、北の方をして内侍を誘ひ出さしめた。内侍叔母より送られた文をよみ、毫も疑ふことなく、御暇を賜はりて、吉野御所を立ち出でたるに、やがて迎ひに來た武士共、叔母君は住吉に待ち居るとて内侍をば無理に輿の中へ入れ、内侍の供人等を討ち斬ッて走り去ッた。内侍の驚きは一通りでない。所へ恰度楠正行が參朝の途中で、これに行き會ひ、何んだか女の泣く聲を聞き、大に怪しみて輿に附き纒へる彼の武士等を討拂ひ、輿の内を見れば内侍である、これは幸ひと直に參内し、内侍を

ば無事に御とゞけ申した、天皇叡感斜ならず、内侍を正行に賜はらうとした。けれども正行此時の境遇は、妻どころのことじや無い、早く足利勢を討平げて、大御心を安んぜ奉るとともに、父の仇を報ゐ、時によれば討死する覺悟であるから、

とても世にながらうべくもあらぬ身の
　かりの契りを如何で結ばん

と詠じ、内侍を返へし奉つた。正平四年高師直の大軍と四條畷に戰ひ、芳名を千歳に殘して、潔よく討死してしまつた、年僅に二十三。内侍これより斷然世を捨て、大和國龍門といふ所へ庵を結び、後醍醐天皇の御菩提を吊ひ、又正行の冥福を祈りて、操正しく此世を送つたといふこと。

▲伊賀局、篠塚伊賀守重廣の女で、やゝ生長してから新待賢門院に仕へた。父伊賀守は新田義貞四天王の一人で、力飽くまで強く、勇武の譽頗る高かッたから、局も其性を受け實に婦女子には稀なる大力であつたさうである。且つ容色優美で、和歌も相應につくれたらしい。嘗つて御所の近邊へ幽靈が出るとて、一時大騒があつた、其時局は健氣にも其幽靈を退治しくれんとて、一首の歌を詠んだ、所がそれからは毫ッとも幽靈の祟りはなかッたと傳えられてる。此世の中に幽靈なんぞといふ怪物はあるべき筈でないが、昔のことであるから、何かの迷信であッたであらう、何にはともあれ、局の氣前によつて、幽靈の噂は消え去ッてしまッたのである。或る年高師直が吉野御所に攻めて來た、後村上天皇は賀名生の奥へ移らせ玉ふた、女院も四五人の宮女を連れて御所から逃がれ出たが、折惡しく吉野川の橋の眞中が落ちてゝ、渡るにも渡られない、これは何うしやうと一同呆れ居るひまに、局は甲斐々々しく太き木を折りとり來て、これを横たへ、早速橋をつくり、自ら女院を背負ッて、難なく越え渡ッたといふことである。局は其後楠正行の弟、即ち楠氏の三世なる左衛門督正儀の妻となッた、誠に良縁といふべきである。正儀は父兄の遺志を繼ぎ、屢々賊軍と戰ッたが、元中年中天命に終ッたから、局も非命に死する

やうなことは、無ッたでせう。

上に述べ來ッた婦人の中、勾當内侍と左衛門佐局は、共に水中に投入ッて溺死し、顔世御前は陰山の血烟と消え。辨内侍は、幼時早く父母に別れ、花の蕾の咲き初めたばかりで、袈裟衣を着けて、はかなき身の上となり。唯何うにか一生涯を全ふしたものは、伊賀局のみである。南朝の佳人等が、如何に現世に薄運なりしか、そうして又如何に節操のかたかりしかは、讀者諸孃は既に諒知したであらう。終りに臨み、予は更に此時代に於ける一賢母と一烈母のことを語ッて置きたいのである。そも一賢母と一烈母とは誰であるか、といへば、讀者の中には大抵知ッてる方があらう、彼の楠正行の母、及び瓜生保の母である。

▲楠正行の母、即ち絶世の忠臣贈從一位楠正成の妻は權大納言萬里小路宣房の女、即ち中納言藤原藤房の妹だともいふ説がある。延元元年正成足利尊氏と戰ひ、湊河に自殺すると、尊氏は敵ながらも、其忠勇に感服して、首を正成の故郷なる河内國に遣はした、正成の遺子正行時に年十一、悲しみの餘り、父の授けたる短刀を拔き放ち、將にズブリと腹刺そうとした。其時母は驚いて馳け來たり、正行を抱きながら、小腕を抑へて短刀を奪ひ取り、「これ正行！よく聞かれよ。父がそなたを櫻井から還へしたのは、此刀で腹を切れとの爲めでない、又父のない後を吊へといふのでもない、唯唯大君の御爲めに、生き殘ッてる郎黨を寄せ集め、早く賊を討平げて、大君の御心を安んせ奉まつれとの遺言である。そなたは其事を承けて來て、此母にも聞かせたじやないか。そなたが言ふた其ことが、未だ耳に殘ッて居るに、血迷ふたのか、忘れたのか、此樣では到底も父の意志をつぎ、大君の御心を安んじ奉ることは出來まい……。正行よ、よく心を鎭め、父の子なれば、くれ〴〵も、些細な事に迷ふてくれるなよ」と懇ろに諭したので、正行は小兒ながらも大に愧ぢ、其後は遊び戲るゝにさへ、軍陣の眞似をし、賊の大將尊氏の首討ち取ッたなど、言ひ囃やしてたといふことである。果して正行が生長するに隨ひ、誠忠を君前に捧

げ、聊かも楠氏の家聲を落さなかッたのは、全く母の教訓其宜しきを得たからである、若しも正行の母が、凡庸とるに足らざる婦人であッたならば、あッたら鳳凰の卵を、未だ孵へらない内に、砕くやうなことになッたかも知れない。正行の母は實に正成の妻として、はづかしからぬ賢婦である。

▲瓜生判官の母、誰の女であるか分らない、越前の人瓜生某の妻となッて、保、義鑑、源琳、重、照の五人の男子を生んだ。建武二年保等兵を杣山に起して官軍に應じ延元二年新田義貞金崎城に據ッて賊軍に抗ッた、其時兄弟五人は義貞の甥脇屋義治を擁て、杣山に據り、里見時成と共に義貞を援けやうとして、城を出て、高師直の弟師泰の大軍と敦賀に戰ッたが、運わるく敗軍して、兄の保と義鑑は時成と共に討死し、弟の源琳、重、照等はやう〳〵杣山に逃げ還ッたので、城中の者共は、がッかりとしてしまッた、定めし大將の義治も失望したであらう。所が保の母は最愛の子息を失ッたにもかかはらず、獨り平氣であッて、義治の前に進み出で『今度妾の伜等が、意氣地のない爲め敗軍して、里見殿まで失くしてしまひ、貴將はさぞ御無念でムりませう、何うも面目もない次第でムいます、ただ二人の伜が死んだので、妾にはいくらか腹癒へでムいます。いふまでもなく妾の伜等は、もと〳〵



貴將の爲め兵を起したのですから、賊軍を討平げるには、五人は愚か、縱令百人や千人の子供を失くしても悲しいとは思ひません。幸ひ未だ三人生き殘ッて居りますから、再び賊軍に打當たることが出來ませう」と、起ッて義治の爲めに酒をついた、てもさても男まさりか、鬼まさりか、女の口から出られる語じやない。何んな懦弱な男子でも、此語を聞いて、奮ひ起たずに居られやうか。これから城中の兵士共、遽に勇み振ッたといふこと。一言以て全軍の士氣を振はす、噫保の母の如きは、またと得難たい烈婦である。

（終）

徐世賓皇后

天下萬民に其祝福を仰がれたるジョセフイン皇后も一朝奈大帝の功名心には窩黨のふすまのもろくも破れて、すみなれし巴里の宮殿をあとに、淋しき里居の御いたはしさよ、皇后は其頭より貴き冠をぬぎ、其胸より貴き寶玉を取り去らんは敢て忍び給ひしところ、あはれやさしもにあたゝかき夫妻の契、奈帝は無情にも破鏡の宣告をあたへしぞ、嗚呼男子一たび其志の燃ゆ、眼中愛なく情なく遂に氷の如きつめたさを、女の胸にはそゝがんとぞするなるか、戰勝つてよしや全世界の手に入らんとも、奈帝はなどてかこの后を捨てし、それ天にあつては比翼の鳥、地にありては連理の枝といひ交すことばの、こはこれ平時事無きの折、翠帳紅閨にありて、徒らにくりかへすにとゞまりしか、あはれきのふ迄たのしき春をゆめみしチユーレリーの宮殿、遂に終なきにしもあらず、巫山のむかしにひとしき秋の夜の月こゝにかくる時ありて、鳳離鸞別、遂に相逢の折なかりしぞうらみなりける。

嗚呼徐世賓の偉大なるは、英玉座に后としてあがめられし時ならず、そが寶冠の光まばゆく奈帝が愛に册づきたる時ならず、戰やぶれて蓋世の英雄、遂にセントヘレナの離小島に流謫の身となりし折ぞ、徐世賓が至誠はあらはれぬ、其貞操はみとめられぬ、まこと徐世賓は奈帝の妻なりしよ、墺地利公主は單に功名心に對するの妻にすぎず、そもや英雄力山を抜き氣世を蓋ふといへども、運命のいかんによりては果敢なき最後に身を終るかなしき末路をくりかへす古今皆おなじ、もし徐世賓をしてエルバの島に慕くを得せしめばいかばかり慰藉を得鬱憤の涙幾分か乾く事を得しならんが、天は一たび無情なりし奈帝に、このうつくしき花を授け給はず、病魔はこの佳人をうばひ去りぬ、さりとてはつれな、虞や虞や若をいかんせんとの聲、この佳人が耳にきく能はざりしを、さりながらエルバの島に於ける拿破崙は憐憫のナポレオンなりき、やさしき徐世賓の夫なりき、嗚呼功名心、こはまたおそろしの蠶や、連理の枝をさきけんカ、あないまはし、あなつらし。

坤殿の瑞夢（皇后陛下坂本龍馬を夢させ給ふ事）

我が御國母におはします皇后陛下の國事に御軫念あらせ給ふよしはつね〴〵承はる處なるが、今度征露のみいくさを起させ給ふに就ても痛く大御心を悩ませ給ひけん、申すも畏き事ながら、去二月の初旅順海戰のありし前二三日の事とかや、陛下には松青く砂白き相州葉山の御用邸に暫時御靜養あらせ給ひける、一夜波風すさぶ嵐の音を聞召されつゝ玉の御床に就かせ給ふ折柄、御枕近ふ顯はれしは筋骨逞ましき一個の古武士にぞある、誰ぞと仰せ言承りあえず恭しく平伏なしつ、草莽の臣坂本龍馬恐れ多くも御前に啓し奉る、小臣は維新の前國事に命を献げて今は世に亡き身に候へど其の頃海軍に心盡せし者に候へば、今回征露の御軍起させ給はん曉には、小臣の魂皇國の大軍艦に宿りて我が丈夫を擁護し奉らん覺悟にて候へは御心安くおはしませよといと健氣にぞ言上しけり。陛下聞召玉ひ扨ては其方は彼の坂本一馬にやと豫て御記臆あらせ給ふまゝの名前もて御尋ねありしに、否一馬には候はず龍馬にて候と申上ぐるを聞召され、さらばと宣らせ給ふうち白波あやしく打さわぎて古武士は幻のごとく消へ亡せたり。されば陛下には不思議の事に思召され翌朝近侍を召し玉ひて昨夜の御夢物語あり、坂本といへる名は兼て聞き覺へたり、如何なる人物にやとの御尋問に、さん候彼は土州の藩士にて維新前凶手に倒れ候ひしも夙に海軍に心掛け海援隊と申すを組織仕りて候と御答申上げ、やがて坂本の寫眞を東京より取寄せて密と御覽に供しつ此者を御見覺えあらせ給ふにやと恐る〳〵伺ひ奉りしに、玉顏うるはしく是ぞ正しく坂本龍馬夢に見たると寸分違ひなしとの仰言に愈々畏みて一同奇異の思ひを爲しこれ偏に陛下が夢寐の間にだも御國を忘れさせ玉はぬ大御心よりかゝる奇しき御夢をも御覽ずるなめれとて御側の人々は世にも有難き御心の程を傳へ傳へて畏み合へりける由洩れ承はりぬ。元弘の昔後醍醐天皇が笠置の山にて夢したる南枝の夢の古事も思合されて、いとも尊き事にこそ。

ヴヰクトリア女王（三）

（藤生貞子）

The Princess was a happy merry[1] child. There was plenty of room[2] for her to run about in that great old palace of Kensington, and many a fine game of play she had, as she danced up and down[3] the long corridors, and run backwards and forwards in the stately rooms.

Nor was all the fun indoors. She had many a ride in Kenshington Gardens on her donkey, which was decked out[4] in blue ribbons. Her mother often walked beside her, and talked to her as she rode along, and if any one bowed to the little Princess, she would[5] nod to them, and say "Good morning."

The Princess Victoria was a busy little maiden, getting up early in the morning to be ready for breakfast at eight o'clock,—sitting at a small round table beside her mother, to eat her bread and milk and fruit—going out with her sister for a walk in the part,—coming in for her lessons with her mother, then hurrying out when lessons were over to look after the flowers in her own little garden under the palace windows,—and all day long and every day, having something that must be done, or seen after

お姫樣は愉快なお兒樣でした。ケンシントンの大きな古い宮の中には、走りまはるのに澤山餘地があつたので、多くの面白い遊びを爲されました。長い廊下をあちこちと踊り、立派な室のなかで走て行つたり、またかへつたりなどして

そしてお遊びは皆室内のみではなかつたのです。青のリボンで飾られた驢馬に乘て、ケンシントンのお庭を度々おあるきになつた。母君も折々其そばをお徒歩なすつて、お姫樣が騎て行かれる時、話をして居られ、また誰かゞ小さいお姫樣にお辭儀をする者があると、それに頷ついて'お早う'とおいひなさるのが常でした。

お姫樣のヴヰクトリアはお忙しいお孃樣でした。先つ八時の朝飯に間にあふやうに朝はやく起き、母君のそばで小さい圓卓に坐つて、パンと乳と果物とを召上り、それからお姉樣と公園に散歩のためお出掛けになり、次で母君とお稽古のため這入てこられます。それからお稽古が濟むと、御殿の窓の下の御自分の小さい花園の花を世話する爲めに、急いで出て行かれる。かく終日、毎日、何事か、爲し終へ、或は世話しなければならぬものを持て居られたのです。

(註) (1) merry は活潑にて元氣よきをいふ。 (2) room. かゝる場合には室の意にならず、餘分の場所の意。 (3) up and down. 上下にあらず、あちこちの意。 (4) deck out かざり付ける。 (5) would= used to. いつも…………して居つた。 (6) look after 世話する、心をかける。(以下次號)

一 口 噺

"Dr. Sharp is quite wealthy, isn't he? Did he make all his money from his practice?"

"Not all of it. He's the principal owner of a very large oil well, and——."

"And he makes money from the sick and the well, too."

"シャープといふお醫者はよほど金持ですね？ 皆自分のはたらきでその金を儲けたのですか"

"みな自分で儲けたのではないのよ。あの人は非常に大きな石油坑の所有主です、そして…………"

"そして病人からも、また達者な人からもお金儲けをするの？"

(well を井戸と健康との兩意にかけたるなり)

W. D. Howells seldom fails, when any one has animadverted on his corpulence, to come out with a neat retort.

One day a very lean and long American said to him jocosely:

"If I were as fat as you I'd go and hang myself"

"Well," said Mr. Howells, "if I ever take your advice I'll use you for a rope."

ハウエルズ(現存の有名なる米國の小說家)は、他人が其肥滿して居るのを嘲るときに、奇警な返答をしない事は稀である。

或日非常に瘠せた、背の高い亞米利加人が戲れに彼に向ていふた:

"私が若しあなたのやうに肥つて居つたならば、自分で首を縊つて死んでしまいます"

ハウエルズは答へていふには："よろしい若しあなたのいふ事を聽く(自分が首を縊る)ならば、繩のかはりにあなたを用ひませう"

(其人の細長きを嘲り返して繩に用ひんと洒落たるなり)

戰　爭　談

(熟語用法練習)

Below the mark

魯西亞の文明は未だ劣等なり。

Civilization of Russia is yet *below the mark.*

Below the mark＝標準以下、下等。

To be of opinion

凡ての西洋諸國は日本が勝つべしと思へり。

All the Western countries *were of opinion* that Japan would be victorious.

To be of opinion＝と考ふ、………と判斷す。

To be on one's guard

旅順と浦鹽斯德とは日本海軍に對して警戒せり。

Port Arthur and Vladivostock are *on their guard against* the Japanese navy.

To be on one's guard＝襲來に備ふ、警備を嚴にす。

To be beside one's self

海軍大勝利の報道確められて、人々喜びのあまり我を忘れ居れり。

The report of the great naval victory has been confirmed, and people are *beside themselves* with glee.

To be beside one's self＝本心を失ひて狂ふ、何もかも忘れて夢中になる。

Be that as it may

明日は天氣の都合が悪るいだらう、併しそれはともあれ、日本艦隊は旅順へ向て出發するだろう。

The weather will be unfavourable to-morrow; but *be that as it may,* the Japanese fleet will start for Port Arthur.

Be that as it may＝それは如何なりとも、そはともあれかくもあれ。

Between ourselves

これは秘密ですが、あの男は露探らしい。

Between ourselves, he seems to be a Russian spy.

Between ourselves＝これは他言を憚るのですが實は (Between you and me ともいふ)。

談叢

倫理衛生 腦髓の話

帝國大學講師 文學士 村上辰午郎
糸左近

倫理と衛生と密接な關係を有つてゐるとは度々述べましたが、腦髓は尚更であります。何となれば、倫理は精神の修養が本であるのに、其の精神が腦に宿つてゐるからです。腦の發達が宜ければ精神の發達も宜しく、精神の發達の善い人は、腦の發達も善いものです。筋肉骨骼其の他各部が上等に發育してゐても、腦だけこれに伴は無いと、惡人か愚者かです。賢人や智者の腦は、之を解剖して見ても、完全に發達してゐるけれど、小人や愚者の腦は甚だ發育してゐませぬ。そこで眞に道德を守る人は、勿論精神の發達が善い人で無くてはならぬ。即ち智情意何れも竝行してゐねばならぬわけで。換言すれば智惠多く、決斷力強く、それで涙もある人で無くてはなりません。故に腦の衛生を守り、それと同時に、精神を善良に導かねばならぬ。然るに我が國の婦人達は、一室に閉ぢ籠り、小説本に涙を溢してゐる的の傾きあるは、慨はしいことである。されば今其の一室に閉ぢ籠り勝と小説本とに就いて眞先に論じて見ませう。

▲腦髓と閑居

東洋の古い言葉にも、小人閑居シテ爲ス不善ヲとある通り、一室に閉ぢ籠つて居れば、快活なる思想は浮ばぬ。快活なる思想が浮ばねば、因循姑息に流れる。因循姑息に流るれば、善良なる心は次第に退いて行き。善良なる心退けば、遂に不善の行を爲すは理の當然であります。抑々人の氣力は太陽と空氣とに依つて、大いに興奮せらるゝものである、精神鬱々たる時、渺茫たる原野に出でゝ、新鮮なる空氣を吸へば、大いに爽快を感

するは誰でも能く知つてゐることであるのみならず、人の精神は其の境界に依て變る。例へば高山大川に遊べば精神も亦自ら豪壯となり、箱庭や犬猫を愛して居れば、精神も亦それに應ずるやうなものである。これから考へても、一室閑居的は、其の心を小さくして、而も鬱々たらしむるは、言ふまでも無いことである。とは言ふもの丶、内政を掌らる丶婦人方に、原野にのみ出で丶、家を外にせよと勸むるのでは無い、唯勉學或は仕事の間々には、出で丶天然の美を眺め、心を爽快に洗ひ玉へと申すのである。或は時に羊腸の坂を登るも可し、或は時に白砂青松の間を散歩するも可し、其の他春の花秋の紅葉、美は天地に充滿してゐるのである。すべて美は人事にも有るけれど、天然のは又特別である。人は此の美を利用して美育の發達を謀り、高尚なる道徳心を養ひ鄙吝の情を洗ひ濯ぐが肝要であります。

▲御伽話と腦の發達

小説は絶体的に惡いと言ふのでは無いが、兎角感情にのみ發達して、意志を薄弱にする傾きがある。殊に我國從來の小説は、男女の戀愛を主としてあるから、若しこれに養成せられたならば、淫奔惰弱とまで流れざるも、良人の出陣に際して、綢繆連綿傍若無人に泣き通すといふやうな人物を作り易いのである。イヤ人は涙も無ければならぬけれど、又同時に勇ましい氣質も無くては、確固たる道徳の人とは言へませぬ。抑々我國一般の女子を歐米の婦人に比ぶれば、其の智力其の意志の點に於て、遙かに劣つてゐる。それから論ずれば、當分の中は、源氏物語や八犬傳などを禁止して、今少しサイエンスの面白さを味はひさせたいものである。然るに普通女學校の教科書に、竹取物語や源氏物語を採用してゐるに至ては、日本女子教育の前途思ひ遣らる丶わけで。或る高等官の妻君が、日露の戰爭は何に原因するか少しも知らず、某教育家の令嬢は比較的巧みに小説を作るけれど、酸素の効用が更に分らぬ、或は又某軍人の母が渡場の舟に醉つたなど、其の無智識、其の無氣力は、即ち閉籠勝的或は小説的に養成せ

られた結果であります。

小說に次いで注意したきは、小兒のお伽話である。お伽話に就いては、或る敎育家中色々の議論が有つて、或る人は『小兒野蠻人は外界の物をすべて己れと同じ境遇なりと考へてゐる者であるのに、其の者に向ひ、有り得べからざる事柄例へば猿蟹合戰とか、舌切雀とかいふやうな話を聞かすれば、益々其の幼稚な思想を闇からしめ知識の進歩を妨ぐるものである。』と論じ、或は人は『さうでは無い、有り得べからざる事柄は興味がある、興味の有る事を聞かす中に、種々の名稱や事物を知り、其の有り得べからざる理は、自然に悟り、少しも智識の進歩を妨げぬものである』と駁するけれど、余等は其の折



初夏の草花（一）

衷說を採用するのである。其の極幼少な時代、即ち五六歲乃至六七歲の間は、有り得べからざる話も可いが、漸次有り得べき作話や、眞に有つた事實に移り、或は理化博物の興味ある話、或は傳記歷史等に進んで行くといふ順序が最も善いと信ずるのでありますが。併し此の順序が善いとて、親の慾心から餘り多く注入するのは宜しく無い、啻にお伽噺にかぎらず、物を敎ふるには、程度が有つて、其の程度を超ゆれば、腦の發達を害し、却て智識の進歩を妨げ、心身共に薄弱な人になるものである。余等の實見した小兒は、年僅かに七歲で、日本外史の素讀が出來、リーダアの二も習ひ終つたと、數

多の人に感心せられてゐたが、其の後三年を經てから、再び其の小兒に逢つて見れば、成程文字は頗る知つてゐるが、理解力甚だ弱いのみならず、顔色蒼白く、骨骼筋肉の發達非常に惡しく、此儘にしておけば、迚も長生は出來まいと思はれました。これ等は其の親が敎育衛生の思想に暗い所から、可惜撫子の蕾を萎ますのであります。

▲腦髓過勞の害

無暗に注入することは、小兒に害あるのみで無く、大人にも宜しく無い。言ふまでも無く腦は適度に使ひ、又適度に休ませねばなりませぬ。腦の衛生は筋肉などの衛生と同じことで。筋肉を少しも運動させずに、坐つてばかり居たならば發育せず、又これと反對に馬車馬の如く過度な運動ばかりして居れば、筋肉遂に疲勞して了ふ。腦も亦これと同じく、毎日々々何を考ふることも無く、更に使用せずに居れば發育せず、從つて愚者たるを免れず、これと反對に、腦を使用すること其の度に過ぎたならば、腦病を惹き起し、續いて精神作用をも害ふは理の當然である。然るに世には之を辨へずして、試驗前などには非常なる勉學をなし、試驗後は之を休むる爲にとて、書物は手にも取らず、遊惰日を亙り、其の揚句に大いに腦の養生をしたから、又大いに勉めようなどゝ、思つてゐる者がある。恰も毎日働いて居た車夫が、又幾日も怠け、次に又急劇に仕事をしようとする樣なものである。過度に使つて傷め、過度に休めて衰弱さすとは、愚の至りと謂はねばならぬ。故に秩序を正して、規則的に勉強するが肝要ある。秩序整然たる行爲は倫理敎育の大道で、秩序の有無を以て、一國の文野をも卜はるゝものである。彼の支那の書物に、股に錐を刺し、或は繩を下げて頸を結び、夜も眠らずに書を讀んだ人を、大さう賞めてあるが、余等の見識を以て考ふれば、野蠻の行爲で、衛生上は言ふに及ばず、倫理の法則にも戻る愚なる擧動と言はねばなりませぬ。

▲睡眠の理

睡眠は腦を休ませ、腦を養ふには大切なることで、徹

夜して勉強するなどは、生理上に背くのみならず、精神の修養上に於ても大害あることである。萬民の塗炭を救ひたる彼の大德行者華盛頓は、甚だ衛生を守つた人なれど、彼の豪傑那翁は、其の睡眠時間甚だ少なかつた不衛生家である。宜なりセントヘレナの一孤島に末路を悲んだとは、嗚呼これから考へても倫理衛生は大いに實行せねばならぬといふことが分るであらう。睡眠の時間は年齢に依ても大いに相違はあるけれど、大人などは平均七八時間が適當であらう。然るに毎日十時間以上も睡眠を貪る如きに至ては、これ又其の度を知らぬ不衛生である、斯様な人は、腦の發育鈍く、精神も亦不活潑で



初夏の草花(二)

ある。寢起の刻限は何時が善いかと云ふに、太陽が地平線上に出るを標準とすれば自然の道に適ふのである、斯の時起き出でゝ戸を開き新鮮なる空氣を入れ、夫々の勉强に取りかゝれば、夜半に目を擦りながら行ふのとは、衛生上に於いて天地の差があるのである、すべて腦を使用するには寢て起きた時が最も善い、さうして困難なる學科を先に〳〵と時間割をせねばならぬ。

勉學する人は、勉學時間中に、色色の事を考へてはならぬ、色々の事を考ふれば、學問の方は連續し無いから、記憶に止らぬのみならず、衛生上にも大いに害がある。例へば英語の本を讀みながら、朋

友の事を思ひ出し、これでは不可ぬと又本を讀めば、今度は旨い物食べたいと胸に浮ぶ、旨い物は何が善からう、西洋料理……、西洋に行つて見たい……、何うも英語は覺えられぬ……、何白勉强は肝要、又本を睨めば頭痛がする、欠伸は出る、迚も讀むに堪へぬ、それは其の筈である、腦は英語の判斷をしようとすると、朋友といふ新問題が來る已むを得ずそれを解決せねばならぬ、所が又旨い物の撰擇、漸く西洋料理と定めんとすれば、其の一刹那又洋行の處置又英語の研究……、斯樣に新しい刺戟が續々腦を責むるから、腦は煩雜に堪へず、遂に疲れて了ふのであります。之を若し英語なら英語で始終通せば、觀念は其の方に集り、勞せずして能く了解せらるゝものである。即ち衞生上にも智識取得上にも益がある、即ち一擧兩得と謂はねばならぬ。すべて雜念を去るといふことは、腦の衞生に於ても、倫理の大道に於ても、敎育の方法としても、樞要なることである。博學高德の人は、己れの講ずる道に於ては熱心なるも、他は虛心平氣で齷齪せぬものである。故に精神は何時も平和で、所謂心配の爲に腦が傷むるやうなことは無い、これに反して、小人はつまらぬ事にクヨ〳〵として、種々雜多な妄念があるから、就眠中すら夢を見るのである。聖人無レ夢の諺も一理あることゝ謂はねばならぬ。

▲腦髓休養の必要

ゼームスといふ學者の言はれたには、『つまらぬ事に氣をかけて、クヨ〳〵するは一種の精神病である。』と、實にその通りである。婦人中には、殊に此の癖のあり易いもので、例へば衣服の着樣が氣にかゝり出すと、色々樣々に直したくなる。それで傍の人から見れば、何でも無いのであるけれど當人丈はクヨ〳〵する樣なものである。今一例を擧れば淸潔といふことは、甚だ美德なれど、一日に二三度も障子の骨を一本々々に氣にして拭くに至ては、淸潔狂とでも謂はねばならぬ。終りに臨んで、今一言したきは、すべて腦を疲らさぬやうにするには、熟練といふことが肝要であるといふ事である。熟練の結果少しも腦力を借ら無いで爲すも

のである。例へば道理を考へながら、其の道理を文章に認めてゐる時、其の字畫などは更に意を用ゐないで、すら〳〵と書くやうになるものである。これ即ち文字に熟練したる結果である。これを生理學上脊骸の反射作用といふ。されどこの反射作用も勿論善事に向けねばならぬ、聖人の一擧一動は意志を用ゐざるも、人の手本となるけれど、惡に染つた極端は反射的に惡事をなすやうになる。嗚呼人は善事の熟練を習はねばならぬことです。

右の外術精神に就いて、色々述べたいが心理學や哲學の範圍に涉る傾きがあるから、これで筆を止めませう。

日々を樂しき中に經る人は
いかに心の長閑なるならん　（完）



初夏の草花（三）

花卉栽培

女流園藝

農學士　鈴木眞吉

殘んの暑いつしか去り、早や！秋も半の月の夜を、喞く虫の叢を辿りて花園に。雁來紅の紅濃き、尾花のそよぎ、桔梗の瀟洒、萩の亂れの露の小玉の煌ける、紫苑女郎花の優に咲くあたりより翠菊の白く赤き、藤紫のゆかしき。糸瓜の露のしげきより、菊の嫩葉の日に長増すを見やり乍らに舜花の夜毎の露に枯るゝ蔓の儚さを想ひつゝ、飛石傳ひ、さては、花の露に裳の濕るゝを紮げつゝ逍遙ひ給はば、如何に詩趣が増し、如何に園藝は趣味あるもので興味に富んでゐるものであると云ふ事が御分りになるでせう。

眞個に園藝の利得は大きなもので、趣味高く、興味深

き、女子に適せる、家庭的の事業であると共に、一の高尙な遊戯で精神を感化するに至大の力があります。

◆園藝の利益

一、女に一等相應しい事業

園藝は萬事緻密です、決して粗放ではそだちません。ですから女子一般の性狀に適してゐる、眞個に園藝は女性的の事業で、親切と叮嚀と、緻密とによりて成り立ち、熟練によりて成効するものでムいます。ですから、婦人方は、何れとも園藝成立の三要素である。叮嚀な擧動と、親切な心掛と、緻密な腦に富んでゐるから幾何素人で、園藝の心掛のない御方でも直樣、行る事が出來るのです。増して、指導者があれば倘更の事。其の内に間もなく事業に熟練致します。親切、叮嚀、緻密の三つは園藝をする上の　要素であると共に事業に熟達するにも非常の勢力があるものです、

二、利益ある事業

花を見て樂みますのみならず、園藝は利益！　莫大なる利益を得られます。ですから園藝は、

三、家政の心掛を増さしめる。

家政の豐は家庭の團欒を助ける。女子として家政の頭腦に乏しいものは、百事万物でも勞費する傾があり、實に不經濟です。で如斯人は、庭家の何のと、かゝる優美の心掛がムいません。やれ物見、やれ遊山、女中を相手に演劇の話、さては指環の數を誇り、衣裝の美を衒ひ、頭のものは、こんなものだ、あんなものだと流行を追ひ夜會に行つて、氣障たら〳〵でゐるよりも、お三殿を相手に緣日の日取を數へつゝ、笑ひどよめき、お菓子を賭けて双六でもして遊ぶ方がよいと云ふ樣なお方で、遂に家政を破り、家庭を紊し、女子としての一大汚名の下に一生を儚く暮さねばならない事に成ります。

斯樣に家政の心掛は肝心なものでムいますが却說園藝は如何な理由で家政の心掛を増さしめ、萬事經濟的に立舞振なさる樣になりますかと申さば、

第一緻密な頭を養ひますから、緻密な心掛を養うでせう。心掛が緻密となれば、萬事如何な事でも緻密で貴

び、心掛が自然經濟的になります。のみならず、自分自身に、假令僅小な利益ある事業でも行つて御覽なさい。金錢の貴いことが分りまして、奢侈品を求めるのが、非常に惜い氣がして、天然自然に、確乎たる貯蓄心を養成します。

初夏の草花(四)



かく、貯蓄心が出來た時は、旣に家政的念慮が生じた際。即ち勞費心が無くなつた季で厶います。のみならず、園藝の一分業である果樹、蔬菜をお作りに成れば、其の勞は間もなく食用品となつて報うてくるのですから、之を食し之を賣り、娘子乍らも一家の主婦たる事業を見習ふ事が出來、倘物品も並大抵で出來るもので無いと云ふ事が分る樣に成つて、自然勞費を防ぎます。

四、家庭に應用して至極よい事業

と云ふ項目の下で更らに詳敷御話致しませう。前に御話し致しました通り園藝は家政を助けますから、これを家庭に應用すれば、良い効果を得られる計りではなく、子女を敎育するにも至極良い事で。……三ッ兒の心百迄もと申す比喩の通り、子供の中によい事を見習せば、一生涯の性質となります。

で今園藝をはおやりになるとして、主婦は主人を助けておやりになれば、自然子供も母親さては父親のする通り見習て、紅葉の樣な手で、土いじくりをしたり、花に就ても嗜好を持つ樣になります。何分子供は兩親のする事をよい事と思ふて見習ますから。……斯くすれば運動を扶ける計りでなく、色々子供の爲にも利得になるではありませんか。

夕食後の御散步！……この散步が、お庭の花園、蔬菜園の逍遙をなさるのでしたら、どうでせう。親子相携へて、面白可笑く、お散步遊ばす樂しさ！　即ち園藝は家庭團欒の上に偉大なる潛勢力を有して居ると斷言出來ます。

とりも直さず、園藝は自然ですから、この自然の樂が、家庭團欒の、自然の觀樂を融和するので、これ等が園藝の唯一の特色でムいます。猶この外に

五、興味多い事業

六、身体の健康のたすけ

一体日本の婦女子達は内氣の性質でムります故、平素身体の工合が惡く、運動不足の爲めに、それは〳〵色色な病氣にお罹りになる方が大層多いやうでムいますが、園藝をお行りになれば、水を撒たり土を堀つたりする外に、つい樂に驅られて、日陰を傳ひつゝ花園に、夕陽を背にして花園菜圃に、この雨では、いたみはせぬか、この風では、この照ではどうであらうと不知不識、逍遙ふ事が日に二三度ならず。又た花の咲く間近には、今朝はどうか、もし今朝頃は咲いてゐるだらうと、自然に朝起の習慣がつき、其の上早朝の新鮮涼爽の空氣を呼吸致しますから、いたく身体の健康を助けます。

のみならず。

七、健全なる精神を涵養す

るに至つては、園藝の感化力の大なるに驚嘆するのみ。「健全なる身体には健全なる精神あり」は少焉曰はず花の艶なる、葉のなよ〳〵しく、又は光彩を帶べるものを見れば、健全なる精神を養ひますのは勿論の事、其の上、

八、國民の趣味を高める

上にも大なる勢力を持つてゐます。全体日本人の趣味は下劣でムります。彼の花を賞して朝夕の歡樂とせる歐米人とはとても比べものになりませんのみならず、この下劣なる趣味は、種々罪惡の本源になり、國民を墮落せしめ、國威を傷けるやうな事になります。

それで園藝が流行すればする丈け國民に園藝熱をつぎ

こみ、國民が園藝熱にうかされてゐるのはつまり、趣味がそれ丈け高くなつたのです。

園藝を好てふ高雅なる趣味は、大にしては國家搆成上必要なものではあり、小にしては各自の品性を高めます。

さてこれから園藝の實地、即ち栽培の方法を申上ませう。



初夏の草花（五）

▲土性

園藝をお初めになるには前庭後園の土質を鑑みて、夫れ〲の花をお栽りにならないと、好結果を得る事が出來ませぬ。

土性に就て詳しく論じますと、他の注意をお話致します事も出來ませぬから、何れ詳しき事は、他日更に稿を改めて、或は菊とか朝顔とか、海棠とか、櫻梅、さては瓜類、蔬菜類等、四季をり〲の眺に從ひお話致す序に、それ等の植物が一等好く土性をお話するとして、こゝには唯その概略を。

如何な植物でも砂質壤土か、壤土なれは生育繁茂せない事はムいませぬ、されば園藝をお初になるにも砂質壤土か壤土地をお選みなさいますれば、滅多に失敗はない、即ち砂質壤土幷に壤土とは左表の樣な土なんです。

	含有せる粘土	含有せる砂土
砂質壤土	二五―四〇	六〇―七五
壤土	四〇―六〇	四〇―六〇

餘り乾燥な土地と卑濕の土地は非常に忌み嫌ひます。

それと同時に土の深いのを好みます。全體土には表土と心土との別がムいまして、表土とは即ち耕土の事、

言ひ換ふれば植物根の伸長する所、肥養分を含有し、植物體を維持する個所なので土の價値はこの表土のみにあるのです、心土とは底土の意味で表土を安全に維持してゐるに止まり、直接肥培上に必要がある土ではムいません。

ですから園藝を御初になりますには表土の深い土地を選み、もし表土が淺ければ堆肥を施して年々底土を少しづゝ耕して表土を深くする樣に心掛け、萬一も、土性が園藝をお初になるのに不適當なれば土性の改良をお行りなさいまし。

土性の改良と申せば大袈裟な語ですが、其實さう〳〵手間のとれる事ではムいません。

即ち陰濕の地なれば、四方の樹木の枝打をなし、園地の周圍に小溝を堀つて排水をなし、又粘土地なれば客土法とて他方より砂を持運んで適當の土壤をつくり、砂土なれば粘土を容れて好い位の土壤とするのでムいます。

▲形狀と區劃

蔬菜園幷に草花園の形狀と區劃、廣狹は作業上に大なる關係を及ぼすものでムいますが、家庭の娯樂幷に、一家の副業としてお初に成るには、左程に廣狹の如何を論ずるの必要もムいませんから、唯の形狀と區劃と、至便の位置丈けをお話致しませう。

家庭の娯樂としてお初になり、一家の副業としてお初めになるにも、又は主業とて、お行りに成るにも、園地は出來る丈け綺麗にし、區劃を整備し、出來る丈小區域の地より大利益を得るに注意致しますのは肝心で、蔬菜園ならば、宅地の後庭を選び、巾五間長さ隨意の畑地をとさへ、巾三尺の小通路をとさへるのです。

長さはお心次第で宜敷ムいますが六間づゝ區ぎりますと操作上至つて便利でムいます。

して草花園は蔬菜園よりも一層叮嚀に、一層綺麗に致さなくては、艶々しく、競ひ咲た花乍ら、いとも見すぼらしき思が致します。そして其位置は前園後庭、何れなりともお選になつて巾六尺、長さ適宜の畑地とな

し、蔬菜地よりは、手狹に區劃なさひまし。何れにしても日當のよい、風通りのよい土地！

▲外界との關係

平たく申せば園地の位置が田舍がよいか、都會がよいかと申すこと。

一寸見には何事にまれ、農業的の作業は田舍に限るとお思召になり、青田に風の薫る邊、露の小玉の煌く野路等を聯想なさいますが、園藝は田舍よりは都會附近よりは都會の方が、販賣上非常に宜しいのです。けれど都會附近も都會には、廣濶なる土地が厶いませんから、都會附近が第一等です。

如斯事は家庭的作業としてお行に成るお方には不必要ですが一寸御注意迄。

初夏の草花（六）



▲肥料

園藝植物は普通他に栽培せる作物よりも一層綿密に肥培せねばなりませぬ。そして園藝物中では蔬菜は果樹よりも手間が澤山にとれ、花卉は蔬菜よりも多く手數がかゝります。ですから、夫れ〴〵に肥料を選んでお施りなさいまし。肥料中には窒素分、燐酸分、加里分の三主要成分がございまして、この成分が効驗を呈するのですから、三主要成分の配合、即ち窒素分を含める肥料と、燐酸分を含める肥料をよい加減に交せ合はしてお行りなさい。今左に參考迄に通常使つてゐる肥料の名稱を擧げませう。

一、人糞尿　二、厩肥

三、堆肥　四、家畜の糞

五、漉滓
六、緑肥（紫雲英等）
七、粕類
八、煤
九、下水
十、魚肥
十一、蠶蛹
十二、過燐酸石灰
十三、骨粉
十四、石灰
十五、藥品肥料
十六、灰
十七、血粉

▲繁殖法

園藝植物の繁殖は、種子に因れば却りて、品種が變化して、佳良の特性を遺傳する事が出來ませぬから、種子繁殖以外に分殖法、插木法、接木法、壓條法等を行ひますのが普通です。今左に、其の概略丈をお話致しませう。


第一圖鉛插

（一）……實播　この法は前にお話した通り、品質が退化劣變するから、臺木用としてお行に成る外、繁殖上お行に成らない方が安全。


第二圖撞木插

（二）……插木法　つまり根のない樹枝、新梢等を、肥沃の土地であつて濕氣の多い處へ插して、そこから根を出さして、一個獨立の木となる方法でムります。其の法、鉛插とて第一圖の樣に、眞砂を少し計土にまぜて、插穗の切口を包んで土中に插す法（一名芋插と稱へ、又玉插とも申します）もあり、又、撞木插とて第二圖の樣なものもムいますし、第三圖の樣な挾插と申すものもムいます、其の他、肉插、葉插、芽插等色々の方法がムいます。

（三）……接木法　或一の砧木に他の異つた品種の梢とか根とかを接合して、無性繁殖を行ひまして、砧木

又は接木、接根から地中より吸上げた液を、接梢又は砧木に連送する法です、この法は砧木と接梢或は接根とは其の切斷面を平滑にして發生層を能く密着させて接着部には空氣水等の侵入を避ける樣になさいまし。接木には根接、腹接、挿接、水接、寄接、芽接の別がムいまして、何れにしても砧木は實生の二年乃至五年目、或は周圍一寸五分以上三尺位のものを普通とし、接部には接蠟を塗り、更に其上を打藁で縛り、接穗は前年に發生した生長の盛のものを選むのが肝心でムいます。

(四)……壓條法　第四圖の樣に枝梢を彎曲して地中に埋めて其部分から根を出して一本立の苗木とするもので、春期に行ひ、夏には、親木と枝梢との間の皮を剝いで、親木から樹液の送達するのを妨げて、苗木の伸長を促すのでムいます。



「第三圖　挾挿」

(五)……分殖法　主として果樹に行ふものでムいまして、根分と莖分との二種に分つてゐます。根分は、棗等に行ふ方法で、莖分は木苺等に行ふ方法でムいます。

其の他菊、芍藥等の宿根植物には株分を行ひ、瓜哇薯等は、根塊により繁殖せしめ百合とか、水仙とかは芽根に因り繁殖させます。



第四圖壓條法

何分にも繁殖は園藝上肝心であつて、利益の多い操作ですから、是非ともお知りを願いたく存じます。

動物生理　魚類の分娩

K、M、生

魚の分娩といふのは、普通、卵を產むとですが、分娩の期節は、數多の魚であるから、一定しません、春、夏の二候に產卵するものを夏期產卵魚とし、秋、冬に產卵するを冬期產卵魚と申します、けれども、實際は同じ魚でも、場所と氣候とにより年齡によつて、遲速があるから、終年、魚の分娩しない日はないと申してもよい。

扨又魚の生殖器は、雌、雄餘り異つては居りません、分娩の期節に向へば、輸精管、または、輸卵管を通じて、之を生殖器孔から輸送する。此生殖器孔は輸尿管と並むで肛門の後に開口いて居ります。

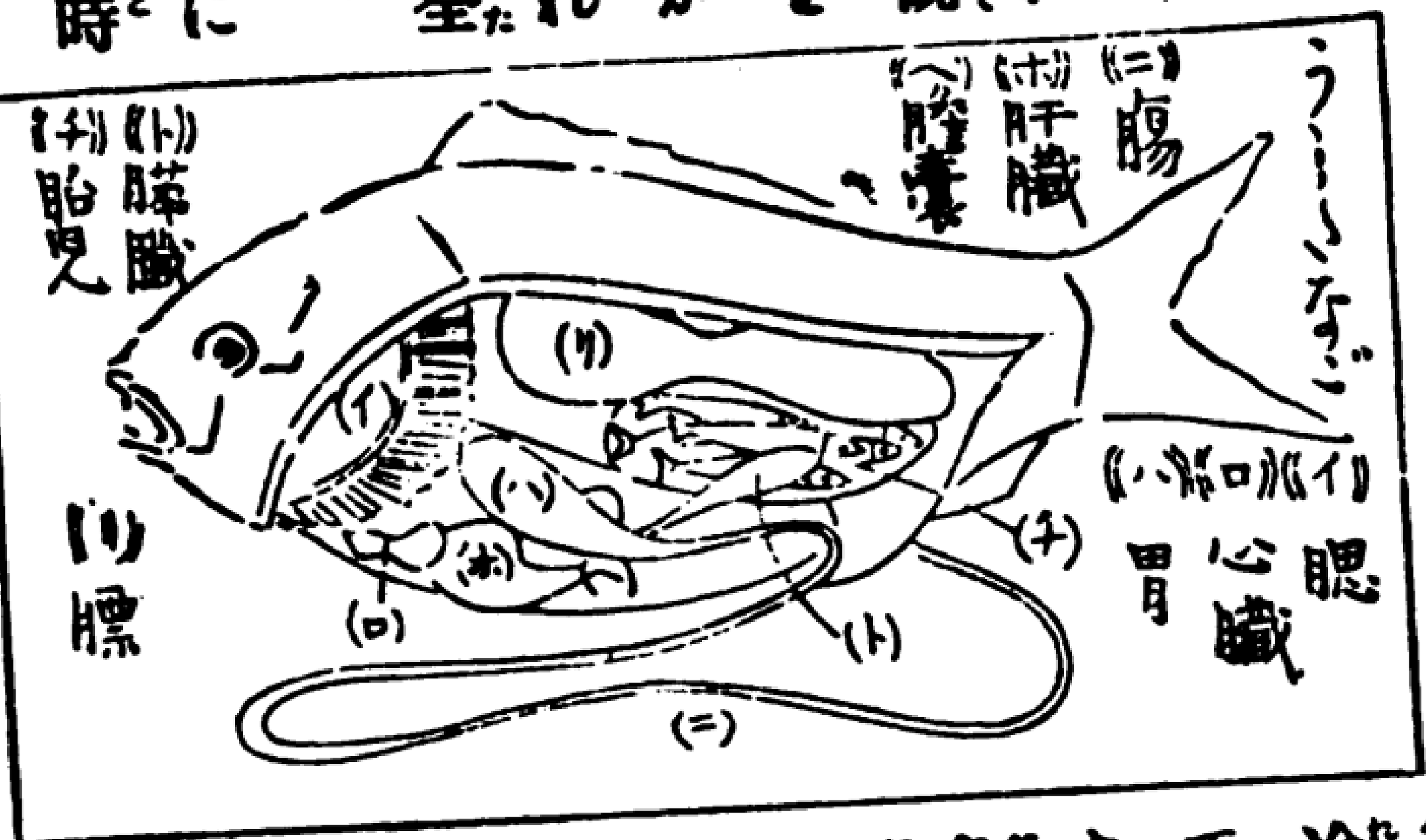
卵は、無數の細孔を具へて居ますが、魚の種類によつて、特に大なる孔を具ふるのがある、卵膜は、通常二層あつて、內容は卵黃で、中には、黃、赤、綠、藍等の色を帶びたのがある、その質は粘質で、脂肪の小粒を混じてゐます、卵は、水よりも重く、海中鹽分の淡い處では沈むけれど鹽分の濃い處では浮びます、夫故太平洋で產卵するものは、大抵浮んで居ります、磯邊で產卵するものは、其粘液を以て、水草、藻類等に附着致すのであります。

魚の分娩は、各自、隨處產卵するものではない、多くは群をなして、深海から、淺處に移り、又は海から河に泝り、或は河から海に下つて產卵する。

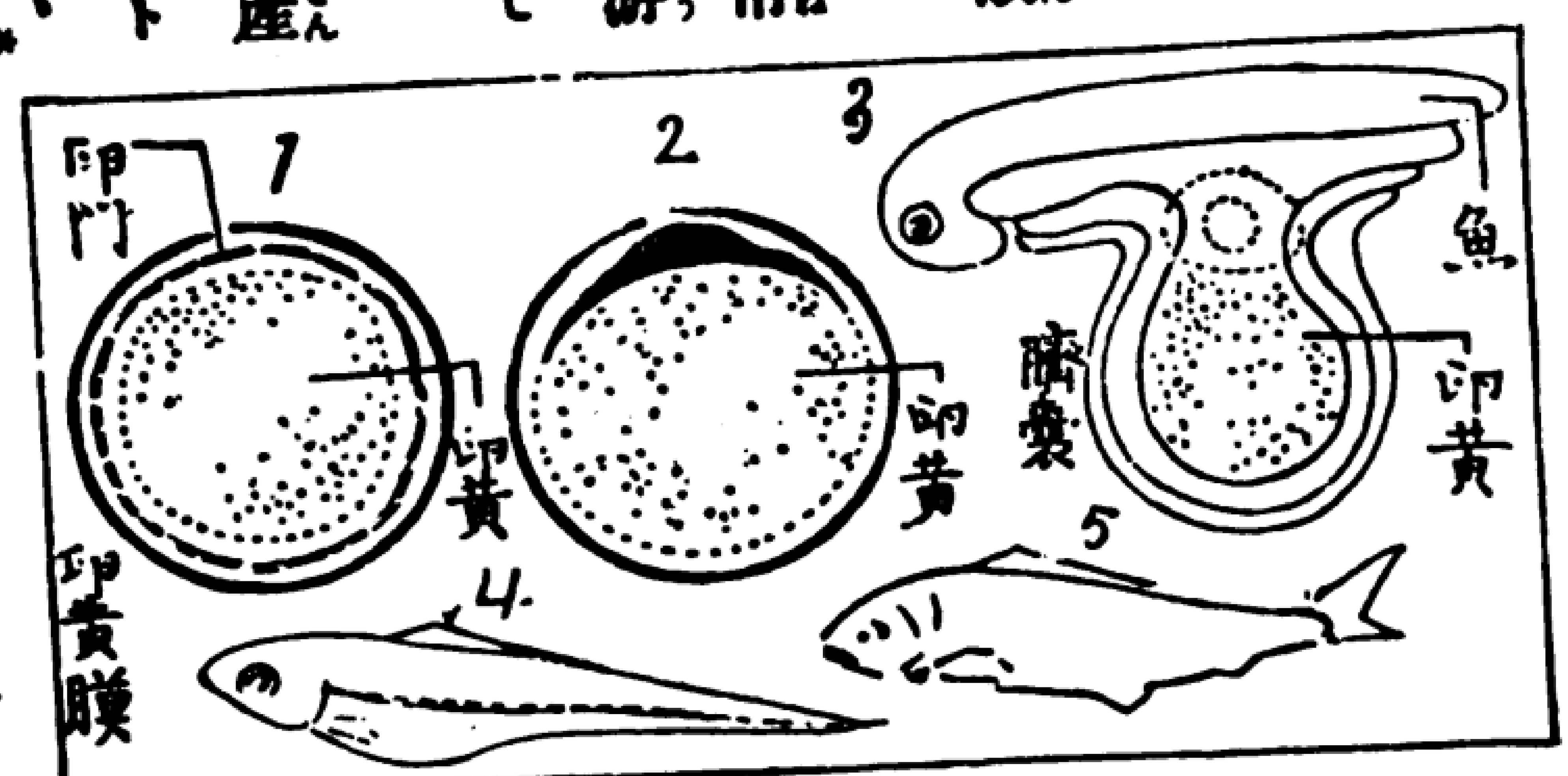
▲分娩の狀態　魚の分娩する時は、多くは肥滿し、又体の色が、艶麗になり、又魚に依つては頭部、皮膚及鰭等に、小結節が出來て、其姿に美を添ふるものであります、動物學上之れを魚の婚姻服と名けます。

卵が受精するのは、雄の精虫が、卵門又は卵膜の細孔から、卵內に入り、そして發生力を生ずるものであります、卵の受精しない前は、少しも光澤がないが、受精するや否や、卵門又は細孔は、膜見た樣なもので、小丘狀をなして、閉ぢられます、すると、卵は十分膨れて、光澤を發し、まるで、勢が違つて參ります、卵

が發生するには、普通他の動物のと同じく、分裂作用を起し、二分、四分、八分、十六分、三十二分と云ふ樣に、分裂し、卵黃の一部が、魚の体となるのでありますが、其營養となるべき卵黃が、未だ半分消費せられない内に、既に魚兒の体を認むることが出來る、それから、卵が全く孵化して、卵を脫するに至るまでの時日は、氣候の*寒暖と水質の冷溫とに依つて差がありますが、鯉、金魚等は、六七日位、鱒は、七八週間もかかります、概して夏期產卵魚は早く、冬期產卵魚は遲い、そして稚い間、腹の處に付いて居る臍囊も、夏期產卵魚は二三日間で脫れるが、冬期產卵魚は四週間、乃至六週間も存して居ます



臍囊の存して居る間は、養分はその臍囊から供給することと恰も人間の胎内に於て嬰兒が養分を取るのと同樣ですから、魚兒は、食餌を需めず、必ず一處に群棲してをりますが、臍囊を離れて食餌を需める樣になると、段々離散するのです。それから又常に遠洋を徊游して居る魚でも、多くは、近岸に來て產卵する、タトへバ鯡等も、*北太平洋に產して、種類も多いが分娩の期節になると岸に近かく來游する、本邦の沿岸中では多く北海道近海へ來て、分娩します、凡て產卵期になつた魚は平常の注意と恐懼とを失ふものですから、網等で取り圍むにも、至極容易であります。そして魚の非常に寄せて來た時は、

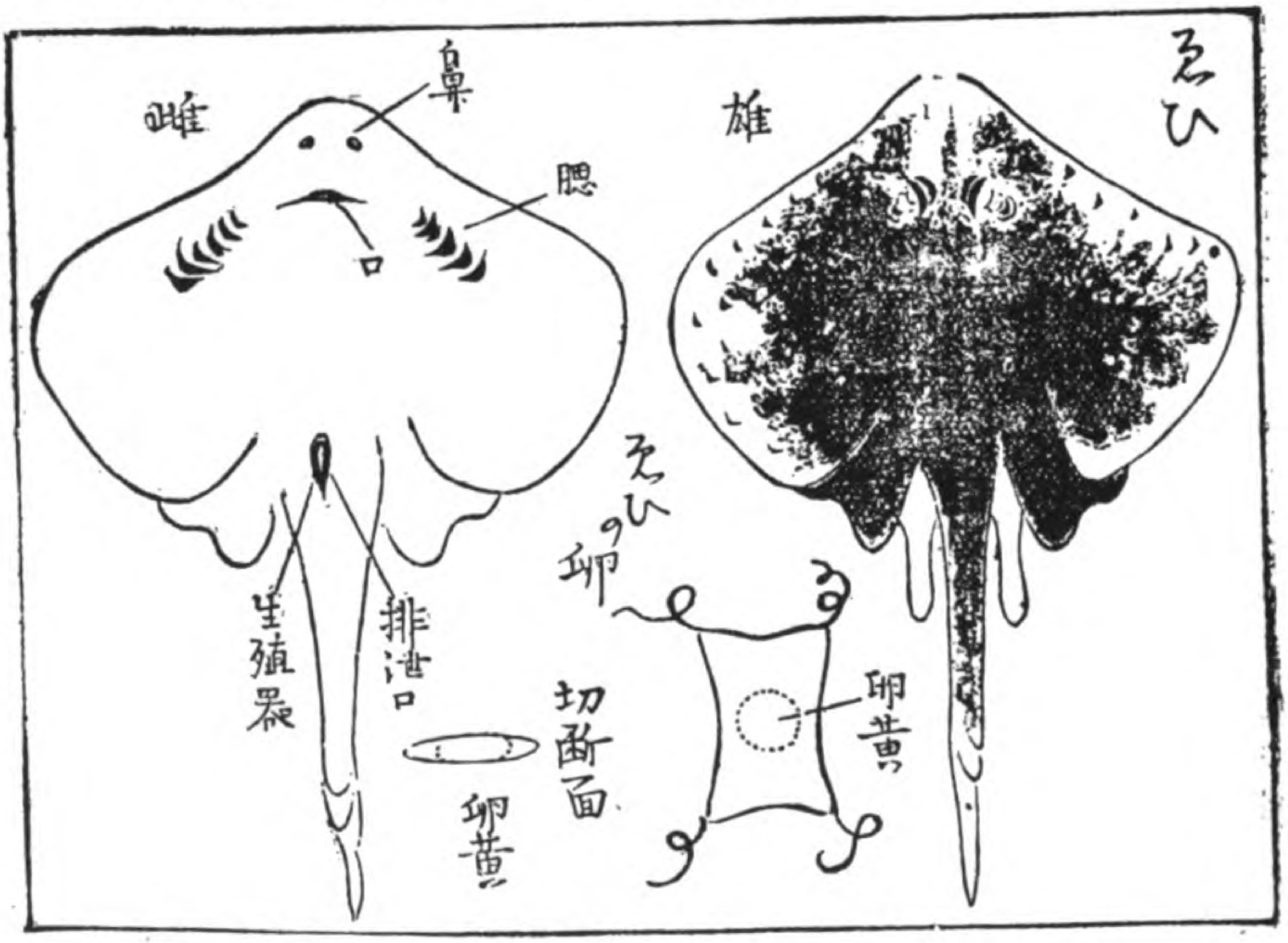


産卵の爲に、數里の間、海水が濁り、海の色が變じ、沖合から吹き來る風に連れて、一種の臭氣が、鼻を襲ふて來る程であります、こんな時には網で取り圍んでも、倘網糸や、網に卵を産み着けますから、漁者は後の始末に中々困るといふ事です、そして少し大漁の時は、網を引き上ぐることが出來ない許でなく、魚の爲に、網を破らるゝ恐れがあるから、直ちに網を切り破つて、一部分の魚を逃がすのださうです。さて又此魚の卵は、透明無色であつて、其一孕の卵數は、四万乃至十万粒位ださうです。

▲産所の經營　鮭、鱒が沿海に來て、河川に泝上るのは、分娩の爲であります、初め河川に泝上るに當つて、非常の、恐れと、注意とを以て、少しの音響や人影にも驚き、夜間に上流に泝つて翌朝、未明には、必ず下りて深處に隱れて居ります、夫故に、水の淸らかな河では、夜間のみ泝上する、けれども、意を決して、分娩する場所を定め様とする時は、少し位の障碍物は申すに及ばす、河中に堰柵等があつて、容易に泝ることの出來ない時でも、その勇氣は驚くべきもので、數尺の高さある障害物でも跳ね越えて、そして自分の産所を經營するのです、その時は頭や、鰭、尾等を以て、砂礫を五寸乃至一尺五寸位の深さに掘り、此に一孕凡そ三千粒の卵を産み下し、後又其上に、砂を掩ひて、卵を匿すのであります、魚類のこの産所を經營する事、他の獸類と同樣であります、初め河川に泝上る頃は、銀色を帶び、艶研なる婚姻服を着け、体もまる〳〵と肥滿して頗る美麗なものとなりますが、分娩する迄は、少しも食物を取らず、体は稍赤色を帶び、次で暗色の雲影が現はれ、それから漸次に靑黑の色となり、ところ〳〵虎斑を生じます、殊に魚類に限りませんが、分娩の時は頗る劇甚な爭鬪を致します、一の雄が、一度雌に接すれば、其雌は、他の雄が來て接するのを防がうとして、死を決して鬪ふのであります、斯くの如く分娩の爲めに、非常の働を致しまするから、分娩が終つた後は、尾、鰭は毀損し、身体は衰弱し、恍然として、殆んど游泳ことが出來ない位であり

ます、夫故に、老年に及び、幾回も此大役を務めた魚は、遂に斃れて流るゝのだそうです。

前述の如く、鮭等は、分娩の爲に遠く海から河に泝るが鰻等は、之と反對で、雄魚は常に、海水又は河口に近い淡鹹水の混交する處に棲息し、決して淡水中に上らない。そこで、分娩の時期が來ると、雌は河川を下つて、雄魚に合ひ、此處で生殖作用を營むのである、鰻の交尾期は、夏、秋の交であるが、分娩は、秋冬の交で、泥中に於て產卵する、夫故に、淡水中に止まつて海に下らないものは其卵



が決して熟せない。鰻の卵は極めて小さく、必ず脂肪球を被り、其大さ凡そ〇、一「ミリメートル」位でありますから肉眼を以て認むることは、難たう御座います、そして一孕の卵は、五六万粒あります、それから、其稚兒は、翌年三四月頃になると、群をなして河川に泝ります、魚も分娩するまでは、種々の艱苦を嘗めドーカして、爲し遂げ樣とするが、さて分娩した後は、自然に任せて顧みないから、折角產み落した卵や、稚兒は他の魚や、其他の害敵の爲めに、襲はれて死滅するものが多く、健全に成育するものは

極て少いが、之れを自然に任せないで、卵を保護し孵化せしめて、健全に成育さすと云ふ事は頗る有益な事業でありませう。

魚の卵の中に、長方形なのがある、世に卵の四角はないといふて居ましたが、古女といふ魚の或るものは、四角な卵を產みます、大さは、幅一寸內外、長さ二寸位でゑびの卵は黑色、がんぎゑびの卵は飴色です、其形は、圖に示す通り、四隅に絲の樣なものがあつて、分娩すると同時に、海中の藻や、なにかに纒絡で、他方へ漂流しない仕掛になつて居ります。其四角の卵の中に、圓い卵黃があつて、其大さは、鷄卵大です、それから、其卵を包むで居る膜は、餘程强靱もので、四隅にある糸の如きものから、引張ると、段々解けて、恰も繭の樣であります、鮫魚の產兒は、少いものは、四尾、多いものは六十尾から產みます、あかゑひ等は、入尾の兒を胎生致します、漁者の談を聞くと、あかゑひが、三四尾の稚兒を連れて、游泳して居る時、其稚兒が物に恐れ驚くと、直ちに母の胎內に入つて、匿れてしまい、暫くすると、又出でゝ遊んで居ると申します。

（完）

遊藝瑣談

生花一席話

齋藤鹿山

▲一口に生花といつて了へば、生花は花をいけるのだといふの外別段の說明をも要せぬ次第であるが、扨日本の藝術に於ける通有の性質として、例の流儀といふのが此生花の方面に於ても、池の坊だの、古流だの、遠州であるの、美生であるのと其外うるさい程多いので、夫れで互に門戶を張つて我佛尊の爭をして居るが、其爭の爲めに相互の研究にでもなるかと思ふと、決して左樣ではなく、矢張り法華宗は南無妙法蓮華經門徒は南無阿彌陀佛を固執する樣に、元祖開山の定めた法則の繩張りを超え樣とする勇氣などは微塵も無いので、其法則がヨシ無理で有らうと不自然で有らうと極めて頑固に墨守する斗りで無く、牽强け得る限りは、

何の彼のと屁理窟をさえ考へ出して、元祖の法則を注解しつゝあるのは、何の流儀に限らず、所謂宗匠連中の通弊であつて、公平な目から観ると、餘りといへば情けない次第であると思ふのです。

▲美術は、其アートの上に於て自己の想を表現すといへる點から論ずれば、生花なども其意義に於ては慥かに美術の一部に編入すべき價値あるかの樣にも思はるるが、併し美術であるとか非美術であるとかの議論は姑らく措いて、茲では只、生花の趣味に就いて僕の管見だけを述べることゝしましよう。

▲處が其前に、形式に就て今少し言ふべき必要がある、形式といへば、誰も知る通りの、即ち生花を形作るべき枝の配置で、流儀によつて異同樣々なれども、大体に於て「天」「地」「人」に配し、それから色々の變化があるので、是が形の基礎である、併し其基礎の建て方の可否に就ては、其れも茲では言ひますまい。

▲兎に角其天地人が、生花の憲法で、其憲法を憲法として置けば可いのに陰陽論、五行論等流儀によつて相爭ふは、何の益にも立たぬ話俳句でいへば「五、七、五」和歌でいへば「五、七、五、七、七」が憲法でも、時により場合によつては、文字の餘るのを妨げない樣に、生花に在つても枝に隨つて、多少の破格を問ふべき筈のものでなく、此破格があつてこそ、變化、波瀾といふ樣な、面白味も出來て來るものを、尺度ではかつた樣に可惜梢を切り詰めたり、獨で曲つたものを撓め直したり、眞直なものを故らに曲げたりして、それで手が利いて居るの上手であるのと傲る其量見が甚だ可笑しい、或人が、始めて句を作つて「山寺の竹叢の中に鶯がホウ法華經と鳴きけり」とやつたら、傍の人が發句は五七五でなければならぬといつて、「山寺の竹叢の中ウグホケキヨ」と直したといふ話がある、格、格と馬鹿に昵むと生花も亦、「ウグホケキヨ」になつて仕舞ふのです。

▲要するに今の宗匠なるものは、舊派俳人のそれと同じく、右の如き墨守家が多いので、縱横自在に、自己の意匠を示すといふ樣なことを許さないから實に困る

併し早晩、斯道に於ても、第二の子規君が出現する時節が來るに相違ないと信じて、僕は、其彌勒の出世を待つてるのです。

▲底で、生花の趣味はといふ問題になると、僕の思ふところでは、誰も始めから其眞趣味を解して斯道に入る人は恐らく稀なものであらふ、デ其趣味を解し得るまでには、少くも三四期を經過するであらふと思はれる。

▲先づ第一期には斯うなのだ「生花といふものは如何にも上品で面白さうなものだから、私も一ッ稽古して見ませう」とか又は、お隣の梅子さんは生花をなさるから、妾も其お師匠樣のとこへ稽古に上らふ」とか只漫然たる時代で、ツマリ第一期などゝいふよりは寧ろ或動機から、學ぶべく決したといふまでの事に過ない。

▲其次には、生花の形に目が着く樣になる、此お花は如何にも賑かなとか、手際が巧いとか位のところで、如何かして、あの方の樣に上手になりたいといつて、只形を奇麗に生けやうとする時期。

▲それから、如何やら斯うやら、枝をいぢくる手心が段々と判つて來て、可なり思ふた程に近い花が出來る樣になると、今度は面白さが餘程泌み込んで來る。

▲それで、段々深入りをして、熱心にやり出すと、大概なのは、思ふ存分に生かるとなる、モウ堪らない、處で池坊の方でいふと、師匠の方から切紙五ケ條の免許を與へるとか何とかとなる、それ三ケの船・松竹梅、櫻、紅葉、葉物蔓物實物と許される、ます／＼愉快になつて來る。

▲それから段々、手際になつて來て、七種の傳、草木集、廻生の卷、定式の卷、生花の卷の免許となつて皆傳だ、即ち席札に「花定式」の燒印が押さるとなる。

▲それで先づ卒業の譯となる、スルと今度は役方が欲しい、會宰であるとか、正面席であるとかいふ樣な肩書附になりたい、又今度は、紫の幕を許されたいとか床構を許されたいとか、薄盤の華盤のといふ騒ぎになつて、何でも人の下になつて居たくなくなる。

▲家元では、其技倆に隨ひ、段々に許して行くといふ

掟になつて居るのであるから、申込によつて順々位を昇級さして呉れる。

▲さうなると今度は位置の競争、花では無しに鼻の競争、岩谷松平の巻煙草の廣告といつたやうです。

▲大抵の人はこの寸法で行くのであるから、是見て呉れいの腕自慢が頭一杯になるけれども、併しその樣子体裁で押し進んだ日には、自惚れ斗りが先に立つて、生花の本當の趣味などは、先アゼロといつて可い。



▲只だ師匠の癖を取つて、形の末にのみ拘泥し、何でも手奇麗に、賑かに、しなぶりよくと斗りに意を用ゐて、所謂俗受け一方との傾きになつて、ツマリ花道の本通りでなく横路に迷つて仕舞ふ、早い處が土佐派の畫工が役者の似顔を描く樣な情けないお話です。

▲斯ふいふ風に横道に外れて了ふと、花を生けるのが人に見せて一番アッと言はせて呉れやうといふところが目的の主たるものになつて、其目的を達する爲めには、花の自然を害してまでも、型を崩すまい、規則違犯をやるまい、と斯ふなつて來るから、時としては死

んだ花が出來て了ふ、生氣のない、千篇一律な、活版摺見た樣な、それで趣味も糸瓜も有つた譯のもので無い。

▲併し是はチト極端なお話、ツマリ頭が舊式に出來て居る連中のお話で、新式の、植物學の素養もあり、美といふことをもお茶漬の御飯同樣にサラ〳〵と呑み込んで御出でになる、明治ッ子のチャキ〳〵たる令孃、夫人方には、埒もない名聞に走る樣な沒趣味な方は萬が稀にも有るべき筈の無い譯ですが、ツマリ邪慢の天狗に魅せられて、思ひもよらぬ横道に迷ふ似非風流家の一例を示したのみの事で、最も是は生花のみでなしに、藝に遊ぶ人には間々あり勝の例で、併し俗人には陷り易い穽だが、又さういふ風に手を引く師匠も師匠だ、といつた處が、元來がパンの爲めに看板をかけて居るのが多い世の中故、何の許、かんの許と家元へ取次げは、免許料の割前に有附くといふ筋道になつて居るのであるから是も、渡世としてからには無理もない譯でせうよ。

▲が、そんな仲間は茲では豫戒令を喰はして置いて、僕の考では、型の事も法則の事も、敎はる丈けは敎はりもし、手掛けるだけは手掛けて見て、それから一ツ自分の花を生けやうと試みるのが肝要であらふと思ふので、さうなると、遂には定則を逸して、ツマリ變則にもやつて見るのですね、ツマリ畫を學ぶ人だと、手本を離れて、自分で圖案を仕組んで見る格ですね。

▲と申すと、何、生花だつて、何時も師匠の通りといふ筈もないといふ方も有るか知らねど、併し實際になると、左樣は行きたがらぬもので、あの時には、斯んな枝を斯ふいふ風に使つて有つたとか何とか、得てそんな風に是非行つて了ふのが先ア十人が十人といつて過言でないかと思はれるのです。

▲そこで、兎に角變則に行つて見る、處で以て常套で無い變則と來るのであるから、どうもやり難い、やり難いから事によると、お化け見た樣なものの出來ないと限れない、けれども、それを操返し〳〵する中には何時とはなしに、飛んだ面白いものが出來る、僕なとは元來、ひねくれた質で、先ア反謀氣が多いといふ風

に、一風變つて出來たのであるから、始終その變則を試みたので、スルと偶には意外に面白いのが出來る事もある、段々するとわざ〳〵捩ちくれた枝を撰んで立て見たり、或は古歌から作意を取つても見たりさうなると、極り切つた普通の眞の花形とか、行の花形とかいふのは一向面白くなくなつて、今度は型に隨つて花を生けるのよりも、豫め意匠を工夫して置いて自分の花を生ける、それが望み通り出來る、サア愉快だ、それは堪つたものでないのです。

▲と、斯ふいふと、それでは法式も規則も要ないのかと疑ふ方も有ふかなれども、自分の歩き慣れて居る道筋は、暗い折でも何でも構はず、ツマリ無意識に歩いて了ふ樣なもので、マサカ溝へも陷らずに、識ず〳〵法式に當篏つて居るから面白い、底が、所謂格を破つて格を離れずで、俳句ならば字餘りといつた樣な、着かず離れず七分三分のカチ合なので、と斯ふいふと何だかチト味噌臭いかも知れません、甚だ恐縮の次第ではあるけれども、併し俗受けをさせやうとか、人にアッと言はせて吳れやうの考では飛び離れたことが到底出來ないのです。

▲前には變則と申して置いたが、是は全体、變則といふ程の事もない、花をいぢくる方は、是非おやりにならなければならぬので、ツマリ草の花形なのです、草の花形といふと、眞や行と違つて、何所が如何との說明が出來ない、ツマリ禪家の以心傳心といふ風なのですから、修行を積んで自ら會得するより外に道はなく、自ら會得しやうとすれば、是非埒外に飛出して、離れ業を幾遍となく繰返して、失敗に失敗を重ねて見なければ迚も本當の味を覺える事が難かしい。

▲古人のやつた草の型、假令ば小堀遠州侯の手籠の朝顏であるとか、利休が水盤の落梅であるとかを其儘眞似て見たところで何等の面白みもない、池坊專定の百瓶に斯ふいふ圖があるから、其儘生けて見たでは少しも曲がない、落語家がよくやる根岸の隱居のお茶の湯の樣な譯で、それで草の型はエヘン斯樣な次第のもので、など〻濟し込む譯にはならないのです。

▲併しそれは、先づ本職といふ方の側に就いてのお話ではあるが、又只一通に、生花をば室内の装飾として掛ては、自分の氣慰みに稽古するとしてからが矢張り其心得でなければ、眞の趣味を解することは覺束ない

▲釋迦が手に持てる一莖草も見様によつては丈六の金身となる譯で、只一瓶の生花でも、千山万水の趣もあるかに見える樣な次第で、其處には迚も人に知られぬ樂みがあるのです。

▲左り乍ら上手にあれ下手にもあれ、斯道を好んでやつて居るからには、矢張り分限相應の樂みも覺え、趣味をも感ずるは勿論の話です。

▲心を籠めて精々と出來上つた花が、好工合に水が揚つて葉先のツン〳〵と立上つた樣などゝいつたらないのです、昨日生けて置いた早咲の梅などが、今朝になつて二三輪も咲きまさり、奇麗に掃除された座敷の旭さす障子に鳥影がチラとうつるなどゝ來ては、天下の春の長閑けさを一室の中に鍾めたかと斗り、其心持は筆にも詞にも及ぶ限りのものではない。

▲又音樂をやる人でも、畫をかく人でも、樂器を取り筆を把つて、各々是に臨んでる間は、頭に塵程の餘念もなく、全身をミユーズの神に捧げて、丸で人間世界を離れて居る樣な氣がすることの夫れの如く、花を生る人も、花瓶の前に座を占めて、是を彼して彼を斯うしてと樣々な工風する時などは、實に自身で自身のあることを忘れて了つて、全く花其物と同化して、塵念も妄想も何もかも頭に浮ぶべき暇とて無く、やがて、出來上つても、花が自分やら自分が花やらの區別さえつかなくなる樣にウツトリとする。

▲又餘處へ往つて、床の間に、シヤンと巧く生つた花などを見る折なども、其花には何となく生けた主の魂が宿つて居りはしまいかと思ふ樣な氣がする、勿論下手な人の手にかゝつたのでは、カシ散々な次第であるけれども。

▲私と同流の其徳軒大塚如松といふ人がある、或時田舍のお寺で四五人の同好が生花の會を催した、處で一席が濟んでから、其人が殘花を集めて、一人で慰んだ

花器は翁形の籃で、花は河原柳に寒菊でしたが、如何いふ機みか何と氣が乗つたものか判らないが、皆の撰み殘した屑同然のであつたが、其よく出來たことゝいつたら、何ともいへない、如何にも枯淡りとしたイヤ味の無い、引締つた隙のない形で、而も冬の寂寥たる光景が自然と現はれて其根締の寒菊と、心、副の阿吽の配合の間髪を容れ難き工合といひ、菊には今しも打たれ水の、如何にも今朝の霜が今、旭に融たかの如く、柳のあたりには鷦鷯の聲が聽ゆる樣な氣がして、我知ず自分も其花の爲に全く氣魄を奪はれで了つた事があつたので



大に賞めてやつたら、そんなに好いのかと斗り本人の其徳軒が却つて不思議な顔をして居つた事があつたが、本當に氣が乗つて魂の這入つた花は、どうしても別になつて見える、併し一番巧くやつて見せうといふ樣な、我が先になつては迚も左樣は出來ない、其德軒の其花の如きは畢竟何の餘念もなく、只氣が乘て生たので本當の魂の入た花が出來たのであらうと今でもツクヾヽと思出されるのです。

▲生花の自然であるとか不自然であるとか、マザヾヽ咲いて居る花を無慈悲にも切取つて花瓶にさして何の趣味があるかなどいふ樣な事に就ては、餘り長くなるから、稿を改めて書ことに致さうと思ひます（完）

上野公園の四季

曠野人なく月千里、見わたすかぎり、はてしも知られず、草より出でゝ、草に入るとか聞きし武藏野の月も、今はそのかみの面影を止めず、屋根よりいでゝ、屋根に入るともいひつべき、東の京の巷となりては、大厦高樓軒をつらねて、車馬の往來絶ゆ間なく、行く處として、いづこも賑かならぬはなき其中に、わきて人々の雜沓なきはむるは、上野の公園にこそ。

春は摺鉢山、竹の臺の櫻咲きそむる頃、美術展覽會、博物館、動物園、パノラマなどの前に立ちて、切符もとめんとする人々の、樂しげなる面もちは、いはずもがな。小學中學の運動會、自轉車競爭會などに、狂ひ興ぜるもおもしろげなり。

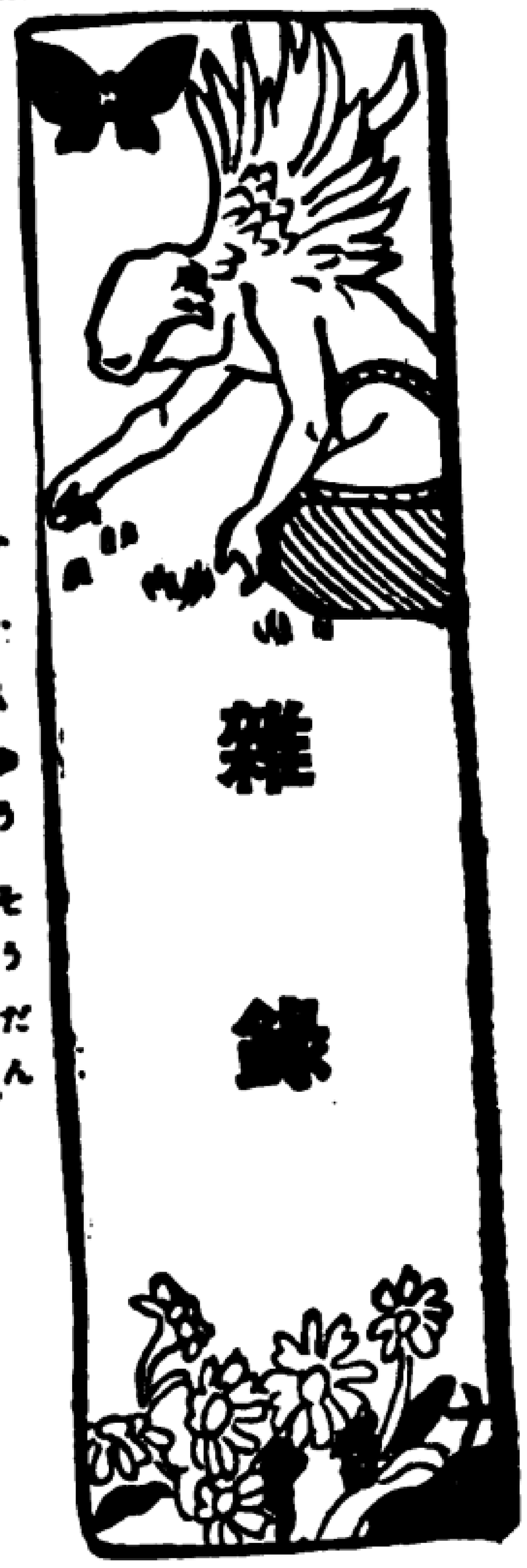
夏は不忍の池畔、涼しき風吹きわたりて、濁りにしまぬ蓮花、水の面にぬきんでゝ、緑りの葉の間より、紅白互に妍を競ふに、その花の開る音きかんと、遠近より集ひ來る人々の、朝まだきより辨天祠のあたりに群をなし、あるはまた、入谷の朝顔見てかへらんとする人もあるらし。

秋は團子坂の菊見、あるは、山づたひに、瀧の川の紅葉狩、さてはまた、月見をかれて、虫聞きに出づる人もありけり。

冬は木の葉なごりなく散りはてゝ、枯木の枝に雪ふりつみたるさま、さながら花をつけたるにも似て、不香の花とたゝへけんもうべなりや、まして、白かねを敷きわたしたるにも似たらん、下谷の景色ゑもいはれず。狐を肩に銃を曳く老翁、雪合戰に餘念なき童など、いづれ勇ましからぬかは。

四つの時々うつりかはれど、いつとても、眺めうるはしく、興つきせぬは、げにこの公園にこそ。

（中井たれ子）



佛蘭西革命 婦人勇壯譚

香蘭女史

私が今斯様に晏然として暢氣に老後を養ふことが出來るといふのは全く亡き妻の賜物である。と斯う申すと、何事ぞ、堂々有爲の男子が、楊柳の如き纎弱き婦人に依つて今日を安穩に暮らすといふは、咄、怪しからん奴、腑甲斐ないものと思召すでせう。が、是れには一場の悲酸な、否な勇壯な物語りがあるのですから、御聞き下され、と云ひつゝ皺の寄つた眶に一滴の涙を浮べて語り出す六十有路の老翁。彼は左手の袖をまくツて弓の如く反り、加之も枯木の如く痩せさらばへる腕を扼しながら、宛も懐舊の情に堪へぬかの様、彼は徐ろに語り出した。

時は一千八百十五年六月、千古の大英雄ナポレオンがあはれや武運盡きて、英將ウエリントン及び獨將ブリユツヘルの聯合軍の爲めに、ワーテルローの一戰に敗れ、同年十月十六日セントヘレナに流竄され、遂に蓋世の英傑も、波路遙けき孤島の月下に、怨を呑んで露と消へて仕舞つた、あゝなんと英雄の末路程果敢なくも又た哀れなものはありますまい。其後ち一千八百二十四年佛王ルイ十八世殂れ給ひ、皇帝チャールス十世が位を襲れたのであるが、王は迷謬暗愚、時勢を見るの明なく、君主專制に拘泥して、自由思想の國内に普及して居ることに氣が付かれなかつたから、立憲内閣を廢して代ゆるに保守内閣を以てした、其處でギソー、チーヤ、コンスタントなどいふ立憲黨の名士は大に反抗して、言論の自由に托し盛んに駁擊を試みました當時のこと。忘れもせぬ時は一千八百三十年の七月廿五日、此日こそ私が深く腦裡に刻んで永劫忘れることの出來ぬ佛國の革命日でありますと、老爺は言語に力を籠めて言ひ、言ひ終つてあとは、有繫老の身の涙

麗く膝に一雫を落し、嗟嘆の聲を發するのでした。暫くして此日こそ實に私が千年の齢を共にせんと契つた最愛の妻の命日であると言ひ足して、扨て老爺は語を續けて言ふやう。

此七月廿五日こそ、無謀なる王がセント、クラウドの勅命を發して、國會を解散し、剰さへ出版の自由を制限した日であります、此時巴里の市民は激昂、憤怒、齒を嚙み血を啜つて以て一揆を起したので御在ます。

私は今でこそ斯樣に老ひさらばひて後苑の薔薇と同じに枯れ凋み、見る影もない老爺ではあるが、私も昔は男山、隨分壯んな事をやりましたよ、當時私はギゾー黨の一人であつて然かも最も熱心に王の不法を説いた慷慨の壯士であつたのです。それ故早くも此一揆に加はるの契約を致したのですが、天は私に此名譽なる一大革命に走せ參ずべき幸福を與えて與れませぬかつた。と申すのは折もあらうに此時私は前夜から嚴い病氣に罹ッて高き熱度は手足もゝげん許りに遠慮會釈なく身体中を驅けめぐる苦しさ切なさ。併し私は其の苦しさよりも切なさよりも、此病の爲めに革命の一揆に加はることが出來ないかと思ふと、實に殘念、畢生の恨として齒を嚙み肉を掻つて口惜涙に咽んだので御在ます。病氣の爲めの苦痛には堪え得ても、此の口惜しき煩悶には耐え切れず、床上に輾轉反側して頭割れ氣も狂せん計りでした。

枕上の時計器、一秒一分と其針を進めて、大事は目前に迫つて居る、今や正に同志が巴里のシャンゼリゼー町に集合すべき時刻に垂んとしてゐる、私は氣が氣でないので叶はぬながらもと、傍にあつた銃を手にして立ち上つたけれど駄目でした、私が奮然蹶起の大勇氣も病魔には勝てず、兩眼が眩んで床上にグタリ轉んで了つた、再び銃に縋つて立上らんとすると今度は腰も立たなくなつて、恰も大磐石を背負はされたかの如く、身體の自由を失つて其儘撞と倒れて了ひました、私は此時聲を擧けて自分の腑甲斐なさを泣いたです。餘りの口惜さに自分の頭を掻き掻つて男泣きに泣いたです。あゝ、私の友は何とか言はん、ギゾー黨の人々は私を

約に背く卑怯な奴、臆病者よと罵るであらう、罵られても詮方がない、あゝ、私の男は廢れたと、無念の涙に暮れて、自焦に自焦、藻搔きに藻搔いた揚句の果は夢現の樣に茫然して了つて何が何やら事理を解することが出來なくなつた、思ふに私が無念口惜しいといふ感念が、一時に腦を刺擊した結果、私の腦は知覺なき迄に攪亂されたものと見え宛ながら木像人形のやうに成て了ひました。

翌朝、私が疲れに疲れて夢現と横はれる枕邊に來て私の耳に口を寄せて囁くもの があつたから、私は重たき瞼を開けてドンヨリとした瞳で其者を見詰めました、此時私の腦は攪亂されて、無我の氣色ではありましたが、其者を誰人と見定めの付かぬ程では有りませんかつた。其者は誰あらう、斷金の友バランスで御在ました。

バランスは右手に持てる上着を指さして之を見よといひますから、瞳を定めて見ると、斯はそも如何に私が常に着馴れて居つた上着でありました。で、私は不審に堪へずよく〳〵其を凝視ると、胸の釦の邊りに生々しい血痕が夥しく着いてゐるでは御在ませぬか、赤い！深紅！韓紅！私は非常に驚いたです、驚くと共に益々不審の雲に覆はれて、自分の上着、赤き血、不審でたまらぬ、私は何うしても其顛末を解することが出來ませぬかつた。

バランスは徐ろに口を開き、

『此上着を何と見らるゝぞ、此の一品こそ永く汝の家の重寶でありますぞ。』

といふた、私は肱を突いて半身を起し

『な……何と言はるゝ。』と舌も廻らず、調子外れの音聲を以て問ひ返へすと、バランスは、沈着拂つて、而も嚴肅なる態度で

『此血痕こそ誰あらう汝の妻ヴエスト夫人の最後の血でありますぞ。』と言はれました、私は此言葉を聞いて堪え入らん迄に驚きました、

『偖は我妻ヴエストには既に現世になきものと成たか私は此間の解釋に苦しみます、どうぞバランスよ其

顛末を話して呉れい、と頼みました所、パランスには未だ彼女の上着を其手より放たずして、恭しく禮を施して語るやう、

『今や汝の妻ヴエストは神のまします御國……と言ひかけて、其の金色の太陽が東天を離れて次第々々に高く登りつゝある中空を指さして、

『彼の一碧の雲の上に暖く眠つて居らるゝのである、汝の妻ヴエストは實に革命軍に偉大なる力を與えた古今獨歩の女丈夫である、汝の妻ヴエスト一人の力を以てしても暴虐なるチャールス十世は倒れねばならぬ、私は汝の妻の功蹟を、汝の爲めに語るのみならず、又た此我が佛蘭西國史上に特筆大書すべき美談として語るのである。

汝の妻ヴエストは汝が不慮の病を得て蓐中に呻吟する故を以て、革命黨の一揆に加はる事協はざるを慨し、かよわき婦人の身ながらも良人に替らんと、雄々しくも思ひ定めて汝の上着を着用し、汝の銃を肩にして昨夜約束の刻限に一分一秒をも違はず、シヤンゼリゼー街に馳せ付けたのである、實に汝の妻ヴエストは巴里市民の憤慨を双肩に荷ふたのみならず、病床にある良人の爲めに名譽ある代理を務めたのであるから、我等は汝と共に永く感謝しなければならぬ。

扨てそれより一揆軍は迎へ戰ふ王の軍をヒタ攻に攻めた、幾千の華燭臺を欺くチャンゼリゼー街は、今や修羅の街と化つて、發砲の白き黒き烟は滿街を覆ひ、彈丸は軒打つ雨霰の如く降り注ぎ、暫らくは阿鼻叫喚の地獄であつた、折しも汝の妻ヴエストは黄金色の艶々した毛髪を振り亂し、柳眉を逆だて玉歯を噛み締め、六尺の男子も顏色なからしむる勇氣を以て驀に敵陣中に突貫した、一揆軍の全隊は今ぞチャールス十世を倒す時機こそ來れり、勝敗は此刹那にありと意氣込み、勇め、進め、の號令と共に激しく奮戰したので、何とて王軍の支ふるを得べき、遂に王は戰ひ敗れ、逃走したので、我が一揆軍は萬歳の凱歌を三唱して引返へしたのである。が、哀れ

や、此の戰に汝の妻ヴエストは、胸に散彈を受け、唐紅の血に染まつて名譽ある戰死を遂げて了つたされば畢竟今回の革命は一揆軍ばかりの力ではない、汝の妻の力が預つて大功あるのだ、汝は實に善き妻を持たれたよ、汝の名は妻の名と共に千載の後までも不朽なるであらう、汝は亡き妻に向つて謝さんけれアならぬ、是れぞ即ちヴエストが奮闘せし名譽の上着』

と長物語りの末、私の前に置いた、血痕の上着

『噫、是れぞ私の妻が現世を辭する名殘りの血か、噫彼女の赤き心は此生々しき血に依つて顯はれてゐる妻よ、ヴエストよ、能く死んで吳れた汝の赤き血は、薔薇、菫の赤き花よりも美しう覺ゆるよ、』と言つて私は上着を犇と抱いて、燃えんばかりの厚き愛情を以て其に接吻したので御在ます。

以後、私は彼れが七月革命の一揆軍に名譽の戰死を遂げた女丈夫ヴエストの良人であると多くの人から身に餘る尊敬を受けました、而して私は妻の爲めにあらゆる榮譽と稱賛を得ました、夜更け人靜まつて四隣閑たる頃になると、黑暗々の中に、懷しのヴエストの面影が朦朧顯はれ出つるので御在ます、嗚呼我が妻ヴエストの面影は忘れやうとしても忘れることが出來ませぬと語りしとか、佛蘭西雜誌にありしを其のまゝ譯して讀者の劉覽に供する事としました。

成功せる亞米利加の婦人

田中茂穗

男子教育問題に就いてはその時期已に過ぎ去れりと云ふべし、婦女教育問題に至つては世界諸國殊に日本に於ては最近の事に屬し、所謂過渡時代を辿りつゝあれば、愼重の態度を以て研究するの必要あるべし、余未だ婦女問題に關し口を開くべき齡と智識とを有せざるも、尙ほ家に年少姉妹あり、その教育方針は大に余が頭を腦ますことあり、近着亞米利加の或る理科雜誌

を閲讀せるに標題の如きもの「アンスロプ」氏に依りて書かれたり、就て熟讀するに大に參考とすべきものあり、余固より余の意見を述ぶるに非らず、只その要旨を諸君に報道せんとするにあるのみ。

亞米利加に於て政治專門學經濟その他の職業に於ける位置を女子の要求し始めたるは今より五十年前のこととなり、その理由とする所は女子の腦も男子と同じき筈にして、若し充分の機會を得せしめば身體上の關係已むを得ざる者を除かば如何なる方面にても男子と同じく成功し得べき筈なりと云ふにあり、これに就ては男子より嚴しく反對を受けたるも今や女子は 敎育 學上及專 門學上最良敎育を受け、軍事上のことを除かば凡ての方面に於て凡ての專門の職に就くを得るに至れり、その要求する處は己れの兄弟の同意如何に關せず太抵得るを得たるのみならず尙要せざるものをも得るに至れり、然かも尙女子の成す仕事に對しては當世女子、生意氣女生、高等敎育の惡影響の語を以て多くの人の尙誤解せるを憾むべし、上述諸問題に對しては諸書に散見する處皆その能力、忍耐力、價値に就て男女兩性比較を擧げざるなし。

三十五年の或る亞米利加の雜誌には誕生日、兩親、敎育、結婚、職業に關し出來る丈けのことを調査し、尙簡單なる履歷をも添へて男子及女子一万千五百五十一人の名を擧げたり就中九百七十七人は女子なれば男子の數に比較せば漸くその十二分の一なり、尙此の内二十三人は有數の女優歌舞者、貴女にて上流の人の妻となれるもの等なれば是を除き殘り九百五十四人に就て此に論ずるなり、此れ等女子の書ける自傳を精細に研究せば頗る面白き事實と意向を吾人に敎ふるものにして、特に次の二問題に解釋を與ふるものなり。

第一如何なる職業が成功に最大なる機會を與ふるものなるか

第二如何なる敎育上の準備が最大補助となり最も必要なるものか

先づ二三の表を示さん

第一表

	總人員	平均年齢	結婚數	結婚割（百分比例）
著述家	四百八十七人	五十三才	二百八十七人	五十九
美術家	百〇三	五四	四十七	四十三
教育家	九十一	四十九	二十四	二十七
新聞記者	六十五	五十一	四十四	六十七
女優	五十九	四十四	三十一	五十二
音樂者	四十三	四十一	二十五	五十八
社會改良者	二十七	六十	十六	五十五
醫者	二十一	六十一	九	四十三
理學者	十七	五十	十	五十九
布教者	十三	五十三	十二	九十二
慈善家	十二	六十	七	五十八
圖書係	九	四十七	三	三十三
法律家	九	五十八	八	八十九
理財家	一	六十七	一	百
救世家	一	六十一	一	百
農業家	一	五十七		
▲總數	九百五十九人	五十三	五十二	五十四

第二表

	公立學校出身	私立學校出身	高等專門學校出身
著述家	五十五人	二百一人	六十二人
美術家	五	十九	四
教育家	二十五	三十	四十二
新聞記者	八	二十六	十二
女優	一	十	二
音樂者	五	十	二
社會改良者	三	十六	四
醫者	二	七	七
理學者	五	四	七
布教者	二	二	五
慈善家	一	五	〇
圖書係		三	二
法律家	二	三	一
理財家		一	
農業家		一	
▲總數	百十一	三百二十五	百四十八

第一表に於て總人員九百五十九人なれば、前掲の女子總人員よりも五人超過せるは一人にして多くの職業を有するものあればなり、尙同表を見れば成功せる女子の結婚せる數は多數なりと云ふを得ず、即ち僅に百中五十四なり、布教者と法律家とを除かば結婚せるは百中六十以下なり、而して專門職業の女子はその職に入る前結婚せるものなるが如し、新聞記者はその次位にて美術家は僅に百中四十二教育家は非常の下位にて百中二十七なれば僅に四分の一以上なり、かく結婚數

の少なき源因は尤も考究を要することにして女子が結婚を非とするのためか同等の男子を見出すの機會乏しき爲なるか、但しは女子智識を得るに從ひ、その學者的生活は男子をして益瞪目せしめざるに至らしむる爲なるか、そは兎まれ角まれ成功と結婚とは教育家に向ては不良なるが如し、驚くべきは女優の結婚數の半數以上に達せることなり。

曾て日本の或る女學校に白粉問題起り調査の結果終に身嗜としての範圍にて用ふべしとなれる事或女學校の卒業生の職業を故意に報告せざりしと新聞に見えたり又女子教育家の不遇なることは日本にても歷然之れを見るを得

年齡に付ては百中六十九人の報告なれば充分に信用しがたきも先づ音樂家尤も早く成功し平均年齡四十七才女優と美術家とは其次位にて兩者平均年齡四十四、五歳なり。

第二表を見れば高等專門教育は女子の成功が小部分なることを示す即百四十八人、百分比例にて十五、五となるなり專門教育を受けし女子にして成功せる最大割合のものは理學者布教者教育家なり。

理學者にして公立學校出身と私立學校出身とは五と四の割合なり然るに他の職業にては私立學校出身のもの公立學校出身の者に遙に超ゆ。

十分なる智識を必要とする教育者にても私立と公立出身とは六と五の割合なり、新聞記者は三と一醫者七と二著述家は四と一の割合なり。

理想の婦人

- 同情の優美なる事。
- 名譽心に驅られずよく謙讓の德を有する事。
- 吝嗇ならぬ事、而も深く經濟に心を用ふる事。
- 失望落膽を忍耐し、如何なる場合にも他を怨みず、愚痴に陷らぬ程の勇氣ある事。
- 其考を世界的にし、可成神經質ならざる事。
- 我愛敬する人の爲めには、自分の位置を顧みずよく平民的に何人とも交際する事。
- 自分より以上の身分の人には相當の禮儀を盡すも、へつらいに陷らぬ事。
- 如何なる場合にも怒を制し得る程大量なる事。
- 常に時を有益に用ふる事。
- 可成活潑に、壯快に、其身を處し、周圍の人をして快く感ぜしむる事。
- 餘り感情に走らず、常に道理と違反せぬ事、即ち常識を備ふる事。
- 可成餘裕を作り、公共事業に盡すべき事。
- 其位置に相當したる務を重んずる事。

血染の玉章

（仁川看護婦人の短信）

仁川看護婦人會員某夫人より東京の友人に送られたる書狀

其後は誠に御無沙汰のみ申上居候處如何御暮し被遊候や、御伺申上候、扨當地にては先月九日日露兩軍艦の開戰之有候につき、私共の爲御心配被下早速御見舞狀頂き難有く御禮申上候、今日にては彼是一と月前と相成候へども、私事は仁川沖にて砲聲のどんどんと致し居る時より引續き今日まで少しも暇無之、御存じの通り當地の赤十字臨時病院に收容せられたる露國負傷兵を日本に送られ候てより、少しは暇に相成候につき是より今日迄の摸樣をかいつまみ申上べく候

二月八日には日本より數多の軍艦や軍用船入港致し、私共居留地の者は實に力強くも嬉しくも相感じ申候、夕刻より陸兵居留地に上陸致し仁川市中到る處皆兵士の宿舍に充てられ申候、私共の住居は〇〇〇官舍故右宿舍とは相成申さず候其節大勢の日本軍隊を見し時如何に嬉しく感じ申候か御察し被下度候、其より九日の晝頃に至り突然家も震ふばかりの大砲に私も下女も膽を潰し申候、當港は各國軍艦の出入多き故、儀式的の砲聲は聞き慣れ居候へども、此度の砲聲は平常と異なる樣相聞へ候まゝ、早速二階の物干臺に上り候處仁川沖八尾島と申す島の邊にて天を蔽ふ許の硝煙相見へ、兩軍艦の戰爭をまのあたり見物致候、其內、領事夫人の許より電話にて負傷兵收容の準備あるにつき態出る樣申され候につき、取敢へず參りて繃帶を裂くやら卷くやら病衣を縫ふやら準備萬般相整へ今にも負傷兵上陸するかと待居り候處、日本軍艦には一名の負傷者も無しとの事にて私共は折角準備致せし事故一時は落膽致候へども、之より目出度事はなしとて皆々喜び申候、此上は敵の負傷兵なりとも看護致度く存じ居申候處十三日に至り愈露艦の負傷兵二十四名を上陸致させ、當地の東山とて眺望も空氣も宜しき處に設けある病院に收容する事と相成候、私共は始めての事故に物珍らしく會員一同白の手術前掛をかけ待居候處、右負

傷兵は擔架にて運ばれ來り蒲團や衣服などは皆血だらけにて見るも物すごく、今にも死ぬかと思はるゝのもあり早速擔架より卸ろし濟き病衣と取換へさせ、其日は負傷兵も疲れ居候につき、其儘休ませ翌日手術有之候處、最初負傷兵は佛國軍艦に收容せられありしも其手當宜しからざりしためか創口は眞黒に腐れ其臭氣言ふべからざるほどに御坐候、手のなきもの、足のなきもの、全身百二十箇所の砲傷あるもの、手の折れたるもの、あばらの肉をそぎとられ肋骨の出たるもの又は砲丸にて足を貫れしものなどありて敵兵とは申しながら實に憐れなる有樣に御坐候、創口よりは折り〳〵鐵片の一錢銅貨位のもの出るのもあり又は衣片の出るの



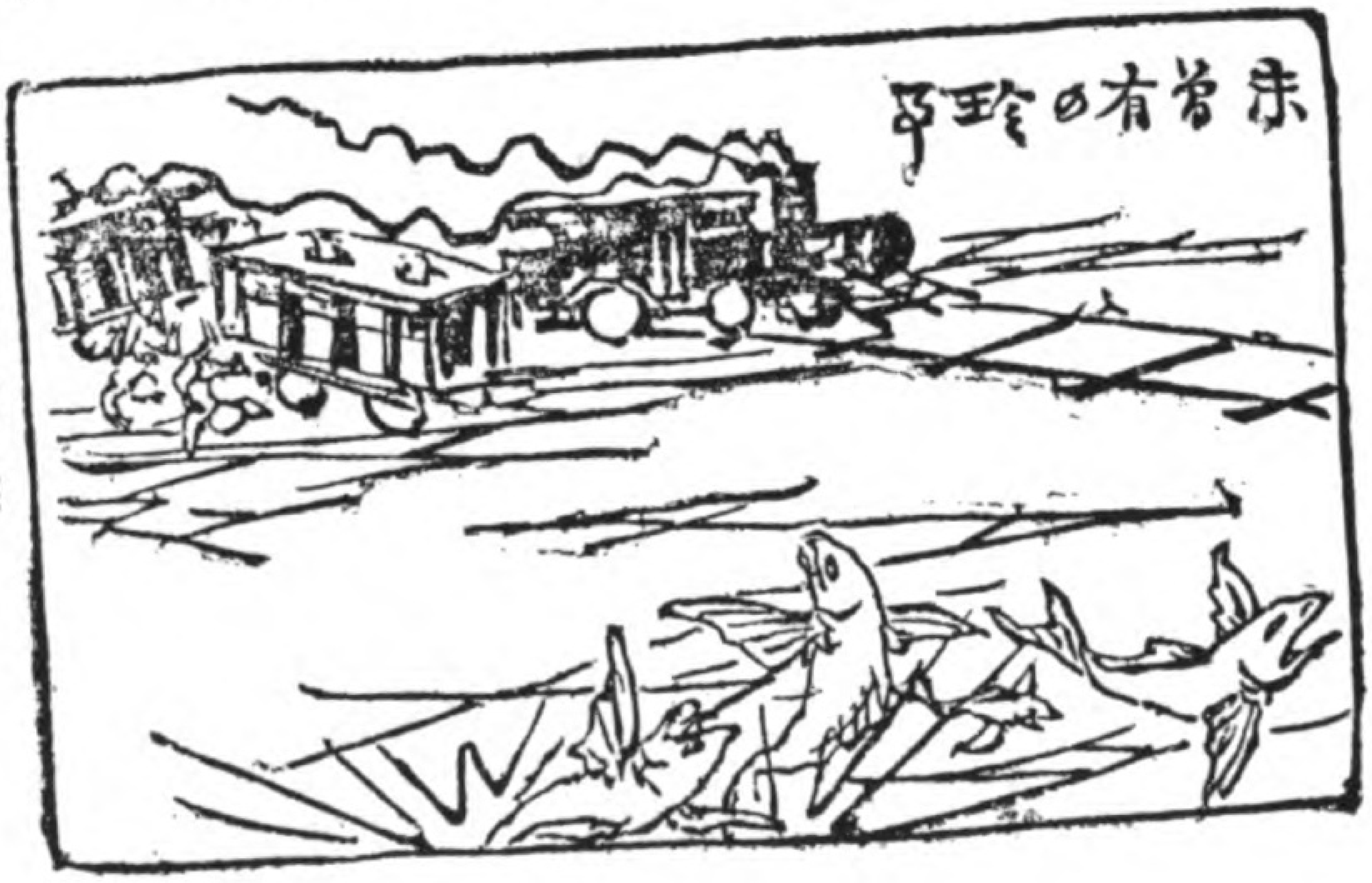
△巴會のポンチ畫（一）
露國の負傷兵

士官「又敵か」
擔架卒「ハイシカモ大男です」
醫官「元より博愛仁慈の御主意ではあるが敵國の奉公のみではコマル」

もあり皆々衰弱致居候佛國軍艦より右負傷兵を受取候節六名は兎ても全治覺束なき旨申され候由に承り候處入院後の經過甚だ宜しく其六名も追々宜しき方に候しが、二名丈けは餘病を引起し遂に死亡致候、又中には輕傷者二三名は間もなく全快致し「ほーい」の代りなど致居候、今一と月位にて皆々全快致すべくと存じ居候處、四五日前に赤十字社の病院船博愛丸入港致し右負傷兵を之に搭載し内地へ連れ行く事と相成候につきその趣を負傷兵に話申候處、皆々大に驚き私共と別るゝを哀み泣き申候、私共も是れまで介抱せし事とて今更手放すのは何んだか惜しい樣な心持致申候、右申上候通り私も晝夜の別なく看護したる故か疲れ

と風邪にて床に就き一時は四十度以上の体熱にて大に苦み申候只今は最早全快致候まゝ御案じ下され間敷候、此後はまた〳〵日本兵の看護に參るやも知れ申さず當地の兵站病院には六七十名の患者これあり是れは氣候風土の異なるため生じたるものにて戰塲へ出ることもできず負傷兵よりは一層不愍に感じ申候、私共は幸か不幸か相分り申さず候へども戰地と同様なる又は今後の戰塲たるべき滿州とやらに程近き當地に住み居候につき戰時は婦人の身も其れ相應の務あること此度始めて相知り申候何には兎もあれ私共の事は呉れ呉れも御心配下されざるよふ御願申上候先づは只今まで御無沙汰申上候御申譯までにかしこ。

▲巴會のポンチ畫（二）バイカル湖の氷上鐵道



魚族の驚駭「水底深く潛む腹黑の魚」

沙漠の花

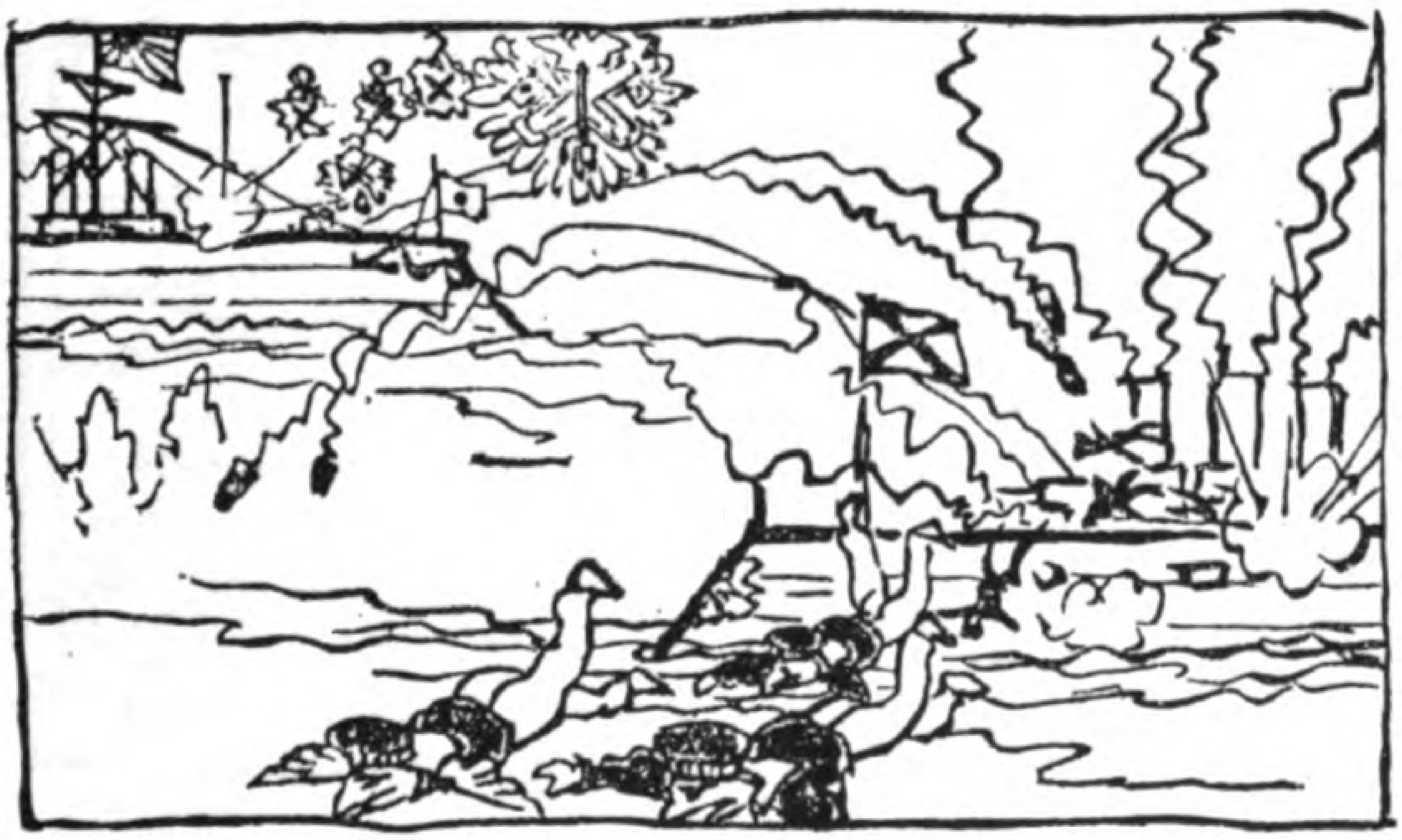
（蒙古女學の消息）

去年蒙古カラチン王の招に應じて赴かれたる河原操子は彼地到着直に敎育に着手し爾後健全に其職に努めつゝある由なるが近頃華族女學校幹事淺岡一氏に送り來りたる女史の消息として大阪朝日新聞に掲載せるものあり聊か蒙古敎育の狀況を知るに足るべきを以て轉記す

謹で新年の御祝詞申上候（中略）十二月十四日附の御手紙、今二十日着仕りまことにうれしう繰りかへし拜見仕り候處、先生御始め、皆々樣には何の御障もなう、御暮し遊ばされ候御樣子、まことに〳〵御うれしう存じ奉り候次に私事御かげ樣にて、着後益健かに、且早速女學堂の規則を編纂致し、王幷に福晋（妃

殿下の事に御座候）に御すゝめ申上げ、後宮の年少女子幷に王府附近在住官吏の女兒を集め（現今二十四名御座候）早速女學堂を開き（舊曆十一月十日即ち十二月二十八日に盛大なる開堂式を擧げ申候）其後日々非常に樂しく過し居り候まゝ、何卒御心安う思召下され度候。

學生等は初めて敎育を受けしものにて、皆非常の熱心、殆ど夢中の有樣にて日々つとめ居申候、私は蒙古語に通じ申さず候間、敎授は困難ならむと、かねて心配致し居候ひしが幸にも當王府の大福晋（御年配六十二三）幷に福晋（同三十三四）は北京の御方にて、後宮に居られ候故字は一字も見え申さず候へども、言葉はよく相分り申候、よりて第一に



▲巴會のヤンチ畵（三）
敵艦の轟沈

一は金鵄となりて中天に翔り
一は魚族となりて深く沈む

日本語を敎へ、次に私事北京語に譯し、福晋及び北京の後宮兒に奉仕せし婦人をして是を蒙古語に譯さしめ申候、まだるき樣には御座候得共案外工合よろしく候、此頃にては學生等『先生さよなら』など申候又私が『我的筆』と申候へば生徒は蒙古にて『ミニービール』と申候、又私『チルチーイエンタイ』といへば生徒は『他的硯臺』と申私『稱的紙』といへば、生徒は『チニーチャース』と申候王及び福晋は非常な御よこびにて日々御見えに相成り、生徒と共に御稽古遊ばされ、習字の時間などには福晋が御手傳下され御めし物に墨などつき候折には、先生私は着物に習字を致せしなど、御戲れに相成候まゝそれは、さぞ御上手に御なり遊

ばしませうと申上げ大笑ひを致すことも御座候、大福晉も始終御見えに相成、我も生徒と共に勉强致し度ものよなど仰られ候、

當王府を始めとして、附近の者皆日本のことは一より十迄皆よしとして、王始め一方ならずよろこばれ申候王、福晉共に非常に聰明の御方に御座候、生徒の中に王の令妹が居られ候が今年十七歲になられ候よし、此御方の腦の御よろしきは實に驚くほどに御座候、日本の學校にて二三年も勉强遊ばされなば、如何に御立派になられ候はむと存候へども、すでに蒙古部内の或王に嫁がれ候約束あるよし、先方にては直ぐにもといはるゝよしに候らへども、當王のかゝる無敎育の者いかで直に遣し得べき、二三年敎育してと申されて、暫くのび居候よし、此御方の敎育につきては、王より呉々も御依賴をうけ申候、まことに柔順の方にて私を母の如くに思はれ、些々たる事までも、申通りにせられ候令妹が此の如くに御座候ゆゑ、他の生徒もこれを見ならひ、非常によろしく候、生徒中に賢き者も御座候へども、此方は不思議なるほどぬきむで居られ申候、二三年の後には喀喇沁部の他に日本好の部落が出來候ことゝ存樂みに致し御敎申居候、(中略)此度は先生に御心配いたゞき、有難き御言葉たまはり、まことにうれしう存候、日本婦人の代表者として踏み出し居候こと故些少のことにも、よく〳〵注意致してと、それのみは一昨年來、片時も忘れ候ことゝ御座なく候へども猶今後は一層の注意を加へ申すべく候、云々

米國篤志看護婦　マギー女史を迎ふ

陸上の皇師鴨綠江畔に屯して一躍直ちに滿洲の敵壘を衝かんとしつゝありし去月中旬の廿二日、風朗なる横濱灣頭の銀波を蹴開いて、靜かに入り來し一滊船あり、是ぞ兼て噂ありし從軍看護婦アスタ、ニウカム、マギー女史の一行を載せたる米國滊船ショーマット號の愈々入港したるにぞありける。

埠頭には我が赤十字社の出迎員を始め、歡迎の貴女

紳士おびたゞしく集ひて、一行の上陸を今や遲しと待ち構へたるに、間も無く碇は卸されて、數百の船客と共に、鳶色の看護服着けたる一隊、棧橋上にあらはれぬ。

彼等は初めて見る戰勝國の青山白水が、賑々しく新來の外客を迎ふが如き光景に、滿足の笑を湛へて、其の足取も自ら活々たり、軈て鳶色服の一隊、我が歡迎員の前に近付くや、連打する拍手の聲、靜なる波止場の空に動搖めき渡りて、手から手に握手の禮の交換されつ。

扨て一行の人々を見るに、孰れも萬里の海波を乘切り來りて、戰雲漲ぎる朔北の野に陣中看護を試みんとする人々のことゝて、世の常の婦人とは異り、渾身皆膽底の雄々しさを以て滿たされ、自ら氣高き氣品の備はるを認めぬ、隊長のマギー女史は年の頃三十二三なるべし、其の容貌は日本にて謂ふ中高顏にて、敢て美しとにはあらねど、眼氣凉しく、口元締りて、其間に無限の愛嬌を湛へ、而も一點凛乎として犯す可からざる勇氣を包みたるが如し、

少時して女史の一行は出迎の人々に擁されて、横濱なる赤十字社支部にと歩を移しぬ。

此時一老婆あり、傍なる一紳士を顧みて曰く、此の人々は抑も如何なる人達ぞ、と、紳士笑ふて曰く、此は是れ我軍に從ふて、傷病兵を救はん爲め、遙々米國より來つたる看護婦隊なり、彼の先に立ちたるが有名なるマギー女史にて、此隊の指揮官なり、女史は今を去ること十五年前、ドクトル、マギー氏に嫁したるが、婚后良人の訓下に、醫術を學ぶこと數年、遂に開業醫の免許を得るにさへ至り、現に數年前迄彼の國の陸軍軍醫班に在りたれば、米西戰爭の際には二千人の看護婦を指揮して砲煙彈雨の間に野戰看護を勤めたり、一行はマギー。ソフイヤ、ニウエル。エラ、キング。メリー、グラドホン。エリサベス、クラック。ミニー、クック。アデル、ニーブ。ゼチホープ、ラッセル。マデレード、マカレスの九名なるが、中五人はヒラデルヒヤの人にして、他の四人は紐育、ニウゼルシー等の

諸州より來れる人々なり、孰れも米西戰爭、ヒリッピン戰爭等に從軍して實地の經驗を積み、たる人々なるが、嗟此際北清拳匪の爭亂當時、北京にありて各國兵士を看護せしを以て有名なるアリス、ケマー女史が疾病の爲に一行に加はり得られざりしは甚だ遺憾なりと言へば、老婆は其の意を了解してや、マア感心な方々よ、と呟いて、暫時は一行の後姿を見送りて目も放さず、感嘆の淚に咽び居たりける。

因にマギー女史が米國出帆前人に語りたる所を記さんに曰く、「赤十字社は博愛慈仁を目的とす、されぱそが看護婦たる者は、單に負傷病兵を看護するの術を知るのみならず、普通の兵卒と同じく必要の場合には自ら露營を建築するの術をも知らざるべからず戰場に於て食物に缺乏する場合には自ら出でゝ之を求めざるべからず擔架卒の負傷者を齎すを待たず自ら戰場に出でて彼等を荷ひ來るの勇氣なかるべからず日々十八時間看護に勤めて猶疲れざるの健康なかるべからず僅かに數枚の毛布を纏ひ大地に横はりて一夜を明かすの覺悟なかるべからず要するに看護婦は兵卒の爲す所をば大抵之を爲すの決心なかるべからず余は斯くの如き決心を以て日本の陸隊に從はんと欲するものなり」と、あゝ、女史はかゝる抱負と覺悟を以て我軍に從ふ、第二のナイチンゲール孃として、目覺しき功績を日露戰史に輝かすこと必せり、吾人軍國民は天使に等しき此の一行に向つて多大の尊敬と感謝を拂ふ、神よ慈仁義俠の彼等に加護あらせ玉へやと爾云。



マギー女史

女子大學卒業式を觀る

目白臺の青葉がくれに咲き出でたる

南風に競ふて、花の、都の春を錦と飾る四月の九日、小石川高田なる女子大學にて第一回卒業式を擧ぐると聞こえたれば、豫て招待を受けたる記者は、いでや此の光榮ある儀式に參列せんものと、車を驅つて、江戸川端に吹雪と飛散る櫻花を眺めつゝ、軈て目白坂に差掛りしに、道のべには早や同校生徒の群、三々伍々、前に後に袖を列ねて來るに逢ひぬ、彼等は意氣揚々として袴の裾捌きもいと潑剌たり。



旭日旗を交叉したる校門前に、來賓を送り込みたる空車の轅を列ねて控へたるに見ても、今日の儀式の盛況が先づ推量られつ。

構内の運動場には紅白段染の幔幕を引き廻しあり、猗々たる緑樹の間に櫻花絢爛、今を盛り

と咲き綻びて兩々相映發する下蔭に、天幕を張りて、中に椅子、卓子をしつらひ、來賓待遇の席とはなしぬ、玄關に刺を通じて、階上の來賓控室に入り、待つこと少時、頓て午後一時の振鈴と共に、當日の式場たる階下の講堂に案内さる、式壇はいと清楚に又た質素にしつらはれて、こちたき裝飾の無かりしため、一層壯嚴の念を催したり、場内を見るに大學部卒業生百二十名を前列に、附屬高等女學校卒業生八十三名を後列にし、教職員諸士、



來賓諸氏左右に居並び、後方には在學生幷びに父兄保證人の席あり、總て千五百あまりと註せらるゝ人數を以て埋められたることなれば、さしもに廣き講堂内も肩々相摩するの狀況なりし。

かくて一同席定るや、喨玲なる洋琴の音、場の一端に起るや頓て、起立して「君ケ代」を合唱し、次に學監麻生正藏氏の數字的報告ありて後、卒業證書、成瀨校長の手より授與されて鄭重を極めたりき、了つて高等女學部卒業生

一同起立して唱歌「感謝の譜」を歌ふ。

「雨の日も風の日も、安らかに守られつ、治まる御代の光を受けて、」と歌ひ出で、其より「嬉しくも此庭を去らむ」と高らかに「よしや今、こゝを去るも」を極めて低く、「いかで我が忘るべき、學びやの恵みを」と高く大きく歌ひ續けたる其の聲其の調、嘈々切々として滿場の心耳を澄ましぬ。

次に校長成瀬仁藏氏の告辭あり、本校茲に三年の星霜を經て、其の第一回卒業生を出しぬ、諸君は實に我が校の總領娘なり、此際諸君に囑すべきこと頗ぶる多し、を冒頭に、婦人の責務、家庭の革新等に就て諄々數萬言を列ねらる、卒業生に餞する言葉としては餘りに冗長にして一大論文の朗讀めきたれど、而も生徒は之が爲めに最大の教訓を齎し歸ることとなるべし。

其より高等女學部卒業生總代門田駿子孃の麗しき謝辭あり、次に大學部卒業生總代丹下花子孃の謝辭となりしが、情に富みたる文字もて、在學中の師恩を謝し、卒業の榮を喜び、訣別の哀しみを叙して、綿々縷々讀み上る辭意の切なる、滿場爲めに感に打たれて水を打ちたるが如し、就中同窓の友は情迫りて感慨一層、いつしか手巾を嚙んで欷歔の聲を放てり、茲に至つて麗しき卒業式は一段の美を加へて情あり涙ある儀式と化しぬ。

次に侯爵西園寺公望氏の演説あり、言辭明晰にして簡潔要を盡せり、續いて東京府知事千家尊福男の祝辭代讀、文部大臣久保田讓氏の祝辭朗讀あり、それより大學部卒業生一同は起つて、唱歌「卒業式」を歌ふ、

其一

なさけの露のかゝらずば、
この下草の今日の日を、
教への親の御惠みは、
あゝいつの世か今更に。

其二

ふるさと人に父母に、
逢ふ嬉しさの明日よりは、
なれし學びの友どちに、
別れむ事の今さらに。

其三

さらば師の君つゝがなく、
ますますおはせ萬代を、
教への園の花紅葉、
榮ゆく庭もいや榮くる

其四

學びの友よいざさらば、
別れむ後も諸共に、
うけし教へをしるべにて、
世の浪風は荒らくとも

是にて式を終へ、階上に陳列したる成績品を一覽に供し、運動場の天幕内に於て生徒の調理に係る茶菓を饗應し、散會したるは午后四時を過ぐる十分、因に本校卒業生を記せば左の百二十名なり、

家政學部卒業生

石井嘉久(埼玉)
井上シヅ(京都)
稲資靜枝(京都)
井上秀(兵庫)
出永澄(熊本)
石原千代(愛知)
原その(佐賀)
友近サト(愛媛)
奥宮加壽(高知)
小原ちせ(千葉)
和田トク(島根)
片瀬とし(東京)
芳田りヨ(奈良)
玉木直(新潟)
中村常(岡山)
村上マツ(靜岡)
藤田ユキ(山口)
山木萬(宮城)
黄楊てい(北海道)
石澤信井(北海道)
井上應(福岡)
岩田靜(京都)
稲村まと(埼玉)
井村のぶ(茨城)
林ヨ子(栃木)
大浦つる(京都)
小笠原スヱ(長野)
太田朝(長野)
服部せい(茨城)
金子萩野(福岡)
田崎千代(茨城)
丹下ムメ(鹿兒島)
長澤八重(山形)
上関とみ(岩手)
工藤眞十(長野)
前田カツ(佐賀)
松本美豐(熊本)
松山スゞ(鹿兒島)
藤田のぶ(千葉)
小杉きみ(三重)
手塚カ子(栃木)
佐藤俊(千葉)
喜田節(香川)
黑谷濱路(群馬)
木山節(大阪)
須田ちゑ(宮城)
松浦のぶ(山形)
松崎眞(千葉)
藤林しづ(兵庫)
後藤愛(宮城)
淺野りき(東京)
齋藤はな(宮城)
宮崎千代(山形)
平井セン(岡山)
杉野喜代(三重)

合計　五十五名

國文學部卒業生

板倉うめ(東京)
今井しづ(岐阜)
稲葉しん(茨城)
稲木八重(東京)
服部ます(福島)
細谷はま(群馬)
大槻彩子(岡山)
吉見キヨ(愛媛)
吉田すな(岩手)
高松田濱(長野)
丹下花(鹿兒島)
中村眞代(宮城)
中内春惠(高知)
村上かめ尾(岐阜)
飯塚貞子(福島)
岩根みゑ(北海道)
井上メミ(大阪)
服部さよ(廣島)
畑幸(大阪)
岡田きやう(香川)
大前もと(兵庫)
吉村キヨ(廣島)
田中とし(東京)
田中友惠(愛媛)
辻内まん(大阪)
中安親子(東京)
村上まさ(愛媛)
梯宮ナミ(福島)

富谷まと(茨城)
山下たみ(兵庫)
薬師院たつ江(奈良)
松田藤惠(北海道)
篠沼留(栃木)
藤原千代(岡山)
高坂よし(長野)
河野まつ(熊本)
青木龍(栃木)
佐藤蓀(千葉)
木下きくに(山口)
木村一千代(滋賀)
清水マツ(愛媛)
弘田由己(高知)
瀬野信(福島)
鈴木きみ(山形)

栗原願(埼玉)
山田智惠(埼玉)
前川ふき(長崎)
藤村初子(東京)
深澤くに(兵庫)
小橋三四(靜岡)
小林つぎ(福井)
明石靜江(兵庫)
櫻井文子(東京)
木下喜久(長崎)
木野村かよ(神奈川)
菊地はじめ(岩手)
廣川なか(新潟)
平山千重(長野)
鈴木審家(東京)

合計五十九名

英文學部卒業生

岩井信(愛知)
松田げん(北海道)
三宅冬衣(山梨)
野中トミ(佐賀)
阿部高野(德島)
正田澂(栃木)

合計六名

終に臨んで記者は是等卒業生諸姉に一言を呈せんと欲す、夫れ諸姉は我邦最初の女子大學校の最初の卒業生として最大最高の名譽を擔ひ玉へると共に、是より活社會に出で丶、新家庭を料理するの責任亦た諸姉の双肩に係れりと謂ふべし、而して今や我邦は前古未曾有の時運に會するを以て、國力發展后の經營に於ては諸姉の手腕に俟つこと頗る大なり、此時に當り諸姉は最高學府の第一回卒業生として母校の名譽を世間に發揮せられんことを、乞ふ自重せられよ。

◉女學の盛衰

最近の文部省調査によれば公私立高等女學校數及び職員生徒數は左記の如し

年度	學校 公	學校 私	教員 男	教員 女	生徒 公	生徒 私	生徒 計
三十五	七二	七	四一九	七四二	一九、一八五	二、〇一九	二一、二〇四
三十四	六一	八	三五五	六〇七	一四、九七五	二、二四〇	一七、二一五
三十三	四七	七	三一〇	四一九	九、七四六	一、九三二	一一、六七八
三十二	二九	七	一二七	三〇五	六、六四〇	一、八〇四	八、四四四
三十一	二五	八	一三五	二六四	六、〇四〇	二、一〇六	八、一四六

これによりてその進歩發達の著しきを見るべし而してこは卅五年までの調査なれば現在にては校數殆ど一百に達しをるなるべく尙右表に私立學校とあるは所謂認可學校にして認可を經ざる高等女學校程度の女學校他に數十校ある由

集會彙報

▲軍人家族授產婦人會

出征軍人の家族にして職を失ひ貧困なるものに對して職を與へつゝある同會は千家男爵夫人、伊東子爵夫人、清浦男爵夫人其他合して十名の發起にして洗濯裁縫其他簡易なる業務を爲すに在り男子にても婦女子にても職工たるを許し幼兒ありて十分の仕事を爲す能はざるものには就業中幼兒を保護する事なるが陸軍部内にても大に此の擧に同情を寄せ種々の便宜を與へ既に麻布三聯隊及び一聯隊の被服洗濯を受負ひつゝあり而して第一着に芝區内の出征者家族を募り職工に當て次に麻布區内のものに及ぼす定めなれども若し希望者ある時は事業の許す限り二區外にても兵事會の證明書を持參せば職業に從はしむる筈にて去三十日より開始されしが幼兒を携へたるもの多きより發起者中最も熱心なる岡田治衛武氏夫人靜子は隣家を借り受け職工中の三名を撰び幼童保護を爲さしめ自ら監督し居れり又岡田實氏外三四名は無給にて仕事の取締を爲し發起人の內三四名宛日々交代にて臨場し萬端の注意を爲し居れるが同所は元と西洋洗濯の跡にて萬事都合善しとなり。

▲淑德女學校生徒の美擧

同校は敎職員生徒一同協議の上通常授業の外に更に裁縫時間を設け此時間に軍隊用の裁縫を爲し又は軍隊以外より裁縫の依賴を受けて其得たる金圓を軍資又は恤兵に献納することに定め蟲に某聯隊の脚絆百足裁縫の依賴に應じて即日之を縫上げて軍隊に納めたりしが同校卒業生は去二月より各自に申合せ父兄より貰受けたる小遣錢并に筆墨紙費等を節約して貯蓄したる金員四十圓に達したりければ今回金二十圓を軍資金に卒業生總代安田規矩子より金二十圓を海陸軍恤兵部へ同淺羽芳子より寄贈を願出でたり。

▲軍國婦人の美擧

今回の事局に付大山元帥以下各將官夫人の首唱にて恤兵義擧あり左の趣旨書を發表せられたり。

前略御容赦被ト度扨今回の戰爭に付老いたる父母を顧みず妻子をも捨てゝ遠く戰地に從軍せられたる我軍隊の勞苦如何を想像いたし候へば感慨に堪へざることに御座候就ては私共發起人と相成博く金員を醵集して其筋の人々と協議致し適應の物品を購入寄贈致すか若しくは金員にて恤兵部へ献納しいさゝか從軍者の勞苦を慰め度存候間御同感の方々には御贊成下され金拾錢以上の御出金相成り度願上げ奉り候敬具

追て物品の選擇又は物品にて寄贈するか金員にて献納するか其邊の事は一切發起人に御任せ下され度候又金員は發起人の內へ御送致被下度候

發起人

侯爵夫人　大山捨松
大臣夫人　寺內瀧子
伯爵夫人　野津登女子
男爵夫人　黑木百子
男爵夫人　奧　茂
男爵夫人　兒玉マツ
男爵夫人　長谷川辰子
男爵夫人　乃木靜子
少將夫人　上田常磐
少將夫人　石本鍼子
少將夫人　福島貞子
少將夫人　伊地知雪子
大佐夫人　內山訓子

▲海軍下士卒家族共勵會

廿七八年戰役後橫須賀に於ける海軍下士卒の家族は一般に風習大に亂れ道德上甚だ厭ふべきの弊習を生じたるのみならず時には賭博等の犯罪行爲をも行ふもの少からず其風儀頽廢實に極度に達し當時民間に於ては荀も風儀の善良ならず

る者を指して水兵家族なる代名詞を唱ふるに至れり是れ一には夫たる下士卒の一度び航海に從事するときは久しく其拘束を受くることなき自由を有すると一には是等の妻たるものは一般に正式適法の婚姻によりて生じたるもの甚だ稀にして多くは野合に起因し離合常なく從つて敎育あるもの又は事理の辨知あるもの殆んど少なきは蓋し其一大原因なるべしと云ふ是に於てか將校夫人の有志相謀り此等の家族を救濟せんか爲に客年一月を以て海軍下士卒家族共勵會なるものを設立するに至れり。

●事業　海軍の所要品にして女子の手を以て爲し得べき仕業は成るべく之を引受け會員をして從事せしめんとするにありて水兵のシャツ服下並に信號旗の製作、火藥嚢の修補、被服の洗濯器具の手入病院及び監獄所要具の製作、修理等其主なるものとす從來是等の事業も建築、土工等の業と同く一般に請負者なる御用商人に委せられたるを以て直接裁縫等に從事せる婦女子は其勢に酬ゆる相當の賃金を得る能はずして所得の大部分は請負者に横奪せられたるの實況なり從つて此の事業を計畫するの當初多少反對の聲なきにあらざりしも夫人諸氏の專ら當局の人に說く所あり爾來漸次に其成蹟の好良なるものあるを以て今日に至りては會員の從事するに充分なる範圍迄は仕事の下付を受くること甚だ容易にして目下不足を感ずるが如きことなしと云ふ

●現況　共勵の効果は既に著しきものあり會員の風儀を改善したるのみならず多少の基金を有するに至り　皇后陛下並に皇族の御下賜金あり裁縫機械の如きは十三臺を購入し工場は不用の官舍を借受け之に充用せるも次第に狹隘を告げたるを以て入會希望者切りに增加するも目下は之を拒絕するの止を得ざる狀況なりと云ふ每日通勤するもの百五十餘名賃錢の多きは一ヶ月廿圓少なきも七八圓を下らずと云ふ又本會の事務は主として榊原夫人之を擔任し其他の夫人之を助け各自一家の整理子女敎育の傍ら熱心に從事しつゝあり事務の費用としては書記を囑托したる下士集會所の書記に每月三圓及び婦人世話係の爲め雇入れたる老婆に五圓を支給するの外役員は一毛の報酬を受くることなく專ら節約の方法を採り收入の幾部は之を基金として工場の建築に充てんとする計畫なり目下基金一千餘圓なりと云ふ。

△救助令の旨意

内務大臣の訓令に曰て豫備後備補充兵の應召下士卒等の家族にして隣佑等の救護あるも尚其生計困難なるものは今回公布せられたる救助令に依り國庫より救助費の下付あるも元來是等家族の扶助は之を國費に俟たず隣保相扶の誼に依り保護の途を立ること最も適應の措置たるのみならず國庫より支出せらるゝ救護費は救助の一端を資くるに過ざる次第に付此際更に一層隣保相扶に努むるの急要なるべきは論を俟たず又公私何れの救助にせよ直接金品の給與は之に伴ふ弊害少からざるを以て充分之が矯弊に努め成るべく生業扶助の計に出づるを以て兩全の方法とす殊に今日の場合應召軍人の家族なるものは宜しく應召者の非常勞苦に察し平時よりも一層其生業に努むべきは勿論に付苟くも勞苦に堪ゆるものは之を激勵し徒らに他に依賴するが如きことなからしむるを期せざるべからずと云々。

△日本女學校卒業式

本郷區龍岡町なる同校にては去月七日午前九時半を以て其の第三回卒業式を擧行せり、來賓は土方久元伯、副島種臣伯を初め、各學校長、名譽職等五拾餘名、初め君ヶ代の唱歌、校長西澤之助氏の敕語捧讀、卒業證書授與、賞狀授與、生校長の訓辭、土方伯の祝辭、副島伯の演說、生徒及職員總代の祝辭、卒業生總代の答辭等、あり、終つて別室に於て茶菓の饗應あり、生徒成績品を縱覽に供し、午后一時散會せり、卒業生は本科百八名なりと。



才媛詞藻

塚越停春君選

石見　宮内登美子

〔天〕餞別

やすらかに眠れる乳子をゆり起し
背子の門出を送る朝かな

評曰。一見何の奇もなき如くなれども、よく眞實を歎ひたるを以て、早曉夫婿を送りてステーションに急がむとするの態、目睹るが如し、乳子をゆり起すの一事を以て、其尋常一樣の旅立を送るに非ざるを見るべく、怱遽匆卒の門出にして徐ろに別情を叙する能はざるの狀、自ら言外に躍若たり。所謂王事無監ものに非ざるなからむや。

又、原作「乳子を」を「乳子も」とあり。乳子さへも搖り起す程なれば、其他の人々の擧て之を送ること知るべく、主人の門出に全家之を送るの狀見るべしと雖、蕭稍散漫なるを免れず。故に「も」を「を」に改め、以て意義を緊密にし、乳子に重きを置けり。此くの如くにして、父子の別は竟に永き生別となるやも知るべからざるものとなり、夫妻の別亦之に同じきこと言ふまでもなく、從て餘韻の自ら長きを得るに至らむとす。

〔地〕山吹　　京都　中川あい

何となくゆかしかりけり山吹の
咲きこぼれたる野路のひとつ家

評曰。何となく床しくして其理由を知らざるの所、即ち詩意の在る所。唱破せずして、人に道灌の故事を憶起せしむ。凡手に非ず、

〔人〕樵路躑躅　　東京　佐藤千代能子

岩つゝじ今盛りなりみ山路を
わけてや行かむ見てやかへらむ

評曰。花を愛みて低回踟躕するの狀見るべし。又用語の慣熟せる、決して初學者の爲し得べき所に非ず。下句最も妙也。

秀逸

〇〇山吹　　上野　黒岩美山子

岩淵の眞青なる水に夕づく日

うら〱にさして山吹の散る

暮潭斜陽の物凄き景に、儚しき山吹の落花を取合せて、言ふべからざる趣あり。

○○山吹　　東京　高宮安子

水なれ棹さすがにをしき山吹の
　花に浮べてのぼる筏か

景趣見るが如く且詩人温厚の体を得。敬服々々。評者もと之を（人）に置かむと擬せり。唯下句「花に浮べて」の用調少しく明暢を缺かむと欲する憾みあるを以て今暫く之を秀逸に取む。

○○山吹　　河内　大矢たね子

路の邊に咲きし山吹折り取りて
　しばし胡蝶に追はれけるかな

「しばし胡蝶に追はれたり」とは、何等の奇想ぞ。

○○山吹　　熊本　安田文子

春夏を一重隔つる中垣に
　八重咲き匂ふ山吹の花

「一重」と云ひ、「八重」と云ひ、「隔つ」と云ひ、「中垣」と云ふ、用語の妙至る。

○○山吹　　東京　林芳子

酒に酔ひ戀に狂ひてやらはれし
　女神のなりたる山吹の花

所謂奇想天外より落つるもの。警抜甚し。

○○山吹　　和歌山市　各井清子

池の邊に八重山吹の咲きしより
　水もいろなる春の夕はえ

全篇妙。下句殊に妙。

○○山吹　　東京　愛子

あひる一つかへりおくれし城跡の
　古池寒く山吹の咲く

興亡の感長し。

ヽ○餞別　　大阪　櫻井喜子

太刀抜けば露營の月に露ぞ散る
　父が賜ひし仇討たむ太刀

壯快なる歌也。唯用意に緊密ならざるを憾むのみ。

ヽ○山吹　　京都　三宮つゆ子

桃櫻ちりにし日よりひとりして
　はるを占めたる山ぶきの花

面白し。

○餞別　　東京　佐藤千代能子

悲しきが中にもうれし君と吾
　これやまたあふはしめとおもへば

着想凡ならず。

ヽ○山吹　　石狩　佐々木まさ子

空のくも動くともなくたそがれて

山吹ちりぬ川添の里

詩味饒し。

ヽ○餞別　　　島根　岸崎以志子

ほまれある君が影身に副はんとて
　友の門出におくるうつしゑ

好作。

ヽ○山吹　　　仝

賤の男がはかなき夢に通ふらむ
　黄金さかする垣の山吹

少しく諧謔の意あれども、語意凡ならず。

ゝ○山吹　　　大坂　廣島いち

思ふ事いはぬ色には咲けれども
　にほひこぼるゝ山吹の花

「いはぬ色」「匂ひこぼる」、相反映して趣あり。

ゝ○同　　　東京　佐藤千代能子

なべてみな黄金をめづる世なりけり
　八重山吹の實はあらずして

歌調あり。

ゝ○樵路躑躅　　　備中　大西操子

斧の音かすかに響き夕霞
　こむる山みち白つゝじ咲く

一語のゆるみなし。妙。

ゝ⊙山吹　　　東京　古川すゞ子

さらでだに枝重げなる山吹に
　露さへおきぬ井手の玉川

此くの如き眞に婦人の詩と謂ふべし。

ゝ○餞別　　　伊豆　向井ひで子

ほまれあれまさきくあれといのりつゝ
　君がゝど出をおくる今日哉

何の奇なけれども、至情此くの如し。

ゝ○山吹　　　秋田　梅田くに子

口なしの色には咲けと山吹の
　花の心ぞゆかしかりける

趣味あり。

○餞別　　　河内　矢寺はぎ子

はなむけに散りぬる櫻たてまつり
　咲きかへり來むはるをまたばや

着想面白し。

ヽ○山吹　　　備中　村田さく子

礎の殘る館跡荒くれて
　昔床しき山吹の花

感慨多し。

ゝ○山吹　　　名古屋　清水みさ尾

やまぶきの花の流れをせきとめて

川瀨に春の名殘とゞめん

花の流れをせきとめて川瀨に春の名殘を留めむとするの意極めて面白し。めでたき歌也。

ゝ〇山吹　岡山　横山龜子

手折らむかそれもすげなしこのまゝに
　畫筆とらむか山吹の花

趣あり。

ゝ〇餞別　備中　大西美佐保

はなむけに贈る肌着を血に染めて
　益良夫脊子の善き名立たさね

人情に近からざるに非ず、武士道の感化盛なる也。

佳調

（山吹、餞別、樵路躑躅）

●　東京　中野信子

夕まぐれ行く手をいそぐ旅人もさほとめて見る岸のやまぶき

此くの如き眞に好作と謂ふべし。

●　伊勢　中津喜美子

はなむけに來ませる里の長老いて昔語りに日は暮れてけり

よく實情をうがちたるもの歟。

●　津市　永田かず子

春雨のはれし小川の岸の上に匂ひこぼるゝ山吹のはな

●　名古屋　森井せき子

何となく唯何となくたゞずみぬ山吹咲ける柴折戸のもと

上句用調妙。

●　東京　高宮安子

ひめおきし鏡のそこの黄金にてせこがかどでの駒をかはなん

山内一豐の妻を詠したるもの。

●　東京　加藤やす

いさぎよく散りての一語はなむけてそむくる面に櫻ちりかゝる

是れ實に人の情也。

●　長野　吉田文子

分けのぼる道かはるとも高嶺にてともにながめむ昔の葉の花

●　河内　岡市岸子

必ずよこの御守をはだへにとかどでのあした母のゝたもふ

●　鎌倉　坂本ふゆ

立かへりしばしながめむやれ垣の八重山吹に夕日さすなり

●　東京　林よし

春雨にぬれつゝも行く人の袖をしばしと留むる山吹の花

●　大阪　立花しな

杣人の通へる蹊に月見ねて谷の巖岸躑躅花咲く

●　越後　わか子

賤かさぬ宿とは見ねずゆかしくも琴の音もるゝ山吹の垣

語やゝ生硬の嫌あれども意は則ち斬新。

●　京都　太田妙子

嬉しさの餘れるけふの別れにもいかで淚のもろく落つらん

●　大阪　大道若葉

心なき木こりもこゝろとゞめけむ折りしあとある岩づゝじ花

● 岡山　濱　子

行く春のなごりとしれば山吹の咲くさへおしき心地こそすれ

好詩。

● 祖か谷　須山規矩子

まさきくの唯一言をはなむけてしとり笑顔に御門出送る

善く婦人の情を叙す。

● 熊本　永田とし

まさかりをめづる言葉もくちなしのいはまに咲ける山吹の花

● 三重　ら　く　子

手折りゆく人もなしとて山かづは行手のつゝじ折りのこしけり

● 東京　本多ひろ子

朝な夕な眺めつゝなほあかなくに一枝手折りぬ山吹のはな

● 信濃　錦織千代子

櫻一枝駒にかざして言の葉も涙もあらじいざゝらば君

● 福岡　太田とも子

雨にくれて草のいほりを訪なへばいらへはなくて山吹のちる

● 河内　大矢たれ子

唐國の道のおくかはたどるともわかしきしまのゆくへわするな

好教訓。

● 三河　永田きん

ものいはぬこととはましを山吹の何くちなしの色に咲きけむ

用語妙々。

● 伊勢　岡島靜子

樵夫のみ通ふ險道險道の右も左も岩躑躅のはな

● 駿河　菊地武子

山吹の花咲き匂ふ中庭に夕日流れて蛙はひ出ぬ

● 伊勢　石王よし枝

おのれのみくれ行く春ををしむともいはぬ色なる山吹の花

妙々。

● 越後　近藤綾子

過ぎ行きし馬子の小歌の音たえて小川のあたり山吹の咲く

● 大阪　楠瀬すか子

立ちよりて折らまほしくも思ふかな垣根ごしなる山吹の花

● 越後　し　げ　子

追分のふし面白くきこりあまた行くかげ消えぬ花つゞく路

● 東京　島田とよ子

門に出でゝ待つらん人に見せばやと柴をおろして岩つゝじ折る

孝心可感。

● 羽後　み　ゑ　子

駒とめてふりにし世をし忍べとはいはれど色にいでの山吹

用語妙。

● 兵庫　柳田俊子

月はなゝめ山を下り來る樵男の右手に赤き山躑躅花

● 東京　中村八千子

遠征の人はかへらず軒くちてあれたる庭に山吹の咲く

趣致多し。

● 津市　米澤よし子

筒井筒昔の庭や露けくて君逝ませど山吹咲きぬ

● 東京　鈴　子

桃さくら散りにしのちに咲き匂ふ八重の山吹こぼれそめけり

眷慎無既。

●きこりうた遠くきこゑて日のかげに紅ゐはゆる岩つゝじの花　東京　藤なばな

●見よさらば櫻なそへし一ふりなはなむけにせむいざ征けやゆけ　東京　安井とみ

●桃櫻ちりしかきれに吾はまだのこりて匂ふやまぶきのはな　高田市　小林靜枝子

●すがたのみ美しきとて何にかせむ咲きしかひなき山吹の花　前橋　小林ゆき

教訓あり。

●山吹の露にすがりてぬる蝶の夢やぶれんに風なそよぎそ　大阪　岡市岸子

●なつかしくたゞなつかしく思ふかな君めでましゝ山吹の花　神戸市　高井小ぎく

●手折るにはよしかたくとも舟よせて山吹さけるかげにあそばん　愛媛　高橋貴子

●かはせみの鳴く音いづこと舟とめて見かへる岸に山吹の花　京都　葉山みさを

●我宿の八重山吹は咲にけりあるじの風よこゝろしてふけ　千葉　平田鈴子

●蛙なく小田の夕を山吹の花散る見ねて春の雨ふる　島根　愛子女史

●思ひあまり神のまもりの[illegible]ひらになさけなこむるあはれ乙女子　東野きぬ子

千葉　千葉秋夢

●屋根はもり垣はやれても山吹の花は黄金の色にさきけり　上總　井上きみ子

●城跡の古井のわたり草しげく枝もたわゝに山吹のさく　茨城　杉山たま女

●山かつの外にゆきかふ人もなし躑躅花咲く苔のふる路　神戸　中村きく

●いつしかと庭の山吹さきそめて人に訪はるゝ宿となりにき　大阪　島君代

●柴負ひてかへる翁なみちの邊にまつにも似たりひめつゝじ花　大阪　平田いち

●ゆくら〳〵柴舟ながす保津川の岸の山吹花さかりなり　水戸　榊春子

●いづこにか舟こぎよせんいさゝ川山吹さきて春長閑なり　熊本　羽田豐子

●よしの川岸の山吹さきそめて花みの月の水にうつれる　熊本　安田文子

●此庵の主人もゆかし山吹のはなの八重垣深く鎖して　長野　くに子

●山深み岸の音ひゞく道のべは赤きつゝじのほこりがに咲く　越後　五十嵐美代子

●七重八重かさねて事をたづぬればこたへぬ色の山吹の花　山口　今橋文子

●み法やみて靜かなる奥の院青葉がくれに白躑躅さく　東京　酒井鈴子

つくろはぬ賤がまがきに色ふかくさきも匂へり山吹の花

去年の春いとし子連れて躑躅折にゆきしなけふは形身なりけり ● 滋賀　田中とみ子

何處にか船はとゝめむ川岸にいよゝ吹きそふ山吹の花 ● 茨城　大橋夏子

はれつるべ心してくめ山吹は水のなかさへ花なるものを ● 岩代　松野たけ子

たそがれの深山ほそぢを月あびて歸るをとめらつゝじかざせる ● 大坂　　　子

ひれもすのあそびにあきて山吹の枝手折りつゝかへる夕ぐれ ● 播磨　小山せん子

雨はれてかきの山吹露ふかく枝もたわわに色まさりつゝ ● 三河　山内經子

駒とめしむかしゝのびてとひくれば匂ひこぼるゝ井手の山吹 ● 山口　篠田くま子

舟人のつれなき棹やふれにけん開きもあへぬ山吹の散る ● 栃木　松本とり子

行く水に姿うつして山吹のほこり顔にも花さきにけり ● 東京　和志田昊子

岩つゝじ吹けるあたりや道ならん別れし樵夫見へつ隱れつ ● 下總　吉田かれ子

里川の流にそへる一むらの山吹さきて蝴蝶舞なり ● 岡山　鵜上歌子

そのまゝの姿めでたし樂人の路のしなりに吹けるつゝじは ● 靜岡　佐藤ひでよ子

行きくれて宿かる家もあらなくにそゞろ悲しき山吹のあめ ● 上總　井上きみ子

返りまつちごやあるらん山賤の手折りて行けり躑躅一枝 ● 四谷　早川やす子

樂人か朝な夕なに過ぎかてに眺めては行く山躑躅かな ● 湘南　葉山しげ子

いと率心細くもひくやたれ山吹さける破垣のうち ● 四谷　濱中喜代子

樵人の背に挿したる山躑躅夕日照り添ひくれなゐもにゐぬ ● 仙臺　梅村まつ子

折り〳〵は若き女の唄もして梭の音ひくし山吹の家 ● 名古屋　森井せき子

風折り〳〵黄金の花の散りしきぬ夕月おはき古井のほとり ● 芝　齋藤すゑ子

御車にめさるゝ君をみおくりてたゝずむそでにさくら花ちる ● 熊本　柏木房子

つま木こり歸へる樵路の右左いくへも知らに躑躅花吹く ● 本郷　古川すゞ子

山傳ひ木樵り行き違ふ路の邊におぼつかなくも咲く躑躅かな ● 小石川　渡邊すみ子

箏月夜箏のしらべに塩まみじそでにかゝれり露の山吹 ● 芝　川井喜久子

小雨ふる川瀨を下す筏士の蓑に散るなりやまぶきの花 ● 岡

一獻は君を祝はむ一獻は背子を祝はむはなむけの酒

門出にに泣かじと思へどそゞろにも落つる涙のなど止めがたき　●　宇都宮　松阪梅子

筝の音の主はたれともしたひよる露のひめ垣やま吹かをる　●　熊本　富川千代

輝ける御國の春に一しほのいろまさり行く山吹の花　●　駿州　戸倉清子

夕月のほのめきそめし玉川に山吹散りて蛙なくなり　●　神奈川　川井あき子

水清きながれにちれる山吹のあとなしたひて胡蝶まひ行く　●　大坂　森戸初子

山寺のとふ人もなき庭もせに山吹ちりて春ふけにけり　●　羽前　儉子

さらでたに身のはかなさぞかこたるゝ老てながむる山吹のはな　●　群馬　清水いく子

なか〱に淋しかりける山里も軒端まぢかに山吹の咲く　●　大阪　大道白百合

花躑躅さき亂れたるつゞらみちを大原女ひとりたゞいそぐなり　●　靜岡　伴野たつた

山かつのたきゞ背をひしかへり路にほこりがに咲く山つゝじかな　●　岡山　横山清子

夕まぐれ躑躅花咲く椎路を草笛吹きて行くは誰が子ぞ　●　下都賀　眞弓濱子

背の君のたよりいかにと待つ夕べ小雨注ぎて山吹ちりぬ　●　京都　香粋女

ふれもずるひまもなきまで六田川岸に露ちる山吹の花　●　京都　北垣貞子

我がせこの出でたちの胸にかざしけり擁ひと枝はなむけにとて　●　東京　濱中久子

かはづなくいさゝ小川の清き瀬にやさしく匂ふやまぶきの花　●　京都　村井澄江

枝かわす岸の山吹さき初て涙も色ある井出の玉川　●　神戸市　とみ子

山寺の入相つぐるかれの音にもろくもちれる山吹の花　●　四ッ谷　原田ひさ

樵人がゝへる山路の川ぎしにつゝじ花咲く春の山道　●　信州　小池登喜代

夕ぐれを柚人いそぐ道の邊にうす紅のつゝじ花さく　●　越後　佐藤鐵子

賤の男が歸る山路の道もせに咲きつゞきたる姫躑躅かな　●　栃木　大島定子

山吹の花ぞひとむらながれけり舟こぐ人のさをやふれけむ　●　本郷　横田よしの

賤が家のまがきに生ふる一本の八重山吹の花咲きにけり　●　本郷　三成喜美子

谷川のあさき流にうちはへて枝もたわゝに山吹のさく　●　伊勢　石井みき子

暮れて行く春の名殘の玉川や花ものいはず一重山吹　●　麹町　兒島芳子

朧月夜棣一枝手折りけり遠征の君にはなむけんとて

● いきなした立てで又となかへりぞと子を送る門に春雨のふる　京橋　石田てつ子

● 山吹は所せきまで咲き出でゝ母屋のあたりはたの音する　静岡　津野田うめ子

● 河舟の棹のしづくやふれにけむ一とひら散れる山吹の花　名古屋　加藤ちよ子

● 荒れはてゝ見るかげもなき我宿のまがきにさける山吹の花　後志　佐藤のぶ子

● 山吹に小雨そぼふる夕まぐれ氣色ばかりの三ヶ月の色　香川　田中瑞子

● くろ髮にこがれの色のはゆる哉妹がかざしの山吹の花　大坂　美子

● 谷あひの八重山吹や散りぬらし黄金流るゝ山川の水　加賀　油谷ずゑ子

● はなむけに涙の袂わかちやらむ夢の世なれば暫しと云はじも　栃木　波多野まさ子

● 征きませる背子を送りてかへるさの並木松原小雨そぼふる　甲斐　岡久代子

● 雨はれて夕日かゞやく馬の上にゆられてゆくか山吹の花　大垣　波津子

● 春雨のはれし小川の岸の上に匂ひこぼるゝ山吹のはな　越中　伊東露子

● 待ちに待ちし黄金色そふ山吹のいまこそ花の盛りなりけれ　伊勢　石加たい子

京都　たづ子

● わかれてはいつおふ瀬やしら河のせきはむかしの名にぞのこれる　山口　田中しん子

● 眞白き杣人やすむ岩が根の躑躅の花に夕日照り添ふ　長崎　廣瀬まさ子

● 乙女子の身をなげしてふ古池の水あはくして山吹のさく　近江　林政子

● あちこちと小鮒走りて水清き背戸の川邊に山吹のさく　尾張　木村みよ子

● 山吹の咲ける川邊は山吹の水のなかにもある心地して　奈良　成田鈴子

● 家つとに手折りてゆかむ谷かけの人にしられぬ山吹の花　伊賀　服部かつ子

● 山川につゝじながれて春たけてきしの山吹移ろひにけり　牛込　三矢ゆき枝

● なかなかにあはれはふかしゝづがやのやれがきにさく山吹の花　大阪　清野美子

● 赤く白く谷間のつゝじさく頃は峻かゆきゝもたのしかるらん　芝　遠藤誠子

● くれて行く春のしほりの名殘とて谷間に匂ふ山吹の花　備後　佐藤篤子

● 妹がくむ手桶の中に色はねて枝さしおほふる山吹の花　大阪　ひで子

● しぺりやの野邊のしこ艸なぎはらひとくかへりませますらをの君　神戸　尾崎みとり

● しづの男がそま木にそへし紅つゝじたが家つとのみやびなるらん

草かりの鎌うち洗ふ夕川に一枝咲けり山吹の花 ● 備中 植田尚子

シベリヤの野邊にかばれは捨つとても譽をあげよ大和ますらを ● 肥前 宏子

山かつがたきゞにそへし花つゝじ夕日にはゆる野邊のほそ道 ● 丹後 藤原政子

里川の清きながれを友としてけふもかげなす山吹の花 ● 西肥 二葉

山吹の花ちる小川來て見ればこがれ流るゝ心地こそすれ ● 石見 宮内登美子

姫君のふりのたもとにみがゝばやこてふたはるゝ八重の山吹 ● 鳥取 砂川澄子

黄金着てうつむく花の心清く夜半の時雨に散りて跡なし ● 長門 兒島みち

金色のひかると見しはたらちれのとこにさゝれし山吹の花 ● 大坂 波多清子

春風にゆられ〳〵て山吹の水にうつれるかげのやさしき ● 神戸 きぬ子

朝夕にきこりの通ふ山路を我もの顔に咲く躑躅かな ● 北海道 藤木鳥羽子

せの君のかど出を祝ふはなむけにきりて送りぬ妻がくろがみ ● 下野 瀬下ちか子

里の男が木樵りにのぼる影きゐて山しづかなり躑躅花咲く ● 伊豫 高橋かめ代

舞鶴の虹の松原きて見れば物あはれなり磯の松風 ● 佐賀 高柳とみ

和歌兼題

新樹

牡丹

山家路

(〆切五月十五日)

(披露六月五日)

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲家庭日記

▲寫生文

(〆切五月十五日)

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折(和歌は端書に限る)の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

田舎の春

美濃　後藤まさを子

田舍としいへば、はなやかなる都にのみ住める人には、いと、むづかしとも見ゆらむ、さはあれど、淋しかりつる冬も、いつしか過ぎ、やがて春くれば、草の庵の梅が枝も景色ばみ古巣をいでし鶯の初音なつかしう野邊の若草かづ〳〵もゆいでゝ、清きながれに、魚のひれふるさまの愛らしき、はた、かすめる空には百千鳥のさゑづりかはし、若菜つむ里の乙女子の歌も所々にきこゑて、牛をふこらの、野邊にれむれる樣など、げに、ちりふかき都の春にくらべては、いかばかりのどかに且きようふかゝらざらんやは。

日記の一ふし

周防　東愛子

たれこめて雲の行衛もしらざりしに母の君あまりうき〳〵せぬとて今日はよき天氣なり妹も日曜なれば連たちて氏神に參詣せん仕度せよとてもふされしにあらうれし御供仕り度發をけつり湯あみして衣類をもかへる妹もはや仕度整ひたるよし母と三人連にていそ〳〵と出懸る門をいづれは空は長閑にてあちらもこちらも咲花にほふ蝶の飛ふもあり花に眠るもあり土筆やけん花を摘つゝゆくほどにはや氏神の森の前松杉は色青々と中には櫻の咲いづるありちりにしもありさま〳〵に今咲花はわらはをもまちしならんとさゝやきて神前には鈴の音いさましくきこゆ拍手の音物靜にきこゆていとうれし神代の事も思はれて禮拜してたちいでし道すから妹は十三歳なるがわらはに姉樣はなにをお祈り遊せしと問ふゆゑお父樣お母樣を始めおまへも私も無事に暮せるようにお願ひ申せしがお前は何を御願ひ申しましたかとたづぬれば妹はあなたの通りおねかひ申ました外に一番さきに此度の軍は勝利なるよふに日本中の人が天皇陛下萬歳といふて大よろこひをいたすように御願申奉るといのりましたといふを母もきゝてそれはよき事と打よろこび打よろこびつゝ歸りける。

朝景色

大坂　藤浪女

何の用捨もなく覺めよとばかり耳元に鳴る時計の鈴に樂しき夢破られていそぎ夜の物かいやりつ雨戸繰りあくれは夜の幕はやう〳〵とり去られて南の方に明星一つ（汝今日も終日勉めて倦む勿れ又一日の計は朝に有り）と戒め顔にきらめけり東の方を眺めやれば下一帶は濃き殷色の雲棚引き其上は橙々色に又上は淨き空色と美しくも彩色せられたりその川の面にうつる景色ゆも云はれぬにはや物運ぶ舟の二つ三つ黑う見ゆるになほ一入の風情をそへて恰も油繪を見るかのやうにて我は暫時物事を忘れて眺め入る折しも奥に聞こゆる祖母の咳拂ひにやう〳〵我に返りぬいざや朝餉調へんかな。

春のながめ

伯耆　羽山らく子

●蝶より先きに起き出でゝたゝずめる柳のもと、そよ風吹き來りて來よ

りかへす面白さや。遠方に棚びくうす霞み、こゝかしこより立ちのぼる烟さへ長閑に、東の空のからくれないに染められし時しも、いづこよりとも無う、幽にきこゆる金衣公子の聲、いとも氣高うこそ。

●花の香移しねては、飛び來る蝶の小さき羽風にあたりかほらすうれしさ。衣縫ふ手暫時休めて行衛見守るほど、垣根の桃の三ツ四ツ笑めるに心附きて、下駄はくまも、をそしと立ちよれば、梢より雀一羽飛び去りつ。ゆられし枝より散しくれないの花、さきの蝶にも見まがうばかり共に植へにし從妹の居たらんにはと。

●老松の梢に殘りし夕榮もはやかげをとゞめず、入相告ぐる山寺の鐘の音よりいよゝくれ行く春の夕、月は早やくも彼方より登りて、おぼろに夜を照らしぬ。はし近う進み出でゝ、鋼鐵の椅など、打ながむる折ふし垣根越しに聞ゆる妙なる玉琴の調べ、笛吹くみやびをの來合せたらんには、猶めでたかるべきを。

家庭日記

東京　角　ひで子

四月十二日六時起床（十日許り病にて打ち臥し此二三日稍々快方となりし故兼てより朝餐）雛をねぐらより出し餌など與へ家事を手傳ひ七時半朝食暫時新聞を見て居りしに頭痛みし故室外へ出で掃除をなし終りて新聞を讀み終り十時半より晝食用意に取かゝり十一時半食事をすまし暫時にして運動に近所なる野に出で草を取り來り雛に與へしに大喜びにて食す夫れより垣根の草を取り終りし時寫眞一葉送り來る開き見れば主人の弟にて此度戰地へ赴く時船員等と共に運送船の甲板上にて給仕業の寫なる由記入ありし一見寫眞師の撮りたる如くにて誠に上出來なりし夫れより書き物致して居りし時誂へ置きしすし參りし故近所の不幸ありし宅へ送る四時半より晩餐の用意に取かゝり五時半食事畢らくして湯に行きしが久し振りにてアカの出ること甚だしく湯屋の三介に氣の毒なる程なりし歸宅後本日の出金、惣菜物屋の控等を記入し終りさて妾の第一の御友達なる女學世界を讀むかたはら女中に雨合羽の仕立方を敎ふ九時となりし故なつかしき書見を止め日記を認め十時床に就く本日は玉子二個產む本日の惣菜

玉子　みつば、ほうれん草　豚ニツケ

朝　黄豆　晝　ゴマあへ　晩　香の物

香の物　豆腐黄染　玉子粥、かつをぶし

香の物

牛　乳　玉子、ふのツユ

十三日六時起床雛の世話をなし風荒くごみ立ちし故水撒きして七時半朝食後新聞をよみ夫れより室外の掃除本日は葬送に付主人は會葬致さるゝ故其仕度をなし妾は病院へ行く日なりし故其用意し晝食の事を命じ置き十時に出かけ十一時半歸宅晝食をすましランプの臺の敷物をあみ初む午後一時となりし故表へ出で出棺を見送り歸りてまたあみ物致し居るとき郵便來る戰地（韓國）なる主人の弟よりの手束にて彼地にての見聞を委しく認めあり其内に可笑しき事など交り居る故所々を記す韓國の家屋は矮小なる茅葺屋にして壁床共土を塗り床はアンペラを敷きて住す彼地の風俗として室内にタンを吐き家屋の周圍に大小便を成す等不潔極まる彼國人は長き煙管にて絶えず臭き煙草をフカス弟は宿泊せし家の主人へ卷煙草一本與へければ如何にすべきかを知らず逆に火をつけたれば火は口に入りて大に一笑せり忠に辨當を開

きしを彼は見て在りしが堪へ兼て手を出し菜を與れと云ふ一箸與へしに彼之を舌打ちして食せり夫れより進軍途中子供あり怜悧にして日本語を知る依つて必要なる水(アリ)火(アリ)難有(コノマアソノ)等數十語を知り大に便利を得たりと引續き進軍土地泥濘にして大に歩行に苦む加之食用不足大に疲勞せり馬は二三歩行きては倒れ大に困難せり平壤につきて入浴出發以來初めて故アカの出ること限りなかりしと同地の物價飴二本五錢、入浴七錢、オールド、常盤一個七錢理髮十五錢位なりと而して菜は皆無の由

(また澤山ありしかど餘り長くなる故之れ丈け記す)右讀み終りしが恰も實地に見聞する心地せり夫れよりあみ物をつゞけ三時半頃より買物に出かけ歸りて女中と二人にて溝掃除す久し振りの事とて泥の出ること甚だし夫れより水撒きをなし晩餐の用意五時半食を終へ雛を籠につけたり本日は四羽の鳥皆にて玉子を產む大に嬉しかりし主人に告げしに共によろこばれし夜に入り本日の出金、惣菜物屋の控其外の帳簿に記入をすましあみ物仕かく女中に授くる昨夜の如し八時半頃あみ物出來上りし故直ちにランプの下に敷きしに色の配合丁度よく出來て我ながらうれしかりし夫れより日記を認め十時寢に就く本日の惣菜

朝	晝	晩
玉子	里芋、みつば	豚、葱、とうふ
香の物	煮染	切干のミソ汁
牛乳	香の物	ワカメ三杯酢
	玉子かゆ	香の物
	菊ニツケ	玉子かゆ
		かつをぶし

繪筆

伊勢　花涯女史

山の端ほの〴〵白みて、雲かとばかり咲き匂ふ櫻の花さわやかに、農家の軒の四つ五つ、平和の夢よりさめしおもかげ、添う影どりし霞の一刷毛こそ、雅邦が得意の小品ならめ。

黒川堤の青柳、美しう烟りて、一筋ぬるき春の水明らかに、渡呼ぶ子が流したる椿の花片、情有りげにゆるぎ行く、靜閑無限の味を加へて、言ひしらぬ趣を點綴したる樣、こは、玉章の筆に待たんか。

菜畑、麥畑の處々に、紅雲片々の匂ひ床しう、今を盛りと咲きほこりたる桃の數本、一路ひろく其間にひらけて、果は、心も春の海原、眠るが如く往通ふ白帆の影、夢のやうに浮び出でたる、小蘋の腕を煩はさんかな。

朧夜の月梛の梢に落ちて、落花しきりに興を催す時、琴をすてゝ起ちし少女の、いとなよやかに欄干によれば、蘭燈消ねんとして、幽かに匂ふ香はめでたう、鬢のほつれ毛掻上げて、さびしき笑ひを洩らしたるは思ひありてか、折から歸り行く雁の一行、こは百穗翁の力をからん。

龍の都も浮き立つや春霞、今日を汐干の遊びに、貝拾ふ人の姿長閑けく、紅綠相映じ、黄白相交りて、綺麗に織りなせし綾や錦や、遠きもの、近きもの、若きもの、老ひたるもの、唄ふは戰捷の歌、さゞめくは國民の元氣、只見る、一幅の活圖畫を展開したる光景は、年方に托せむか、月耕に托せむか、寧、桂舟に囑して、渡邊を煩せむ哉。

春の花いろ〳〵

播磨　岡本もと子

櫻

山深かられども人跡を絶ちて、いとゞ寂しき殿寺の廣庭に、年老ひし八重櫻の、今を盛りと咲き亂れ、風なきにしづ心なく散る下に、うら若き弟子僧の箒もて立ちつ、聞くともなく、ほく〳〵となる木魚の音に伴ふ讀經の聲に耳傾けては、落花の雪を仰ぐ、花は其蒼白き面に、色あせし墨染の袖に、三ひら四ひら散りかゝりぬ。

桃

軒傾き壁崩れたる、賤が藁屋の竹垣にそひて、心おきなく一と本の桃の花、紅匂ふそが下に、破れ莚を敷きて、老嫗の、いと古びたる糸車を繰り廻はして、糸績ぎつゝ、花に舞ひ狂ふ蝶を眺めて、微笑めるもをかしく、親鷄に連れられし雛鳥の五つ六つ、いと嬉しげに散りおつる花瓣をつゝき戯るゝも又なくをかし。

山吹

しめやかに降る春雨の、黃金色まばゆく咲ける山吹の花にそゝぎたる、飽かぬ眺めなるに、みめ美はしき乙女子の、蛇の目傘さしつ、そが傍に立てるはこよなう配合面白し、やがて其一枝を手折れば、花に含みし水の黃に染みたるが、雪を欺むく其白き手に零れり、乙女子の去りし後はいと寂しく、たゞ一つの花瓣下行く水に浮びて、春雨いや繁げう降り來ぬ。

菜の花

青々と生たる麥にまじりて、黃金の色に染めなせる菜畑を、同じ色しゝる蝶の、あちらこちらと舞ひ居るは、いづれを花と分ち難きに、彼方より白き蝶の舞ひ來て、黃なる蝶とむつれ合ひ、空高くあがると見れば又おり來つ戯るゝを、可笑しげに眺めながら、鍬杖つき浮世を外に、煙草薫ゆらす農男の、やがて牛追ひ行けば、牛もうと吼へて春の野に響く。

躑躅

薹倚暗き幽谷を、ちよろ〳〵と流れ行く清水の、岩に觸れ石に激して、白き水泡の花を咲す岩陰に、數株の躑躅紅に咲き誇ころ中に、一と本白きがいと氣高く見ゆれど、訪ふ人とて更になく、芳芬むなしく散じてやがては果敢なく散失せむに、日暮れて歸る杣人の、そを折り取らんとして手を觸れば、花は脆くも散りつ、流れ行く水に浮べり。

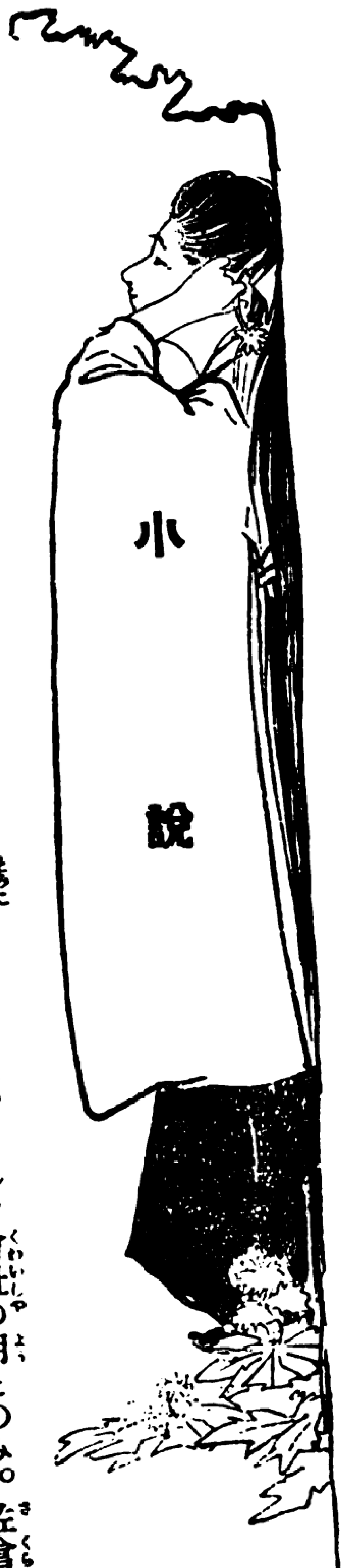
雨の降りける朝

富山　井上紫濟

あしたのほどより空かきくもりて　おのづから眠氣を催す日なるをいとおどろ〳〵しきなる神さへ　はためきて人の心地もねせず庭の草木も降る雨にうなだれつ心をこめて粧へる千草の花も色あせて　地上にこぼれにけりくぼみたる　庭のところ〴〵には雨水たまりてさながら湖の如くにぞ見ゆる

家のうちは何所をとはず　皆しめりたらむやうにおぼね妹等のさゞめく聲もうちしめれり

屋根のかなたよりは瀧のごとく水落ちていとおもしろし。



三めぐり沼

江見水蔭

上
一

鶯は蒔繪の籠に聽き、梅は花生に見て、霜を知らぬ庭の敷松葉、手洗鉢の氷は權助が破つて捨てた頃に、起出でる、夫人富子、朝湯から直ぐと化粧に掛つて、衣服を改めて茶の間に坐れば、牛乳が暖められてある、新聞が來て、居る、小間使は手足の如く能く働くので、立つにも及ばず、其儘其所に何一ッ足らぬ事なき松本の家に、此頃唯これのみが物さびしい、主人敏一の不在勝。

富子は、しかし、これを會社の用とのみ。佐倉から東京へ月に何度となく上京せられる、良人の身の忙がしさがお氣の毒で、ならば此身にその半ばを分けて貰うて、時たまの欠伸避けに仕たいとの心。

何故か今朝は牛乳美味からず、新聞面白からず、唯茫然として居れば火鉢の炭も早く立ち、櫻炭の花と見し火は、雪と化して灰白きを、繼ぎ足さうと火箸を取りに掛れば、小間使の半女が横から奪ふが如く取りて、『あれ、奥樣、妾が繼ぎますよ』と、働かせず。これでは御飯の美味からぬが道理である。

『ねえ、奥樣!!!』

半女は大きな聲。

『何んだねえ、吃驚したわ』と夫人は瞬いた。

「ねえ、奥様、炭は斯うして此方様のやうに俵で澤山買つてお置きなさる方が、どの位お徳用だか知れませんねえ」

「まア……何を云ふのかと思つたら、そんな事なの。それアお前、知れ切つた事だわ」

「ですけれど、奥様、おほゝゝ、可笑う御座いますねえ、高田さんの御新造は……おほゝゝゝ、此間、妾は見ましたのですがね、おほゝゝゝ、粉炭を一籠ねえ、お買ひなすつて、それを新聞紙へ包んで、それから、其上を布呂敷で包まうと爲さる處をね、妾、見ましたのですがね……」

「そんな處を、お前は傍に立つて、平氣で見て居たのだらうね」

「いえ、御新造さんが、眞赤な顏を爲さつたから、妾は見ない振で、斑點犬に石をぶつけてやりました」

「何んてまア惡戯なのだらう。まるで男だわ……」

「高田さんの御新造さんも、まるで男のやうですね。此方へ大根を三本提げて、此方が今の安炭でせう。背に坊つちやんを背負つて居らつしやつて、後から男のお子さんが附いて居らつしやるんですもの」

「あ、大勢家内で居らつしやるんだから、其位になさらないとねえ……あの方だつて、妾と一所に學校へ行つてらつしやつた頃にはねえ、矢張お孃樣で、お美しかつたのだけれど……」

と云つて、夫人は何事か心に浮べて、つひ、それに氣を取られて、言葉を切つたが思直して。

「……此頃は大層おやつれ爲さつたのねえ」。

突如として半女は奇問を發した。

「貧乏暇無しつてえますが、本統ですかねえ」

「何んてまアお前は搆ひなしな事をお云ひだらう。若し高田の御新造がお聽き爲さつたら、どんなにお思ひなさるか知れないよ」

「あッ、然うで御座いましたね。噂をすれば影てえますね。きつと惡口を云つてますと、其方が見えるもんですねえ」

果せるかな、果せるかな、勝手元にその高田の御新造

が。

『御免下さいまし』と力の無い聲。

上‖二

高田忠藏といふ陸軍特務曹長の妻幸子は、束髪の丸髷にくらべて手の掛らぬそれさへも、束ね直す暇の無いかして、亂れ勝の艶を失ひ、一飛に總白髪に成らうとまで思はれる、それに、洗ひざらしの双子の羽織、乳吞子を抱へて、松本家の臺所口から通り、茶の間で夫人の富子に面會した。

『さア、冷えますから、どうかお敷き下さいよ。妾も御免蒙りますから……』

富子は座布圑をすゝめたのである。何となく氣の引けたやうな風情、半を遠慮して、半に座を占めた幸子は。

『最うどうかお搆ひ下さらないで……』と會釋したが、思はず知らず太息を吐かうとして、心づいて、半女が酌んで出した茶を一口。

『あの今日はお買物にでもお出掛けでして？』と富子は何心なく問うたのである。

『はい、一寸、出ましたのですが……』と云つて、幸子はためらひ。

『何しろ、どうも、外は道が惡う御座いますので、子供を抱へては、本統に歩きにくふ御座いましてねえ』

『あッ、然うで御座いませうねえ、つひ妾は出無性でして……佐倉へ參りましても、しみ〴〵町の樣子を知らないので御座いますよ』

『妾は又御承知の通り、人手が御座いません上に、子供が澤山で御座いましてねえ』

『御幾人でしたッけねえ』

『三人で御座いますよ』

『結構ですねえ』

『何が貴女、結構な事が御座いませう。宛然家の中は戰爭で御座いますよ。角力やら喧嘩やら、泣きます、怒鳴りますねえ、障子なんか貴女破り放大で……それに御膳の時なんかと申すものは、それは〳〵えらい騒ぎ……』

『それが貴女よろしいので御座いますわ』
『いえ、それが子供だけなら好いのですが、良人のが又子供と同じ樣に……』
『軍人の方はねえ、それで無いといけないのですわ』
『だッて貴女、それにもよりけりで御座いますわ、大勢、貴女、御友達や、兵士などを連れて參りまして、酒ばかり飲みましてねえ』
『餘程、御酒をめし上るのですが……』
『いえ、自分は直きに醉つて了うのですが、人に飲ませる方が好きで御座いましてねえ』
『それは好い御氣分ぢやア有りませんか』
『それが、で御座いますねえ』
最う耐え切れぬ太息を、ホッと吐いて。
『申すのも御耻かしい次第ですが、特務曹長の身分では、然う貴女、パッ〳〵としては居られませんですからねえ』と苦しい事を茲に漏らしたのである。
『で、御座んせうねえ……』
富子は少からず同情した。しかし、この同情は今日始めてゝは無いので、斯うまで打明けては幸子も語らなんだが、富子に於ては二三度既に同情を形で現はした。一寸困るからといふので、金を立替えた事がこれまでに有つた。
『……いつぞや此方から拜借致しましたのも、然ういふ譯で御座いまして、未だ延引致して居るやうな譯でして……』
幸子は如何にも極りの惡さうな。
『なア――に貴女……』と富子は快くそれをなだめた。
『誠に面目ないので御座いますが……』
『なアに貴女……好いのですよ。貴女と妾との間ですもの、學校時代には能く貴女から、ペンやピンを拜借致した事が有つたぢやア御座いませんか。又貴女、御都合の惡い時には、御遠慮なくねえ……』
實は今日も、それで伺つて、と唇まで出た。けれども向ふから斯う云はれた時に、それに突入つて頼むのも、腹の中の見え透いて、餘りに極りの惡さから、つひ言葉は他に轉して。

『貴女こそ斯うして御幸福ですけれど、妾などは、本統に學校時代の方が、氣が暢りと致して居りまして誠にどの位面白かつたか知れないので御座いますよ』

『それは貴女、お互ひですわ。妾だつてどの位、あの時分が戀しいか知れませんですわ』

『その頃のお友達の貴女が、此方へお出でなさらうとは、チツとも存じませんでしたが……お出でになるまでには他にシンミリとしたお話を致しに參る處も御座いませんし、もうクサ〳〵致しましてね』

『妾もねえ、貴女が此方にお出でなさつたので、どんなに嬉しかツたか知れませんですわ』

『……實は何んで御座いますよ。……餘まり心配が重つて、氣の晴れるといふ事が無い時には……姑は御承知の通り嚴しう御座いますし……家の内外から、いろ〳〵な事で責められるツラさに、一層身でも投げて……おほゝゝゝ、そんな氣を出した事がたびたびで御座いましたよ』

『まア……』

『いえ、眞實のお話です、世帶の苦勞と申すものは、人間を馬鹿にして了ひます、本統の馬鹿にして了つて呉れるなら未だよろしいのでせうが、好い智恵を無くしたばかしで、感じるのが何によらず深くなりまして、普通の人よりは餘計に苦しいとか悲しいとか、然ういふ事をヒシ〳〵と胸に傳へるのですから、氣の弱い者は溜りませんですわ』と涙含んで——それを隱す、否、打消す爲に、笑を見せたが、その、さびしい顔と云ふのは無いのである。

幸子が斯う云うのを聽いては、富子も何んと慰めて好いか分らぬ。唯、頷いて見るより、他には無いのだ。

『いつぞや何んかは、如何しても貴女……少しばかりの事ですが……如何しても都合が出來ないのでして最う途方に暮れまして、如何したら好いだらうかと、知らず〳〵歩いて町を脱れたので御座いますよ。田圃路をとぼ〳〵と廻りまして、何處へ行くといふ目的も有るのぢやア御座いません。唯只都合が出來な

かつたのを苦にして、家へ歸りにくい樣な氣持がしまして……と、何時の間にやら沼の端へ出たので御座いますよ」

『印幡沼ですか』

『いゝえ……他の沼で、あまり大きくは有りません……それを考へ考へ、ぐるりと一度沼の周圍を廻りましたが、最う〳〵世の中が厭アな心持が致しまして、死んで了ひたいやうな氣になりまして、又一度池の周圍を廻りましたら…………最う何んの考へも無くなッて了ひまして……いえ、多少敎育のある者が、這んな事を申すのは可笑ふ御座いますが、魔が射したとでも申しませうか。全く身を投げて死ぬ氣になりましてねえ」

『まア……』と富子は驚いたのである。



『それで何處から身を投げて死んだら好いだらうと存じまして……』

これを語る幸子は、常ではない、何か酷く興奮して居るやうな風で。

『樋の口から、それから、洗場からそれから、杭の澤山打つてある處から、楊柳の生えて居る方へ……三度目を廻らうとしました時に、突然後から抱留めた者がありましてね』

又しても同じ言葉で、富子は受けた。

『まア……』

『それが、何家かの婆アさんでして、それの申しまするには、此沼を三度廻る者は必らず死ぬッて……貴女も死神に誘はれたのでせうから、早くお宅へ御歸んなさいッて、親切にも坂の處まで送つて呉れましたが……然ういふ譯でして、今日でも、時々沼へ行かうかといふ考へが、起らないでも無いので御座います』



『然ういふ時には、是非、幸子さん、沼なんかへ入らッしやらないで、妾の處へお出でなさいましよ。決して御遠慮はねえ、入らないので御座いますから…』

此所で幸子は、先きに失した時機を再び見出したのである。恐る〳〵。

「お言葉に甘えるやうですが……」

下 ――

櫻庭に咲き、月おぼろの此頃となりて、富子は、今まで知らぬ一ッの苦痛を生じた。

それは良人の餘りに家を空ける事が繁々なので、如何に會社の用とはいへ、あまりの事と心づいて見ると、何から何まで疑はしい事だらけ。來る手紙の中に、女文字の男名前、それを良人が讀捨ての文殼は、如何したのか、つひぞ反古籠に入れられず。不思議にして、それからそれと溯れば、彼の時の擧動、若しやそれかと、想像は先きから先きへと走り結ぼれてのみある朝の事。何心なく新聞紙を手に取りて讀めば、これは如何に、良人が新橋の藝妓某と箱根に雲隱れ云々。

富子の血は悉く冷え切つた。氷よりも冷え切つた、と、直ぐに復、火よりも强度の熱に變じて、ぶる〳〵と、身ぶるひの止まらぬ悲嘆の極。あさましい良人の素行よ。紳士としてあるまじき事、十年前の出來事ならば、世に有勝と知らぬ顏で居るのが、捌けた奧樣とやらの所業かも知れぬが、苟しくも教育ある身分で、これは默つては居られぬ事。充分諫めて見ねばなりませぬと、富子は大躰の方針を屹と定めた。

嗚呼、しかしながら良人の此身に對して、今まで示した愛情は、あれは皆僞りであつたのか。いつぞやそれよ、終列車で、東京からお歸り爲さつて、お土產に中華亭の折詰、お前が未だ寢ないで待つて居るであらうと思つて、東京の料理の味を忘れさせぬ爲に、それ、あま鯛のてり燒に金ぷら、うづらの椀盛の汁を斯うして德利に入れて提げて來たと仰有つた時には、その御馳走よりも御芳志、淚の出る程嬉しかつたが、氣を回はせば、それも其時には、藝妓を連れて、夕食にでもお出かけなされ、その殘肴でも……いや思ふまい、はしたなし、唯妻としての本分を盡し、諫めるだけ諫めれば、それで好いと、新聞投出して溜息長し。

それにしても、氣持の惡さ。腦がしびれて血を絞り出される樣に思はれて、心細いやうな、悲しいやうな、いふに云はれぬ不愉快さ。斯うした時に東京ならば、相談に行く先きもあり、慰めて貰へる家もあるが、馴染の薄い此佐倉で、それよ、高田の幸子さんの處へ行くより他にはと富子の心に浮んだのである。

小間使の半女が是非にお供をといふのを斥けて、一人で外へ立出でた。

裏路から拔けて大手町、藪端を通つて舊藩士の屋敷の並ぶ淋しい處へ富子は出た。

昔は何百石取かの屋敷、玄關構への大きいに似ず、今は大方破れくづれて、其頃の一部のみが殘つて居る一軒。跡は大方畑に成つて居る、其所こそ、特務曹長高田の住居。土塀くづれ落ちて、ところ／＼殘る處を、竹切、木切で繕つて、武者繪の逆茂木よろしくである門を入れば滿艦飾といふ見得で、子供の襁褓が干してある。井戸の端には漬物樽が洗ひかけて置いてある。木の枝には餅が實つたやうに、洗つた足袋を裏がへして懸けてある。

家の中には子供の突貫する聲、主人が詩を吟じる聲、姑の何か小言いふ聲、最う耳が聾するかと思はれて、おとづれる勇氣が失せたのである。

けれども、折角此所まで來て引返へすのもと、氣を取直して。

「御免下さいまし、お賴み申しまする」

非番と見えて、主人忠藏、大縞の薩摩飛白、兵子帶を卷きつけて、髯茫々。

「やッ、誰ですか」

號令でも掛けるやうな聲して、がらり開いた玄關口。

「やア何方ですか」富子は恐る／＼。

「あの、松本ですが、奧樣は……」と會釋した。

「あゝ、松本の奧さんですか。や、まッ、どうか此方へ……毎度家のが出まして……さア、ま、此方へ………」

突立ッた儘で、手ばかり動かして居る。二人の子供は來客を障子の穴から覗いて見て居る。

「はい……難有ふ御座いますが……あの、幸子さんは、御留守で御座んすか」

「はア、一寸、その、買物に……や、最う歸つて參るでせうから……」

「いえ、別に用事も御座いませんのですが、お門を通りましたから、一寸伺つたので御座います。如何か御歸りで御座んしたら、チトお遊びに入らッしやる樣にと……又いづれ改めて伺ひます」

「ヤッ、それは、如何も生憎で……歸りましたら然う云ひませう。が、まア上つて茶でも飮んで行つて下さい」

顏のいかめしきに似ず、優しい心の見える主人の樣子。嗚呼、生活が貧しからうが、容貌が醜からうが、眞から愛して與れる良人を持つたらといふ氣がして、此所にも長く居られず、そこ／＼に挨拶して、外へ出た。

下――二

これから、すご／＼と家へ歸つたからとて、氣が鬱しるばかりであらうから、田圃でも歩いて、結ぼれを解かうと、富子は元の路を取らず、切通しの坂の急なのを下つて、小川に添うて桐畑、それから先きの稻荷の社、鳥居の横から空田に出れば、蓮華草の咲揃ふ、其所邊一面の色一ッ。その美しさも、しかし、目には入らず。常なら好きな韻文でも作れやうもの、長閑の境に入つて、その長閑を知らず。秋をあはれとは心なき人でもの事、心ある者には春の悲しさ。

若しや良人の不品行から、會社をしくじる樣な事は有るまいか。能く世間には有る例、無駄のつひえのはげしさから、會社の金を遣ひ込んで、知らず／＼罪人となるといふ、よもやそれ程の良人でもあるまいが、いづれにしても、知る者、知らぬ者、皆爪彈きして彼の記事を讀んだであらう。良人よりも此身のはづかしさよと、富子は又しても苦痛を覺え、何處を如何歩いたか道はいつしか思ひも寄らぬ處に出て、いつぞや幸子から聽いた沼か、あらぬか、只有る水溜の畔に出た。それが夕暮である。

兵營の喇叭拙なし、新兵の吹きならひか、細く長く引きて、物悲しく、鐘の音よりも身に泌むのである。蝶は何處に眠るであらうか。風無き空に音するは、塒へいそぐ烏の群、翌日は雨ならむとして雲滿ちたり。人一人見えぬさびしさよ。

沼に聲あり、水を打つて後の靜けさ。蛙の飛込んだのか、鯉の躍上つたのか、覗いてその水の面を見れば、波紋次第々々に擴がりて岸に消え、藻の下からぶくぶくと泡の立つて、水神の呼吸かと、疑はれる。樋の口に蚯蚓のかたまりのたくるは、釣した人の置いて行つたのか。

其人は、魚を得て恙なく歸つたのであらうか。若しや沼に陷ちて死んだのではあるまいか、と富子は急に恐しさを感じた。

三たび廻ると死ぬ氣になるといふ沼。これが彼の幸子の話の、それでは有るまいか。

野菜物の洗場もある。楊柳も生えて居る、杭も多く打つてある。此所から斯う彼の人は回つたのではあるまいかと思ひつゝ、富子は一めぐりした。

嗚呼、良人の品性の賤さよ。男の操を彼の人は破つて、愛情を僞り粧ふ心憎さ。此身は誠にあはれな者である。心靈の幸福は最う得られぬもの。一層死んで了はうか。死んで良人を諫めるのではない、死んで此身の苦痛を忘れやうとでも無い、紳士にして紳士にあらぬ人の妻に、淑女ありといふそれを世に知らしたさに、沼を幸ひ、これに身を投げて自らを殺す不自然は、不完全なる社會の産物であると後の人の戒にもと考へつつ、知らず〳〵三たび周圍を歩いた。覺悟を定めて、三度目に、何處から身を投げやうかと樋の口から洗場、楊柳の傍まで行つた時に、向ふからも回つて來る女一人。たそやかれ、近寄つて見れば、思ひがけず。

「おう、幸子さん」

「富子さん……」

「如何して貴女は……」

「如何してゝは有りませんよ。此所は三めぐり沼で御座いますよ」

『妾は知らなかッたのです』

『まア兎も角も、お宅へお歸んなさい……妾は……貴女がお訪ね下さッたと承はりましてね、直ぐとお宅へ伺つた處が、未だお歸りでないと申す事で……それから諸方をお探ししたのですが、此所にとは思掛ませんでした。まア兎も角もお歸りなさいまし』

『幸子さん』富子は其手に縋つたのである。

幸子は何かは知らず縋る儘に委した。

『貴女は本統に幸福で居らッしやるわ』と富子は云つて、さめ〴〵と泣くのである。

『何故ですか、何故貴女はそんな事を仰有のですか……』と幸子は訝しまざるを得ないのである。

『いえ、最う妾は何も申しません。この沼の傍へも參りますまいが……妾は實に……今更のやうにですねえ、人の幸福を認めるのは、不幸の者の眼からでなけれア見られないと云ふ事を知りましたよ』

『何か意味がお有んなさるのでせうが、妾の目からは如何しても貴女は幸福な方です。この沼へ近寄るお方では有りません、私こそ此所に……』

『貴女は未だ何もお知りなさらないのですよ』と富子は聲を放つて袖に泣いた。

幸子はその何故たるかを知るに苦しんで、茫然として唯其所に立ち、慰めかねて居たのであつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

新聞の彼の記事は、人違ひの故を以て直ちに取消された。良人はさる事を夢にも知らぬといふ事を、信用すべき會社の重役から證明されて、始めて富子が愁の雲は散じ疑の闇は明く爲つた。

然うして、今より思へば、餘りに短氣であつた、死を決したのは輕卒であつた、さるにても怪しいは三めぐり沼、或はその何等か化學的の作用が沼の水にあるのでは有るまいかと、疑はしい、恐ろしい、解し難い心を富子は生じた。それにしても彼の時、幸子さんが來て下さらなかつたら、どんな事に爲つたか知れぬのである。恩人――出來るだけ之に報ゐなければなりませんと、深く富子は感謝した。

（完）

軍事小説 **海軍病院**

村の人

上

午後三時頃の太陽の光線は、窓の帷幕を洩れて、白く塗つた壁に反射して、部屋中はくわつと明るくなつて居る、煖爐も置かれてあつて、戸外の寒氣とは打つて變つて、此處には花咲く春の氣が通ふ樣にも思はれたが、其の温い思ひを打消すのは、鼻を刺いでも行きさうに感せらるゝ沃度ホルムの臭氣で、其れよりも一層人の氣を沈ますのは、此の靜寂な室の中央に置かれてある寢臺の上に横はつて居る病人の口から折々洩れる呻吟の聲であつた。

佐世保の海軍病院の士官病室の一室で、病る人と云ふのは最初の旅順攻撃に預つて大負傷を受けた一等兵曹津原守衞なのである、乘組んで居たのは軍艦磐手で其左舷の第一砲門を受持つてゐた、第一戰には思ふさま敵艦隊に砲火を浴びせ懸け、第二戰が終つて後一同引上る事となり、磐手艦は艦隊列で殿となつたのであつたが、其の際敵の砲臺から撃下した砲丸が前檣を打砕き、津原兵曹は其の砲丸の破片を大腿部に受け、同時に下腹部一面の火傷を受けたのである。名譽の負傷を受け、且つ拔群の働きがあつたと云ふ事で、特に士官病室に移されて、外科醫は鄭重に診察し、あらん限りの手術を盡して、全癒す可く盡力したのであつた。果して生命を取り止めるのであらうか其れとも近い中に墓の下に埋まつて行く靈魂であらうかと云ふ事は、未だ疑問の中に壹週間は過ぎたので、受持軍醫は只一言恁う云つた。

『之が若し暑い時候であつたなら、とても三日と持つんぢやないが、先づ氣候が好ゝので……。』

是丈けであつた。

風が少し出たと見えて、窓にはた〳〵と物音が立つたが、病人の枕元にある早咲の梅の花が一つ床にこぼれ

た。同時に呻吟き聲は少し高まつた。

『なに、助からうとは思はん、疾つくに覺悟して居る……。』

弱く恁う云つたが、更に一段と聲を高めて。

『其れにしても殘念じや、初手の戰ひに傷を負ふては、もそつと戰つて、戰かい拔いてから、傷を負ふとも、戰死するとも爲たかつたんだ、心殘りはこれ一つぢや。』

戰つてから未だ一週日と日は經たんと云ふに、衰弱は永く病牀にあつた人の樣に見えて、頬の肉は瘦せ落ち、眼は落ち窪んで、鼻から懸けて頬への濃い鬚が、一段と其の蒼い顏を物凄く見せて居る。

夫の顏と面して、直ぐ側の椅子に腰を降して居た若い妻の顏には、憂愁の色が深く漂うて居て、今一言悲しい言葉を聽かうものなら、直ぐと淚と變じさうに見えるのである、其れをば見せまいと押怺えて居る狀態は武士が戰場へ出たと同じ心持ちで、彼女は膝の上で堅く手を握り占めて居る。面長の色の白い、眼鼻立の揃ふた輪廓の美い顏付きで、髮を質素な束髮に結つて居るが、心なしか後れ毛が二三本頬に亂れて居る。黑縮緬の羽織こそ端折つて居るが、下には銘仙の衣裳を二枚重ねた切りで、帶とても、襦袢の袖とても、出征した夫の留守を守るに相應しき身裝りなのである。

夫の顏を凝と瞶つて、

『奈何して這麼にお變り遊ばしたのであらう、家をお出になる時は、いつに變らぬ光澤のいゝお顏だつたのに。』と、女心の淺果敢な愚痴を些と恁う思ひながら綾子は夫の言葉に耳を傾けて居たが、沈んだ眼の輝きを見せながら。

『然うで御座いましやうつて……然うですが貴方、請願那麼心弱い事を仰有らずに、乾度治癒ると思つて居て下さいまし。然うせねば、看病なさる方だつて私だつて張合がないぢや御座いませんか、病氣の癒る不癒んのは、神經が半分手傳ふと申しますから、貴方ね、御苦しう御坐いませうが、是非然う思つて下さいましね。』

若い妻の無邪氣に云つて退ける此の言葉に、夫の兵曹は返す言葉を持たなんだ。

『未練がましい……。』と叱る言葉も、

『軍人の女房らしくない言葉を云ふな！』

との誡め言葉をもで。世の中の何にも知らず顏に居る寧ろ小兒見た樣な愛度氣ない氣質を思つて、と、顏をあらぬ方に回して涙に咽んだ。

妻の方では然うでない、自分の夫が自分を小兒見た樣に思つて居るのを前々から知つて居るので、其の考を變更させ樣とは謀らますに、飽迄無邪氣な小兒見た樣な擧動をして、其の中で引締る可き事は引締つて、夫の補助者となり、其の心の慰めともならうと、一段の苦心を平常から持つて居る。で、此の時まで其れと察して居なからも、強いて思ひを見せず、輕い調子で。

『貴方何を泣いて被入るんです。家の事なんかを心配して被入るんですか。那麼事なら御止しなさいまし、之でも軍人の妻ですもの、平常から丁と覺悟をして居ますから、今更狼狽なんどする樣な事はありません。よしんば貴方が御死亡れになる樣な事があつたつても、殘つて被入るのは御父さん御一人ですもの、御介抱申上げて、世間の物笑の種となる樣な事はいたしませんから、那麼事は御安心なさつて下さいまし……。』

此の言葉は甚麼に病める夫の耳に快く響いたであらう。恐らく天の聲が其の耳に達したと云つても此位には感せられぬので、妻が起つて、其の袂から柔い絹の手巾を取出して、自分の眼の邊りを拭ふて呉れた時は其の心臟は喜悦の情に震ふて居た。然して恁う思ふた。

『之ならば安心して死ねる！。』然りながら、恁うした雄々しい言葉が、無邪氣と思ふ妻の唇から出たのを思つて、其の罪のない胸に、自分の事、家の事を、自分の留守中甚麼に深く思煩つたのであらうと思つては彼は妻に對して感謝の心を持たずには居られなんだ。自分は今迄此の若い妻に心配を懸けるのを恐れて、自分の戰死などの事に就いては、未だ甞て一言たりとも云つた事がないのである。

『嗚呼薄倖なる妻！。』

染々恁う思つた後、『軍人などは決して妻を持つ可き者ではない。殊に若き妻などは……。』

恁う更に思つたが、綾子が自分の座席へ戻つたのを見て、顔を其方に回し、

『御父さんの御病氣は 奈何だい。』

『はい。少し御宜ろしい樣ですが、昨夜は終夜咳が出て、些つとも御寢みにななれいんで御座いますよ。もう



熱は悉り引けて了つたんで、御醫師さんは此の分なら大丈夫だと云つて被入いました。』

『御醫師さんは矢張り三隅さんだらう。』

『えゝ、然うなんです。今日は朝から能くお眠りましたから。留守をお隣りの老婆さんに頼んで參りましたのです。』

『うむ、然うか御父さんには未だ私の傷を負つて還つて來て居る事は御存知ないんだらうな。』

病める夫は、烈

しい苦痛を怺える様、顔を顰めながら恁う云ふと。

『え丶……。』

とばかり妻は氣遣はしさうに夫の顔を瞶り、

『其の方が、御宜ろしいと思つて……三隅先生も折角大分治癒くなり懸つて來た處だから、今此處で那麽事を聴かすと能くないと有仰つたもんですから……。』

『うむ、其れがい丶丶丶。』

夫は何故かほろりと涙を一滴落した。妻はもう何としても怺え切れなさうに、見えたが、此處で自分が泣いてはと、屹と思返して凝と下唇を緊めて居ると、寢臺の上の夫は術なさうな呻吟の聲を一つ長く洩らした。



『貴方御苦痛う御座いましやうね。』

『あ丶……然し那麽事云つたつて爲方がない。綾子、もういゝから早く家へ歸つて、御父爺さんを御介抱申上げて呉れ、もう繃帯を更へる時間だから、看護婦達も歸つて來るだ

らうし……。』

『其れぢや其の繃帶を變へて御了ひになる迄居りましやうよ。』

妻は飽迄優しく云ふと。

『莫伽！貴樣なんか、己の傷を見樣もんなら、其れこそ腰を拔かして了ふわ、女なんか、這麽ものを見るものぢやない。其れよりか、御父親さんが寂しがつて待つて被入るだらうから、早く歸つて上げい！。』

綾子は然して爭はなかつた。夫が自分の負傷よりも、父の病氣なり、自分の事を案じて與る優しい心を知つて居るので、其れから二つ三つ必用な家事向きの事を話して立上ると、同時に入口の扉が開いて、這入つて來たのは受持の看護婦の一人である。色艶の餘り能く無い代りに、口元が引締つて威のある程で、鼻筋の通つた、眼には流石に女性の柔和な光りが漂うて居る。年齡は卅を二つ三つも超えて居るであらうか、額にはもう小皺が寄つて居て、顏全體何處となく浮世の慘憺たる徑路を經て來たらしい影がほの見えて居る。

扉を高い音の立たぬ樣靜に閉めて近寄つて來たのであつたが、其の眼頭に一滴の淚の露が宿つて居るのを機敏な性情の若い妻は認めた。然して其の顏全體に、譬へ難ない尊い同情心の輝きが見みて居るので、不思議な眼の色で綾子は迎へたのであつたが、寢臺の上の夫は其れと見て、若い妻にと眼を遣り。

『綾子其方から能く御禮を申して與れ、三澤春子さんと有仰るんだ、此の方に御世話になつて居るんだから……毎時も無理ばかり云つては困らして居るんだ、能く御禮を申して與れ。』

綾子は丁寧に頭を下げて、夫の命ずる儘に飽迄恭謙な態度で禮を述ぶるのであつた。

『御禮で痛み入ります、一向行屆きませんので……。』

三澤春子と云はれた看護婦は優しく禮を反したが、

『嘸御苦勞が多い事で御座いませう。旦那樣から承はりますれば、御親父さまも御病氣で被入いますつてね併し奧樣、旦那樣の方は御氣遣ひ遊ばしますな、私達及ばずながら一生懸命になつて御看護申上げて居りま

すんですから……はい、屹度治癒して御覽に入れましやう……。

然も確信あるもの丶樣に云つて退くるのである。綾子は其の強い言葉調子に了然引入れられて了ひ、然ながら尊い神の聖座から宣旨でも受けた樣な氣がして、强い安慰を得、思はず嬉し淚を其の眼頭に溜めたが、猶も夫の上を呉々も賴み、父の病氣の折を見ては日毎に見舞に來る旨を述べて、軈て此室を辭して歸つて行く三澤看護婦は其の後姿を、さも感じた樣な、同情の深い眼色で見送つて居たが、我に回ると、寢臺の上の兵曹を見て、

『あの、奥樣は御幾歳で被入るんです。』

優しく問ふ。

『えい――と廿二歳になるです。』

『廿二歳！然うすると貴方とは十六御違ひになるんですね。』

兵曹の頷くのを見て。

『あ丶廿二の歳！廿二の歳！。』

三澤看護婦は口の中で繰返して呟いたが、

『私も夫に別れたのは廿二の歳でした。』

深い感慨の籠つた聲音で斯う云ふのであつた。病人は傷の惱みに顔を蹙めながら。

『あなたはもう一度御結婚なさつたのですか？』

苦痛の中にも、妻に優しく云つて呉た返禮の心算で問ふと。

『え丶。然うなんで御座いますよ。一度夫を持つたのですが、其れが今から十年前、之は平壤の戰爭で討死したので御座います。』討死したと聞いては、兵曹は心を動かさずには居られなかつた。

『討死？して役は。』

『少尉だつたので御座いますよ。然し未だ籍が這入つてなかつたので、私は少尉の未亡人と云はれる身分になれなかつたのですわ。添つて居たのは二年ばかしでしたが。』

三澤看護婦は、故鄕に一人殘つて居て夫の戰死と聽いた當時の事を思ひ出したのであらう。ほろりとした態

度で、悲しい眼をあらぬ方に注いだが、寢臺の上の兵曹は、此の態を凝と見て、自分は結婚してから一年餘りの月日しか未だ經たないので、軈て若い妻を恁うした薄倖な運命の下に立たせなければならぬのであらうと思ふと、身命は國家に捧げたもので、更に惜むのではないが、死よりも辛い可憫さが、胸に迫まつて來て、其の眼を襞のある白い帽子を頂いて、白衣を裝ふて居る三澤看護婦の姿から放す事が出來なんだ。

室は暫時靜寂の中にあつたが、軈て三澤看護婦はツと身を動かして。輝く眼で自分が看護する兵曹の顏を瞶りながら。

「貴方ね、乾度ね、治癒つて御上げなさいましよ、私も今日からは一層看護に骨を折りますからね、よろしいですか、乾度若い奥さんを未亡人になさいますな。」

烈しい感情の含んだ聲で云つて退るのであつた。

（中）

蒼空は寶石を鏤めた樣に、星は輝いて居て、西の空低う六日ばかりの月は懸つて、早や彼方の黒い建築物の後に落ちんとして居る。二三日續いて温かつたのが、又急に寒くなつて來て、四邊の風物は、此の寒い月の光りを受けて蒼く、轉た寂寥を極めて居る、海軍病院の裏手の小丘の上は、地一面に芝生が植付けられ、所〲に捨石などもあり、平生は快方に向つて來た病人の運動場となつて居る所である。

街はもう眠つて居るらしい、何の物音も響いて來ないが、海岸の方からは、出船のある摸樣で、然ながらもの、別れを告ぐる樣な滊笛の音が響いて來たが、其れも大空の果に消えて了ふと、四邊は依然として以前の寂寞に回る。と小丘の方へと向つて足音が起つて來た然かも其れが女の足音らしく思はれる。

若し此處に人があつたならば、此の足音を聞いて、初めは不思議に思ひ、軈ては、其の歩調に犯し難い威が含まれて居るのを知つて、慄然とした事であらう。足音は次第に近づいて來たが、月影は其處に、一個白衣の姿を顯はしたのである。然ながら物の怪の浮動する

様に月の光りの中に漂ふて、小丘を上に上つて來たが更に一段と高く、其處からは海も見ゆる頂上に立つと、「あゝ」とばかり呼吸を洩して顔を上たのであつた。大理石に刻まれた面の様に柔和な女性の美を失はずに神々しく、黒き瞳は何物かを渇仰する如く輝いて、口元は堅く引結ばれて居た。一度は佇立つて、眞黒い沖の方へと眼を移したが、戒嚴令の敷かれた今、港に一つの燈光も點火つて居ないのを見ると、更に或る偉大な意を受けた様な色を動かしたのであつたが、と、白衣の姿は掌を組合して、そを静に額に押し當てゝ直ぐ、其處へと膝折屈めて蹲踞くのであつた。

初めは聲が低くて、明瞭とは聽取れなかつたが、熱情が増して來るに連れ、次第に聲高う、月ある夜の中に水の流るゝ如く聞える。

「我等が崇むる一つの御神！若し此の日本の國を、此の世界の中に建て給ひしが、御神の御心ならば、何卒此度の戰爭に、大なる勝を得させ給へ、四千萬の同胞に大なる誇心を與へ給へ。海を超へて戰ひの地へ往きし者の中には、いと憐憫なのも御座います。仕ふ可き兩親を忘れ、愛する妻子を忘れますするのも、只此の皇國を愛し、思ふに外ならぬ情で御座りまする、御神よ惠ませ給へ。請願、然る人達に、御力を添へられまして、大なる危難より免れしめ、大なる負傷より免れしめ、いと目出度き凱旋の式に迄連なり得らるゝ様守らせ給へ。

おゝ我が國を惠み給ふ御神、皇國の名の爲めに戰さの場に働くが御心に叶ひなば、何卒此度の旅順の海戰に勇ましき働きを爲して、名譽の負傷を爲し、此の病院に送り還されしものゝ上に御惠を垂れ給へ、分けて我が預り居りまする一等兵曹の上に御惠を垂れ給へ。彼の人には病める父も御座います。結婚して未だ間もなきいと若き妻も御座います、請願格別の御惠みを此の一等兵曹の上、病める父、殊に此の若き妻の上へ垂れさせ給へ。一等兵曹一人の死は、其の病める父を殺し、若き妻を限無き抱鬱なる生涯に陷入れるもので御座います。妾とても早く夫に分れて其の苦痛を受けま

したもの、巨浪の如く押寄せ來る種々の忘念、誘惑に打勝つは、若き女の身にて、死すよりも猶大なる苦痛を受けるもので御座います。あゝ御神、何卒彼の若き妻を守らせ給ひて、寡婦と爲し給はらざらん樣に只管希ひ上げ奉りまする。』

眞心の底より流れ出る尊き言葉を續けて其の祈禱を終ると、突と立ち上つて再び以前來た道を月の光りの下、然ながら幽靈の通ふ如くに白衣の人は小丘を降りるのであつた、が此の態度を見たものは誰も無かつた。

少し風が出て、樹立は少し鳴り騒ぎ、遠く〳〵浪の音も聞えたが、件の白衣の影は、今はもう小丘を了然と降り果て、庭の立樹の蔭の中へ這入つて、軈て靜々と病院の裏切戸の方へ進むだが、其方からばた〳〵と足音がして來て、恰度些とした小屋の前に、此方の影が動いた時。

『あら、三澤さんぢやありませんか、何處へ被入して、副院長さんが喚んで被入るんですよ。』

之も白衣の人であつた。

『さう？』と此方は嫺やかに返辭すると彼方は息遣ひ忙しく。

『方々探しても被入らないもんですからね。宿直さんに尋ねたら、今庭の方へ出られたのを見たとお云ひなさいましたから、此方へ恐々來たんですわ。』

『奈何も憚りさま。何だか頭痛が爲る樣でしたから、些と庭へ散歩に出たんですわ。』

貳人は連立ちて、内庭へと這入り、石段を上り、扉を押して廊下へと出たが、揭燈の影は、明らかに一人を三澤春子に、一人は其の友達の看護婦姿を照らし出した。

（下）

『君はいよ〳〵明日退院するさうだね。』

『負傷して此處へ運ばれて來た時は、とても駄目だつて聞いて居たんだが……何しろ御目度い譯だ。』

『然う〳〵、鳥海大軍醫殿は、見ても一週間とは持つまいと云つて居なすつたんだが、もう了然と以前の通

りで、歩くのには差閊えが無いらしいね。』

『其れでも少しは前とは工合が惡からう。』

白い金巾の筒袖綿入を着た、貳人の之も兵曹組らしい病水兵に話し懸けられながら、見晴らしのいゝ運動場の共同椅子に腰を下して居るのは、津原兵曹である。微笑んで二人の顔を見たが。

『なにね、鋲が些とばかし附いて居る切りで、歩行くのなんかは、些つとも奈何も無いんだ、骨に懸らなかつたもんだから、其れで宜かつたんだがね。其の代りに無くなつて了つたものが一つある。』

『無くなつて了つたものッて何だ？。』

二人は異口同音に尋ねた。

『臍さ！。』

『臍を？』

二人は噱々然として大聲に笑つたが、津原兵曹も笑顔を造りながら。

『何處へ行つて了つたか形なしだ。』

二人は漸く笑ひ止んだが、髭髯のある年の老つた方は手を前で組んで。

『其奴は旅順の海へ大邊な落し物をして來たものだ。屆け出すと云ふ譯にも行くまい。』

更に笑ふと、俯く迄色の黑い、其れでも何處か優しみのある若い方のは。

『だが、之から津原の嫌いな雷が鳴つても氣樂なものだ、狙はれる氣遣いがないから。』

面白さうに云ふと、津原兵曹は樂しげな色の中に、眞面目な色を些と見せて。

『併し僕は實に感心した。あんな看護の爲方と云ふのは無いだらうと思ふ。全く夜の目も寢ずと云ふ介抱なんだから。』

『三澤看護婦だらう。其の噂は僕達の方へ迄も聞えて居た。先づ津原兵曹は結構な譯さね。』

頬髯が持つて廻つた樣に云ふと。津原兵曹は向き直つて。

『己樣達は然う云ふ事を云ふから否けない。那麼事ちやアない。』

「解つとる〳〵。津原然う勃然に無らなくつてもい、ありア森河が調戯つたんだ。吾輩知つとる、實に感心な婦だ、何でも以前は陸軍の少尉の夫人さんだつたと云ふ事つた。」

「確か然う云ふ話だつた。僕は眞實感謝して居る。無論大軍醫殿の御骨折もあつたらう、併し、あの人が世話して呉なかつたら、奈何だつたかも知れない、之は大軍醫殿も云つて居られるんだ。」

津原兵曹の態度が餘り眞面目なので、森河も重ねて諧謔の口を弄さなかつた。四月も半ば過ぎた温い氣候の蒼空は、麗らかに晴れ渡つて、太陽の光線は氣も延びやかに地に敷いて居る。散り殘つた櫻の梢からは、微風が吹く度に、花辨が然ながら吹雪を亂した樣に、華やかに散つて、彼方には早や綻び初め懸けた八重櫻の枝振りも見える、其の向ふに、ずつと軍港の景色も見えて、船懸りの三本檣に帆前船、小蒸汽は絶えず行通ふて、其の後を浪の迂り、沖の離れ島の方へと白い鴎は飛んで行く。

津原兵曹は、猶も優しい看護婦の事に就いて物語らうとする時、ばた〳〵と上草履の足音が、道芝の上にして來て、近づいたと見ると、今も話の其人であつた。と、丘の下から眩ぶしさうに上を仰いて。

「あの津原さん、奥さんが御出なさいました。」

「然うですか、憚りさま。」

津原兵曹は立上つて、二人の伴侶に些と笑顔を見せて小丘を降りかけると、殘された二人は長閑さうに笑つた。三澤看護婦の忙しさうに馳けて引回して行く後に續いて、津原は庭を通り抜け自分の病室へ這入ると、其處には若い妻の綾子が、例の愛度氣ない顔をし笑ましげな眼で迎へて呉れた。

「運動場へ被入して居たんですか。」

之が妻の最初に懸けた言葉であつた。

「うむ。」と、夫の兵曹も笑ましげに應へ、其處の寢臺の端へと腰を降したが、綾子は、つく〴〵と其の夫の肉附いて赤味を持つた顔を眺めて、一番最初此の病院へ見舞に來た時の、其の憐な容子を思起し、思較べて

眞實身が顫ふ程に嬉れしく思ふ事を壓へ得られなかつた。彼の時の悲しさ、心細さ、自分は心の中と、口とは別々に働かし、俳優めいた擧働もして、夫の心を慰めもし、引立もして歸つたのであるが、家へ歸つてから甚麼に泣いたかを夫はよもや知るまい。彼の時は、此の病室の壁にも、天井にも、床にも死の影が漂ふて居て、總てがどんよりと灰色に濁つて見え、自分迄一家を底の知れない悲哀の穴へ連込んで行く樣にも思はれたのであるが、今はもう總ての景色が變つて了ひ、室内は華やかに輝いて、樂しく、壁にも、天井にも、床にも、寢臺にも、希望が滿ち〳〵て自分達を嬉んで迎へて吳れる樣に、若き妻の綾子は感じた、猶も夫の顏を、輝いた眼で凝と瞶り。

「貴方もう、丁然以前の通りの御顏色におなりなさいましたよ。」

「うむ、然うか、足の方も丁然以前の通りになつて了つた。」

「眞實にいゝ鹽梅しきに早く御治癒りになつて、這麼嬉しい事はありませんわ……昨日ね、御父親さんに初めて打明けましたの。實は御隱し申して居ましたが、貴方が御怪我を爲さつて歸つて被入るつて。然してももう二三日の中に退院して御歸りなさいますつて申し上げましたらね。

然うか、何も隱して置かなくつてもいゝに。已は疾うからもう丁と覺悟して居る、生きて歸つて來るとは思つて居ない。然し其れでも負傷が早く治癒つて結構だつたと眼に涙を浮べて嬉んで被入いましたわ。」

津原兵曹は嫣然として、之も眼に涙を浮べて、二三度頷いて見せたが。

「其れで御病氣は甚麼鹽梅だい。」

「はい。もう丁然御宜ろしいと云つてもいゝ位で、明日貴方か御歸りになる時には、寐て居るのも何だから起きて待つて居るつて、何と云つても御聞き入れなさらないんですよ。」

津原兵曹は、温い父親の情に感激して、思はず一雫床へ落したのであつた。と、廊下の外に足音が止り、扉

が開いて這込つて來たのは、三澤看護婦であつた。之も笑ましげに、綾子と津原兵曹との顏を眺め、其れから、寐臺の前へと廻つて、此度は綾子の顏を凝と瞶り

『奥さん、嘸御嬉れしいでせう。這麼に能く御治癒りになつたんですもの。』

少しの邪氣なしに友達にでも話す樣に、然も馴々しく誇顏に云ふ。

『眞實で御座います。何と申してよいやら、御禮の申樣も御座いません、夫も度々申しますので、今度治癒つたのは、全く貴方樣の御看護の御蔭だつて、御恩は一生忘れる事ぢや御座いません。』

綾子は眞心の底から出た禮を述べると、三澤看護婦は自分が今云つた言葉が、余り馴々し過ぎたのを悔ゆるらしく氣極惡氣な色を見せて。

『然う仰有つて頂くと、私何と申上げて宜いやら、御挨拶の爲樣に困りますが……。』

早口に云つて退けたが、次の瞬間には、何か非常に感激した色が頬に浮び出て、瞳には力が籠つて來た、一度は顏を垂頭れたが、直ぐと上げ。

『奥さん。』一聲切つてから。

『實は私は其のお言葉が聞かれ樣かしらと、危ぶみながらも、今日迄待つて居りましたので御座います、御禮を云つて頂かうと思ふ那麼心算ぢやないんです、嘘も隱しもいたしません、私は一生懸命に津原さんの御看護を申上げたのですが、失禮で御座いますが、之は津原さんを思つての心盡しぢや御座いません、奥さんの御心の中を察して、若しもの事があつてはと、私も覺えが御座います、奥さん、婦人と云ふものは、誠に果敢ないもので御座いまして、夫無しで一人で行くと云ふ事が、甚麼に辛いでしやうか……。眞實に女と云ふものは弱いものですね。』

云ふ眼には涙の露が宿つて居たが、其の顏は宛ながら天の御使の樣に、淸く尊く輝いて見えた。（完）

いくさのうはさ

戰雲譚海

[illegible]劍生

●天祐を荷へる我が皇軍の向ふ所山川靡き草木伏して幸先吉き奇瑞嘉祥の現はるゝを常とせり、曾て日清の役我が巡洋艦高千穗が、拂曉猶ほ明けやらぬ暗を冒して大連灣沖に赴くの際、虛空に天翔ける一羽の鷹あり翼を張つて同艦の周圍を廻ると見る間に、忽にして翼を收め檣頭高く止りたるより、折しも甲板に在りたる水兵八頭司德一郞氏は矢庭に身を挺して檣頭に攀ぢ登り、件の鷹を捕へたることとあり、時恰も曙に近き頃なりければ、共に因みて有明と名付け、今も尙ほ宮城の振天府に靈鷹として藏せらるゝ所なるが、玆に十年后の今日更に新しき奇瑞の而も同じ人に依て得られたる芽出度き話あり、事は去る四月二日の朝、午前五時三十分頃、彼の仁川沖に敵艦ワリヤークを擊沈して開戰第一の名譽を荷へる巡洋艦淺間が朝霧深き波濤を蹴つて山東角の沖合に航行し來る途中、天外遙かの方より翔り來りし一羽の鷹、大氣を切て羽叩き鋭く舞ひ下りたるが、此時甲板上の舷側に哨兵の勤務をなし居たる彼の八頭司氏の肩上にヒラリと許舞ひ止り、更に恐るゝ氣色もなきに、氏は再びかゝる瑞相に逢ふことゝて奇異の事に思ひながら、難なく之を生擒して、艦長八代大佐の許に差出しぬ、然るに大佐も亦往年日清の役八頭司等の分隊長として高千穗艦上に在り、當時の奇瑞を目擊したる事とて、いとゞ因緣の淺からざるを感じ、早速海軍省に送りて、天覽に供したりといふ、之より先き水上の皐師旅順を衝きたる二月八日の夜、天孫降臨の靈地として天そゝり立つ高千穗の峯に一團の靈火燃えて、空を焦し山を取卷きつ、韓國岳の彼方より西方滿洲を指して遙かに燃え行きたる壯大の奇觀といひ、或は又た此の靈山の名を冠したる高千穗艦が津馬沖にて巨鯨の腹部を中斷したる奇瑞といひ、共に併せて今回の役の吉祥とす、さるに其の吉祥は着々事

實となりて海に陸に大捷の吉報を齎す頻なり、嗚呼赫赫たる我皇の威徳、奇しくも亦た尊き極にぞありける。

●此の奇瑞に接せし八頭司徳一郎といふは、射撃の名人にして、百發百中の稱あり、嘗て紀淡海峽に實彈射撃の演習ありし折の事、某艦の司令塔に人形の射的を据え、五六の軍艦乘組員一同甲板上に整列して環視する中に、氏は悠然として自個の船を乘入れ、司令塔の人形目掛けて砲門の　照準を定めぬ、並居る滿艦の將卒は、此瞬間の成績如何にと手に汗を握つて片唾を呑む時、轟然一發驚破こそと見る間に覗は過たず人形の半面、木葉微塵に碎け落ちたり、かくと見たる一同の將士は俄かに手を拍つて之を賞賛したるに其の音海波に振ふて暫時は鳴も止まず、昔し源平の戰に奈須與市宗高が扇の的を射落したる時の喝采も斯くやと許思はれたるが、さるにても二度まで不思議の瑞相に逢ふとは、何たる芽出度き人かなと、氏を知る水兵等の噂さし合へりし。

●壯烈無比、軍神とまで崇められたる故廣瀬中佐に就ては語るべき逸事多かるが中に、最も吾人を敬服せしむる一話あり、同中佐が先年露國に留學し在りたる時、中佐には露國の海軍士官候補生某を愛し、彼亦た中佐を敬ひて、常にタケ兄と呼びつゝ交情親密なりしが、今回の戰役となるや、中佐には日本軍艦に在て屢屢旅順口外に迫る、彼の候補生今は士官に昇進して是亦た旅順口の露西亞軍艦に在り、彼我砲彈を以て相見ゆるに至るといへども舊時の情や忘れ難かりけむ、彼れ一日書を中佐の許に飛して『我が尊敬するタケ兄と砲火を交ゆるに至りたるを悲しむ、兄幸に健全なれ』と言ひ越せしかば、中佐は直ちに其に答へて『今や不幸にして日露戰ひを開くに當り、子と予とは互に敵對行動を執るに至れり、然りと雖も是れ國と國との交戰なれば、子に對する私情に於ては敢て變るなし、益々親交の意を致すなり、我れ固と身を軍籍に置けば子を標的に砲火を開くことなきを保せず、是れ我が國民の義務なり致方なし、速に平和を克復して再び子と笑つて手を握るの日を待つと雖も、國家當初の目的を

逹する迄は互に敵對行爲を執るべし、幸に健全を祈る』との旨を認め送りたりと云ふ、中佐は實に敵に對しても猶ほ此の友情あり、况んや、味方に對してをや、更に况んや部下の兵士に對してをや、三度船に還つて搜索したる當時の眞情誠に思ふべきなり嗚呼中佐の如きは勇あり義あり而も愛ある日本武夫の本領を遺憾なく發揮したるもの、軍神と稱せらるゝ亦宜なるかな、我等は傳へて末代までの語草にせむ。

●廣瀨中佐の無妻主義は人の知る所なるが、之に就て面白き話あり、矢張中佐が露國に留學中の事なりけり彼の國の侍從武官なる少將某は、中佐の非凡なる人物を愛して宛然我子の如く待遇し居たれば、中佐が三年の任果てゝ歸朝せんとせし時、少將は深く中佐と別るるを惜しみ、責めては親しき關係を將來に繫がんものとて、自己が愛娘なる三個の姉妹の一を撰んで其の妻とし連れ歸らんことを乞ひぬ、此の姉妹は容貌といひ才學といひ其頃露都に隱れなき美人なるさへあるに况して少將が日頃の恩義を思へば、無下に斷るに忍びず有繫の中佐も兎やせん角やと煩悶三日に及び、終に意を決して斷然其の親切を謝絶したりと、其時の語に曰く、『余は永く少將の恩に感ず、されど貴國は決して我邦の友邦にあらず、遠からずして砲火の間に相見ゆるや必せり、今若し閣下の令孃と永久に赤繩を結ばゞ他日必ず恐るべき運命の夫婦の間を割くに至る を おそる』と、義理明瞭一點の私心を挾まざる語には、宮中に飛ぶ鳥落す勢の少將をして強ふるの道なからしめたり、されど令孃等が纒綿綢繆の情絶たんとして、絶つを得ず、中佐が露都を出發する時、停車場構內、紅涙禁めあへぬ三個の美人の佇立するを認めたりといふ、永久の羈絆を永久に排除したる勇士の心中、唯だ夫れ彈丸と硝藥あるのみ、あゝ壯なる哉。

●去月十三日、故廣瀨中佐の嚴肅なる葬儀を靑山墓地に營みたる折の事なりき、此の式に列せんとて態々上京會葬せる名譽の戰死者杉野兵曹長の母刀自が村田齋主の祭文中『三度兵曹長を索めて得ず』の條項に讀み至るや、同刀自は遂に得堪えで、ワッと聲を揚げて

涕泣したるに、左右の人々之を慰むれば、僅かに顏を上げて『悴の生死は構ひません、三度まで御尋ね下さつたお志といひ、部下一人の爲めに、斯ういふ立派な方をお殺し申したこと丶いひ、難有くて泣かずには居られません』と言ひたるにぞ、慰めたる人々も老母の健氣さに感じて貰ひ泣せざるはなかりし、あ丶何たる至善至美の眞情ぞや、靑山原頭風冴ゆるの日、後の人又幾度か感謝の涙を中佐の墓石に手向くることなるべしと會葬せし人の語りぬ。

◉京都に採香女史といふ少女畫家あり、京都府高等女學校の五學年生なるが、出征軍人通過の際は每に停車場に赴きて之を見送り、梅、桃、櫻などの枝に自詠の和歌を結び付けて、萬歳聲裡に送られゆく將校達に進め居たるが、第一師團參謀中佐伊豆凡夫氏が同市を通過の砌も、櫻の枝に『おく露はよし多くとも日の本のますら武夫ぞはらひつくさん』と記したる和歌を添へて中佐の前に呈したるにぞ、中佐は折角心を籠めたる贈物、答へずば武人の無風流を笑はれやせんとて早速『さ丶げゆきてウラルの山に插し植えん君が手折りし山櫻花』と讀みて返へしたる由、同中佐が知友の許に寄せたる書中に見えたり、女史本名を野島菊江といひ京都福田寺住職加納法順師の愛孃なりとか、優にやさしき心ばえなる哉、昔、大田道灌が草茅の少女に逢ひたる話は山吹の歌と共に傳へて今も美談とすれど、此の兩個が櫻花に寄せたる贈答は其にも增さる佳話として後昆までも芳しかるべし。

◉先頃日比谷にて逢ひし婦人連の一人は、櫻に赤の七寶もて日章旗を眞中に現はしたる平折のピンを插し居たり又他の一人の年若きが插したるは、銀の艶消しの錨に細き鐵針金製の錨を搦めて之に櫻花を二三輪あしらひ、花の匂ひに小粒の眞珠を附けたるものなり、こは云ふまでもなく我が陸海軍の戰捷を祝したる意匠なるべし。其後お茶の水にて見たる女學生は十字形の銀臺に赤七寳の流込みあるピンを插し居たるが、何となう氣が利きて見えたるも時節柄なればにや、是等は例の白牡丹の案出なるべし。

女學世界夏季增刊

婦人壯烈譚

六月十五日發行

日露戰爭は出師五十萬と稱し同胞の異境に趣くもの今や十萬を以て數ふ、誠に振古未曾有の大役にして世界列國の耳目を聳動するの大業といふべし此際に當つて日本國民たるもの別して婦人たるものの極めて愼重の態度を保ち平靜の心を喪はざらん事を要す。

戰爭は社會の秩序を破壞するものなり平和を愛する婦人の性情と固より相容れざるなり、而かも平和を目的として戰はれたるこの戰爭に於ては婦人も又大に活動して報國の用たらざるべからず。

本篇題して婦人壯烈談といふ、世界古今の戰爭に交捗せるあらゆる婦人の事蹟を集蒐して以て一卷となす、卷中勇壯なる物語あり、悲慘なる事蹟あり、血に泣く美人あり、劍に伏す節婦あり、紅涙衣に滴り鮮血刄に濺ぐの美談、佳話あり若し夫れ腥風吹き凄む修羅の巷に人情のうるはしきを見、彈丸劍戟の間に花笑ひ鳥歌ふの佳趣を見るに至つては戰爭も又是れ好箇の詩題にして天下巨匠の經營よく鬼神を動かすに足るべし。

懸賞文募集

▲和歌（題隨意） ▲新體詩
▲寫生文 ▲軍事小說

締切五月二十日限

賞金は軍事小說三篇限り金拾圓、五圓、三圓以下各種秀逸に圖書切符賞あり

次號記事豫告

六月五日發行

- ▲戰時の家庭　矢島楫子
- ▲戰爭と婦人　棚橋絢子
- ▲兒童小訓　川瀨ドクトル
- ▲家政二十四時　河西天放
- ▲マリアント子ツト皇后　菊池雪子
- ▲戰爭と日本女子　大町桂月
- ▲紅花の話　田中農學士
- ▲寶玉奇談　松琴女史
- ▲女學生の日用文　近藤正一
- ▲女學生と結婚　採香女史
- ▲滿洲の婦人　天風居士
- ▲女先生　須藤求馬
- ▲日本美貌法　皐月女史
- ▲女學生の旅　茨城貞子
- ▲花あふぎ　糸南泉
- ▲支那巾幗叢話　田村松魚
- ▲軍事小說 家の櫻　嚴谷小波

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……十二冊／增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年五月五日發行　第四卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工塲
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　三千三十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館發行　**日露戰爭實記**　定期增刊

第二卷（五月八日發行）豫告

▲第壹卷（四月八日發行）一時品切の處今回第拾版出來▼

日露戰爭 寫眞畫報

毎月八日發行
大判（縱八寸五分 橫六寸）美本
口繪卅八頁
石版色刷二枚光澤版四頁寫眞版及石版三十二頁
本文記事豐富挿畫數十

飲馬鴨綠江頭**新月高**（二倍判極彩色石版刷）北蓮藏君筆●朝鮮**王宮の炎上**中澤弘光君筆●**正木**大尉の**膽勇**山中古洞君筆●定州占領の**苦闘**武內桂舟君筆●露國旗艦の**轟沈**小峰大羽君筆●**松**花江鐵橋の**破壞**片山春帆君筆●**老**婦の至誠**祭場**に**慟哭**す渡邊審也君筆●**老鐵**山下の間接**射撃**橋本邦助君筆●**露**國の帝室（露帝ニコラス二世○露帝の一家○露都の宮殿）●**伊**藤大使の一行○京城大使館前光景●**黑木**陸軍大將の家庭●第二師團長男爵西陸軍中將○第十二師團長男爵井上陸軍中將○近衛師團長男爵長谷川陸軍中將○出發前の近衛步兵第三聯隊●**ダルニー**港の全景●ダルニー市の露國官舍●同新街●韓國京城の官妓●**東淸**鐵道停車場と滊車●松花江第二鐵橋●**遼陽**城外の新市街●**哈**爾賓埠頭街の大通り●露國占領中の**奉天府**其一（奉天城北西門より東方の眺望 北陵第二門と東陽の矢倉四平街）●**奉天府**其二（舊停車場附近の石橋○舊停車場附近の清國駐屯兵○增祺奉天將軍●**旅順**口敵國海軍鎮守府●敵國陸海軍將士の服裝●露國の美人（女優及歌妓）●濟々たる多士第一師團司令部●仁川海戰の戰勝艦**淺間**乘員●帝國海軍の精鋭**六**大戰闘艦と**敗殘**の敵國艦隊○チアナ○ペトロパウロスク○レトウ井ザン○バルラタ○ノーウイック○バーヤン

記事●敵艦沈み敵帥死す●日進春日の偉勳●鴨綠江上の衝突●水雷艇及驅逐艦なしと想像せば（春浪漁史）●戰友の裏面（牛門大尉）●廣瀬中佐景望歌（犀東）●白人の自惚根性（天溪）●戰爭と天候（桂月）●軍國の繪畫（賀軒）其他

▲正價一册金二十錢●六册一圓十錢●十二册二圓十五錢●郵稅二錢五厘宛▼

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

（後付の一）

大和田建樹君作歌
眞行君作曲
上

●日露開戰軍歌

正價三錢五厘―郵税二冊迄二錢

斯道の大家大和田先生の作、別に一家の調をなして、士氣を皷舞すべく作られたり、首章に曰く山嶽ふるひ、湖海沸く、聲は天地に轟きて、東洋平和は破れたり、敵は誰ぞ何ものぞ

久保天隨君作歌
眞行君作曲
上

●征露新軍歌

正價四錢―郵税二冊迄二錢

健筆縱横を以て知られたる久保文學士の作、朗唱すれば血湧き肉躍るの慨あり、首章に曰く「知らすや我は絶東に、義を是れ守る君子國、一たび鞘を拂ひなば、屠らで止まぬ日本刀、」

發兌元　四月中再版

著者	書名	版	定價
丸尾法學士著	民法（總則篇 物權篇）釋義	四版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
高山文學博士著	近世美學	六版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
佐藤理學士著	日本新地理	十三版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
蟹江文學博士著	倫理學	十版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
高山文學博士著	論理學	十四版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
澤村農學士著	農業經濟學	四版	上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
大橋乙羽君著	耶馬溪	三版	正價金四十錢 郵税金四錢
小波、櫻桃、小舟、三二君著	明治少年節用	四版	正價金七十五錢 郵税金十二錢
竹貫登代多君著	新撰代數問答	三版	正價金二十錢 郵税金四錢
寺崎留吉君著	新撰動植物問答	再版	正價金二十錢 郵税金四錢
飯島立峯君著	米國渡航案内	五版	正價金四十錢 郵税金六錢
稻垣農學博士著	初等作物通論	十一版	正價金五十錢 郵税金八錢

佐々木信綱君作歌
上　眞　行君作曲

●露西亞征伐の歌

正價三錢五厘—郵稅二冊迄二錢

國學の大家佐々木先生の作、優麗の詞、流暢の曲、琅々口に可なり、首章に曰く「大海原の夜は明けぬ、初瀨、敷島、富士、朝日、朝日の御旗さきだて丶、荒浪蹴分け、進み行く丶」

大町桂月君作歌
上　眞行君作曲

●露國征伐軍歌

正價四錢—郵稅二冊迄二錢

大町文學士の作、雄健偉大、健兒の氣を振作すべし、首章に曰く「富士の高根の立てる國、その山よりも猶高き、民の勳功を傳へたる、歷史は二千五百年」

圖書廣告　博文館

著者	書名	版	正價	郵稅
近藤醫學士著	仰臥三年	八版	正價金三十五錢	郵稅金八錢
中江兆民先生	一年有半	十五版	正價金三十五錢	郵稅金八錢
恩地農學士著	實用 苹果栽培書	再版	正價金二十錢	郵稅金四錢
峯是三郎君著	新題算術	三版	正價金十八錢	郵稅金四錢
村井弦齋君著	繪入 小僧讀本	七版	正價金十二錢	郵稅金四錢
飯泉規矩三君著	學術自修法	九版	正價金十二錢	郵稅金四錢
大町桂月君著	女學生訓	再版	正價金二十五錢	郵稅金四錢
福羽逸人君著	蔬菜栽培法	十三版	正價金七十錢	郵稅金十二錢
伊藤松宇君校	付合作法全集	再版	正價金三十錢	郵稅金八錢
尾崎紅葉君校	俳諧類題句集（前）	再版	正價金三十錢	郵稅金八錢
尾崎紅葉君校	俳諧類題句集（後）	再版	正價金三十錢	郵稅金八錢
佐々木弘綱君 佐々木信綱君 校註	日本歌學全書 二編	五版	正價金二十五錢	郵稅金六錢

（後付の四）

巖谷小波山人作歌
山田源一郎君作曲

●征露軍歌 旅順の海戰

正價二錢五厘
郵税八枚迄二錢

征露軍歌の第一編にして巖谷小波君の作なり「神守るてふ日本の、敵は誰ぞ?、彼の露西亞!、げにやロシヤの無禮には、神も怒を爲さゞらんや」を以て起る、玲瓏諷詠に可なり

巖谷小波山人作歌
東儀鐵笛君作曲

●征露軍歌 決死隊

正價二錢五厘
郵税八枚迄二錢

征露軍歌の第二編にして、有名なる決死隊の旅順の封鎖を詠じたるもの、朗吟すれば以て懦夫を起たしむべし

發兌元　四月中再版

佐々木弘綱君・佐々木信綱君（校註）	日本歌學全書 十編	八版	正價金廿五錢	郵税金六錢
佐々木信綱君編	近世名家々集	再版	正價金卅五錢	郵税金八錢
吉池慶正君著	蠶業汎論	七版	正價金十五錢	郵税金四錢
戸川殘花君著	少年讀本 河合繼之助	三版	正價金十三錢	郵税金四錢
野口珂北君著	少年讀本 水戸烈公	再版	正價金十三錢	郵税金四錢
阪崎紫瀾君著	少年讀本 坂本龍馬	三版	正價金十三錢	郵税金四錢
津田素彦君著	ベースボール クリーケット	四版	正價金十二錢	郵税金二錢
三宅鐵骨君著	球突術	四版	正價金十二錢	郵税金二錢
巖谷小波君著	猿蟹合戰	六版	正價金五錢	郵税金二錢
巖谷小波君著	羅生門	十三版	正價金五錢	郵税金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 世界の始	九版	正價金八錢	郵税金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 王城乘取	四版	正價金八錢	郵税金二錢

井上哲次郎君作歌
山田源一郎君作曲

●征露の歌

正價二錢五厘
郵稅八冊迄二錢

井上文學博士の作、首章に曰く「金甌無缺の我國は、他の國々と異なりて、万世一系の帝室を上に戴き動きなく、二千餘年も打續き」堂々正々日本軍の如し

鹽井雨江君作歌
白井規矩郎君作曲

●女子軍歌

正價十錢—郵稅二錢

女子大學敎授鹽井文學士の作「家の守り、我等も國の爲、看護婦、此日の御旗、想父戀」の五編を收むもの軍國婦女の朗唱すべきもの是なり

圖書廣告　博文館

著者	書名	版	正價	郵稅
巖谷小波君著	世界お伽噺 豫言書	四版	金八錢	金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 狐の裁判（下）	五版	金八錢	金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 九重の塔	三版	金八錢	金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 鐵の狼	三版	金八錢	金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 豆の王	三版	金八錢	金二錢
巖谷小波君著	世界お伽噺 骸骨島	再版	金八錢	金二錢
武田櫻桃君著	敎訓繪噺 海軍の卷	四版	金五錢	金二錢
木村小舟君著	敎訓繪噺 陸軍の卷	三版	金五錢	金二錢
木村小舟君著	敎訓繪噺 植物の卷	再版	金五錢	金二錢
武田櫻桃君著	敎訓繪噺 家庭の卷	五版	金五錢	金二錢
木村小舟君著	敎訓繪噺 お噺の卷	四版	金五錢	金二錢
木村小舟君著	敎訓繪噺 遊戲の卷	再版	金五錢	金二錢

（後付の五）

佐々木、中村、大和田、東宮、四大家作
上眞行君作曲

●日露戰爭 國民唱歌 第一編

正價八錢――郵税二錢

中村秋香、大和田建樹、佐々木信綱、東宮鋏眞呂四大家作の唱歌を收む、一家自ら一家の体あり、調あり、而かも歸する所は、義勇奉公の誠を勵ますものならざるなし

野口寧齋君著

●征露宣戰歌

正價五錢―郵税二册迄二錢

萬朝報の評に曰く宣戰の詔下り膺懲の師起るや詩人野口寧齋直に絶句三十首を賦して廣く之を天下に分つ（中畧）一として士氣振興人心鼓舞の料たらざるはなし詩人是に於てか天下を益す云々、

發兌元　四月中再版

著者	書名	版	正價	郵税
福山文學士著	世界歷史譚 華盛頓	三版	金十三錢	金四錢
大和田建樹君著	日本歷史譚 豐太閤	八版	金八錢	金四錢
巖谷小波君著	日本お伽噺 櫻井驛	十三版	金六錢	金二錢
巖谷小波君著	日本お伽噺 日吉丸	十一版	金六錢	金二錢
巖谷小波君著	日本お伽噺 鬼童丸	十版	金六錢	金二錢
巖谷小波君著	明治お伽噺 お伽十番	再版	金十二錢	金四錢
吉田調子君著	日用百科全書 裁縫と編物	十三版	金二十五錢	金六錢
金澤巖君著	日用百科全書 寫眞及幻燈	七版	金二十五錢	金六錢
石井研堂君著	少年工藝文庫 電話の卷	三版	金十五錢	金四錢
天城安政君著	商業讀本（一）	四版	金十五錢	金四錢
天城安政君著	商業讀本（二）	三版	金十五錢	金四錢
天城安政君著	商業讀本（三）	再版	金二十錢	金六錢

（後付の六）

佐藤六石君作

●征露大捷歌

正價五錢——郵税二冊迄二錢

詩宗六石先生の作、東より韵を以て次第して咸に至る、凡て三十絶句、誦し易く、解し難からず、秩序一貫征露の義戰なるを明にす、曩に發行せる、征露宣戰歌と好兄弟也

國府犀東君著

●伐露樂府 大陸劍歌

正價五錢——郵税二冊迄二錢

犀東居士の作、長篇あり、絶句あり、卓勵風發、快利雷に似たり、健兒劍を抜て且吟し、且舞はゞ、肉躍り、骨鳴るの感あるべし

博文館發行 日露戰爭實記

正價

一冊金十錢●三冊廿八錢五厘●九冊八十三錢●十八冊一圓六十錢●卅六冊三圓十五錢●郵稅一冊一錢五厘

第拾編 四月二十三日發行

{寫眞銅版口繪}

久邇宮殿下北白川宮殿下◉艦隊司令長官**片岡海軍中將**◉陸海軍四大發明家、伊集院海軍中將、有坂陸軍少將、下瀨工學博士、宮原機關大監◉露國皇族**キリル公**◉露國東洋艦隊司令長官**マカロフ提督**と其家庭◉滿州鐵道及鐵橋の景◉**韓國**京城‖王宮及城內景色◉廣瀨中佐葬儀の實景◉決死隊血書の請願書◉最近廣島市の光景◉博文館特派從軍寫眞班◉各新聞從軍記者

記事要目

旅順口第七回第八回**攻擊詳報**　**北征從軍錄**は戰地より特派員の**戰況畫報**と相俟ち陸戰の戰況を眼前に見るが如し、**軍事通解**は行動、兵器、兵種、効用任務等迄詳述し以て戰爭の眞相を解し得べし、伊集院信管下瀨火藥發明苦心譚は刻下最有益の讀物。

第拾壹編 五月三日發行

{寫眞銅版口繪}

有栖川海軍中將宮殿下日高海軍中將、尾本海軍中將、松本步兵第一旅團長、中村步兵第二旅團長、大迫砲兵第二旅團長、靑泥窪市街、極東の露國鐵道、加藤橋立艦長、山屋秋津洲艦長、莊司新高艦長、仙頭對馬艦長、小田海軍中佐夫妻、山口海軍中尉、奉天府、北陵前蠟石の門、舊城內飛雲殿、北陵の遠望、小東關裏通りの市街、後備第三十一聯隊軍旗拜授式、松山赤十字社病院の露國負傷兵、全負傷兵の治療、露軍占領中の營口、駐屯露兵、民政廳、電話交換局、滿洲と西伯利亞の要害、寶貫城、寧古塔興安嶺の隧道、貝加爾湖上の汽車運搬船其他最新撮影の寫眞銅版は一見其境に入り其人に接するの感あり。

記事要目

記事には**戰地通信**續々到着し**軍事通解、伊集院中將、下瀨博士**の發明成功譚益ます佳境に入り、特派寫眞班長田山花袋氏一行は既に天の一方に向て進發し、其他の特派員も皆な戰地の各方面に配置せられ、拍案快呼の記事は涌くが如く讀者の前に供せらるべし。

（後付の八）

女學世界

(明治參拾七年五月五日發行) 第四巻第六號 (明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉗
明治37年4月(第4巻第5号)、5月(第4巻第6号)

2007年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業]　03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3143-3　C3321